
FLASH ~ かがやく君へ... ~

いとかなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FLASH ～かがやく君へ…～

【Nコード】

N5278E

【作者名】

いとかなし

【あらすじ】

好きな人は、遠い親戚。微妙な関係。揺れる心……。／／／沙織はごく普通の女子高生。数年ぶりに出会った親戚のカメラマン・鷹緒に惹かれ始めるが、鷹緒には思いがけない過去が……恋一直線に頑張る少女と不器用な大人の恋物語。

01：はじまり

あなたが放つフラッシュに魔法をかけられたように、あなたのことが頭に焼きついて、離れない……。

大晦日――。

「すげえな、沙織。BBの年越しライブのチケットが手に入るなんて。しかもタダ、しかもビップ？ おまえ、何者だよ」

寒空の下、寄り添い歩くカップルたちの中で、一際大きい声で少年が言った。

「親戚がギョーカイの人だね。わりと顔が利くらしいんだ」

少年と手を繋いでいた少女がそう答える。少女の名は、小澤沙織^{おざわさおり}。十六歳の女子高生だ。隣にいる少年は一つ年上の、遠山篤^{とよやまあつし}。二人は

同じ高校で知り合い、つき合っている。

大晦日のこの日、二人は沙織の親戚から手に入れたレアチケットで、人気歌手グループ・BBの、年越しライブに来ていた。

「業界の人ってなんだよ。プロデューサーとか？」

目を輝かせて、篤が尋ねた。そんな篤に、沙織は首を振る。

「わかんない」

「わかんないって、親戚だろう。それに、ホラ……これからも、そういうチケットとか手に入るかな？」

「親戚っていつても、遠い親戚なの。それに、篤がBBの熱烈ファンだから、無理やりお母さんに頼んだんだよ。おかげで、ちよつとバイトするハメになっちゃったけど……」

「バイト？ なんだよ、それ」

「チケット取るかわりに、その人の事務所で手伝いすることになっ

「たんだ。なんか、すごく忙しい時期みたいだね」

苦笑しながら、溜息まじりに沙織が言う。

「手伝いつて、何すんの？」

「わかんないけど、雑用とかだと思うよ。それより、早く行こうよ」
「うん」

二人は、コンサート会場へと急いだ。

数日後。沙織は、都内の小さなタレント事務所へと入っていった。

「あの……」

狭い事務所には、数人が慌しく動いている。

「はい？」

受付で、たった今まで電話をしていた女性が、沙織を見て返事をした。

「あの……小澤といいます。今日、ここに来るように言われて……」

「ええっと、ちょっと待ってね。ヒロさん！」

女性は突然、奥へと叫んだ。

「なあに？ 牧ちゃん」

奥から、男性の声が聞こえる。

「小澤さんっていう方が来てますけど」

「ああ、鷹緒たかおの親戚の子だろ？ 聞いてるよ」

そう言いながら、奥から三十歳くらいの男性が出てきた。大きな目が優しそうに輝き、整えられた髭を生やし、長めの髪を後ろで束ねている。

「小澤……沙織ちゃんだね。聞いてます。鷹緒の親戚だつて？」

男性は気さくな感じで、沙織に話しかける。

「はい。鷹緒お兄ちゃんと、母が従兄弟同士で……」

頷きながら沙織が言った。鷹緒とは、沙織に人気歌手グループであるBBのチケットを用意してくれた親戚だが、子供の頃に会っただけで、もう何年も会っていない。

「鷹緒お兄ちゃん……鷹緒さんにも、こんな可愛い親戚がいらっし

「やったんですね」

受付の女性が言った。その言葉に、男性が苦笑して口を開く。

「ハハハ。牧ちゃん、意外と失礼だねえ……さて、じゃあちよつと待っててくれる？　今、ちよつと手が離せなくてね。こつちの仕事が終わったら、すぐに別の場所へ移動して、そこで手伝ってもらってから……」
「って、紹介が遅れたね。僕はこの事務所社長の、木村広樹まきむらひろきです。この子は、うちの看板受付嬢の、牧美里ちゃんまきみさと。君には今日から数日間、うちの事務所を手伝ってもらうから、よろしくね」

社長と名乗った男性が、そう言った。

「はい、よろしくお願いします。あの……鷹緒お兄ちゃんは？」

お辞儀をして、沙織が尋ねる。

「ああ、あいつは今、スタジオにこもってるんだ。あとでそこへ行って、手伝ってもらうよ。この時期、忙しいから助かるよ」

「わかりました。よろしくお願いします」

沙織がそう言うのと、社長の広樹は頷いて、奥へと戻っていった。

「じゃあ、沙織ちゃんはそこに座って、ヒロさん待っててくれるかな？」

缶ジュースを差し出して、牧が応接スペースに座るよう勧める。

「はい。ありがとうございます……」

沙織はきよろきよろしながら、ソファへと座った。小さいながらもタレント事務所というオフィスは、たくさんのポスターや写真が壁に貼られている。

沙織が座る目の前のテーブルにも、所狭しと書類が積み上げられ、写真が無造作に置かれていた。

「あ、そのこのテーブルの写真には触らないでね」

牧の言葉に、沙織は慌てて頷いた。

「あ、はい。すみません」

「勝手に触ると、鷹緒さん、怒るのよ。普段は奥のデスクでやってるんだけど、そこで仕事を始めた日には大変よ。今日も時間がないからってそこで写真広げられて、そのまま出かけちゃうんだもの。」

お客さん来たらどうしてくれるのよねえ」

「へえ……鷹緒お兄ちゃんって、写真撮ったり、モデルしたりしてるんですよね？」

テーブルに置かれた写真を遠目に見つめながら、沙織が牧に尋ねた。親戚の鷹緒は、カメラマンでモデルだと、母親から聞いている。「モデルはやってないわよ。肩書きは、写真家ってところかしら。うちは企画業もやってる事務所だから、鷹緒さんもそれに携わってるし、最近はテレビ局とかにも呼ばれるようになって、いろいろしてるみたい。万能な人ってすごいわよね」

「へえ……いろいろやってるんですね。お兄ちゃん」

「鷹緒さんを、お兄ちゃんなんて呼ぶ人初めてだから、なんだか新鮮だわ」

笑いながら、牧が言う。

「あ、すみません」

「いいのよ。小さい頃から知ってるんでしょ？」

「はい、まあ……」

沙織がそう言ったところで、広樹が奥から出てきた。

「牧ちゃん。これ、VFプロにファックスしといて」

「わかりました」

広樹の言葉に、牧がすぐに動く。

「じゃあ、沙織ちゃん。行きましょかね」

「は、はい」

02：再会

「すぐ着くからね」

歩きながら、広樹が言う。

気さくに見える広樹は、すぐに打ち解けられるような安心感がある。

「あの、木村さんの事務所って、タレント事務所なんですね」

沙織が尋ねる。事務所の詳細も、仕事の内容もほとんど聞かされていなかったため、いろいろ知りたかった。

「うん。あとは、いろいろな企画を考えたりしてるよ」

「へえ……」

「それより、鷹緒とは久しぶりなんだって？」

今度は広樹が尋ねた。

「はい。もう十年以上は、会ってないと……」

「そんなに！　じゃあ、本当に久しぶりなんだね。鷹緒のことは覚えてるの？」

「小さい頃に遊んでもらった記憶とかはあるんですけど……正直、あんまり覚えてないんです。何をしている人かも、あんまり知らないし」

「ふうん、そうか……あ、ここがスタジオだよ。今日はあいつ、カメラマンとして動いてるから」

広樹の案内で、沙織は生まれて初めて、スタジオというところへと入っていった。

中では、眩しいくらいのフラッシュが炊かれ、数人のモデルがポーズをとっている。その前でシャッターを切っているのが、沙織の親戚である、鷹緒のようだ。

「はい、これで終了です。お疲れさまです」

「お疲れさまでした」

スタッフやモデルたちが、一斉にそう言った。

「鷹緒」

その中で、広樹が呼ぶ。その声に一人の男が振り向いた。沙織の親戚である、諸星鷹緒だ。もろほしたかお背が高く、眼鏡をかけたその男性は、沙織と面識はあるものの十年以上も会っておらず、そう交流があったわけではない、沙織にとって遠い親戚だ。

「ヒロ。遅いぞ」

鷹緒が言った。広樹は苦笑する。

「終わっちゃったか。大丈夫だった？」

「なんとかな」

そう言う鷹緒は、沙織に目も向けず、カメラをいじっている。

「終わっちゃったなら仕方がないよな。ほら、連れて来たよ」

「誰？」

「誰じゃないよ。おまえの親戚だろ？ 小澤沙織ちゃん」

「ああ……」

鷹緒が初めて沙織を見た。沙織は久々に見る鷹緒の顔に、少しきよんとしている。そんな沙織に、鷹緒は口を開く。

「なに、アホ面してんだよ」

「た、鷹緒お兄ちゃん……」

沙織の言葉に、鷹緒は沙織を見つめた。

「おまえ、ここは俺の仕事場なんだ。お兄ちゃんはやめろよ」

つれなくそう言う鷹緒に、沙織は少し戸惑っていた。そんな沙織を見て、鷹緒が笑う。

「ハハハ。あの、泣き虫の沙織がねえ……」

その言葉と表情に、沙織はほっとしたような、かっとしたような気分になった。

「な、泣き虫じゃないもん。お兄ちゃんは、私のこと知らないくせに！」

気付いた時には、沙織はそう叫んでいた。

「……そうだな。もう十年も会ってないもんな。大きくなるわけだ」

鷹緒は苦笑しながら沙織の頭を軽く叩くと、ジャケットを着て振り向いた。

「今日はもう終わりだ。帰って仕事するよ」

広樹に向かつて、鷹緒が言った。その言葉に、広樹も頷く。

「ああ。じゃあ僕はまだ仕事があるから、事務所に戻るよ。間に合わなくて悪かったな」

「本当にな。じゃあな」

「ああ、お疲れさまー」

広樹はそのまま、沙織やスタッフに合図を送り、スタジオを出ていった。

「沙織」

鷹緒のその声に、沙織は一瞬、ドキツとした。

「無駄足させたな。今日はもう終わりだから、家まで送るよ」

「……うん」

久しぶりに会った鷹緒は、沙織の記憶にはないほど大人になっていた。

03：親戚のお兄ちゃん

「これ、お兄ちゃんの車？」

駐車場で鷹緒の車を見て、沙織がそう言った。少し驚いたのは、外車のスポーツカーだったからだ。

「ああ。早く乗れよ」

「オジヤマシマス……」

沙織は緊張して車に乗り込むと、車内を見回す。

「ハハ……何をきよろきよろしてんだよ」

「だって、外車なんて初めてだし……お兄ちゃん、稼いでるんだね」「バーカ。んなことはねえよ」

鷹緒はそう言いながら、車を走らせた。

「それより、どうだった？ 年越しライブは」

車の中で鷹緒が尋ねた。鷹緒のおかげで、沙織は好きな歌手・Bの、念願の年越しライブへ行くことが出来たのだ。

「うん、すごくよかった！ 彼氏も喜んでくれて……ありがとう……ございました」

未だ緊張したままの沙織が言った。男性と二人きりで車に乗るのは、初めてである。

「へえ、彼氏いんの？ イッチョ前に……」

「もう！ そんな子供じゃないもん。もう十六だよ？」
沙織がムキになって言う。

「まだガキじゃん。早い、早い」

そう言う沙織に、鷹緒が軽く言う。その横顔は優しげで、どこか懐かしい。

「じゃあ、鷹緒お兄ちゃんは、オジサンじゃん」

「アホか。俺はまだ二十九だ」

「立派なおジサンじゃない」

「コノヤロー」

二人は笑いながら、会話を弾ませる。次第に沙織の緊張も解れていき、二人は打ち解けていった。

「ねえ、明日は何時に行けばいいの？」

しばらくしたところで、沙織が尋ねた。

「そうだな……朝九時に、事務所に来れる？」

「えー、早い。迎えに来てくれる？」

鷹緒の言葉に、冗談で沙織が言う。

「アホか。まあ、三日バイトしてくれたら、後はいいから」

「え、三日でいいの？ 冬休み、全部削られるのかと思った」

「削って欲しけりや、いくらでも仕事はあるけど。たかがチケットやったくらいで、三日拘束すりや十分だろ」

鷹緒が言った。鷹緒と打ち解けてきたところで、沙織は質問を続ける。

「……ねえ。ああいうチケットって、どうして手に入るの？」

「どうしてって……仕事関係だけど？ 一応、事務所ルートでチケットはいくらか取れるし、あのグループは、前に俺が写真撮ったこともあって、回ってきただけの話だよ」

「へえ。そうなんだ……」

「でも、驚いた。しばらく連絡も取ってないおまえの母親から、たまに連絡が来たと思ったら、BBの年越しライブのチケットが欲しいなんてな」

軽く笑いながら、鷹緒は煙草に火をつける。

「だって、彼氏がすごい好きで……」

「……まあ、いいけど？ こっちとしても年始の忙しい時期に、一人でも人手が増えるのはありがたいよ」

煙草の煙を吐きながら、鷹緒が言った。そんな鷹緒に、沙織が質問を続ける。

「……仕事って、何をすればいいの？」

「俺とかヒロの言うことを聞いてればいい。まあ、雑用ってところだな。あれ持ってこいだの、あれ買って来いだの、はつきり言って、

俺は人使いが荒いからな」

「うん。荒らそう……」

素直な沙織の言葉に、鷹緒が苦笑する。

「まあ、覚悟しておけよ」

「うん……」

「それから現場では、俺のことは間違っても、お兄ちゃんなんて呼ぶなよ」

鷹緒が煙草を揉み消しながら、念を押して言った。

「じゃあ、なんて呼べば？」

「……諸星さんか、鷹緒さんだな」

「じゃあ、鷹緒さん……」

「はいはい。ほら、着くぞ」

車は、沙織の家の前に止まった。

「ありがとうございました。待ってて。お母さん、呼んで来る」

「え？ べつにいいよ。もう長いこと、会ってないし……」

「でもお母さんだって、会いたがってるもん。待ってて」

沙織はそう言うのと、家の中へと入っていった。

少しすると、沙織が母親を連れて、家から出てきた。沙織の母親と鷹緒は、従兄弟同士であるが、沙織同様、まったく会っていない。

「鷹ちゃん、久しぶりねえ」

懐かしそうに、沙織の母が、鷹緒に近付いてそう言う。

「どうも……お久しぶりです」

鷹緒は少し照れながら、会釈をする。

「この間は、ごめんね。BBのチケットくれだなんて、急に変なことを頼んじゃって……」

「いいよ。代わりに三日間、お嬢さんをお借りしますがね」

沙織の母の言葉に、笑って鷹緒が言った。

「変なことに使わなければ、どうぞ使ってやってちょうだい」

「それは大丈夫だけど、明日も朝から来てもらうから、よろしくお願いします」

「わかったわ。送ってもらってありがとうね」

「いえ、じゃあ……」

鷹緒は軽く会釈をすると、そのまま車で去っていった。

「大きくなったわね。鷹ちゃんも……」

車を見送りながら、沙織の母が呟く。

「嫌だ、お母さん。鷹緒お兄ちゃんも、ちょっと困ってたじゃない。二十九歳の男に、鷹ちゃんなんて言うから……」

少し呆れたように、沙織が言った。

「だって、鷹ちゃんは鷹ちゃんだもの。鷹ちゃんだって、ずっと私のこと、杏子お姉ちゃんって呼んでたのよ」

「それって、いつの話よ……」

「うーん。鷹ちゃんが、小学生くらいの時かしら」

「まったく……」

二人は笑いながら、家の中へと入っていった。

04：初仕事

次の日。沙織は待ち合わせの時間に、昨日のタレント事務所へと向かった。

事務所は朝にも関わらず、狭い室内に人でごった返している。沙織はしばらく、きよろきよろとその光景を見つめていた。

するとそこに、鷹緒がやってきた。

「おはよう」

鷹緒の言葉に、沙織が振り向く。

「お、おはようございます」

仕事ということで、昨日から鷹緒に念を押されていたので、沙織が他人行儀で挨拶をする。

「おう。早いじゃん」

「約束は守ります」

「感心、感心」

鷹緒が、そう言って沙織の肩を叩く。

「あ、諸星さん。お待ちかね！」

すると、近くにいた数人の少女が、鷹緒に声をかけた。

「悪いね……全員揃ってる？」

「はい、います」

少女たちが答える。

「じゃあ、先に行きますか」

「はい」

鷹緒の言葉に、そばにいた少女たちが、荷物を持って鷹緒についていく。

「沙織。おまえ、奥にいるスタッフの荷物持って、一緒について来て」

「はい」

沙織は素直に返事をする、事務所の奥にいるスタッフのもとへ

と向かっていった。

「諸星さん。あの子、誰ですか？ やけに親しげじゃないですかー」
そばに居た少女たちが、沙織の背中を見つめて言う。鷹緒は苦笑しながら歩き出した。

「ああ……親戚の子だよ」

「諸星さんの親戚？ 姪とか、従兄弟とか？」

「従兄弟の娘。まあ、よく知らないよ。さて行こうか」

「はい」

一行は、そのまま近くのスタジオへと向かっていった。

撮影が開始されたスタジオでは、少女モデルが次々にポーズを取っている。沙織は、鷹緒と話す間もなく、仕事に追われていた。沙織に与えられた仕事は、鷹緒のスタッフのアシスタントで、物を探したり、渡したり、磨いたり、買出しに行ったりする、いわば雑用であった。忙しかったが、スタジオの雰囲気、新鮮で面白かった。

数時間後。

「はい、これで終わります。お疲れさまです」

「お疲れさまでした」

スタッフの声に、モデルたちが一斉に挨拶をした。

残ったスタッフたちは、機材を片付け始める。その中で、鷹緒は一人、隅の机でパソコンをいじっている。そんな鷹緒を見ながら、沙織も片付けに入った。

するとそこに、広樹が現れた。

「あれ、また終わっちゃったか」

「遅いですよ、ヒロさん」

スタッフの一人が、広樹にそう声をかける。

「悪いねえ……鷹緒は？」

「仕事フルモードですよ」

「そつか。じゃあ、今は話しかけない方がいいな」
「そうっすね」

広樹は沙織と目が合って、沙織に近付いた。

「沙織ちゃん、お疲れさま」

「お疲れさまです」

沙織が会釈をして答える。広樹は頷きながら、言葉を続けた。

「どう？ 大変だったでしょう」

「はい。写真の撮影も、結構時間がかかるんですね……」

「うん。でも、鷹緒はスピーディーで有名だね。早い方なんだよ」

「へえ……」

「社長。片付け終わりました」

スタッフが言った。

「オーケー。じゃあ、我々も事務所に戻りますか」

広樹が言う。その言葉に、沙織は広樹を見つめる。

「あの……鷹緒さんは？」

「あいつは、まだ仕事中。今撮った写真を加工するまでが、今日のあいつの仕事だからね。パソコンの前に座ったら、テコでも動かないよ。それより、みんなでご飯でも食べに行こうよ」

「は、はい」

広樹の誘いに、とっさに沙織が頷く。

「鷹緒！ 僕たち、事務所に戻るからな」

広樹が、鷹緒に向かってそう叫んだ。

「んー……」

生返事で、鷹緒が返事する。

「いつもああなんだ。さあ、一旦事務所へ戻ろう」

苦笑する広樹とともに、スタッフたちは仕事中の鷹緒を残して去っていく。沙織は広樹やスタッフたちと事務所へ戻り、そのまま食事へと出かけた。

「へえ。沙織ちゃんって、まだ十六歳なんだ？ 若いなあ」

食事をしながら、スタッフたちが沙織に言う。みんな気さくな人ばかりで、沙織もすぐに打ち解けていた。沙織は首を振りながら返事をする。

「でもみなさんとも、そんなに年離れてないですよネ？」

「そうはいつても、ここにいるのはみんな二十代だからネ。十代は遠いよ」

「へえ……」

「社長つて、二十九でしたっけ。鷹緒さんもそうですよネ？」

するとスタッフの一人が、広樹にそう尋ねた。

「うん、同じ年」

広樹が答える。その話題に、沙織も興味をそそられた。身を乗り出して広樹を見つめる。

「そうなんですか？ 社長さんと鷹緒さんが？」

「まあね…… 仕事でずっとかち合つてて、腐れ縁つてやつだよ」

「そういうえは鷹緒さん、まだですかネ。大丈夫かな？ 前、スタジオオでぶっ倒れてましたよね」

「え、そうなんですか？」

スタッフの言葉に、驚いて沙織が尋ねる。

「ああ、そんなこともあったよな…… でも、あの時はめちゃくちゃ忙しくて、徹夜漬けだった時だろ？ 心配いらないって」

その時、広樹の携帯電話が鳴った。

05：仕事のあと

「お、噂をすれば、鷹緒からだ。もしもーし」

広樹が電話に出る。

「今、いつもんどこ。じゃあな」

広樹はそれだけを言うと、電話を切った。スタッフたちは、苦笑いしている。

「簡単な電話っすね」

「どこにいたってさ。すぐ来るよ」

しばらくすると、鷹緒がやってきた。しかしその隣には、二人組の少女が引つついている。

「あれ？ モデルちゃんたちじゃないの」

広樹が言った。少女たちは、広樹の事務所の専属モデルであった。鷹緒が頷きながら口を開く。

「そこで会ったんだ。食事するって言ったら、どうしてもってさ」

「でも、ここじゃ三人は座れないな……」

「いいですよ、こっちで。諸星さん、こっちでいいでしょ？」

少女たちに引つ張られ、鷹緒は広樹たちの隣のテーブルへと席に着いた。

「いいなあ鷹緒さん。両手に花で、モテモテじゃないっすか」

スタッフの一人が言った。その言葉に、鷹緒が苦笑する。

「俺は口リじゃねえよ」

「ひどい。うちら、もう十八だもん。今年の春から大学生」

鷹緒の言葉に、少女たちが反論して言う。

「へえ、もうそんな年か。うちに来たときは、まだ中坊だったよな？」

「そうそう！ 髪も黒かったし、短かった！」

少女たちはテンションを上げながら、鷹緒と話を膨らませていた。

しばらくして――。

「ごちそうさまでした！」

少女たちの言葉に、鷹緒が笑う。

「ちゃっかりしてんなあ」

「えへへ。だって、おごりでしょ？」

「社長のおごりだよ。ごちそうさま」

鷹緒が、広樹に振り向いて言う。

「へいへい。モデルちゃんは、うちの宝よ」

そう言いながら、広樹は会計を済ませていた。一同も店を出る。

「鷹緒。そっちはもう、終わったんだよな？」

広樹の言葉に、鷹緒は軽く頷く。

「だいたいな。これから事務所で仕上げにかかるよ」

「オーケー。じゃ、スタッフはここで解散でいいです」

「はい、お疲れさまでした」

そう言うと、スタッフとモデルたちは去っていった。しかし沙織はどうしていいのかわからず、その場に立ち止まっている。

「沙織？ おまえももういいぞ」

そんな沙織に、鷹緒が言った。

「あ、うん。じゃあ、明日は……」

「明日も九時に事務所」

「わかりました。じゃあ……お疲れさまです」

「ああ」

沙織はそこから去っていった。みんな優しくだったが、淡々とした雰囲気が馴染みづらかった。

鷹緒は広樹とともに、事務所へと戻っていく。

「鷹緒。沙織ちゃんのバイト代だけ、手渡しでいいのかな？」

信号待ちをしながら、広樹が鷹緒に尋ねた。

「ああ……聞いてないけど、いいんじゃない？」

「おまえなあ……」

「あいつ、どう？ 使えた？」

鷹緒の言葉に、広樹が呆れたように返す。

「おまえの下で働かせてんだろ？」

「俺の下下だもん。下っ端の働きぶりなんて、見てねえよ」

その時、信号が青になったので、二人は歩きながら話し続ける。

「スタッフの間では、評判よかったよ。まだ何やればいいのかわからないだろうけど、気働き出来るし、使えるよ。それよりあの子、可愛いじゃない。目はパツチリで髪もふわふわ、しかも現役女子高生。モデルでいけるんじゃない？」

広樹の言葉に、鷹緒は静かに笑い、煙草に火をつけた。

「あーんな丸っこいのが、モデルなんて出来るわけねえだろ」

「丸っこいったって、太ってるわけじゃないだろ。顔は可愛いし、今は読者モデルの時代なんだぜ？ 絶対、人気出ると思うんだけどな……」

「社長の勘か？ 俺はややししいのが嫌なんだ。あいつの母親には、変なことには使うなって念を押されてるし」

それを聞いて、広樹は吹き出すように笑う。

「変なことって…… AVとでも勘違いされてんのかな？」

「ハハ。とにかく、俺からは口説けないぞ」

「わかったよ。それは僕がやる」

広樹がそう言う。二人は事務所へと戻っていった。

次の日。沙織は寝坊をしてしまい、走って事務所へと向かった。

「あ、沙織ちゃん」

受付の牧が声をかける。

「ご、ごめんなさい！ 寝坊しちゃって……」

「いいわよ。それより、さっきスタッフ出ちゃったのよ。昨日のスタジオなんだけど、場所わかる？」

牧の言葉に、沙織は息を切らせながら頷く。

「はい、わかります」

「じゃあ、そっちに行ってみてくれる？」

「わかりました。ありがとうございます」

沙織はそう言うと、スタジオへと走っていった。

スタジオに着くと、すでにスタッフたちが撮影の準備をしている。

「おはようございます。ごめんなさい！ 遅くなっちゃって……」

「ハハハ、まだ大丈夫だよ。寝坊？」

スタッフたちが言う。沙織は申し訳なさそうに頭を下げた。

「はい……ごめんなさい！」

「大丈夫、大丈夫。それより、その機材、全部出してくれる？」

「わかりました」

沙織はそう言いながら、辺りを見回した。

「鷹緒さんなら、ちよっと遅れて来るってさ。寝坊だって」

沙織に気付いて、スタッフが言った。

「アハハハ。さすが、親戚！」

他のスタッフが、笑ってそう言った。沙織は少し恥ずかしくなったが、明るい雰囲気につられて笑う。

その時、数人の青年がスタジオへと入ってきた。沙織の目に飛び込んできたのは、大晦日に見に行った、人気歌手のBBであった。

「BBだ！」

思わず沙織が叫んだ。

06：憧れの芸能人

「BBだ！」

思わず沙織が叫んだ。その声に、BBのメンバーが笑う。

「おはようございます。スタジオでその反応、新鮮ですね」

BBの一人が言った。

BBとは、二十代前半の男性ユニットで、ユウ、センジ、リュウ、アキラの四人で構成される、人気歌手グループである。

「す、すみません！ 聞いていなかったものですから……」

焦りながら沙織が言う。目の前にいるのが本物のBBなのか、まだ信じられない。

「沙織ちゃん。今日はね、BBさんの写真集撮りなんだよ」

そんな沙織に、スタッフが言った。

「そ、そうだったんですか……すみません。何も知らなくて、思わず……」

「諸星さんのスタッフさんですか？ 新顔ですね」

BBのリーダーであるユウが言う。BBの中でも、一番人気を誇っている青年だ。

ユウの言葉に、スタッフが説明を入れる。

「鷹緒さんの親戚の子なんです。ヘルプで入ってくれて」

「へえ、諸星さんの？ 僕たち、諸星さんに写真集撮ってもらいたくて、ずいぶん事務所に交渉してもらったんですよ。そうか、諸星さんの……」

しみじみと沙織を見つめながら、ユウが言う。憧れの歌手を前に、沙織はどうしていいのかわからなくなっていた。

するとそこに、鷹緒がやってきた。

「おはようございます。遅くなってすみません」

「おはようございます、諸星さん。寝坊ですか？ ひどいなあ。僕たちの写真集撮りだからって、気を抜いてるんじゃないでしょうね

？」

鷹緒の挨拶を受けて、ユウが言った。

「まさか」

苦笑しながら、鷹緒が答える。そう言いながらも、鷹緒の手はすでに準備を始めている。

「今、諸星さんの親戚の子と話してたんですよ。面白い子ですね」

「さあ、よく知らないから……」

鷹緒の言葉に、ユウも苦笑した。

「ハハハ、ひどいな。親戚でしょう？」

「遠いね。面白いって、何かしたの？」

「冗談ですよ。でもスタッフさんには、仕事内容くらい教えといてくださいよ」

沙織を庇うようにして、笑ってユウが答える。

「ああ……そーいや、言ってなかったか。沙織、BBのファンだったよな？ こいつ、大晦日もライブ行っただろ」

「本当？ 見てくれたの、僕たちの年越しライブ」

突然、嬉しそうに尋ねてきたユウに、沙織は緊張したまま頷いた。

「は、はい……」

「それは嬉しいな。諸星さん？」

「いえ、彼氏と。彼氏も大ファンで……」

沙織が素直に言った。

「なんだ、彼氏持ちかあ。でも嬉しいな。そっか……諸星さん、この子のために、この仕事受けてくれたんですね」

「えっ？」

ユウの言葉に、沙織は驚いた。だがユウは、構わず鷹緒に話しかけている。

「聞きましたよ。僕らの年越しライブのチケットは発売と同時に完売してたけど、諸星さんが渋ってたこの仕事、受ける代わりにどこでもいいから席を用意してくれて要請があっただって」

「まさか……それとこれとは別だよ。さあ、始めるから着替えて」

切り替えるように鷹緒がそう言つと、ＢＢのメンバーは更衣室へと向かつていった。沙織はユウの言葉が気になりつつも、仕事にかかった。

その日の撮影は、夕方までかかった。沙織は機材の片付けをしたり、買出しに行ったりし、徐々に仕事をこなしていった。間近にいる有名芸能人を前に、沙織は夢の中にもいるような感覚を覚えていた。

「お疲れさまです」

撮影が終わると、鷹緒はすぐに支度を始めている。そんな鷹緒に、スタッフが声をかける。

「あれ、鷹緒さん。今日はお急ぎですか？」

「ああ、これからＣＭの会議なんだ」

「マジっすか。大変ですね」

「いや。じゃあ、後は任せるよ。明日もここ使うから、適当に片付けたら帰っていいから」

着々と帰り支度を進めながら、鷹緒が言う。

「鍵はどうします？」

「事務所寄らないなら、鍵閉めて、いつもの……」

「窓枠の溝っすね。わかりました」

「じゃ、お先に」

鷹緒はそう言つたところで、沙織に気付き、そのまま沙織のもとへと歩いていった。

「沙織、明日も九時にここ。直接来ていいよ。明日も同じ、写真集撮りだから。じゃ、明日な」

鷹緒はそう言つと、スタジオを出ていった。

沙織は、ＢＢのユウに言われたことが気になっていたが、結局、鷹緒に何も聞けないまま、片付けを終えた。

その夜。自宅に戻つた沙織は、彼氏の篤と電話をしていた。

『マジで！ BBに会ったの？』

篤の声が、電話から漏れた。沙織は自慢げに話を続ける。

「うん。しかもね、リーダーのユウさんが、話しかけてくれたんだよ！」

『本当かよ？ 信じらんねえな』

「嘘じゃないもん！ 明日も同じ撮影だし」

『……なあ。マジの話ならさ、俺も明日連れてってくんない？』

篤が言った。

「え？」

『おまえだつて、俺がBBファンだつての知ってるだろ？ 俺、どうしても会いたいんだ。頼むよ、沙織』

確かに篤は熱烈なBBファンで、ファンクラブにも入っている。ミーハーな部分も手伝つて、芸能ネタにはとことん弱い。

「で、でも……私だつて、仕事で行くんだよ？ 話しだつて出来るとは限らないし……」

沙織は少し困っていた。篤をBBに会わせてやりたいと思うが、遊びで行くのではない。第一、鷹緒が許すはずがないと思った。

『わかつてる。でも頼む！ 遠くから見てるだけでいいんだ。俺に出来ることなら、なんでもするしさ』

篤の必死な願いに、沙織も弱っていた。

「わかった。じゃあ、親戚の人に話してみるけど……どうなるかわかんないよ？」

『ありがとう！ 頑張つて頼んでみてよ。絶対に邪魔はしないからさ』

「わかった……じゃあ、ちょっと待ってて。電話してみるから……」
沙織はそう言つて、電話を切った。時計を見ると、夜の十一時を回っている。

「こんな時間に大丈夫かな。会議があるって言ってたけど……」
少しの間悩むと、沙織は意を決して、鷹緒の携帯電話に電話をかけた。

07:ミハー彼氏

数回呼び出し音が鳴ると、留守番電話に繋がる。沙織は小さく溜息をついて、電話を切ろうとしたその時、声が聞こえた。

『はい』

その声に、沙織は電話を持ち直す。

「あ、鷹緒さん？ ごめんなさい。こんな時間に……今、大丈夫ですか？」

少し緊張しながら、沙織が言う。

『ああ、いいけど……』

「あの、実は……言いくいんですけど、私の彼氏がBBの大ファンで、明日の撮影を見に来たいって言うてるんですけど……」

思い切つて、沙織が言った。しかし鷹緒は、すぐに返事をしない。そこで沙織は言葉を続けた。

「あ、でも、絶対に邪魔はしないし、声もかけないし、遠くで見ただけでいいって……手伝えることなら、なんでも手伝いますって……」

……

『……駄目』

沙織の言葉に、ハッキリと鷹緒が言った。沙織は淡い期待をなくし、予想通りの答えに苦笑した。

「あ……やっぱり駄目ですね。仕事現場に……」

『嘘だよ、いいよ』

諦めかけた沙織に、鷹緒からそんな返事が聞こえる。あまりに唐突な返事だったので、沙織は一瞬、何を言われたかわからなかった。そんな沙織に反して、鷹緒の態度はあっさりしているようだ。

「えっ？」

『べつにいいよ。見てるだけなら』

「ほ、本当？」

『ああ』

「ひ、ひどーい。どうして駄目だなんて言ったの？」

ほっとして、笑いながら沙織が言う。

『なんとなく……意味はないよ』

そう言う鷹緒は、煙草を吸っているようで、時に溜息のような息が聞こえる。

「鷹緒さん。さっき聞けなかったんだけど……」

『なに？』

「BBのユウさんが、鷹緒さんが私のために、今回の仕事を引き受けたって言ってたでしょう？ あれって、どういうこと……？」

昼間、ユウにそれを聞いてから、気になって仕方がなかった疑問を、沙織は鷹緒にぶつけた。

『ああ……そんなことはないよ。ただ、俺がこの仕事を済ませてただけど、年越しライブのチケット取ることになったから、代わりに引き受けるって形に見えてるんだろ。べつにそんなことはないから、気にしないでいい……あ、悪い。会議始まる』

話の途中で、鷹緒がそう言った。

「え、まだ会議？」

『ああ。休憩中だったんだけど……じゃあ、明日な』

「う、うん。ありがとう！」

沙織はそう言うのと、電話を切る。思わぬ鷹緒の優しい言葉に、嬉しくなった。

次の日。沙織は篤を連れて、スタジオへと向かっていった。今日は遅刻をしなかったが、中ではすでに、スタッフたちが支度を始めている。

「あ、沙織ちゃん。おはよう」

スタッフの一人が、沙織に声をかけた。

「おはようございます。すぐ手伝います」

「うん。あれ、その人は？」

「あ、彼氏です…… B Bさんの大ファンで、鷹緒さんに言ったら、連れて来ていいって言われて……」

「へえ。僕らなんか、この業界入ってから、そういうのなくなったなあ…… まあ、鷹緒さんがオーケーしたならいいよ。隅の方に居てくれる？」

「わかりました。じゃあ、篤。そっちの方に居て」

沙織が、篤に指示をする。篤はスタジオを見回しながら頷いていた。

「わかった。俺、手伝わなくていいの？」

「うん。大丈夫みたい……じゃあ、待っててね」

沙織は、篤を壁際で待たせると、仕事にかかり始める。

しばらくすると、B Bのメンバーがやってきた。

「おはようございます。今日もよろしくお願いします」

憧れのB Bを前に、篤は目を輝かせてB Bを見つめている。するとそこに、鷹緒ともう一人男性がやってきた。

「鷹緒さん、木田君、おはようございます」

スタッフが声をかける。

「おはよう」

鷹緒は、篤を横目に、中央まで歩いていく。

「おはようございます。今日は昨日の続きです。今日は全員の撮影が終わったら、一人ずつの撮りになります。予定時間は、全員の撮影が終わったら言います。ではB Bのみなさんは衣装に着替えて、メイクしてください。終わり次第、すぐに撮影を開始します」

鷹緒と一緒に来た男性がそう言くと、全員が動き出した。すると鷹緒は大きなあくびをして、隅の椅子に座る。

「大丈夫ですか？ 鷹緒さん。また、あんまり寝てないみたいですね」

「んー……結局、昨日も会議が長引いてね。深夜まで続いたよ。でもまあ、なんとかね」

スタッフの言葉に苦笑しながら、鷹緒が言う。

鷹緒たちがそんな話をしている時、沙織は一仕事終えて、篤と話していた。

08：バイト終了日

「沙織。あのBBの後に入ってきた人、誰だよ」

篤が、鷹緒を見ながら言った。

「あの人が、親戚の諸星鷹緒さん。お母さんの従兄弟だよ」

「マジかよ。すげえ背高いし、カッコイイじゃん」

「そ、そうかな」

沙織が、少し照れて言う。

「ああ、それより夢みたいだよ。マジでBBじゃん！」

興奮しながら、篤が言う。目に映るものすべてが新鮮なようだ。

「当たり前でしょ。信じてなかったの？」

「ちよつとな」

「ひどーい」

二人が笑っていると、鷹緒が近付いてきた。

「あつ。お、おはようございます！」

慌てて沙織が、お辞儀をして言う。

「おう。君が彼氏？」

鷹緒が篤を見て言ったので、篤は頭を何度も下げた。鷹緒は静かに微笑んで、篤を見つめている。

「はい、遠山篤といいます！ 無理言つてすみません。俺、本当にBBのファンで……」

「まあ、こんなもんでいいなら、どうぞ……」

「……鷹緒さん。あの人は？」

突然、沙織が尋ねた。

「誰？」

「ほら、一緒に来た男の人」

「ああ……初めてだったか。おい、俊二」

鷹緒がそう呼ぶと、鷹緒と一緒にやってきた男性が、こちらに走って来た。

「こいつ、俺の親戚の沙織と、その彼氏の遠山君。沙織には今日まで手伝ってもらうから、勝手に使ってくれ」

「わかりました」

鷹緒の言葉に、男性が笑顔で頷く。初々しさが残るような、爽やかな笑顔の青年である。

「こいつは、俺の助手の木田俊二。きだしゅんじ年末年始は海外の仕事でいなかったけど、また戻って来たから。おまえ、今日はこいつの下で動いて」

鷹緒はそう言うと、別のスタッフのもとへと向かっていった。

「よろしく願います」

俊二と紹介された男性に、沙織が挨拶をする。

「こちらこそ。指示はその都度するんで、よろしく願います」
「はい」

俊二はそう言うと、スタッフたちのもとへと去っていった。

「みんな優しそうな人ばかりだな」

「鷹緒さんは、そっけないけどね」

篤の言葉に、沙織が苦笑して言う。

その時、B Bのメンバーが、衣装に着替えてやってきた。

「B Bさん、入ります」

「よし、始めよう」

一気にスタジオは緊張に包まれた。

夕方。篤が沙織に話しかける。

「沙織。俺、これからバイトなんだ。もう行かなきゃなんないけど、今日はありがとう。おまえのおかげで、貴重なものを見せてもらったさ……あの鷹緒さんって人にも、お礼言っといってくれな」

撮影中のため、静かに篤がそう言った。そんな篤に、沙織も頷く。

「じゃあ、こっち終わったらメールするね」

「ああ。じゃあ、これで」

篤はアルバイトのため、スタジオを後にした。

「はい、撮影終わります。お疲れさまでした」

それからしばらくして、そんな声が聞こえ、撮影が終わった。

B Bたちが楽屋へ戻ると、スタッフたちは早々に機材の片付けに取りかかる。沙織もそれを手伝った。そんな中、鷹緒だけは端のスペースで、パソコンに向かっている。

片付けが着々と進む中で、着替えを終えたB Bのメンバーが出てきた。

「お疲れさまでした」

そう言いながら、B Bのメンバーは沙織のもとへと近付いていく。

「え……えっ？」

09：サプライズ

近付くBBに、沙織はきょろきょろと周りを見た。しかし、近くには誰もいない。

「沙織ちゃん」

「は、はい！」

ユウの言葉に、沙織が答える。どこを見ればいいのか、何をしたらいいかがまったく分らないほど、緊張する。

「これ、よかつたらどうぞ」

そう言つてユウが差し出したのは、メンバー四人のサイン入りCDであつた。沙織はまたも驚く。

「えっ！」

「昨日、僕らのファンだつて言つてくれたじゃない？ それに君、手伝いだから今日で最後つて聞いて、よかつたらと思つて……」

思わぬBBの言葉に、沙織は震える手でCDを受け取つた。

「あ、ありがとうございます！ 嬉しいです……！」

感無量といった様子の沙織に、BBのメンバーは顔を見合せて微笑む。

「よかつた。じゃあ、また……僕たちの写真集、手伝つてくれてありがとうね」

そう言つと、BBのメンバーたちはスタジオを後にした。

「よかつたね、沙織ちゃん。彼氏にお土産出来たね」

その声をかけたのは、俊二である。

「木田さん。はい、きつとすごく喜びます！」

沙織は微笑んだ。まだ今までの出来事が、頭の中でリフレインしている。

「よかつたね。これ、三日分のバイト代。鷹緒さんから預かつてたんだ。お疲れさま」

そう言つて、俊二が封筒を差し出した。

「あ……ありがとうございます」

「鷹緒さん、まだ仕事モードで話しかけられないと思うから、このまま帰っていいよ」

「そうですか……貴重なお仕事手伝わせてもらったので、彼だけじゃなくて、私もお礼言いたかったんですけど」

「じゃあ、伝えておくよ」

「お願いします……あ、もうBBの写真集撮りは終わりなんですか？」

横目で鷹緒の方を見ながら沙織が尋ねた。しかし鷹緒が居るはずのスペースには、すでに人を拒むかのように仕切りが閉められ、姿さえ見られない。礼の一つも言えずに仕事を終えるのは、少し寂しく感じた。

「ううん。来週、今度は外で撮りがあるよ。平日だけだね……また手伝ってくれる？」

「あ、手伝うのはいいんですが、来週からは学校があるので……」
沙織が、残念そうに言った。出来ることなら、またBBに会いたいと思った。なにより、スタッフも優しいので、この仕事は楽しく思える。

「ああ、そうか。まだ高校生だもんね……じゃあ、暇な時は事務所に連絡してよ。仕事はたくさんあるからね。また、芸能人に会えるチャンスもあるだろうし」

「ありがとうございます」

「じゃあ、お疲れさま」

「はい。お疲れさまでした」

俊二に見送られ、沙織はまだ仕事中の鷹緒を尻目に、スタジオを去っていった。

数日後。冬休みが明けた学校で、沙織は篤と話をしていた。

「すげえな、沙織。みんなに自慢出来るじゃん。BBとしゃべって、

サイン入りのCDもらったんだぜ？ マジすげえ！」

子供のようににはしゃぐ篤に、沙織も微笑む。

「うん。ラッキー」

「おまえ、すごいよ。親戚が売れっ子の写真家だなんてさ。あの人、結構有名なんだな。あれからなにげに雑誌とか見てても、諸星鷹緒って名前、かなり出てるよ」

「え、本当に？」

「うん。確かこれにも……」

驚く沙織に、篤は持っていたファッション雑誌を広げる。すると、メインページのカメラマン表記に、鷹緒の名前があった。

「本当だ！ こんな身近な雑誌にも関わってるなんて、知らなかった」

更に驚いて、沙織が言う。

「なんだよ、親戚のくせに」

「そうだけど……本当に、知らないんだもん」

「アハハ。おまえも大物だなあ。まあ母親の従兄弟じゃ、俺も全然知らないけど」

その時、沙織の携帯電話が鳴った。

「あ、電話……鷹緒さんだ」

電話には、鷹緒の名前が出ている。

「早く出ろよ」

「うん」

篤に促され、沙織は電話に出た。

10：電話

「もしもし。沙織です」

『諸星ですけど……今、平気？』

電話からは、確かに鷹緒の声が聞こえる。

「あ、はい。大丈夫」

『連絡遅くなって悪い。ちゃんと金、もらったか？』

鷹緒が尋ねた。沙織は電話越しに頷く。

「バイト代？ うん、もらったよ」

『そうか。助かったよ。ああ、BBにCDもらったんだって？ よかったな』

「うん！ 本当、ラッキーだよ、ありがとう。あ、BBの写真集って、もう全部撮ったの？」

はしゃぐように、沙織が言う。

『いや、今日最終。今日終わったら、入稿するから……発売は、春頃になるって言うてたよ』

「春かあ。待ち遠しいな」

『そうか』

「うん。あ、また、手伝いに行ってもいい？」

『まあ、ミィハーしなきゃな』

鷹緒の言葉に、沙織が赤くなる。

「しないもん。BBだって、べつに……」

『まあ、好きな時に来いよ。事務所はいつも誰かしらいるし。おまえの顔も、事務所の人間みんな覚えてたみたいだから』

「本当？ わかった。ありがとう、鷹緒サン」

『ハハ。こちらこそ……じゃあ、ありがとうな』

「うん」

『あ、おまえ、まだ学校？』

突然、鷹緒が尋ねた。

「うん、そうだけど……」

『何もないなら、渋谷に来れば?』

「え? なんで……」

『あ、呼んでる。じゃあな』

沙織はそこで、鷹緒に電話を切られた。

「なんだって?」

篤が尋ねる。

「よくわかんない……何もないなら渋谷に来れば、だって」

「渋谷に? なんで?」

「さあ……」

二人は、首を傾げる。

「何か知らないけど、ここに居てもしょうがないし、行ってみるか。それに、今日はＢＢの新曲発売日だしな。帰ろうぜ」

「あ、今日だっけ。じゃあ、ＣＤショップも寄らなきゃね」

沙織と篤は、学校を出ていった。

「そういえば今日、ＢＢのＤＶＤも発売だったよね? この間のライプのやつ」

渋谷の街を歩きながら、沙織が言う。その横で、篤は街並みをぼうつと眺めながら口を開いた。

「そうだっけ。ＣＤと発売日が一緒?」

「そうだよ。そういえば、前もＣＤとＤＶＤの発売が一緒だった時があつて、その時は原宿でシークレットライブやったんだよね」

その時、女子高生が黄色い声を上げて、走っていくのが見えた。

「キヤー! ＢＢがシークレットライブしてるって!」

その声に、二人は顔を見合わせる。

「走るぞ、沙織!」

「うん!」

二人は、女子高生たちが向かう方向へと走っていった。

11：シークレットライブ

しばらく行くと、とあるショッピングビルのバルコニーに、BBの姿が見えた。その上には大型スクリーンがあり、アップでのBBが映る。ビルの下には、すでに人だかりが出来ていた。

「あ！ 鷹緒さんだ！」

その中で、沙織がそう叫んだ。沙織の視線の先には、鷹緒の姿があった。鷹緒は、BBたちと同じバルコニーのステージ上で、BBの写真や、ファンの写真を撮っているようだ。

「あれ、沙織ちゃん？」

その時、沙織に声をかけたのは、鷹緒のいる事務所の社長、広樹であった。

「ヒロさん」

沙織も気付いてお辞儀をする。

「やっぱり沙織ちゃん。覚えててくれた？」

「はい、もちろんです。先日はお世話になりました」

「いえ、こちらこそ、助かったよ。沙織ちゃん、鷹緒から聞いてたの？ このシークレットライブ」

「あ、いえ。たまたま……」

「そうだよな。親戚とはいえ、鷹緒がそんな情報漏らすわけないか……」

広樹が、苦笑して言った。

「でも、すごいですね。シークレットライブなのに、こんなに人が……」

「うちの企画だね。今日はCDの発売日だし、写真集の宣伝も兼ねてだよ。うちの事務所の宣伝にもなるし」

BBが映る大画面の下には、スポンサーや企画の名前が小さく連ね、そこに広樹の事務所の名前も入っていた。

「なんかすごいな……すごい！」

沙織が興奮して言った。その言葉に、広樹が微笑む。

「そう言ってもらえると、こちらとしてもやりがいがあるよ。こちら、彼氏？」

広樹が篤を見て言った。篤も会釈する。

「はい、遠山です。先日は、撮影現場にお邪魔させていただいて…

…」

「ああ、聞いてるよ。BBの大ファンらしいね」

「はい」

「ライブはもうしばらく続くと思うから、楽しんでいつて。僕らも、なかなかこういう機会はないから、嬉しいよ。じゃあ僕、事務所帰る途中なんで、これで……よければまた、いつでも事務所に寄ってね」

広樹はそう言うと、そこから去っていった。沙織と篤は、広樹にお辞儀をすると、ライブを見つめた。

「やべっ、バイトに遅れる！」

すると突然、篤が叫んだ。

「今日もバイト？」

「うん。冬休みで、結構使っちゃったからさ」

「そっか……」

「じゃあ俺行くけど、沙織は？」

「ライブ、最後まで見ていくよ……」

「わかった。じゃあ、また明日な」

沙織はそこで、篤と分かれた。

ライブはそれからほどなくして終わってしまい、人の波は嘘のようどこかへ消えていった。

沙織はしばらくウィンドウショッピングを楽しんだ後、思い立って鷹緒の事務所へと向かっていった。

「あれ、沙織ちゃん。さっきはどうも。彼氏くんは？」

やってきた沙織を見て、受付でお茶を飲んでいた広樹が尋ねる。

「あ、バイトで……」

「そっか。どうだった？ BBのライブは」

「もう、すっごくよかったです！ 興奮しちゃったんで、早速来ちゃいました」

興奮気味で、沙織が言った。

「そうか。よかった、よかった」

「あの……鷹緒さんは、まだ帰ってないんですか？」

沙織が、辺りを見回して尋ねる。

「スタジオにいると思うよ。あそこは鷹緒のアトリエみたいになってるから。今日は泊り込みで作業するって言ってたよ」

「……行っても平気ですか？」

沙織が言う。先日の撮影や今日のライブのことを、鷹緒と直接会って話があった。そんな沙織に、広樹が笑う。

「いいけど、仕事中的あいっつて、反応ないからつまらないと思うよ？ 邪魔したら不機嫌になって、扱いづらいしね」

「そうですか……」

「ああでも、顔出してやってよ。これ持って」

そう言っ、広樹は冷蔵庫から、缶のお茶とおにぎりを出し、袋に入れて沙織に差し出した。

「あいつ、仕事となると食べるのも忘れるんだよな。僕も後で顔出そうと思ってたんだけど、君が行ってくれるならいいや。なんとか食べさせてやって」

「わかりました。じゃあ……行ってきます」

沙織はそれを受け取ると、スタジオへと向かっていった。

沙織がスタジオへ行くと、鍵が閉まっていた。

「あれ？ いないのかな……」

そばにあった呼び鈴を鳴らし、何度かドアをノックする。しかし、応答はない。

「いないのか……」

そう言いかけた時、ふと前にスタッフが言っていたことを思い出した。

『鷹緒さん、前にスタジオでぶっ倒れてましたよね？』

「……大丈夫だね？ でもヒロさんも、仕事となると食事も忘れるって……」

沙織は急に、鷹緒の安否が心配になった。その時、前にスタッフがスタジオの鍵のありかについて話しているのを思い出す。

「窓枠の溝に……」

近くの窓枠の溝を見ると、そこには鍵が挟まっている。

「本当にあつた……どうしよう、泥棒みたい。で、でも、鷹緒さんが倒れてたら、シャレにならないよね」

沙織は意を決して、その鍵でスタジオのドアを開けた。するとドアは簡単に開いた。

静かに中へと入っていくが、スタジオに人の気配はない。

「た、鷹緒さん……いませんね。鷹緒さん……」

「なに？」

その時、沙織の背後から、そんな声が聞こえた。

「ぎゃあ！」

12：スタジオ訪問

「ぎゃあ！」

沙織は驚きのあまりに飛び上がり、声を上げて振り向いた。すると、そこには鷹緒が立っている。

「た、鷹緒さん！」

「なんだよ、こんなところで。それにおまえ、鍵……」
思わぬ訪問者に、鷹緒も驚いた様子である。

「あの、か、鍵のありか、スタッフさんが話してるの聞いてて……
勝手に入って、ごめんなさい！」

鍵を差し出しながら、沙織は深々と頭を下げた謝った。

「ああ……いいよ。ここにあるのは、ガラクタばつだから。ほとんど放置状態……」

鷹緒はそう言って、中へと入っていく。

「……今来たの？」

中へ入りながら、沙織が尋ねた。

「ううん。一度来て、あまりに腹減ったから、そのコンビニでカップラーメンをね」

「あ、私も、ヒロさんに言われて、おにぎりとお茶……」

「ああ、サンキュー」

鷹緒はそう言つと、沙織からそれを受け取り、お湯を沸かし始める。そして、おにぎりを頬張りながら、口を開いた。

「それで？」

「えっ？」

鷹緒の言っている意味がわからず、沙織が驚いた顔をする。

「え、って……何か用があるんじゃないのか？ 事務所に行ったんだろう？」

「ああ、うん……特に用事があったわけじゃないんだけど、さっきヒロさんに会ってね。いつでも寄ってね、なんて言ってくれたから、

本当に寄っちゃった……」

沙織は妙にドキドキしていた。お互いのことはあまり知らないが、親戚であるという微妙な関係の鷹緒は、有名人を手がける写真家であり、沙織の周りにはいないタイプである。

「へえ。今日、彼氏は？」

「バイト」

「ふうん？」

そう言いながら、鷹緒はパソコンに向かう。

「あの……今日のBBのライブ、見たよ。渋谷に来て、このことだったんだね。ちゃんと教えてくれればよかったのに。危うく見逃すところだったよ」

近くのソファに座りながら、鷹緒の背中に向かって、沙織が言った。

「ああ……秘密はどこから漏れるかわからないからな。ちゃんとは言えないよ」

「そんなこと、しないのに……」

「うん……まあね」

その時、やかんの笛が鳴った。

「あ、私がやるよ」

立ちかけた鷹緒に、沙織が言う。沙織はやかんの火を止めると、鷹緒が買って来たカップラーメンにお湯を入れ、鷹緒のそばに置いた。

「はい」

「サンキュー」

沙織は首を振ると、鷹緒の前にあるパソコンを覗く。画面上には、BBの写真が並んでいる。

「わあ、BBだ。これ、さっきのライブ？」

「ああ」

「すごいなあ……そういえば、鷹緒さんって有名なんだね」
「は？」

唐突なまでの沙織の言葉に、鷹緒は驚いた。

「あ、あのね。さっき彼氏が教えてくれたの。ファッション雑誌とかに、鷹緒さんの名前が結構出てるって……」

「ああ……でも、有名かどうかは疑問だな」

「またまた」

苦笑している鷹緒は、カップラーメンの蓋を開け、食べ始めている。

そんな様子を見つめている沙織に気付き、鷹緒は口を開いた。

「おまえ、夕飯は？」

「あ、どうしようかな……」

「早く帰れよ。暗くなるぞ」

「うん……」

沙織はなぜか、まだ帰りたくないと思っていた。もっと鷹緒と話していたと思う。

「……家に何かあるの？」

「え、どうして？」

鷹緒の言葉に、今度は沙織が、驚いて聞き返す。

「いや。帰りたくなさそうだったから」

「べつに、そんなことないけどさ。でも、なんか……そういう時ってあるでしょ？」

「さあな……」

鷹緒はカップラーメンを置くと、立ち上がった。

「もう食べたの？」

「飯、食いに行こうぜ」

「まだ食べるの？」

「こんなもんじゃ、体力続かねえからな」

鷹緒はそう言うと、パソコンの電源を切り、上着を持って振り向いた。

「送るよ」

その言葉に含まれた優しさが、沙織にはわかった。しかしそれは、

恥ずかしいような心地よい感覚である。

「うん……」

沙織はそう返事をする、鷹緒についてスタジオを後にした。

13：二人きりの食事

外に出た二人は、鷹緒の車でファミリーレストランへと向かった。そのまま店に入った鷹緒は、すぐに携帯電話を見つめたので、沙織が首を傾げる。

「電話？」

「いや……」

そう言つと、鷹緒は携帯電話の電源を切った。

「切っちゃうの？」

「食事中くらい、逃れたいんでね」

「……鷹緒さんって、すごい人なんだね。私、知らなかった」

「なんだよ、さつきから」

鷹緒が、苦笑して言う。

「だって、いろいろ活躍してるみたいだし、忙しそうだし……」

「まあ、忙しいのは当たってるけど。それより、沙織は？」

「え？」

「だから学校とか、勉強とか、どうなんだよ」

「どうつて……特にないよ。順調、順調」

「へえ……」

その時、沙織の携帯電話が鳴った。見ると、知らない番号である。

「出ないの？」

首を傾げている沙織に、鷹緒が言う。

「あ、うん……」

沙織は周囲を気にしながらも、電話に出た。

「はい」

『あ、沙織ちゃん？ 僕、木村広樹です。もしかして今、鷹緒と一緒に？』

電話の相手は、鷹緒のいる事務所の社長、広樹であった。

「ヒロさん。はい、一緒です」

『よかった。悪いけど、代わってくれるかな？』

「はい」

沙織が鷹緒を見ると、鷹緒は嫌そうな顔をしている。しかし出ないわけにもいかず、鷹緒は沙織の電話を受け取った。

「はい……」

『鷹緒。おまえ、食事中に電源切るのやめろよ』

すかさず、そんな広樹の声が聞こえる。鷹緒はうんざりした様子で口を開く。

「悪いな。飯食う時間くらいは大切にしたいんだよ」

『言うと思ったよ。今、どこだよ。スタジオ行ったら、いないからさ』

「んー、ちょっと気分転換。飯食って、沙織送って、戻るよ」

『わかった。それはいいけど、BBの事務所から連絡あつてさ……』
その話題に、鷹緒は聞き入った。

「何かトラブルか？」

『いや、別件だ。実はおまえに、BB専属のカメラマンになって欲しいっていう、要請が来たんだけど』

「専属……？」

鷹緒は目の前の食事に手をつけながら、会話を続ける。

『そう嫌そうな声出すなよ』

「……わかってるだろ？ 嫌なんだよ、そういうの。専属なんていったら被写体限られるし、いろいろと面倒臭い」

『わかってるよ。でもBBは人気グループだし、損はないよ。BBのメンバーもあっちの事務所も、みんなおまえの腕に惚れてんだよ。今回の写真集の件だって、BBのメンバーから直々の要望なんだぞ？』

広樹の言葉に、鷹緒は考えていた。苛々するように、テーブルの上に置かれたフォークをいじっている。

「……でも、俺はこれからもいろんな仕事を受けたいし、今は写真だけじゃなくて、企画業までやってるんだ。BBばかりに構ってい

られないよ。スタッフだって大勢いるわけじゃないし、今でさえいっぱいいっぱいスケジュールなのに、これ以上、仕事を増やすなよ」

真剣な態度の鷹緒を、沙織は静かに食事をしながら見つめていた。鷹緒は尚も話を続けている。

『わかってる。スタッフの件は、今後増やすことを約束するし、事務所としてもBBとの契約はプラスなんだ。うちはまだまだ小さい事務所なんだし、わかってくれよ』

広樹の言葉に、鷹緒は小さく溜息をついて、目を閉じた。

「……わかった。帰ってから考えるよ。リミットは？」

『まだ決まっていらないが、近いうちだ』

「じゃあ、今晚考える。じゃあな」

電話を切ろうとする鷹緒に、広樹の声がすぐに引き止める。

『あと鷹緒。携帯の電源だけは切るなよ』

「わかったよ……じゃあな」

鷹緒は電話を切ると、沙織に返す。

「……悪かったな」

そう言いながら、鷹緒は自分の携帯電話の電源を入れた。すると、すぐに電話が鳴る。鷹緒は溜息をつく、電話に出た。

「はい、諸星です。はい……」

鷹緒が電話を続けている間、沙織は食事を続けていた。

しばらくして、鷹緒は電話を切った。

「……大変そうだね」

苦笑しながら、沙織が言う。いつ見ても鷹緒は、忙しそうに見える。

「だから嫌なんだよ。食事くらい、ゆっくり食べたいのに……もう冷めてるし」

鷹緒が溜息をつきながら、眼鏡を拭いてそう言った。俯く顔は長めの前髪に隠れ、素顔を見ることは出来ない。

「……目、悪いんだ？」

「昔から、かけてたよ」

「うん、知ってる。それは覚えてるよ」

眼鏡をかけ直した鷹緒を、沙織は見つめる。改めて見ても、そこに子供の頃に知っている親戚の姿はない。まるで家族や親戚という雰囲気は持つておらず、別世界の男性に見える。

沙織が見とれるように見ていると、そこに大きなパフェが運ばれて来た。

「うわ、デカ！」

驚く沙織に反して、鷹緒は嬉しそうだ。

「俺の」

「超意外！ 甘い物好きなの？」

「うん、かなり好き。最近疲れてるし、甘い物は腹もちいいからな」
「へえ」

意外な鷹緒の一面に、沙織は微笑みながら、自分の食事続ける。

「そういえば、おまえ、バイトとかしないの？」

突然、鷹緒がそう尋ねた。

「したいとは思ってるんだけどね……」

「じゃあよかったら、うちの事務所また手伝ってくれよ。またBBに会えるかもしれないぞ」

「本当？ でもやりたいけど、学校あるから夕方とか週末しか働けないよ？ デートの時間だって、削られたくないし……」

「ああ、べつにいいよ。週に七日だろうが、一日だろうが、好きな時に来いよ」

鷹緒は軽くそう言う。

「え、そんなんでもいいの？」

「ああ。今日みたいに、暇な時に来ればいいじゃん」

「暇、暇言わないでよ。今日はたまたまだもん。篤がバイトで先に帰っちゃったから……」

「ふうん？」

そう言いながら、鷹緒はパフェをたいらげた。

「すごい、一気……」

「ごちそうさま。さて、帰るか」

「うん」

二人はファミリーレストランを出ていった。

14：事務所

車の中で、沙織はまたも緊張する。鷹緒の存在は、すでに親戚ではなく、芸能人のような感覚になっていた。華やかな世界で活躍する鷹緒の存在は、沙織の好奇心をくすぐる。

「沙織」

「は、ハイ？」

突然呼ばれて、沙織が我に返った。

「おまえ、家に連絡したのか？ 夕飯食べてくるって」

「ううん。いつも私、外で食べるから」

「え、じゃあ、お母さんどうしてんの？」

「お母さんも、夜はパートの日が多いんだ。習い事とかもやってるし。うち、結構オーブンだから、遅くても平気」

「おまえなあ……まだ学生なんだから、連絡くらいしろよ」

「はいはい」

「聞く気ねえな……」

沙織の返事に、鷹緒は苦笑する。

「じゃあ、鷹緒さんの学生時代は？」

「俺は真面目に勉強してました。まあ……家にはあんまり帰ってなかったけどな」

「じゃあ一緒にじゃん」

「一緒にすんなよ」

車は、沙織の自宅へと着いた。

「ありがとございました」

車から降りながら、沙織が言う。

「どういたしまして……でも学校まで電車通学、少し大変だな」

鷹緒が言った。沙織の自宅から学校までは、電車で四十分ほどだが、行きも帰りもラッシュ時となる。

「もう慣れたよ。それに、遊んでたらラッシュはクリア出来るし」

「遊ぶなよ。じゃあな」

「ありがとうございます」

鷹緒はそのまま車で去っていった。

その日から、沙織はちよくちよく暇があつては、鷹緒の事務所に行くようになっていた。鷹緒に会うことは滅多になかったが、社長の広樹も事務員の牧も、みな優しくかったので、沙織にとって居心地の良い場所になっている。

「こんにちはー」

ある休日。今日も篤がバイトのため、沙織は一人、事務所へと顔を出した。

「沙織ちゃん。いらっしやい」

事務員の牧が、受付で出迎える。沙織は牧に近付き、口を開いた。
「牧さん。何か仕事ありますか？」

「あるわよ、膨大に。でも、ちょっと休んでからにしようよ」

「はい。じゃあ、コーヒー入れますね」

「ありがとうございます」

沙織は慣れた様子で給湯室へと入っていき、コーヒーを入れて受付に戻る。そんな沙織に、牧がクツキーの入った缶を差し出した。

「ありがとう、沙織ちゃん。クツキーあるから、一緒に食べよ」

「わあ、おいしそう。いただきます」

沙織はクツキーを頬張りながら、事務所を見回す。

「今日は静かですね」

「比較的ね。忙しい時期も、ちょっと過ぎたし」

その時、鷹緒が事務所へ入ってきた。

「鷹緒さん」

「おう。なんだ、また来てたのか。よっぽど暇なんだな」

憎まれ口を言いながら、鷹緒が沙織を見て言う。

「またまた、鷹緒さん。沙織ちゃん、いろいろ手伝ってくれてるんですよ」

苦笑しながら牧が言った。鷹緒は軽く微笑みながら、応接部分のソファへと座る。

「ふうん……じゃあ、俺にもコーヒーくれよ」

「ひねくれ者にはあげませんよー」

鷹緒に近付き、わざと膨れっ面をしながら沙織が言う。

「すみませんね。この年になると、ひねくれもするんだよ。いいからくれ」

「はい」

沙織は笑いながら、コーヒーを入れて鷹緒に差し出した。

「サンキュー」

鷹緒は早速テーブルに書類や写真を広げ、コーヒーに口をつける。

「あ、ＢＢの写真」

テーブルの上を覗き込みながら、沙織が言った。鷹緒は構わず、写真を並べている。

「本当、カッコイイわよね、ＢＢ。鷹緒さんも、どうするのかわかったけど、ＢＢの専属カメラマンの契約も受けてくれたから、事務所の知名度も一気に上がって……」

すぐそばの受付から、牧も覗いてそう言った。

「あ、受けたんだ？　ＢＢの専属カメラマン」

「ガキが首突っ込むな」

沙織の言葉に、鷹緒が言う。

「最近、冷たくないですかー？　親戚なのに」

そんな鷹緒に、冗談交じりで沙織が言った。

「あのなあ。暇な時は手伝えと言ったけど、毎日毎日来やがって」

「べつに、鷹緒さんにはほとんど会わないじゃない」

「話には聞いている」

その時、鷹緒の携帯電話が鳴った。

「はい。ああ、どうも……」

すかさず電話に出た鷹緒の後ろで、膨れる沙織に、牧が笑って口を開く。

「漫才やってるみたいね」

「合わないんです。私と鷹緒さんは」

「あら。面白いコンビだと思うけど？」

「やめてくださいよ。あんなオジサン」

その言葉に、鷹緒が沙織の頭をコツンと叩いた。

「あ、電話終わってたんだけ？」

「牧。これ、俺の来週のスケジュール。ヒロと俊二に渡しておいてくれる？」

沙織の言葉を遮って、鷹緒が牧にそう言う。

「わかりました」

返事をしながら、牧はすぐにコピーを取り始めている。その時、奥から広樹が出てきた。

15：急な仕事

「おう、鷹緒。居たか」

広樹が鷹緒に声をかける。

「ヒロ。なに？」

「おまえ、今夜の予定は？」

「八時から打ち合わせ」

「じゃあ、ギリギリだけど……おまえ、キャンデイスの撮影やつてくれないか？」

広樹がそう言った。キャンデイスとは、中高生向けのファッション雑誌で、鷹緒の助手である俊二がカメラマンを手がけている。

「なんで？ 俊二の仕事だろ」

「俊二がぶつ倒れたんだ」

「は？」

「風邪。熱が三十九度越えてるって。他のやつも出払ってるし……おまえしかいないだろ」

その言葉に、鷹緒は軽く頭を掻いた。

「……オーケー。八時前には終わらせるぞ」

「当然。僕も手伝うよ。お願いします」

「仕方ないですな。一肌脱ぎますか」

鷹緒はテーブルの上の写真をかき集めると、すぐに支度を始めた。
「うちのスタジオ？」

「ああ。スタッフ連中は、すでに準備に行ってるよ」

「了解。おい、沙織。手伝って」

振り向きざまに、鷹緒が沙織にそう言った。

「えー、なんて。いいよ」

「当然だろ。じゃ、行って来ます」

そのまま鷹緒は沙織を連れて、事務所を出ていった。

「俊二さん、大丈夫かな？」

歩きながら、沙織が尋ねる。

「さあな……でも、あいつが仕事休むなんて、余程のことだからな」
「でも、こういうこともあるんだね。今日の撮影関係者、鷹緒さんに撮ってもらえるなんてラッキーじゃん」

「まあな……」

鷹緒は軽く笑うと、スタジオへと入っていった。

スタジオでは、スタッフが着々と準備をし、モデルたちも衣装に着替えていた。しかし、関係者は騒然としている。

「お疲れさまです」

鷹緒がそう言つと、雑誌の制作スタッフが駆け寄った。

「あ、これは諸星さん……」

「すみません。うちの木田が熱で来られなくなりまして、急遽私がやらせていただくことになりました……」

軽くお辞儀をして、鷹緒が言った。

「いえ。それは、こちらとしても嬉しい限りなのですが……」

「はあ、何か？」

浮かない顔の雑誌関係者に、鷹緒が尋ねる。

「実は予定していたモデルが一人、風邪で来れなくなりまして、プランが変わってしまいそうなんですよ。でも八時までには上げたいと聞きました、どうだろうと……もちろん、日取りを変えるのも不可能ですし……」

「プラン変更には、そんなに時間がかかるんですか？ 一人抜けたくらいなら、臨機応変に……」

雑誌関係者に、鷹緒が言う。

「いえ。プランを考えたのは、うちの編集長が用意したプランナーでしてね。まあ、こちらの事情なんですが、寸分たりとも変えるわけにはいかないんですよ……」

焦る関係者を前に、鷹緒も少し考えた。その時、広樹がやってきた。

「何かあつたんですか？」

そう言う広樹に、関係者がまた説明をする。

「……沙織ちゃん。君、モデルやらない？」

一同が考え込む中、突然、広樹がスタッフに混じる沙織にそう言った。

「ヒロ。冗談言うなよ」

すかさず鷹緒が止める。広樹は笑いながら沙織の肩を掴んで、雑誌関係者を見つめる。

「冗談なんかじゃないよ。どうですか、この子。可愛いでしょう？」

「彼女は？」

雑誌関係者が、沙織を見つめて尋ねる。

「諸星の親戚で、うちの事務所を手伝ってくれている子なんです。現役高校生です。モデルとしてなら背は低めだけど、雑誌モデルなら大丈夫でしょう」

「やつてもらえますか？」

関係者の言葉に、沙織は戸惑った。

「わ、私がモデルなんて……出来ません！」

16：ピンチヒッター

「わ、私がモデルなんて……出来ません！」

慌てて沙織が言う。そんな沙織の肩を抱きながら、広樹はなだめるように沙織を見つめる。

「まあ、そう言わないで。大丈夫だよ。難しいことは何もないし、カメラマンは鷹緒なんだ。どうしてもフォローしてくれるよ。なあ、鷹緒？」

鷹緒は沙織を一瞬見ると、雑誌関係者に尋ねる。

「……そちらは、この子で大丈夫ですか？」

「ええ、プラン通りにいけるのなら誰でも。ぜひお願いします」
関係者の言葉に、鷹緒は沙織を見つめる。

「ちよつと……外していいですか？」

鷹緒はそう言うと、沙織を連れて、その場を離れた。

「鷹緒さん。無理だよ。私がモデルなんて……」

スタジオの隅まで連れて来られた沙織が口を開く。鷹緒は軽く頷きながら、沙織を見つめている。

「わかつてる。でも、おまえしかいないんだ。頼むよ」

「で、でも私、ポーズとかもわかんないし、表情だつて……」

「それは教えるし、フォローするよ。おまえは言われたとおりに動けばいい。今からモデル呼んでたら、この後の仕事にもひびくし、困るんだ。絶対にうまく撮る。だから頼むよ」

鷹緒の言葉に、沙織は顔を赤くした。自分がモデルになるなんて考えたこともない。恥ずかしさはあるものの、鷹緒や広樹を助けたいとも思った。

「……じゃあ、美味しいご飯食べたい」

まだ不安げな表情をしながらも、沙織が言う。

「オーケー。寿司でもステーキでも、好きなもん食わせてやるよ」

「……わかった。でも、笑いものにはしないでよ」

「しねえよ。じゃあ、よろしく頼むよ。ヒロに頼むから、一緒に奥の楽屋に行って着替えて」

「うん……」

説得された沙織に、鷹緒は頭をポンと叩くと、広樹を呼んだ。

「ヒロ」

鷹緒の言葉に、広樹が駆け寄る。

「説得は済んだ？」

「ああ」

鷹緒の言葉に、広樹が微笑む。

「そう、よかった。ごめんね、沙織ちゃん」

「いえ、私なんかでよかったら……」

「全然いいよ。沙織ちゃん、可愛いし。前からモデルとして誘ってたじゃない」

「また。ヒロさんってば……」

広樹の言葉に、沙織が苦笑した。鷹緒はその様子を見ながら、口を開く。

「じゃあ、広樹。沙織を楽屋に連れてってくれ。すぐ始めるぞ」

「ああ。沙織ちゃんのことは、事務所総出でバックアップ＆フォローするよ」

広樹はそう言うと、沙織を連れて楽屋へと向かっていった。

十数分後。沙織は緊張しながらも、撮影のための衣装へと着替え、スタジオへと入っていった。

「はい。じゃあ、少し遅くなっただけど撮影開始します。今日は担当の木田カメラマンが欠勤のため、諸星さんに撮っていただくのと、モデルの子も一人来られないということで、急遽、この小澤沙織さんに入っていただくことになりました。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

広樹の言葉に、一同が返事をする。

「じゃあ始めますんで、モデルさんは全員スタンバイしてください。進行はスタッフの指示に従ってください」

現場は一気に撮影モードへと入っていった。

沙織は言われるがままにポーズを取り、鷹緒は撮影を続けた。

数時間後。タイムリミットの八時直前に、撮影は終わった。

「お疲れさまです、これで撮影を終わります。各自終了してください」

「お疲れさまでした」

その言葉に、沙織はほっとする。撮影中は緊張してあまり覚えていないが、眩しいまでの照明から解放されるのは、少し寂しい気さえした。

「沙織ちゃん」

そんな沙織に、すぐに広樹が声をかける。

「ヒロさん」

「ごめんね、こんなことになって。でもよかったよ。沙織ちゃん、本当にこれからもモデルやらない？」

「またまたー」

沙織は苦笑しながらも、撮影に気持ちよくなっていたのは事実であつた。

「沙織」

そこへ、鷹緒が声をかけた。すでに出かける準備が整っているようだ。

「鷹緒さん」

「お疲れ。まああの出来だったよ」

「光栄でございます……」

「じゃ、埋め合わせは今度……ヒロ。俺、もう行くから」
鷹緒が、広樹に言う。

「ああ。後は任せろ」

「じゃあ、よろしく」

鷹緒はそのまま、スタジオを後にした。

「じゃあ沙織ちゃん。今日は僕がごちそうして、家まで送り届けま

しょう。本当に助かったよ」

「わあ、ありがとうございます」

沙織は笑って返事をする。終わってみれば、もう撮影の緊張は少しもなかった。

その夜、沙織は母親に撮影のことを話した。

「ええ！ あんたがモデル？ 嫌だ、どうしよう」

慌てて母親が言う。そんな母親に、沙織は苦笑した。

「お母さんがどうしようってことはないでしょ」

「だってあんた、雑誌に載るんでしょ。下着モデルとかじゃないよね？」

「違うよ、有名な雑誌だよ。私だって時々買ってるもん。だからびつくり」

「へえ……まあ、ちょこつとだけでしょ。今時、読者モデルとか流行ってるみたいだしね」

「うん。緊張したけど、楽しかったよ」

沙織が正直に言った。初めての経験に、少し興奮気味でもある。

「よかったじゃない。あんた、趣味とか全然ないからね」

「そんなことはないけど……」

「鷹ちゃんも、ずいぶん有名なカメラマンになったらいいし、親戚として誇らしいわ」

その時、沙織の携帯電話が鳴った。鷹緒からである。沙織はすぐに電話に出た。

「もしもし」

『ああ、諸星ですけど……今、大丈夫？』

電話の向こうから、鷹緒の声が聞こえる。

「はい」

『今日は助かったよ……事務所としても、感謝してる。今日はヒロに送ってもらったんだって？』

「うん。ステーキごちそうになっちゃった。鷹緒さんは、お寿司だ

からね。そっちはもう打ち合わせ終わったの？」

『ああ、二時間ぐらいでな……じゃあ、またな。今日はサンキュー』
「え？ あ、うん……」

そこで鷹緒にあっさりと電話を切られ、沙織は少し寂しくなった。

17：嵐の前の静けさ

「誰から？」

その時、テレビを見ていた母親が尋ねた。

「あ、鷹緒さん」

「そう。なんだって？」

「今日は助かったって。あの人の電話、いつもそっけないんだよね……」

少し不満げに、沙織が言う。

「まあ、昔からクールな子だったわよ。それより沙織が出るっていう雑誌、いつ出るのよ」

「え？ さあ……」

「さあって……」

「そんなこと、いいじゃない。恥ずかしいし」

「よくないわよ。娘の晴れ姿を、ちゃんと見るんだからね」

「ハイハイ。今度聞いておくから」

沙織は苦笑しながらそう言うつと、母親と話を続けた。

次の日。沙織は、また事務所へと足を運んだ。事務所入口の近くにある応接スペースでは、鷹緒が書類を広げているのが見える。

「あ、沙織ちゃん」

受付に座っている牧が出迎える。その声に、鷹緒は顔を上げた。

「おう」

「鷹緒さん……事務所に居るなんて、珍しいね」

沙織はそう言って、鷹緒のそばへと歩いていった。

「まあな」

鷹緒はそっけなくそう言い、仕事を続けている。

「沙織ちゃん。紅茶でも入れるから、座ってて」

受付から立ち上がり、牧がそう言った。沙織は慌てて牧に駆け寄る。

「いいですよ、牧さん。自分でやります」

「いいのよ。沙織ちゃん、撮影現場を助けてくれた恩人だもの。事務所としても、仕事がストップしないで本当に助かったわ」

牧がそう言って給湯室へと入っていったので、沙織は鷹緒の前に座った。

少しすると、牧が紅茶を沙織に差し出した。

「ありがとうございます」

「いいえ。もう、鷹緒さん。ここで仕事するのやめてくださいってば。来客用のスペースなのに」

口を尖らせながら、牧が鷹緒に注意する。

「んー……」

そんな鷹緒は生返事で、話を聞いていない様子だ。

「もう、鷹緒さんったら」

「……もうすぐ終わるから」

鷹緒はそう言う、真剣な眼差しで仕事を続けている。

「牧さん。今日は何か手伝うことありますか？」

鷹緒の態度に苦笑している牧に、沙織が言った。

「うーん、今日は大丈夫みたい。みんな風邪でダウンしてるから、仕事も手がつけられないのよね。ゆっくりしてって」

牧はそう言う、受付に戻り、自分の仕事にかかり始める。沙織はソファに座ったまま、そばにあった雑誌を取り、時間を潰した。

しばらくして、鷹緒がテーブルの上の書類たちを片付け始めた。

「終わり？」

見ていた雑誌から目を離して、沙織が尋ねる。

「一通りな」

「ねえ、お寿司は？」

「今日か？」

沙織の言葉に、鷹緒が言った。

「駄目？」

「いいけど……じゃあ、もう少し待てるか？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、ちよつと待ってて。牧。俺、J M雑誌でチェックしてから、印刷会社へ入稿してくる」

「わかりました」

鷹緒は牧にそう言うと、事務所を出ていった。

「鷹緒さん、いろんな仕事あるんですね……」

残された沙織がぼそつと言った。牧は仕事を続けながら、苦笑している。

「まあねえ。鷹緒さんは、カメラマン業だけじゃないから……あんまり助手も使わない方だしね」

その時、沙織の携帯電話が鳴った。画面には、彼氏である篤の名が浮かんでいる。沙織はすぐに電話に出た。

「もしもし」

『沙織？ 俺』

「うん。どうしたの？ バイトじゃなかったの？」

篤は毎日アルバイトをしていて、沙織とは学校以外で会うことはほとんどなかった。学年も違うため、最近あまり会う機会もない。その分、沙織はこのところ、頻繁に事務所に顔を出していたのだった。

『バイトだったんだけど、今日は早上がり出来ることになってさ。これから会わない？』

18：約束のごほうび

『バイトだったんだけど、今日は早上がり出来ることになってさ。これから会わない？』

篤のその言葉に、沙織は少し戸惑った。

「あ、ごめん。今日はちよっと、用があって……」

沙織は鷹緒と食事をするため、篤の誘いを断ることにした。鷹緒と食事というのは滅多にない上に、すでに約束もしてしまっているからだ。

そんな沙織に、篤は強引なまでに誘いをかける。

『用って？ 最近あんま会えなかったからさ、ちよっとでも会いたいんだけど……』

「私もだよ。でも、約束あるし……ごめん」

『そうか……じゃあ、帰ったらメールくれよ』

「うん、わかった。そんなに遅くならないと思うから……じゃあ、あとでね」

沙織は電話を切って、鷹緒の帰りを待った。

数時間後、鷹緒が事務所に帰ってきた。もう牧も帰っており、事務所には奥にスタッフが数人居るだけで、沙織はソファに座って雑誌を読み続けていた。

「悪い。遅くなって……」

沙織に向かって、鷹緒が言う。沙織は少し膨れっ面で、自分を見下ろしている鷹緒を見つめた。

「本当、遅いよ」

「悪い。でも食事なんて、いつでもよかったのに……」

「でも、鷹緒さん忙しいから、いつになるかわからないじゃない」

「そりゃあそうだけど……悪かったな。腹減ったろ？ 食いに行くか」

「うん」

鷹緒の言葉に、沙織が立ち上がる。二人はそのまま事務所を出ていった。

「車じゃないの？」

駐車場とは別の方向に歩く鷹緒に、沙織が尋ねる。

「寿司なら、近くに美味しい店があるんだ」

鷹緒はそう言っていると、事務所近くの寿司屋へと入っていった。カウンターに座る鷹緒の横に、沙織は小さくなって座った。

「なんか……場違いじゃない？ 私、制服だし」

「べつに平気だよ」

鷹緒は気にせずそう言って、壁にかけられたメニューを眺めている。沙織も店内を見渡すと、壁には有名人の色紙が、所狭しと飾られている。

「すごい。サインでいっぱい」

「おまえはミスターだったな……時間によってだけど、ここに来れば誰かしらいるよ、芸能人」

「いらつしゃい、諸星さん。女子高生連れ込むなんて、らしくないじゃない」

その時、カウンターの向こうから、板前がそう言った。鷹緒も常連らしく、親しげに笑う。

「違うよ。こいつ、俺の親戚」

「またまたー」

「ハハハ、本当だって。とりあえず、今日のおすすめを適当に握ってください」

「かしこまりました」

鷹緒の言葉に、板前がネタを握ってゆく。そして差し出された寿司は、美味しそうに輝いていた。

「うわあ、すごい。大きいネタ」

目の前に出された寿司に、思わず沙織が言った。鷹緒は笑いなが

ら、すでに食べ始めている。

「じゃんじゃん食えよ」

「いいの？」

「ああ」

「いただきます！」

二人は寿司を堪能し、やがて車で沙織の家へと向かっていった。

「ありがとうございました。ごちそうさまでした」

車から降りるなり、沙織が言う。

「いえいえ。じゃあな」

相変わらず、鷹緒は淡々として答える。

「あ、うん……」

「なんだよ、その顔」

沙織の残念そうな顔に、首を傾げて鷹緒が尋ねる。沙織は首を振りながらも、説明しがたい寂しさに、目を泳がせるだけだ。

「だって……」

その時、向こうから人影が近付いてきた。そこには、息を切らした篤がいる。

「沙織……！」

「篤……」

思わぬ人物に、沙織は驚いた。だが状況を把握する間もなく、篤は怒ったように口を開いている。

「おまえ……なんなんだよ。用があるって、そいつのことなのか？」
ひどく怒っている様子の篤に、沙織は何が起こったのか、どうすればいいのかわからない。

「そいつって……鷹緒さんだよ、親戚の。それより、どうして篤がこんなところに……」

「表の店で時間潰してたんだ。最近会えなかったから、今日は会いたいと思って、すぐに出られるところにいた。そしたら、車に乗ったおまえが見えて、走って……何が用事なんだよ！俺より、その

男との約束が大事なのか？」

沙織に面と向かって、篤が怒鳴った。

「ち、違うよ！ それは……」

「話中悪いけど、こんなところで喧嘩はやめろよ」

そこへ、車の窓から顔を出した鷹緒が言った。鷹緒のその言葉に、篤は更に逆上する。

「親戚だかなんだか知らねえけど、何も知らないくせに首突っ込んでくるなよ！」

鷹緒は静かに微笑むと、車のエンジンを切り、そのまま篤を見つめる。

「……コドモだなあ」

「なんだと？」

鷹緒の言葉に、篤の顔はどんどん逆上して赤くなっていく。だが鷹緒は、構わず言葉を続けた。

「ガキだって言ったんだ。大人はな、こんな住宅街の真ん中でそんな大声は出さないし、ましてや恋人の自宅前で、喧嘩なんか始めないんだよ」

そう言う鷹緒の顔は穏やかだが、目は真剣に篤を捉えている。篤は逆上したまま、開いた窓から鷹緒の襟元を掴んだ。

「なんだよ、あんた。そんなこと、あんたに言われる筋合いねえんだよ！」

そこに、いつもの明るくて優しい篤はいなかった。沙織はどうしていいのかわからずに、戸惑っている。

鷹緒は、尚も掴み掛かる篤の額を掴んで、引き離れた。

「何すんだよ！」

「そっちが絡んできたんだろ？」

逆上したままの篤に反して、鷹緒は驚くほど冷静だった。篤と沙織にとっては、それが恐ろしくも見える。篤は鷹緒から離れると、沙織を睨みつけた。

「……もうっんざりだ。俺がバイトしてる間に、おまえは浮気かよ

！ だったらいつのところで、どこでも行けよ！ 俺は別れるからな」

篤はそう言つと、その場から去っていった。

19：暗雲

「篤……！」

沙織は篤の背中を見つめたまま、それ以上何も言えない。

鷹緒は静かに息を吐くと、シートにもたれたまま沙織を見つめる。

「……家、入れよ」

その言葉に、沙織は首を振る。

「じゃあ、乗れ」

鷹緒はそう言つと、エンジンをかける。沙織も、静かに車へと乗り込んだ。

走り出した車の中で、二人は何も言わなかった。ただ沙織は、シヨックで俯いたままだ。

しばらくすると、鷹緒の携帯電話が鳴った。鷹緒はハンズフリーの通話ボタンを押す。

「はい」

「広樹だけど。今、平気か？」

車内に広樹の声が響く。

「ああ、なに？」

「明日だけど、朝イチで事務所へ来てくれないか。俊二が休んでるせいで、仕事が片付いてないんだ」

広樹の言葉に、鷹緒は顔をしかめて口を開く。

「おいおい。明日は俺、久々の午前休みで……」

「わーかってるよ。その分の埋め合わせは、俊二が出てきたらするから」

「……オーケー。じゃあ、明日な」

「ああ悪い。あと、今日はちゃんと寝ろよ。おまえ、このところ寝てないんだから」

「言ってることがなつてないぞ。じゃあな」

苦笑しながら、鷹緒は電話を切った。

「……ごめん、もういいよ。家に帰る」

横目に鷹緒を見ながら、沙織が言った。

「べつに……早く帰れたから寝れるってわけじゃないし」

「……寝てないの？」

「いや、ちょこちょこ寝てるよ。このところ仕事が忙しかったから、ちよつとな」

鷹緒は軽く笑ってそう言っていると、車を走らせる。

しばらくすると、沙織は寝てしまった。鷹緒はそれを確認すると、静かに沙織の自宅方面へと戻っていった。

「おい、着いたぞ」

鷹緒がそう言っていると、沙織が目を覚ました。

「あ……家か」

「寝てちよつとは楽になったか？」

「……うん、ありがとう。いろいろ考えてみる」

沙織はそう言っていると、笑って車を降りる。

「……何かあったら、事務所来いよ」

ぶつきらぼうだが、鷹緒の優しさが伝わる。

「ありがとう。じゃあ、遅くまでごめんなさい。しかも寝ちゃって……またね！」

そう言って沙織が家へ入ったのを見届けると、鷹緒はそのまま去っていった。

それから数週間、沙織は一度も事務所へ顔を出さなかった。

「鷹緒！」

ある朝、事務所でそう呼ぶ声があった。呼ばれていた鷹緒は、事務所のソファで眠っている。

「起きろよ、鷹緒」

鷹緒が目を覚ますと、そこには広樹がいる。

「ん、ヒロか。なんだよ、さっき寝たとこなのに……」

鷹緒は、眠たそうに起き上がった。

「寝かしてやりたいけど、出入り口から丸見えだ。まったく、おまえの仕事スペースは奥に用意してやってるのに、使わないんだから……」

ぶつぶつと、広樹が言う。

「……今、何時？」

眠い目を擦りながら、鷹緒が尋ねた。

「八時五分」

「ああ、まだ一時間しか寝てねえよ……」

「おまえなあ、たまには家に帰れよ」

「遠いんだよ」

「車で十分くらいだろ。それが遠いつてんなら、目の前のマンションでも借りろよ」

「んー、面倒臭い」

「ほら、コーヒー。目覚ませ」

冷蔵庫の缶コーヒーを差し出しながら、広樹が言う。

「ああ……」

「で、仕事は？」

「出来たよ。さっきファックス流したから、もう終わりだ」

未だぼうつとした様子の鷹緒が、一点を見つめながらそう言った。まだ気だるそうに、何度もあくびを繰り返す。

「今日はおまえ、珍しく会議だけだったな。じゃあ、すぐに家帰って寝ろよ。今日はもういい……最近ろくに寝てないだろ？」

「いつものことだよ。ふあーあ」

鷹緒は大きなあくびをして、今にも眠りそうである。

「まったく、しょうがないなあ。仕事が忙しいのはわかるけど、自己管理しろよな」

「してるよ……」

「ほら、車のキー貸せよ。部屋まで送る」

呆れたようにしながらも、心配そうに広樹が言った。そんな広樹に、鷹緒は苦笑する。

「いいよ、べつに」

「よくないよ。そんな状態じゃ、危なくて仕方ない」

「んー、じゃあ、電車で帰るよ」

やっと目が覚めてきた鷹緒は、伸びをしながらそう言った。

「おまえが電車？ 嫌いなくせに」

「たまにはいいよ。車で十分、電車で五分だからな。じゃ、お言葉に甘えて帰るわ……」

「ああ、ちゃんと寝ろよ」

「んー」

鷹緒は立ち上がると、そのままふらふらと歩き出した。

「あ、鷹緒」

そこを、広樹が呼び止める。

「ん？」

「……例の件、進めるからな」

広樹の言葉に、鷹緒は小さく息を吐く。

「……ああ」

返事をする、鷹緒は自宅へと帰っていった。

20：注目の的

沙織の通う高校では、朝からいつになく騒然としていた。

「おはよう、沙織！」

昇降口で沙織に声をかけたのは、クラスメイトの茂木朋子^{もぎともこ}である。沙織とは仲の良い友達だ。

沙織は少し疲れた様子で笑いかける。

「トモ、おはよう」

「沙織。最近、元気くない？先輩と別れたから？」

朋子の言葉に、沙織が溜息をついた。朋子のいう先輩とは、篤のことである。沙織と篤は、あれから何度もメールなどでやりとりしているものの、つかず離れずの状態だ。

「はあ……」

沙織は、もう一度溜息をついた。

「嫌だな、溜息なんて……深刻なの？」

「うん、なんかもう、何言っても駄目で……でもまだ別れてない、と思う」

「そっか。原因、なんだっけ？」

「誤解っていうか、なんていうか……」

「なに、修羅場？」

朋子が、興味津々といった感じで尋ねる。

「……私、最近仲良くなった親戚の人がいて、なんだかその人と会うのが楽しかったんだ。事務所の人もみんな優しいし。篤がバイトで忙しいから寂しかったこともあって、その職場に入り浸りだったの。それを知った篤が、俺より大事なことがあるのかってキレちゃって……」

「へえ……」

「誠意を示すためにも、もうそこには顔も出してないんだけど、信じてくれないし……篤だって、その親戚の人にはお世話になってる

し、知らないわけじゃないのに……」

独り言のように、沙織が言った。浮かない顔の沙織に、朋子も溜息をつく。

「よくわかんないけど、大変そうだね」

「まあね……」

二人は、教室へと向かっていった。

「あ、来た。沙織！」

教室に入るなり、沙織のどんよりした心に反して、クラスメイトの女子が叫ぶ。その勢いに、沙織は目をパチパチさせる。

「え、なに？」

「これ、沙織でしょ！　なんで言ってくれなかったのよ、いつからモデルやってんの？」

その言葉に、沙織はまたも驚いた。クラスメイトが差し出した雑誌の表紙には、数人の少女が写っており、その中に沙織もいたのだ。

「あ！　それ、今日発売だったの？」

思い出したように、沙織が言う。

「ちよっと、どういうこと？　沙織」

「ってゆうか、見せて！　ええ、表紙に載っちゃってるの？」

沙織は赤面しながら、雑誌にかじりついた。

「やっぱりこれ、沙織なんだ。すごいじゃん！　表紙だけじゃないよ。ほら、こっち」

女子たちが群がって、雑誌をめくる。数ページに渡るメインコーナーには、沙織とわかる写真が大きく出ていた。

「うわ、何これ！」

あまりの目立ちように、沙織自身も驚いた。数人いるモデルの中で、沙織がメインに撮られているような構図に見える。

「なんであんたまで驚いてんのよ。これ、沙織なんでしょ。どういうことなの？」

女子たちが尋ねる。沙織はそこまで大々的なものになるとは思ってもしなかったが、経緯を女子たちに話した。

「へえ、意外。沙織にそんな知り合いがいたんだ。カメラマン？
すごいじゃん」

「ってゆうか、ヘルプで出た割には、メインで撮られてない？
きつとその親戚、沙織のことが可愛くてメインで撮っちゃったんじゃないの？」

はしゃぐように、女子たちが言った。沙織は、顔を赤らめたまま
叫ぶ。

「そんなこと、あるわけないじゃん。ああもう、超恥ずかしい！」
「いいじゃん。キャンデイスっていったら、ティーン向け雑誌の中
で一番読まれてるんだよ？ 読者モデルだって、難易度高いんだか
ら。超恵まれてるよ、羨ましい！」

「私は私で、必死だったんだよ。嫌だったし……」
「もう、贅沢モノ！」

この一件で、沙織は一躍有名人となっていた。

その日、学校が終わると、沙織は久しぶりに鷹緒の事務所へと向
かっていった。

「こんにちは……」

21：事務所の人たち

「こんにちは……」

久々なので、沙織は少し緊張して入った。この忙しい事務所では、自分の存在などすぐに忘れられてしまうだろう。

「あら、沙織ちゃん。久しぶりじゃない。どうしてたの？ 心配してたのよ」

そんな不安げな沙織に反して、いつもの調子で事務員の牧が出迎えた。沙織はその様子に、ほっとする。

「ごめんなさい……あの、鷹緒さんは？」

「今日は緊急でお休みだそうよ」

「え、何かあったんですか？」

「ううん。寝不足続きらしくて、社長命令でね。鷹緒さんに用事？」

「いえ……キャンデイスのことで、びつくりしちやって」

沙織が言った。

「ああ、私も見たわ！ すごいじゃない。あんなに大々的に載るなんて、モデルでもあんまりないわよ。鷹緒さんのサービスじゃない？」

笑って牧が言う。そんな牧に、またも沙織は照れて赤くなった。

「本当、びつくりしたんですよ。端っこで、ちょこっと写ってるだけだと思ったから……」

「いいじゃない、光栄でしょう。滅多にないことなんだから」

「それはそうですけど……」

「あれ？ 沙織ちゃんじゃない。久しぶりだね」

そこへやってきたのは、社長の広樹である。

「ヒロさん」

「どうしたの？ ちつとも顔出してくれないから、心配してたんだよ」

「ごめんなさい。いろいろあって……」

会釈をしながら、沙織が言う。恐縮したままの沙織に、牧が笑って口を開く。

「ヒロさん。沙織ちゃん、今月のキャンデイスのことで来たんですって。恥ずかしがってるんですよ」

「ああ、僕も見だよ。鷹緒のやつ、さすがうまく撮るね。それより沙織ちゃん、真面目にうちの専属モデルになること、考えてみない？ 君は可愛いんだし、雰囲気も持ってる。うまくやっていけると思うんだ。なにより鷹緒の親戚で、もう我々とも知り合いだし、しっかりサポートしていくよ」

明るいながらも真剣に、広樹が言った。沙織は目を泳がせると、静かに口を開く。

「そんな……私、モデルなんて考えられません。今でさえ、こんなふうに乗っちゃってオドオドしてるのに」

「ハッハッ。そんなの、すぐに慣れるよ」

「でも、来年は受験生にもなるし、今はそれどころじゃないんです……」

沙織が言った。謙遜しているわけではなかった。興味がないといったら嘘になるが、自分にそれほど自信もなく、仕事としてなど考えられない。

そんな沙織に、広樹は残念そうに頷いた。

「そう……残念だなあ。じゃあ大学に入ったらでもいいから、ぜひ考えておいてよ。うちの事務所も、これからどんどん拡大していると思うてるから」

「……わかりました。でも私、そういうタイプじゃないんですよ。恥ずかしがり屋だし」

「フオローはするって。鷹緒だっているわけだしさ……さて牧ちゃん。僕は会議で出かけるから、あとよろしくね」

時計を見て、広樹が言った。牧も時計を見上げると、頷く。

「わかりました。定時で閉めていいんですね？」

「うん。その前に俊二たちが一度戻ると思うけど、今日は早く閉め

ちゃっていいよ。どうせ僕も鷹緒もないんだし」

「わかりました。お疲れさまです」

「ほーい。じゃあ沙織ちゃん、またね。ゆっくりしてって」

広樹はそう言つと、事務所を出ていった。

「なんか、いろいろ大変なんですね。事務所って……」

いつ来ても慌しいまでの事務所に、沙織がぼそつと言つた。

「まあね。こんな小さな事務所でも、結構大きな仕事も入ってきてるし、モデルだけでもかなり増えちゃってるしね……」

その時、撮影スタッフたちが戻ってきた。

「お疲れっす」

「お疲れさま、早かつたね。今、社長が出ていったところなのよ」

牧はそう言いながら、お茶を入れて差し出す。

「マジっすか。あ、お茶いただきます」

そこへ、少し遅れて俊二が入ってきた。

「お疲れさまです」

「お疲れさま。はい、お茶」

すかさず牧は、俊二にお茶を差し出す。

「ありがとう。牧ちゃん、悪いけど、マンションスタジオの鍵、貸してくれる？」

俊二が言つた。

「いいけど、どうしたの？」

「いや、昨日の撮影の時に、フィルムとか忘れちゃって……」

そう言つ俊二に、スタッフと牧も苦笑する。

「カメラマンなのに、フィルム忘れちゃったの？」

「はあ。あそこ、僕はあんまり使ったことないから、なんか緊張して忘れちゃうんだよね……」

「そうね。俊二君は、その地下スタジオ専属みたいな感じになつてるから、他のところはあまり行かないものね。じゃあ、社長には私から伝えておくから」

そう言つと、牧は俊二に鍵を差し出す。俊二は苦笑してそれを受

け取った。

「ありがとう。ついでに鷹緒さんの様子も見てくるよ……あの人、限界までやるから、ぶっ倒れてるかも」

「……あの、マンシヨンスタジオって？」

その時、話についていけない沙織が尋ねた。鷹緒の名前が出たので、なんとなく反応している自分がいる。

22：彼の話題

「……あの、マンションスタジオって？」

「ああ、沙織ちゃんには知らないのね。うちの事務所、鷹緒さんの自宅マンションの隣に、スタジオ持ってるのよ。もともとは鷹緒さん所有の部屋でね……部屋の雰囲気とか出したい時は、そこで撮影するんだけど、昨日もインテリアの撮影で使ってたね」

「へえ」

初めて聞く話に、沙織は興味を奪われた。日常では知り得ない世界がここにある。

「沙織ちゃんは、鷹緒さんの親戚だったよね。そういうことは話さないの？」

興味津々な様子の沙織に、俊二が尋ねた。

「親戚といっても、遠い親戚ですから。あんまり話したこともないし……」

「そうか。あの人、親戚の中でも無口なのかなあ」

「さあ……でも大丈夫なんですか？ 鷹緒さん、倒れてるかもしれないって」

沙織の言葉に、俊二は苦笑する。

「わかんない。前に行った時は、熱出して玄関先でぶっ倒れてて……あの人、時々そういうことあるから少し心配だけど、忘れ物を取りに行くついでに見てくるから、きっと大丈夫だよ」

「……あの、私も行っちゃ駄目ですか？」

苦笑している俊二に、沙織が言った。

「え？」

「私、鷹緒さんと話したいことがあって……キャンデイスの雑誌の件で」

「ああ、大々的に載ってたね。僕は構わないけど……」

「いいんじゃない？ 鷹緒さんは沙織ちゃんを知らないわけじゃな

いし、親戚だもの」

考えている様子の俊二に、牧が割って話に入ってきた。

「うん……」

「連れてつてあげなさいよ。鷹緒さんが心配なのよ」

少し渋る俊二に、牧が言う。

「ああ、そういうことか。鷹緒さん、モテるからなあ……」

俊二が牧の言わんとする意図を悟って言った。沙織もそれに気付いて、慌てて否定する。

「わ、私はべつに、鷹緒さんなんて……」

「うふふ。いいのよ、沙織ちゃん。鷹緒さんを好きな人は、ゴマンといるんだから」

「確かにね。あの人、あれだけ無口で愛想もないのに、どうしてあんなにモテるのかなあ……」

笑いながら、牧と俊二がそう言う。そんな二人に、沙織はまだ否定を続けた。

「だから、私は鷹緒さんなんて……」

「わかったわ。じゃあ、とにかく行ってらっしゃいよ。それから、ついでに鷹緒さんの車に乗っていつてあげて」

慌てた様子の沙織を尻目に、牧が俊二に、鷹緒の車の鍵を差し出して言った。

俊二は車の鍵を受け取りながら、口を開く。

「鷹緒さん、車で帰ったんじゃないの？」

「そうなのよ。フラフラしてて危ないからって、社長が止めたんですって。電車で帰ったみたいだけど、次に出勤する時、車がないと動きづらいと思うから」

「へえ、鷹緒さんが電車。わかったよ」

「あと、事務所はもう閉めるから、直帰してくれる？　ここには忘れ物しないですよ」

帰り支度をしながら、牧が言う。時刻はもうすぐ定時になろうとしている。

「わかりました。じゃあ行って来ます。お疲れさまでした……さあ
沙織ちゃん、行こうか」

俊二は沙織を連れ、事務所を後にした。

23：マンションスタジオ

鷹緒の住むマンションは、東京タワーが見える大きなマンションであった。

俊二は地下駐車場に鷹緒の車を停めると、沙織を連れて鷹緒の部屋へと向かっていく。

「なんか、すごい高級そうなマンションですね……」

マンションの造りを見ながら、沙織が呟く。俊二はそれを聞きながら、一つの部屋の前に立ち止まった。

「そうだね。ここがスタジオ。そっちの部屋が、鷹緒さんの部屋だよ」

俊二はそう言うと、スタジオである部屋の鍵を開ける。沙織は鷹緒の部屋という、隣の部屋を見つめる。

「先に行かないんですか？」

「うん、こっちからも行けるから」

俊二はそう言うと、スタジオの部屋へと入っていった。沙織もそれに続く。

スタジオと呼ばれる一室は、普通のマンションでありながら、本格的な撮影機材が並んでいた。

「わあ、すごい……」

圧倒されて、沙織が言う。

「あれ、ここに置いたはずだけどなあ……」

俊二はそう言うと、早速、忘れ物のフィルムを探している。沙織も辺りを見回す。

「私も手伝いましょうか？」

「いいいいいよ、別の部屋かも。それより、鷹緒さんの様子見てきてくれる？ そのドア開けると、鷹緒さんの部屋に繋がってるから」

俊二が指差したのは、リビングにつけられた一つのドアだった。

「え？」

「どっちも鷹緒さんの部屋だったから、ドアつけたらしいよ。そっちの部屋、廊下を出て一つ目の右のドアが寝室だよ。異常がなければそこで寝てると思う。僕は探し物があるから……」

「わかりました」

沙織は返事をする、鷹緒の部屋へと入っていった。

緊張しながら進むと、沙織は言われた通りの部屋のドアを静かに開ける。すると中には、大きなベッドがあり、寝息が聞こえる。そっと覗き込むと、そこには紛れもなく鷹緒がいた。

（よかった。普通に寝てるみたい……）

沙織がそう思っで見つめていると、突然、沙織の携帯電話のバイブが震えた。

「わ……」

慌てて沙織は電話を切って、鷹緒を見る。しかし鷹緒は起きる様子もなかった、一安心した。

沙織は、鷹緒に背を向ける形で携帯電話を見つめると、一通のメールが届いていた。そこには、もう会話すらしていない、恋人の篤からの言葉が連ねられている。

“この間は感情的になつてごめん……今日クラスの女子に、キャンデイスって雑誌見せてもらったよ。あれってマジで沙織なの？俺しばらく考えてみたけど、やっぱり沙織と別れたくないよ。謝るから、今夜会わない？今夜が駄目なら、学校でもいいよ。俺、今年受験生だし、やっぱりもう一度ちゃんと話したい”

篤からのそんなメールに、沙織は複雑な気持ちで携帯電話から目を逸らす。そして壁にかかったボードにつけられた写真を、無意識に見つめた。すべて風景写真だが、そのボードの前には、唯一の人物写真が、フォトフレームに入れられて立てられている。

そこには、今より少し若い鷹緒と一緒に、見知らぬ女性と小さな女の子が写っていた。

「え、なに？これ……」

沙織は驚きと同時に、何も考えられなくなっていた。写真を手に取ってみるものの、信じ難いことが浮かぶだけだ。まるで若い家族のような写真である。

その時、部屋の電話が鳴り響いた。沙織が慌ててまごまごしていると、鷹緒が目を覚ました。

「ん……」

目を擦りながらの鷹緒と、沙織の目が合う。

「うわ、沙織！　なんでおまえがここに……」

起きたたての鷹緒は、沙織を見て驚いている。沙織も突然のことに目を泳がせながらも、口を開く。

「よ、様子を見にだよ……俊二さんも一緒に」

「はー、脅かすなよ……」

「それより、電話出たら？」

「んー……」

嫌そうに、鷹緒が電話の受話器を取る。

「はい。ああ、どうも……」

鷹緒が電話の相手と会話を始める。沙織は写真を持って見つめたまま、しばらくその場に立っていた。

すると、電話を終えた鷹緒が、沙織の持つ写真を奪うように取り、棚に戻して歩き出した。

「ねえ、この写真の子……」

部屋を出て行こうとする鷹緒に、沙織がやっとそう口にする。

「……俺の子供だけど？」

24：発覚

「……俺の子供だけど？」

静かに鷹緒が言った。

「え……う、嘘でしょう？」

「嘘じゃねえよ。なんだ……母親から聞いてるんだと思ってた」

鷹緒はそう言って頭を掻くと、部屋から出ていこうとする。思わぬ事実を突きつけられ、沙織は驚いたまま、ぼそつと呟いた。

「何も……聞いてなかった……」

「……あっそ」

鷹緒はそう言うと、部屋を出ていった。沙織もそれに続いてリビングへ向かうと、俊二がスタジオからやってきた。

「あ、鷹緒さん！ すみません、勝手に……」

申し訳なさそうに、俊二が言う。

「どうしたんだ？ こんなお邪魔虫まで連れて……」

未だ眠そうな鷹緒が、小さく溜息をついて言った。俊二はバツが悪そうに口を開く。

「それがその、忘れ物しちゃって……あと、鷹緒さんの様子を見に沙織ちゃんも心配していたんで、一緒に連れて来ました。事後報告になります、社長にも了承済みになっていると思います」

「ふうん……」

電話に起こされ、鷹緒は不機嫌そうにソファに座る。

「あ、あの、鷹緒さん……」

「俊二。おまえ、フィルム忘れるなよ」

その時、恐る恐る言いかけた俊二に、鷹緒が遮ってそう言った。
「え！」

俊二がびっくりして声を上げる。

鷹緒は目の前のテーブルに置かれたパソコンから、カメラのメモリカードを取り出し、近くに置いてあったフィルムと一緒に、俊二

に差し出した。

「ああ、鷹緒さんのところにあっただんですか！ もう、どうしようかと思いました。すみません！」

深々と頭を下げて、俊二が言う。鷹緒は苦笑しながらも、優しく微笑む。

「もう、二度と忘れるなよな」

「はい。本当にすみませんでした！ ああ、でもよかった。どこを探してもないから……」

「俺のカメラそっちに取りにいったら、そいつが置かれてるの見たんだ。データ見たら、昨日のдар？ 届けようと思ったんだけど、そのまま寝ちゃってさ……」

鷹緒はそう言いながら、もう一つカードを差し出した。

「え……」

「バックアップついでに、ちょっとレタッチしといた。まあ、おまえの仕事なんだから、暇つぶしにやっただけだし、使わなくていいからな」

そんな鷹緒の言葉に、俊二はまたも驚く。

「え、編集してくださったんですか？ 本当にすみません、睡眠削っちゃって……でも、助かります。明後日までの締切なのに、何も手をつけてないんじゃないですか……すみません！」

「いいって。体質的に、目の前に素材があつたら、いじりたくなるんだよな……」

鷹緒が、苦笑して言う。

「ハハ、病気ですね……ありがとうございます。徹夜で仕上げます」

「明後日までの仕事だろう？」

「でも別の仕事が溜まってるんで、早目にやっておかないと……あと、車は僕が乗ってきたんで、駐車場にあります。これ、鍵です」

俊二はそう言って、テーブルに鍵を置く。

「ああ、サンキュー」

「じゃあ、帰ります。沙織ちゃんは……」

フィルムとカードをしまいながら、俊二が沙織に言った。

「あ、私……」

「いいよ、俺が送るから……」

小さく息を吐きながら、鷹緒が言う。

「そうですか。じゃあ、僕はお先に失礼します」

俊二はそう言うと、鷹緒の部屋から出ていった。

残された沙織は、ソファに座ってうなだれる鷹緒を見つめる。

「……コーヒー入れてくれる？」

沈黙を破って、鷹緒が言った。

「う、うん……」

沙織は言われるままに、キッチンへと向かう。広いキッチンだが、あまり使われていない様子だ。

「豆は棚の中。そこにコーヒーメーカーがある」

部屋の勝手がわからない沙織に、背を向けたまま鷹緒が言う。沙

織はコーヒーを入れ、鷹緒のもとへと持って行った。

「はい……」

25：シヨック

「サンキュー」

鷹緒はコーヒーを受け取ると、まぶたを押さえた。大分、眠気は取れたようだが、だるそうにしている。

「あの、ごめんなさい。ついてきたりして……」

不機嫌な様子のままの鷹緒に、沙織が素直に謝る。鷹緒はコーヒーに口をつけると、軽く顔を掻いた。

「べつにいいけど……それで、何の用？」

「あ、あの、キャンデイス見てびっくりしちゃって……」

「ああ、よく撮れてたろ？」

静かに笑って、鷹緒が言う。

「うん……でも、あんなに大々的に載るとは思ってなくて、びっくりした」

「まあ、メインページだから仕方ないだろ。何か問題でもあった？」

「ううん。ただ、学校ではちょっとした噂になっちゃって……」

「ハハ。よかったじゃん」

「よかったのかな？」

立ったままの沙織は、思い切って鷹緒の横に座った。鷹緒は何も言わず、ぼうつとしている。

「雑誌はおまえの家に、何部か届けてあるはずだから。あと、ヒロがおまえをモデルにつてうるさいんだよ」

「うん、さっきも言われた。でも私、来年は受験生にもなるし……」

「なに？ 興味ないんだ、モデルとか」

鷹緒が、意外そうに尋ねる。

「興味がないわけじゃないよ。正直、楽しかったけど……でもすごく緊張したし、仕事としては考えられなくて」

「ふうん？ まあ、俺はどうでもいいけどな……」

「なにそれ、ひどい」

「だって、選ぶのはおまえだろ？」

いつもと変わらず、そっけない態度の鷹緒に、沙織は俯いた。

「そうだけどさ……」

「さあ、帰るか」

「あ、うん……」

沙織は頷くものの、なんだか心が晴れない。

鷹緒はコーヒーを飲み干すと、立ち上がって支度を始めている。

そんな鷹緒に、沙織も立ち上がり、口を開く。

「あ、いいよ。電車で帰る……今日は寝た方がいいよ。だるそうだし」

「いいよ、べつに」

「よくないよ。ちよっと辛そうだもん」

「……いいのか？」

「うん、まだ全然早いし。それより、さっきの話だけ……」

「さっきの話？」

聞きにくそうに尋ねる沙織に、意味がわからず、鷹緒が聞き返す。

「だから、さっきの写真……鷹緒さん、本当に……子供がいるの？」

沙織が言った。鷹緒はもう一度ソファに座った。

「ああ……その話が」

面倒くさそうに、鷹緒は顔をしかめる。

「私、知らなかった……」

「……だからなんだよ。知ってたら、どうだったって？」

溜息をつきながら、鷹緒が言った。その態度は今までと違い、強い拒否のようなものが、体全体で伝わってくる。

「どうって、べつに……」

「俺に子供がいようといなかうと、俺がどういう人間だろうと、おまえには関係ないだろう？ 親戚っていつでも、大して交流もない親戚なんだから。もう帰れよ」

いつになく冷たく突き放す言い方をする鷹緒に、沙織は驚いて俯いた。

「わかった。ごめん……」

沙織はそれだけを言うと、急いで部屋を出ていった。
残された鷹緒は、そのままソファに横になり、大きな溜息をついた。

家へ帰った沙織は、ショックで落ち込んでいた。

鷹緒が結婚していたということ、そして子供がいたという事実、ショックを隠しきれない。そして沙織は、鷹緒のことが気になって仕方がないという気持ちに、気付かされていた。

「私……鷹緒さんのことが好き……？」

26：気付かされた、恋心

「私……鷹緒さんのことが好き……？」

自問自答を繰り返しながら、沙織はリビングの椅子に座る。目の前のテーブルには、沙織がモデルをやった雑誌「キャンデイス」が、数冊置かれていた。

「私じゃないみたい……」

自分の写真を見て、そう呟く。説明し難い孤独感が、沙織を襲っていた。

「ただいまー」

そこに、元気の良い母親の声が響いた。

「お母さん！」

いつにない孤独感を感じていた沙織は、思わずそう叫ぶ。

「なんだ、沙織。帰ってたの？ 今日早いわね。あ、あんたの雑誌送られてきて、見たわよ。すごいじゃない！ 最初、沙織かどうかわからなかったわよ。でも、綺麗に撮れてるじゃないの」

母親独特のマシングントークが炸裂する。

「うん、私も思った」

「夕飯は食べたの？」

「まだ……」

「じゃあ、今から作るから」

そう言つと、母親はすぐにキッチンに立つ。

「あ、ねえ、お母さん。鷹緒さんが結婚してたって、知ってたの？」
思い出して、沙織が尋ねる。

「ああ、もちろん知ってたわよ。沙織は知らなかったっけ？ そっか、その頃はもう、あんまり交流なかったし、あんたも小さかったからね……」

「うん。それ聞いて、びっくりしちゃって。鷹緒さん、そんな風に見えなかったからさ……」

「まあねえ……でも、あんまり長くは続かなかったみたいよ」

「え、そうなの？ 離婚してるの？」

沙織は興味津々で、母親を見つめる。

「確かそうよ。まあ、結婚自体あまり知らせてなかったみたいけど、私たちは叔父さんの葬式で会って知ったのよね……そうよ、写真も残ってるわよ」

「嘘、見たい！」

「なあに。なにかあるの？」

興奮気味の沙織を、母親が不思議そうに見つめている。

「うつん……だってあの人、謎だらけなんだもん」

「まあ、そうかもね……アルバムが入ってる棚にあると思うわよ。十年くらい前のだったと思うわ」

「十年、そんなに前？」

「そうよ。確か鷹ちゃん、十代の頃でしょ」

「へ、へえ。なんか歴史が……」

「そうよ。だからあんたもフラフラしてないで、真面目にきなさいよ」

「ハイハイ……あ、あつた！」

十年前のアルバムを開いて、沙織が写真を見つめる。とある葬祭場で撮られた写真だが、親戚一同が揃っている。

幼い沙織たちに混じり、若き鷹緒とそれに寄り添う女性がいた。

鷹緒は飛び抜けて背が高く、まるで芸能人のように輝いて見える。

「うわ。鷹緒さん、すっごくカッコイイ！」

「そうよ。鷹ちゃん、モデルだったんだもの。相手の女性もモデルだったみたい。鷹ちゃん、ママから見てもカッコイイと思うわよ。」

沙織だって小さい頃は、鷹ちゃんと結婚したいって言ってたじゃない」

「え、そうだったけ。覚えてない」

母親の言葉に、沙織は赤くなつて言う。

「まあ、鷹ちゃんは昔からモテてたからね」

それを聞きながら、沙織は鷹緒の写真を凝視する。確かに相手の女性もかなりの美人で、スタイルがいい。沙織は言葉を失った。

「本当、だったんだ……」

認めたくはなかったが、その胸の高鳴りに、沙織は自分が鷹緒に恋をしているのだと確信した。

次の日の早朝。鷹緒が事務所に行くと、入口付近に一人の女性が立っていた。

「理恵……」

鷹緒が女性を見て言った。女性は鷹緒を見ると、すぐに微笑む。

「久しぶりね。鷹緒サン」

「ああ……そうだな……」

鷹緒は目を反らすと、眼鏡を正して奥へと入っていった。

「ヒロ」

奥へ行くと、広樹が机周りをあさっている。

「ああ、鷹緒か。おはよう。早いな」

「まあな……」

「理恵ちゃんに会ったか？ 久々だろ、話してもしてろよ」

書類をペラペラとめくっている広樹を尻目に、鷹緒は無言のまま、近くの机に腰をかける。

「……」

「なんだ？ 遅かれ早かれ会うことになったんだ。さっさと打ち解けるよ。元の奥さんだろ？」

広樹が言った。さっきの女性は、鷹緒の離婚した前妻であった。

27：別れた人

鷹緒は小さな溜息をついた。

「よりによつて……」

「ヒロさん、まだ？」

その時、女性が奥のデスクに顔を出した。鷹緒の別れた妻というその女性は、確かに元モデルというだけあって、すらりと背の高い美しい女性である。

石川理恵いしかわりえという、二十七歳のその女性は、鷹緒とは四年前に別れた以来、ほとんど会っていない。

「ごめん、まだ見つからないんだよ。ここに入れたと思ったんだけど……」

机の引き出しから書類の束を出しながら、広樹が言う。そんな広樹に、見かねて鷹緒が口を開いた。

「なに探してんだ？」

「契約書だよ。この間、役員会でサインしたのが……」

「……あれだろ？」

鷹緒が指差した先には、壁にかけられた大きな封筒があった。

その封筒を目にして、広樹は照れながら封筒を取り上げた。

「お、本当だ。そうか、わかりやすいように壁にかけておいたんだった」

「相変わらずですね。ヒロさん、結構おつちよこちよいなんだもん。鷹緒も、物を見つける力は、相変わらず衰えてないみたいね」

小さく笑いながら、理恵が言った。そんな理恵に、鷹緒は小さく溜息を漏らす。

「……おまえが、まさかうちの社長になるとはな」

「社長はヒロさんよ。私は副社長、モデル部担当」

理恵が答える。理恵はもともと、モデル引退後にモデル事務所でマネージャーをしていた。しかし独立の話が持ち上がり、その中で

広樹の事務所を共同経営することになったのだった。

それは、広樹の事務所がモデルやタレントにも力を入れる傍ら、企画事務所としても成長してきたことや、鷹緒の力も手伝って、事務所が大きくなってきたことであつた。

「まさか本気とはな……」

テーブルに腰をかけ、俯いたままの鷹緒が言う。

「だから話は進めるって言つたろ？ でも、うちも助かるよ。モデル事務所じゃないのに、結構モデルも充実してきちゃってたから、管理も大変だろう？ 理恵ちゃんは、ここしばらくモデル事務所でしごかれてきたわけだし、これから大きく広げるのに一任出来るよ」
広樹はそう言つて、歩き出した。

「コーヒーでも買つてくるよ。肝心な時に、冷蔵庫に何もないんだものな」

「え、じゃあ俺が行くよ」

バツが悪そうに、鷹緒が言う。

「馬鹿言え。たまに会つたなら、ちゃんと話せば？」

広樹は意地悪げにそう言つと、事務所を出ていった。

「つたく、あいつ……」

鷹緒はそう言つと、応接用のソファに座り、煙草に火をつけた。

「相変わらずだね、鷹緒。私が苦手？」

目の前に座り、苦笑しながら理恵が言う。

「……苦手だな」

「ひどーい。じゃあ、なんで結婚したのよ」

「アホか、いつの話だよ。でも……ちゃんとやってんのか？ 恵美は？」

「うん、元気よ」

「そうか……」

「……ごめんね。まさか鷹緒の事務所に来るなんて思つてなかった。初めは、ただ独立したいってヒロさんに相談しただけだったんだけど、その後ヒロさんから共同経営の話を持ちかけられた時、戸惑っ

ただんだけど……まだ一人じゃ不安で、お言葉に甘えちゃった」

理恵の言葉を聞きながら、鷹緒は煙草をもみ消す。

「……いいんじゃない？ ヒロはヒロで、社長として事務所のこと考えてるんだ。デメリット背負ってまで、おまえに話は持ちかけないだろう。俺は一社員だ。経営陣がどうなるのが、関係ねえよ」

鷹緒の言葉に、思わず理恵が苦笑する。

「相変わらずだね。でも経営陣に私が入るってことは、あなたの仕事に口出し出来るってことだからね」

「馬鹿言え。おまえの専門はモデル部署だろう？ 俺はモデルだけに関わってんじゃないからな」

「でも写真家としてのあなたなら、モデルに関わることが多いでしょ？」

理恵の笑顔に、鷹緒も小さく微笑んだ。

一見、喧嘩腰の二人の会話は、二人が育んだ親しげな過去を物語っている。

「ただいまー」

その時、広樹が戻って来た。

「ほい、コーヒーと軽食」

「サンキュー」

コンビ二袋を広げた広樹から、すかさず鷹緒が缶コーヒーを手にし、一気に飲み干した。

「相変わらずだな、朝っぱらから一気飲みかよ。理恵ちゃん、こんな男と別れて正解だよ」

冗談っぽくそう言う広樹に、理恵も微笑んだ。

「私もそう思います」

「おまえらな……」

「冗談だつて。話は出来たのか？ 仲良くやってくれよ。同じ会社の仲間になるんだから」

鷹緒の言葉を遮って、広樹が言った。理恵は静かに微笑む。

「大丈夫ですよ。喧嘩別れしたわけじゃないんだし……仲が悪いの

は昔から。ねえ？ 鷹緒サン」

そう言ってきた理恵に、鷹緒は苦笑する。

「確かに……喧嘩別れじゃないよな……まあ、勝手にやってくれ」

鷹緒と理恵は、軽く握手を交わす。そんな二人に、広樹はにこやかに微笑んでいる。

「それはよかった。二人の握手は、僕が見届けたよ。さて、これから今後の経営体制について話し合うつもりなんだ。鷹緒も居てくれるか？」

「まさか。俺は入稿ついでに寄っただけだよ」

空になった缶を掴み、鷹緒が立ち上がって言った。そんな鷹緒を引き止めるように、広樹が口を開く。

「今日の予定は？」

「打ち合わせが三件入っているほかは、珍しくオフ」

「じゃあ、それまでここにいたら？ 食事でも……」

「いい。じゃあな」

鷹緒はそう言って、足早に事務所を出ていった。

「まったく……相変わらずだな。君の前でもあつさりしてる」

ぼそつと言った広樹に、理恵は静かに微笑む。

「うん。でも、それがいいところだと思う……彼、照れ屋だし、思ったことを素直に伝えられないんだもの」

「まあ……そうだね」

広樹も笑って答えた。

28：再会の夜

その夜。鷹緒は家に帰ると、買ってきたコンビニの弁当で夕食を済ませる。その時、インターホンが鳴った。モニターに映ったのは、広樹の姿である。

「よっ」

部屋までやってきた広樹は、そう言っただけでワインを片手に上がり込む。

「珍しいな。おまえが来るなんて」

「仕事以外じゃ、そうだな。なんだ、またコンビニ弁当で済ませてるのか？」

テーブルに広げられた鷹緒の夕食を見て、広樹が言う。

「いいんだよ。自分で作るより、コンビニの方が遥かにバランス取れてるから」

「おまえ、料理やらないもんなあ……あ、おでんと焼き鳥も買ってきたぞ」

「ああ。今、グラス出すよ」

鷹緒はそう言っただけで、キッチンへと向かった。

残された広樹は、マガジブラックに入った雑誌を取り出した。表紙には、鷹緒の前妻、理恵が写っている。

「……どうだった？ 久々の再会は……」

広樹が尋ねる。鷹緒は苦笑して、口を開く。

「なんだ、そんなことで来たのか？ 俺は大丈夫だよ。変に気を使うの、やめてくれよ」

「……おまえが本当に吹っ切ってるなら、気なんか使わないさ」

「どういう意味だよ」

グラスをテーブルに置き、鷹緒は広樹の前に座った。

「こんな古い雑誌、こんなところに置いてるんだ……僕はおまえが吹っ切ってるなんて思っただけだよ。理恵ちゃんと別れてから、恋人

だって作ってないじゃないか」

広樹はそう言いながら、グラスにワインを注いだ。鷹緒は苦笑しながら、雑誌をマガジンラックへ戻す。

「……こんなバツイチのオッサンに、恋人なんか出来るわけないだろ？」

はぐらかすように、笑いながら鷹緒が言う。

「そんなわけないだろ。切るか切られるかの世界で、おまえは写真家として大成してる。写真だけじゃなくて、今は何もかも順調だ。そんなおまえに言い寄る女は、いくらでもいるんだぞ？ それをおまえは……」

「何が言いたいんだよ、ヒロ……俺はな、ただもう面倒くさいだけなんだよ。愛だの恋だの、そんなもんはとくに経験してんだよ。ったく、俺のことは放っておけよ。おまえだって、大した経験ないくせに」

ワインを飲みながら、強い口調で鷹緒が言った。広樹は小さく息を吐くと、真剣に鷹緒を見つめる。

「僕はモテないだけなんだよ。鷹緒……僕は心配してるんだ。これから嫌でも、理恵ちゃんと顔を合わせることになるんだ。おまえ、やってくれるか？」

「やるもやらないも……社長のおまえが決めたことだ。社員として俺は従うほかないよ」

「鷹緒……」

「それにおまえ、誤解してるぞ？ 確かに理恵とはほとんど会っていないけど、恵美とは何度も会ってるんだ。接点がなくなったわけじゃないし、俺はとくに終わったものだと思ってる。本当だよ」

鷹緒がそう言った。

広樹は今後、理恵が事務所に関わるということで、鷹緒がどうなるか心配していた。それは、鷹緒が理恵と別れてから、一度も恋に走らず、吹っ切れてないように見えていたからだ。

「おまえがそう言うならいいけど……正直、心配なんだ」

「なにを今更……まあ結婚当初から、俺とあいつは水と油だって言われてた。喧嘩もしよっちゅう……でも別れてまでお互いに干渉する関係ではないし、それに社長命令なら、うまくやっていきますよ」
苦笑しながら、鷹緒が言った。

「そうか、それならいいんだ。よろしく頼むよ」

「ああ……」

二人はその夜いろいろと語り合い、飲み明かした。

数週間後。春の街並みを、沙織は友人の朋子と歩いていた。

「新学期が始まったのはいいけど、あんまり代わり映えないね」
朋子が言った。沙織は笑いながら頷く。

「確かに。トモとも、また同じクラスだしね」

「アハハ、腐れ縁つてやつ？ でも、先輩とは本当に終わったの？」

突然、朋子が沙織の彼氏である篤のことを尋ねた。その話題に、沙織は散りかけた桜の花びらを見つめながら、急にしんみりする。

「うん、もう連絡も取ってない……いいんだ。あっちは受験生だし、もう終わったの」

「そう……じゃあ、新しい恋しなくちゃね」

「うーん……」

「なに？ 意味深だなあ。もう好きな人でもいるの？」

「えっ、そんなことないけど……」

「怪しい、その反応！」

「もう、トモつてば」

じゃれるように歩きながら、二人は笑った。そして朋子が、切り替えるように口を開く。

「じゃあ、バイトでもすれば？ 私もこれからバイトなんだけど、バイト先にちよつといい人がいるんだ」

「バイトかあ。やりたいとは思っけど……」

「沙織？」

そこへ突然、沙織を呼ぶ声があった。二人が振り向くと、そこには鷹緒がいる。
「鷹緒さん！」

29：偶然の街角

「鷹緒さん！」

驚いて、思わず沙織が叫んだ。

「おう、久しぶりだな。学校帰り？」

「うん……あ、友達の朋子です。この人は、親戚の鷹緒さん」

「ああ、カメラマンの！」

朋子が言った。沙織がモデルをした時に、鷹緒の話は少なからず出ている。

「どうも」

朋子に向かい、鷹緒がぺこりとお辞儀をした。そんな鷹緒に、沙織が口を開く。

「鷹緒さん、仕事？」

沙織がそう言ったのは、鷹緒が肩から大きなカメラを提げているからだ。

「いや、オフ」

「でも、カメラ……」

「オフは仕事抜きで写真撮ってるんだよ」

「へえ。本当に写真が好きなんだね」

「まあな……」

「沙織」

その時、二人の会話を打ち消すように、朋子が声をかけた。

「あ、ごめん、朋子」

長話してしまったことを、沙織が謝る。

「ううん。いいの、いいの。でも私、これからバイトだから、そろそろ行くね」

「あ、うん。ごめん」

「ううん。じゃあ、また明日ね」

朋子はそう言って、その場から去っていった。

「……じゃあ、俺ももう行くよ」
残された沙織に、鷹緒が言った。

「え？　せつかく会えたのに……」

思わず沙織が言う。鷹緒は小さく微笑むと、辺りを見回した。目の前には喫茶店がある。

「じゃあ、茶でも飲む？」

「うん！」

二人はそのまま、近くの喫茶店へと入っていった。

「本当にびっくりした。こんなところで鷹緒さんに会えるなんて、思ってもみなかった」

喫茶店で紅茶を飲みながら、沙織が言った。

先日、鷹緒が結婚していたという事実を知ってからはずっと会っていない。別れ際の態度に、気まずさで事務所にも寄れなかったが、目の前の鷹緒は前と変わらず、笑みさえ浮かべてコーヒーを飲んでいる。そんな鷹緒に、沙織も元通りに笑いかける。

「それは俺もだよ。そうだ、おまえ、BBのファンだったよな？」

「写真集、欲しいならやるぞ」

「え、本当？　嬉しい！」

「ミーハーな彼氏の分も必要か？」

「あー……」

鷹緒の言葉に、沙織はバツが悪そうに俯いた。

「どうした？」

「うん……別れたんだ。篤とは」

「……へえ。それはそれは」

鷹緒はそう言いながらコーヒーをすすり、もう一度口を開く。

「まあ、いいんじゃないの？　どうせおまえ、本当の恋なんてしたことないんだろ？」

「そつ、そんなことないよ！」

俯いていた沙織は顔を上げ、ムキになって反論する。

「へえ？　じゃあ、その元彼クンとは、胸が張り裂けるような、激しい恋愛してたんだ？」

意地悪気にそういう鷹緒に、沙織はムツとした顔を見せた。反論出来ない沙織に、鷹緒が続ける。

「そらみる。おまえら十代の恋愛なんて、くつついたり離れたり、忙しい一時の感情に任せての恋愛だろ？　そういうのは、恋愛とは言わないの」

「もう、誰のせいで別れたと思って……」

「……俺のせい？　まさか、あの時のことが原因で？」

驚いてコーヒークップを置きながら、鷹緒が尋ねた。

「うん。それだけじゃないけど……まあ、もういいの。バイトでもして、新しい彼氏見つけるわ……」

反論出来ない沙織が、諦め顔で笑って言う。

「バイト？」

「うん。さつきトモが言ってたの。新しい出会いは、バイトだって…… 出会いはないかもしれないけど、バイト探してるなら、うちの事務所手伝えよ」

鷹緒が言った。

「なによ。手伝えよって……」

「ミーハーなおまえに合ってる」

その言葉に、沙織は赤くなる。

「そりゃあ、ミーハーだけださ……」

「まあ考えといて。今、ちよつとゴタゴタして忙しいのに、バイト募集してる暇もないんだ」

「へえ。繁盛してるんだ」

「まあな……じゃ、そろそろ行くよ」

「うん……」

二人は喫茶店を出て、別々の方向へと分かれた。

数日後。学校帰りの沙織は、久々に鷹緒の事務所へと向かった。
「あれ？」

しかし事務所に家具はなく、空の状態である。

30：新事務所

「あれ、沙織ちゃん？」

来客に気付いて、奥から広樹が顔を出した。沙織は驚いて、辺りを見回している。

「ヒロさん。これは……？」

「ああ、引っ越ししたんだ。鷹緒から聞いてない？」

「聞いてません。全然……」

「そう。うち、社員も増やして、本格的に事務所拡大を図ろうと思つてね。よかつたら沙織ちゃんも、うちでバイトしてよ。土日だけでもいいからさ」

広樹の言葉に、沙織は笑う。

「それ、この間、鷹緒さんにも言われましたよ」

「そつか。駄目かな？ 事務所が落ち着くまででもいいからさ……」
「拝むようにしている広樹の姿がおかしくて、沙織は苦笑いした。

「いいですよ。私に出来ることなら……暇ですし」

「本当？ よかった、ありがとう。まあ僕としては、君にはモデルをしてほしいんだけど……そうだ、君宛のファンレターが、いくつか届いてたと思うよ」

「ファンレター？」

「うん。国民的な雑誌に、あれだけ大々的に載ったからね。反響も大きかったんだ。ごめんね、バタバタしていて、連絡しそこねたよ。新事務所の方に行っちゃってると思う……」

「えー！ ファンレターなんて、どうしよう……」

「あはは。僕はもう少し、こっちで後処理しなきゃならないんだ。新しい事務所は近いから、そっちに行ってみてよ。鷹緒もいると思うから」

そう言つて、広樹は事務所移転のお知らせの紙を、沙織に差し出した。

「あ、いえ。近くまで来たんで、ちょっと顔を出してみたただけですから……」

「まあ、いいじゃん。牧ちゃんも、会いたがつてたよ」
忙しそうな時期に行くのは気が引けたが、沙織は頷いた。

「あ……じゃあ、行ってみます」

「うん、また気軽に来てよ。バイトの件も正式に頼みたいし。それは鷹緒と話してくれてもいいし、僕ももうすぐ行くから、そこでもいいよ」

「わかりました」

沙織はそう言って、地図の示す場所へと向かっていった。

新しい事務所は、旧事務所から五分くらいのところにあり、七階建てオフィスビルの三階にあった。

沙織が事務所に入ってみると、そこはまだ騒然としていて、旧事務所の倍以上の広さに見える。

「どちらさまですか？」

そう言って、奥から女性が出てきた。沙織はその女性に見覚えがあった。いつか写真で見た、鷹緒の別れた妻である。

「あ……」

思わず沙織は、言葉を失った。

「どうしたの？ 何の用かしら？」

「あの……間違えたみたいです。すみません」

沙織はそう言って、すかさず背を向ける。鷹緒の事務所に、前妻がいるはずがないと思った。

「あら、沙織ちゃんじゃない！ 久しぶりね」

そこに牧が気付いて、沙織に声をかけてきた。

「牧さん……じゃあ、ここが新しい事務所？」

「なんだ。牧ちゃんの知り合いだったの？」

女性が言う。

「いえ、鷹緒さんの親戚の子なんですよ」

「え？ 鷹緒さんの……？」

女性もまた、沙織を見つめる。そんな沙織は、目を泳がせるばかりだ。

「ええ、小澤沙織ちゃんです。この子には、何度も助けてもらってるんですよ。今年の忙しい正月にも仕事手伝ってもらったし、キャンドイスでモデルが足りなくなつた時も、この子が出てくれて……ヒロさんが、沙織ちゃんにモデルになつてほしいって、ずっと言ってるんですよ」

牧がそう説明する。女性は笑顔で頷き、沙織を見つめた。

「そうなの。はじめまして、私は石川理恵といます。今回、ヒロさんと一緒に、この事務所を共同経営することになったの。よろしくね」

「は、はい……」

沙織は理恵と名乗った女性から、目が反らせなくなっていた。理恵はすらりと背が高く、本当に美しい顔立ちをしている。なにより、ほんのり香る香水に、大人の女性という感じが漂う。

「理恵」

そう言つて、奥から鷹緒が出てきた。

「ちよつと、気安く呼び捨てにしないでください」

理恵が言つた。鷹緒は変わらぬ表情のまま、口を曲げて理恵に近付く。

「悪かつたな、副社長……それより、さっき預けたフィルムどこやつたんだよ」

「え？ 机の上に……あ、ここにあつた」

ポケットからフィルムを出して、理恵が言つた。

「つたく……おう、沙織。今、ヒロから電話あつたぞ。バイトしてくれんだつて？」

「え、あ、うん……」

沙織は戸惑いながら、鷹緒を見つめる。様子の違う沙織に、鷹緒は首を傾げた。

「なんだよ。どうした？」

「べ、べつに……」

「変なやつだな」

「まあまあ、ちょっと休憩にしましょうよ。お茶入れてきます」

牧はそう言つて、給湯室へと向かつていった。残された三人は、近くの応接スペースへ向かう。

対面式に置かれたソファに、沙織は奥の席を勧められ、鷹緒と理恵は隣同士に座った。

「あの……お二人は、もしかして……」

気まずい空気の中、沙織が意を決して尋ねた。鷹緒と理恵は、お互いの顔を見合わせる。

「……元夫婦？」

鷹緒が言つた。

「バラさないでよ」

「こいつ、知ってるよ」

「あ、そうなの？」

二人のやりとりを、沙織は呆然と見つめていた。

31：二人の関係

「元夫婦だけど、今は全然関係ないのよ。牧ちゃんとか数人以外は、事務所の人も知らないし。バレたっていいんだけど、お互いやりにくいし、黙っていてね」

理恵が苦笑して言った。沙織は二人を交互に見つめながら、口を開く。

「……お二人、同じ事務所で働くってことですか？」

「まあそうだけど、本当に私たちはもう赤の他人って感じだから……特に意味はないのよ」

黙ったままの鷹緒に反し、理恵が答える。そこに、牧がお茶を持ってやってきた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

一同は、お茶を飲み始める。するとそこに、広樹がやってきた。

「おお、大分片付いたじゃない」

「ヒロさん、遅いですよ。男手はスタジオの方に、最後の搬出に行ってます」

牧が言った。広樹は新しい事務所を満足げに見回し、微笑む。

「そう。あとは小物ダンボールだけかな？」

「そうだと思います」

「うん、事務所らしくなってきたな。あ、牧ちゃん。沙織ちゃんのファンレターがどこにあるか知ってる？」

「まだ届いてないと思います。小物の中だから」

「そっか……」

「なんだ？ 沙織のファンレターって……」

二人の会話に、鷹緒が尋ねる。

「ほら、沙織ちゃんにキャンデイスでモデルしてもらった時の反響が思ったより大きくて、今でも問い合わせの電話がくるって、キャ

ンデイスの事務所が言ってたよ。ファンレターも、まとめて送られてきてね」

「へえ……」

「僕は、なんとか沙織ちゃんにモデル続けてほしいんだけどさ……」
広樹の言葉に、沙織が首を振って俯く。

「でも私、今でもすごく恥ずかしくて……」

「まあ、ファンレター読めば気持ちが変わるかもよ？ もう少しで届くから、待っててよ」

「あ、いえ……私、もう失礼します」

沙織が立ち上がって言った。なんとなく、その場に居づらい雰囲気があった。それは意識している鷹緒と、鷹緒の前妻が一緒にいるということに違いない。

「え？ でも」

「すみません。じゃあ……」

「……じゃあ、俺ももう行くよ」

鷹緒もそう言って、立ち上がる。

「おまえ、今日は会議か何かだっけ？」

「ああ、ＢＢの事務所。じゃあ、お先。行くぞ、沙織」

鷹緒はそう言って、一瞬、沙織の肩を抱いた。

「え？ う、うん……失礼します」

一瞬だが肩を抱かれ、沙織の胸は緊張して高鳴る。やっとのことで挨拶すると、鷹緒とともに事務所を出ていった。

「な、なによ、鷹緒さん」

外へ連れ出す鷹緒に、沙織が言った。

「べつに？」

「え？ 何か意味があって、連れ出したんじゃないの？」

「いや。おまえが帰るっていうから、空気が変わったろ？ 俺も出ようと思ってたから、ついでにな」

「なんだ……本当に？」

「他に何かあるんだよ。じゃあ俺、あっちだから」

「うん……」

「じゃあな」

鷹緒はいつものようにそっけなく、別の方向へと去っていった。

「なんだ。本当に、何もないんだ……」

沙織は少し残念そうに、家へと戻っていった。

数時間後、家へ帰った沙織は、ベッドに寝そべりながら目を瞑る。思い出されるのは、鷹緒と理恵の姿ばかりだ。今でもお似合いのカップルといった二人は、離婚したとはいえ、お互いが通じ合っているように感じた。

「しんどい……」

沙織はそう言って、大きな溜息をついた。

その時、沙織の携帯電話が鳴った。見ると、広樹かららしい。自分、仕事の件だろう。しかし今の沙織は、鷹緒と理恵と一緒にいる姿など、見たくはなかった。

しばらくすると、電話のベルが切れた。

「もうやだ……なんで気になるんだろ。鷹緒さんなんか……」

沙織は枕に顔を押し当てる。鷹緒を好きなことを認めたくはなかった。親戚という微妙な立場のため、親に相談することも出来ないと思った。

その時、沙織の部屋のドアがノックされた。

「沙織」

母親の声が聞こえる。

「もう寝てまーす……」

そのままの状態で、沙織が言う。今は何をする気にもなれない。

「なに言ってるの。鷹ちゃん、来てるわよ」

「ええ！」

それを聞いて、沙織は飛び上がるように起き上がった。

「下で待ってるから、下りてらっしゃい」

「は、はい……」

沙織は慌てて、鏡の前に走った。

「どうしよう、どうしよう……」

身だしなみを整えて、沙織は鏡を見つめる。

「落ち着け……よし！」

沙織は一人そう言っていると、リビングへと向かっていった。

32：突然の訪問

リビングでは、鷹緒と広樹がお茶を飲んでいた。

「鷹緒さん、ヒロさん！ ど、どうしたんですか？」

慌てた様子で沙織が尋ねる。そんな沙織に、広樹が口を開いた。

「ああ、ごめんね、突然。近くまで来てるって電話したかったんだけど、繋がらなくて……」

「はあ……」

「ケーキいただいたのよ。食べましょうよ」

沙織の母親がそう言って、ケーキを取り分ける。

「ああ、あとこれを……」

広樹が沙織に、紙袋を差し出した。沙織は首を傾げる。

「え？」

「ファンレターだよ。ごめんね、さっき間に合わなくて」

「ああ……」

「それで、お母さん。ちょっとお話があるのですが……」

改まって、広樹が母親に言った。

「ええ、なんでしょう」

母親も座って、広樹を見つめる。

「改めまして、私は鷹緒と同じ事務所の社長をしております、木村といいます。沙織ちゃんには、いつもお世話になってます。実は突然の話で大変失礼ですが、本格的に沙織ちゃんをモデルとして起用させていただきたいと思ひまして、伺わせていただきました。沙織ちゃんには、前々から個人的にその旨を伝えていたのですが、先日出ていただいた雑誌社からの要望もございまして、今回は正式に親御さんにもお話をと思い、突然ながらお邪魔させていただいた次第です」

広樹が言った。先日、なりゆきで出た雑誌から、沙織への依頼が来ているようだ。さすがの母親も、それには驚いた。

「沙織が……モデルですか」

「はい。最近は読者からモデルになった子も多く、現実には沙織さんにも予想を上回るファンレターが届き、問い合わせの電話も多く届いております。ファンレターを読んでいただければ、そのファンの熱意も伝わると思います。まだ学生さんですから、無理強いは致しません。学業に支障をきたすことはさせませんし、モデルとしてのフォローは、こちらがきちんと致しますので、その点の心配はないと思われますが、いかがでしょうか」

広樹の話聞きながら、沙織はちらりと鷹緒を見た。鷹緒は軽く目を伏せたまま、広樹の話に耳を傾けている。

「……沙織はどうなの？」

その時、考えていた母親が、沙織に尋ねた。

「え？」

「お父さんがどう言うかはわからないけれど、あんたの気持ちはどうなの？」

母親が、そう言い直した。

「……そりゃあ、そういう世界に興味がないわけじゃないよ。でも

……」

沙織はもう一度、鷹緒を見た。鷹緒もその視線に気付いて、沙織を見つめる。

「……鷹緒さんはどう思う？」

「なんで俺に聞くの？」

沙織の言葉に、鷹緒が言う。

「……だって鷹緒さん、私が馬鹿だって思ってるでしょ？ この話受けたら、おまえには無理だなんて言って、陰で笑ったりするんじゃないの？」

膨れっ面で、沙織が言った。それを聞いて、鷹緒は苦笑する。

「まあ、馬鹿だとは思っけど、べつにそんなふうには思わないよ」

「そうよ、鷹ちゃん。本当に沙織は、その世界でやっていけるのかしら」

真剣な目でそう言いながら、母親も鷹緒を見つめる。

「……まあ、これだけ多くのファンレターが来るのは、確かに珍しいと思うよ。もちろん厳しい世界だから、本格的にそれで食っていくというなら、正直、難しいと思う。だけど読者モデルとして、一般の子がモデルをやるのは増えてきてるんだ。それこそ趣味の一环。モデルを目指してる子も、目指してない子も、一時期のバイト感覚でやってる子も多い。だからその程度なら、十分やっていってもいいと思うけど？」 確かに沙織は、顔も可愛いわけだし」

鷹緒の言葉に、沙織は嬉しくなった。お世辞かどうかはわからないが、鷹緒からのその言葉は、今の沙織にとって、最高の褒め言葉である。

「もちろん、今すぐ返事をくれというわけではありません。ご家族でよく話し合って、それからお返すくだされば結構です。そしてもしお受けいただけるならば、少なからず仕事の謝礼はお支払い致しますし、スケジュール管理からフォローまで、うちのスタッフが面倒見ます。気心が知れている鷹緒も同じ事務所のわけですし、気兼ねなくやっていただければと思います」

一同を真っ直ぐに見据えて、広樹が言った。そんな広樹に、母親は頷いた。

「わかりました。主人とも話し合って、それからお返事します」

「お願いします。では、突然お邪魔して申し訳ありませんでした。

我々は、これにて……」

広樹がそう言って立ち上がると、鷹緒が名刺を母親に渡した。

「事務所の住所変わったから、これからはこっちに連絡して」

名刺を差し出しながら、鷹緒が沙織の母親に言った。

「わかったわ。鷹ちゃん……本当にうちの子、モデルなんてやっていけるの？」

心配そうに言った母親に、鷹緒は優しく微笑む。

「まあ、本人のやる気次第だと思うよ」

鷹緒がそう言うと、沙織が手を差し出した。

33：誘われて…

「なに？」

怪訝な顔をして、鷹緒が尋ねる。沙織は尚も手を差し出して、口を開いた。

「私にも、名刺ちょうだいよ」

「なんでだよ。おまえはもう、事務所の住所知ってんだろ？」

「知らないもん」

「つたく、ほら」

鷹緒が、沙織に名刺を渡す。

「わあ。ちゃんとした名刺だ」

「当たり前だろ。じゃ、そういうことで、お邪魔しました」
そう言つと、鷹緒は広樹とともに、沙織の家を後にした。

「それで、沙織はどうしたいの？」

リビングに戻った沙織は、母親の問いかけに俯く。

「わかんないよ…… やってみたいって気持ちはあるよ。私、お母さんの子だからミィハーだし」

「なによ、その言い草は……」

母親が苦笑する。

「でも、私で出来るのになつて、不安も大きい……」

「あなたの将来なんだから、あなたが決めなさい。私はどっちでもいいわよ。あなたにやりたいことが出来るなら大賛成よ。趣味の一つもないんだから」

「放つといてよ……」

沙織はそう言つと、紙袋からファンレターを取り出した。

「本当にファンレターだ…… なんか信じられないな」

手紙を読みながら、沙織が言つた。手紙には、沙織に憧れを抱いた少女からの文章が連ねられている。

それを横で読みながら、母親も驚いて口を開く。

「本当、すごいじゃない」

「……どうしよう」

「まあ、よく考えて決めなさい。あんたはまだ高校生なんだし、そう焦る必要はないと思うけど……でも、今しか出来ないこともあると思うし、本当にやりたいと思うなら、お母さんはやってもいいと思うわよ」

「うん……」

沙織は小さく頷いて、すべてのファンレターを読んでいった。

数日後。沙織はまだ決心出来ず、相談しようと鷹緒の携帯電話に電話をかけた。しかし、留守番電話に繋がる。沙織は少しためらった後、鷹緒の事務所へと電話を入れた。するとすぐに、牧の声が聞こえる。

「あ、あの……小澤沙織です。牧さんですか？」

『ああ、沙織ちゃん。どうしたの？』

「突然すみません。あの……鷹緒さんはいますか？」

『牧が電話に出たことで、少しホッとしながら沙織が尋ねた。』

『ううん。鷹緒さん、今日は午後からオフなのよ。帰って仕事するって言ってたから、自宅にはいると思うけど』

「そうですか……わかりました。ありがとうございます」

『ううん。あ、またファンレター届いてるのよ。今度取りに来て』

「え、またですか？ はい……じゃあ、今度。失礼します」

沙織は電話を切った。すると、すぐに電話が鳴る。

「わあ！」

思わず沙織が驚いた。見ると着信画面には、鷹緒の名前が浮かんでいる。沙織はすぐに電話に出た

「はい！」

『あ、悪い。気付かなくて……電話くれたか？』

鷹緒の声が聞こえる。

「うん。今、事務所に鷹緒さんいるか聞いてたの。ちょっと相談したいことがあって……」

『ああ、モデルのこと？』

見透かすように、鷹緒が言った。

「う、うん……今、家にいるの？」

『ああ。おまえは？』

「まだ学校の近くなんだけど……」

『そう。俺、仕事やってて、もう少しかかりそうなんだけど……それでよければ、どっか出るけど？』

「じゃあ、私がそっち行く……駄目？」

勢いながらも、勇気を振り絞って、沙織が言った。

『こっちって、俺んち？』

「うん。駄目か……」

苦笑して、沙織が言う。

『べつにいいけど……場所わかるか？』

軽く了解を得たことで、少し緊張気味だった沙織は、拍子抜けした。

「う、うん、多分……」

『駅さえ間違わなきゃ、すぐわかるよ。じゃあ家にいるから……あ、途中で煙草買って来て。いつもの』

「はい。じゃあ、後でね」

そう言って、沙織は電話を切る。また鷹緒の家に行けることが嬉しかった。

34：彼のマンションへ

しばらくして。鷹緒の部屋に通された沙織は、改めて部屋を見回しながら口を開く。

「おじゃまします。煙草、買ってきたよ」

「おう、サンキュー」

沙織に煙草代を渡し、鷹緒はキッチンへと向かった。

「この間は、突然行って悪かったな」

鷹緒はそう言って、缶コーヒーを沙織に渡し、ソファに座る。テーブルの上は、書類で散乱している。

「うつん……大変そうだね。仕事」

空いている鷹緒の横に座って、沙織が言った。

鷹緒はテーブルの上の書類を軽く片付けると、口を開く。

「まあな……それで、相談って？」

「モデルの件、まだ迷ってて……やりたい気持ちもあるし、不安な気持ちもあるしで、どうしたらいいかわからなくて……」

目を泳がせながら、正直に沙織が言った。不安が多く、まだ決めかねている。

「……親はなんだって？」

「あんたがやりたいならやれって。うちって、変なところで放任主義的なところがあるから……」

「ふうん。じゃあ、やってみれば？」

軽く鷹緒が言った。

「……そんな軽く言うこと？」

「そんなに重く考えること？」

沙織の言葉に、鷹緒が言う。

「じゃあおまえ、将来の夢とかないの？」

鷹緒の問いかけに、沙織は俯いた。そんな沙織に、鷹緒は言葉を続ける。

「本格的にモデルやりたいうなら、最初から無理だつて俺は反対するよ。でも、一時限りの読者モデルだろ？ オファーはキャンデイス一誌だけなんだし。やりたきゃやってみたらいいし、やりたくても今後断られる場合もある。切るか切られるかの世界だ。要は、本人のやる気次第だろ？」

「……私が受けても、無理だつて笑わない？」

口をへの字に曲げたまま、沙織は鷹緒を見つめて言った。そんな沙織に、鷹緒は吹き出すように笑う。

「笑わねえよ。おまえ、そんなに自分に自信がないのか？」

「……ない」

「あつそ。ま、無理なら最初から無理だろ。そんなに悩むならやめれば？」

「なによ、その言い方」

「だつてそうじゃん」

「……」

沙織は押し黙った。

「……悪かったよ。こっちも強引なところがあったと思う……おまえは学生なんだし、急ぐことないよ。これからは、ヒロにもあまり干渉しないよう言つし……」

沙織を気遣つて、鷹緒がそう言った。そんな鷹緒を見つめ、沙織は大きく息を吸い、口を開いた。

「決めた！ 私、やる！」

「……なんだよ、急に」

「勢いも大切でしょ。私、やってみるわ……無理なら無理つて、言つていいんでしょ？ それに、向こうから断られるかもしれないんだし」

勢い余つた様子の沙織に、鷹緒は苦笑する。

「まあ、そういうことだな……じゃ、よろしく頼むよ。キャンデイスの読者モデルとはいえ、うちのモデルになるわけでしょ」

鷹緒はそう言うと、沙織の腕を軽く叩いた。そんな鷹緒の温もり

を感じ、沙織は頬を染める。

「その代わり、鷹緒さんもちゃんとフォローしてくれる？　また相談とか乗ってくれる？」

「……いいよ」

沙織の言葉に、鷹緒は小さく微笑むと、飲み干した缶コーヒーをテーブルに置いた。

「でも言っとくけど、読者モデルとはいえ甘い世界じゃないからな」
「……わかってます」

「じゃあ、近いうちに事務所に行ってやって。一応、契約とかあるし、いつからとかも決めなきゃならないだろ？　あと、お母さんと一緒にがいいよ」

「わかった」

素直に沙織が頷く。その時、鷹緒の携帯電話が鳴ったので、鷹緒はすぐに電話に出た。

「はい。ああ、うん……わかった。じゃあ、今から行くよ」

鷹緒はそう言っと、電話を切った。

「……急用？」

電話の受け答えを耳にして、沙織が尋ねる。

「悪い。事務所行かなきゃ」

「わかった」

「駅まで送るよ」

「うん……」

二人はマンションを出て、鷹緒の車へと乗り込んだ。

35：依頼

「鷹緒さん。あの……石川さんって……」

車の中で、沙織は思い切って理恵のことを尋ねた。

「ああ……なに？」

少し嫌そうに、鷹緒が聞き返す。

「あの……本当に、これから一緒に職場で働くんだよね。その……やりにくくないの？ 結婚してたんでしょ？」

「……まあ、やりにくくないっていったら嘘になるけど……本当、結婚自体知ってるやつ、ほとんどいないんだ。それに、ヒロとも仲が良いわけだし、同じ事務所っていても部署も違うし、出払うことも多いだろうしね……まあお互い、割り切ってるからどうってことないよ」

「へえ。そういうもの……」

「そういうものだな。じゃあ、ここでいい？」

鷹緒が、駅の近くに車を止めた。

「うん。今日はありがとう……突然ごめんね」

「いいよ。じゃあ、またな。ヒロに電話させるから、話聞いとして」

「わかった。じゃあ、またね」

沙織は車から降りると、去っていく鷹緒の車を見送った。

「……よし。やるぞ」

決意を固めてそう言つと、沙織はそのまま家へと帰っていった。

「シンコンのカメラマン？ 俺が？」

事務所に向かった鷹緒が、かつたるそうに言った。

「そう嫌そうな顔するなよ。シンコンっていったら、年に一度のビスクイベントの一つだ。審査の一つにカメラテスト……まあ、カメラ映りがどうなのかを見るわけだけど、そのカメラマンの一人に、おまえへオファーが来てるわけ。ひいきがないように、他にも数名

のカメラマンが来るわけだけどね」

鷹緒の前に座る、広樹が言った。目の前のテーブルには、有名なコンテストの資料が広げられている。

「わあ。今年もシンコンの季節ですか？ 全日本・ミス・シンデレラコンテストっていったら、うちとしても外せないイベントになってきましたよね」

お茶を入れてきた牧が言う。

「そうなんだよ。でかいイベントだし、去年も鷹緒にオファーが来てたのに、仕事が被って断ったろ？ 今年もこうして話が来たわけだから、願ってもない話だ。三次審査で、ちゃちゃっと撮るだけだよ」

「……わかったよ。事務所拡大のためですな」

腹を決めて、鷹緒が言った。

「よかった。助かるよ、稼ぎ頭！」

「おまえなあ……」

「オーケー？」

そこにタイミングよく、理恵が入ってきた。鷹緒は口を曲げる。

「なんだよ、オーケーって。おまえらグルか？」

「もちろんよ。同じ事務所の人間だもの。じゃあ、こっちもモデル選出に乗り出すわ」

やる気満々な様子で、理恵が言った。

「いやに力を入れてるな」

「もちろんだよ。今までうちは小規模でやってきたわけだけど、正式にモデル部署も出来たからね。事務所も大きくして新しくなったわけだし、事務所の名を世に知らしめるためにも、今回のシンコンは力を入れて、グランプリを狙うから」

同じく意欲を見せて、広樹が言う。

「ふうん……」

「ああ、それで、沙織ちゃんの方はどうなったか、おまえ聞いているか？」

「え……まさか、沙織をシンコンに選出させるつもりなのか！」

鷹緒が察して言った。そんな鷹緒に、広樹は頷く。

「いやあ、もちろん、まだ候補だよ。でも、もし沙織ちゃんがオーケーしてくれるなら、十分いけると思うんだ。あの子は本当に可愛い子だし、雰囲気も持つてる。たったあれだけの雑誌出演で、多くのファンレターが来たんだぞ？ キャンデイスからのオファーだって何度も来てる。あの子は他のモデルに引けをとらないよ。まだ慣れてないところが、シンコン審査員の心をグツと掴んでくれると思うしね」

「……でも、あいつはモデルとしての心得とかまったくないし、第一、荷が重過ぎる……ただの小さいコンテストや、読者モデルレベルじゃない。たかが少しくらい反響があっただからって、それはどうなんだ？」

熱く語る広樹に反して、鷹緒は冷静に心配して言う。親戚でもあるため、沙織の可能性を手放して推せず、乗り気にはなれない。

「まだシンコンまで三カ月ある。これから教えていけばいいと思うよ」

「……でも」

「鷹緒が心配するのはわかるよ。赤の他人じゃないわけだし。もちろん本人の意思がなきゃ無理だし、他にも候補はいるからね」

いつになく慎重な態度の鷹緒を察して、広樹がそう言った。鷹緒も納得して頷く。

「……キャンデイスの件は、オーケーだそうだ。近々契約に来させるから、連絡してやってくれ」

「本当か。キャンデイス側も喜ぶよ。じゃあ早速、後で連絡入れるよ。おまえもシンコンの仕事受けてくれるなら、今度打ち合わせしてもらおうから、そのつもりでな」

「わかった……」

鷹緒はそう言っと、立ち上がった。

「ようこそ。わざわざご足労いただきまして、すみません」

ある日。事務所に訪れた沙織とその母親を、広樹が出迎えた。

「いいえ。綺麗な事務所ですね」

辺りを見回しながら、母親が言った。

「越してきたばかりなので、まだバタバタしてるんですけどね……すみません。今日は鷹緒、出払っていないんですが……」

「いいえ」

「では早速ですが、ご契約のお手続きをさせていただきますようか」
広樹は契約内容を説明し、契約書を差し出した。これから沙織は、広樹の事務所に所属するモデルとなり、そこから依頼された雑誌社の撮影に出向くことになる。

「はい。これで契約は終わりです。ありがとうございました」

しばらくして、契約書への記入を終えて、広樹が言った。沙織の母親も、座ったまま頭を下げる。

「よろしくお願い致します……」

「こちらこそ。大事な娘さんですし、鷹緒の親戚ですからね。嫌な仕事はさせませんし、ご安心ください。それと、もう一つお話があるのですが……」

36：契約の日

「もう一つお話があるのですが……」

広樹はそう言って、シンデレラコンテストの募集チラシを差し出した。

「シンコン……」

ぼそっと沙織がそう言った。沙織でも知っている、有名なコンテストだ。

「そう、全日本・ミス・シンデレラコンテスト。略してシンコン。実は沙織ちゃんさえよければ、シンコンに出てもらいたいんです」

「ええ、私が？ 無理です！」

すかさず沙織が言う。予想通りの反応といったように、広樹が笑う。

「あはは。そう言うと思った。でも聞いてよ。僕は今回、グランプリまでいけるモデルを探しているんだ。伊達に君を選んだわけじゃないし、その点では自信を持ってるよ。シンコンは全国から美少女を募るわけだけど、もし沙織ちゃんが受けてくれるなら、少しトレーニングを兼ねた体づくりの訓練を積んでもらうつもりだよ。ハードにはなると思うけど、基礎的な部分もしっかりやっていくし、事務所の全面的バックアップでフォローするつもりなんだけど……どうかな？」

「……無理だと思います……」

俯いて沙織が言った。

「そうかなあ。まあ、そんなに重く受け止める必要はないんだよ。君は本当、これから磨いていくべき人なんだから、自信なんてなくて当然だし」

「あ、鷹緒さん。おかえりなさい」

その時、事務所の入口からそんな声が聞こえ、一同は振り向いた。
「ただいま」

鷹緒はそう言って、広樹のもとへと向かう。

「おかえり」

「ああ、もう済んだ？」

広樹の言葉を受け、鷹緒が沙織たちを見て言った。

「ああ。今、シンコンの話をしてたところ」

「その様子じゃ、フラれそうだな」

「おまえなあ……おまえこそ、早かったな。シンコンの打ち合わせだろ？」

「ああ、すぐ終わったよ」

息を切らしながら、鷹緒は広樹の隣に座る。

「あの……シンコンの打ち合わせって、鷹緒さんも何かやるんですか？」

鷹緒と広樹を交互に見ながら、沙織が尋ねた。

「うん、三次審査のカメラマン。カメラテストだよ。まあ、沙織がシンコンの依頼を受けて、万が一、三次まで残るんだったら、俺がグランプリまで後押ししてやってもいいけどね……三次まで残るかが問題だな」

鷹緒の言葉に沙織は揺れた。意地悪な言葉も耳に入らない。

「へえ。鷹緒さんが、カメラマン……」

急に沙織は、シンコンをやってみたくなった。もし三次まで行けば鷹緒がいる。妙な安心感が、沙織を包む。

「……やってみてもいい？」

母親を見て、沙織が言った。母親も少し心配そうに戸惑っている。

「でも、本当に大丈夫なのかしら……」

「まあ、全国規模のコンテストはたくさんあるからね。最初からシンコンじゃなくなっていくけど、たまたまこの時期だから……よければ出てみたら？ 全部事務所持ちだから、タダでスポーツジムやエステに行けるよ」

戸惑っている二人に、鷹緒が軽くそう言った。

「た、鷹緒さんも、フォローしてくれるなら……やってみようかな」

……」

静かに沙織が言った。その言葉に、広樹は笑顔で鷹緒を見る。

「本当？ もちろんだよな、鷹緒」

「まあ、俺に出来ることならな……」

「オーケー、決まりだ！ ありがとう、沙織ちゃん。よろしく頼むよ」

広樹はそう言って、沙織と母親に握手をした。

「よかったな。じゃあ俺、テレビ局に行ってくる」

鷹緒はそれを見届けると、すぐに立ち上がってそう言った。

「ああ、まだ打ち合わせがあつたか」

「うん。じゃ、これからよろしく。行ってきます」

鷹緒はそう言って、慌しく事務所を後にした。

「忙しそうね、鷹ちゃん……」

沙織の母親がそう呟く。

「ハハハ。でも契約が気になって、すっ飛んで帰ってきたんでしょ
うね……鷹緒は大成して、事務所としても、本当にあいつのおかげ
でやってきたんです。さあ、契約のお礼は今度鷹緒にしてもらうと
して、今日はこの辺で終わりましたようか」

広樹の言葉に、沙織と母親は同時に頷く。

「はい」

「今後のことは、これからスケジュールを立てます。まだ学生さん
だし無理は言いませんが、出来るだけ週末は事務所に来てもらふこ
とになります。雑誌の撮影も、大抵週末ですから。あとはまた学校
帰りの暇な時にでも来てもらえれば、新設モデル部署の人間が、モ
デルとしてのノウハウをお教えますので」

「わかりました。では、とりあえず週末に伺わせます」

母親が答える。

「お願いします。今日は本当にありがとうございました」

広樹はそう言って、沙織と母親を見送った。

沙織はまだどうしていいのかわからなかったが、ワクワク感が包

み、決意を固めた。少しでも、鷹緒のそばにいたいと思った。

37：レッスン

次の日から、沙織は放課後に事務所へと通い始めた。同級生の友達からは、つき合いが悪くなったと言われたが、シンデレラコンテストに出ることは秘密にしていた。

「今日もお疲れさま」

ある日。やってきたばかりの沙織に、牧が缶ジュースを差し出した。

「ありがとうございます、牧さん。もう、超暑い！」

そう言って、沙織は受付前にある待合用のソファに座る。

「あはは。もう暑くなってきたわよね」

「本当ですよ」

「沙織ちゃん。いらっしやい」

そこへ声をかけたのは、理恵である。

「理恵さん」

かつて鷹緒と結婚していた理恵だが、今は割り切ったつき合いだと鷹緒が言っていたことで、沙織も過去は過去だと、気にするのはやめることにしていた。

事実、理恵はとても良い人で、元モデルというだけあり、沙織にモデルとしてのノウハウを教えてくれている一人である。

「すごい汗ね。走って来たの？」

「はい。ちょうど電車が来たんで、飛び乗って……」

「じゃあ、汗が引いたら始めましょうか」

「はい」

沙織はジュースを飲み干すと、奥の部屋へと入っていった。沙織はそこで、理恵から様々なことを習っていた。

「理恵さん。昨日、ウォーキングの練習してから、体中が筋肉痛なんですけど……」

苦笑しながら、沙織が言う。

「あら。まあ、普段使わない筋肉を使うのも事実だけど、慣れておいた方がいいわよ。普段の姿勢や歩き方もよくなるし。雑誌モデルから始めるといっても、いつステージに立つかわからないんだから」

「まあ、楽しいですけどね……」

「それはよかったわ」

そこにドアがノックされ、鷹緒が入ってきた。

「鷹緒さん！」

思わず沙織が言った。事務所に通っていても、鷹緒にはほとんど会うことはなかった。

「おう、沙織。来てたのか」

「久しぶりだね」

「ああ。頑張ってるらしいじゃん」

「やるからにはね……」

「どうかしたの？」

理恵が尋ねる。

「ああ、これ、シンコンの審査内容が、正式に発表された」

「あら。諸星さん直々に届けてくれるなんて」

「事務所の総力を挙げての企画ですからねえ……あと、沙織の撮影日時、早いとこ決めてくれ。俺も予定あるからな」

「わかったわ。じゃあ後で」

理恵が答えると、鷹緒はそのまま出ていった。

「あの……私の撮影って？」

沙織が尋ねる。

「沙織ちゃんのプロフィール用の写真を撮りたいのよ。シンコンの締切も、もうすぐだから」

「なんか、本格的になっってきたなあ……」

「そりゃあそうよ。着実に話は進んでいるわよ」

理恵は笑ってそう言った。

今日も二時間ほどレッスンを受けた沙織は、奥の部屋から出ていった。すると、企画部署の奥のデスクで、鷹緒がパソコンに向かっているのが見える。

鷹緒は出てきた沙織に気付くと、声をかけた。

「沙織。ちよつと来い」

「……なに？」

反発した態度はするものの、内心は嬉しく、沙織は鷹緒のもとへ駆け寄る。

「珍しいね。鷹緒さんが事務所のデスクで、真面目に仕事してる姿」

「馬鹿言え。そんなことより、今度の土曜の夜って空いてるか？」

鷹緒の言葉に、沙織は期待して頷く。

「うん！ 空いてる」

「じゃあ、これやるよ」

そう言つて、鷹緒が一枚のチケットを差し出した。

「なに？」

「ＢＢのコンサートチケット」

「嘘！ 今やってるやつ？」

「ああ」

「超嬉しい！ このチケット、ファンクラブ入っても取れないんだよ。入れるのは抽選で当たった人だけなの。今週末でだし」

「もらったんだ、最終日のチケット。ＢＢから、直接のお誘い」

その言葉に沙織は驚いた。

元彼である篤が大ファンだったことで、沙織自身も人気歌手グループであるＢＢのファンになっていたのだが、彼氏と別れた今でもそれは変わらない。

「ＢＢから？！」

「俺は仕事で行くんだけど、この間打ち合わせに行った時に、ＢＢの連中がおまえのこと覚えてて、親戚のお嬢さんもぜひどうぞってな」

「ええ！ 私のこと、覚えてくれてるの？」

興奮した様子の沙織に、鷹緒が微笑む。

「一枚だけだけど、よければ行けよ。楽屋にもぜひ来てくれってさ。早く来れたら合流して、楽屋まで連れてってやるよ」

「本当？ 超嬉しい。ありがとう、鷹緒さん！」

思わず、沙織が鷹緒に抱きつく。

「馬鹿。抱きつくなんての」

少し照れながら、鷹緒は沙織を離れた。沙織は好きなBBのコンサートを見られるということ、鷹緒に抱きついてしまったという嬉しさと恥ずかしさで、満面の笑みだった。

「まあ、それだけ喜んでもらえれば、やり甲斐があるな。じゃあ、行くのは一人で行ってくれよ」

「うん。本当にありがとう、鷹緒さん」

「礼を言うなら、BBにしろよ」

「うん。じゃあ、行くね」

「ああ。気をつけて帰れよな」

「はい！」

沙織は嬉しさで飛び上がりながら、家へと帰っていった。

土曜日。沙織は真っ白な新しいワンピースとミュールを履き、気合を入れた服装で家を出ていった。

38：コンサート

早目にコンサート会場へと向かった沙織だが、すでに客が列をなしている。沙織はきよろきよろと見回した後、鷹緒の携帯電話に電話をかけた。

『はい』

少しして、鷹緒の声が聞こえる。

「沙織です。今、会場に着いたんですけど……」

『あ、そう。今どのへん？』

「人が並んでるところにいる」

『じゃあ、裏まで来てくれよ。楽屋口に出てるから』

「はい」

沙織は電話を切ると、コンサート会場の裏へと回っていった。

しばらく歩くと、楽屋口の文字が見える。その近くに、鷹緒が立っていた。

「鷹緒さん！」

沙織が駆け寄る。

「おう、早かったな」

「もちろん。ＢＢに会えるんだもん！」

「あっそ……じゃあ、これ着けて」

そう言って、鷹緒はバックステージパスを沙織に渡した。

「うわ、すごい！」

「それがないと入れないだけだよ。来いよ」

沙織は緊張した面持ちで、鷹緒の後をついていく。しばらく行くと、とあるドアに「ＢＢ様」と書かれている部屋があった。鷹緒は躊躇わず、ドアをノックした。

「どうぞ」

そんな声が聞こえ、鷹緒はドアを開ける。

「諸星さん。あ、沙織ちゃん、来てくれたんだね！ 久しぶりです。わざわざ来てくれてありがとう」

気さくに話しかけたのは、B Bのリーダー・ユウである。後から他のメンバーたちも集まってくる。

「あ、あの……」

緊張のし過ぎで、沙織は言葉を失った。

「なんだよ、おまえ。緊張して声も出ないのか？」

笑いながら鷹緒が言う。

「あはは、おかしいな。諸星さんの親戚なら、僕らだけじゃなくて他の芸能人にも会ったりするんじゃないんですか？」

ユウが言う。

「遠い親戚なだけだよ。こいつ、正式にうちの専属モデルになったんで、一応よろしく」

「マジですか。可愛いもんなあ、頑張ってね」

鷹緒の言葉に、メンバーたちが、口々に言った。

沙織は緊張しながらも、やっとのことで口を開く。

「は、はい。ありがとうございます。あの……今日は本当に、お会い出来て嬉しいです！」

「いいんだよ。僕ら、諸星さんには本当にお世話になっててね。仕事の姿勢とかも尊敬してるし。そんな人の親戚だもん。僕らのファンだって言ってくれてるわけだし、大事にしますって」

笑顔で、ユウが言う。

「ありがとうございます……」

「失礼します。最終打ち合わせしますんで、練習室までお願いします」

そこに、スタッフの一人が来てそう言った。

「はい。じゃあコンサート開始まではまだ時間があるんで、ゆっくりしていったね。諸星さん、写真の方お願いします」

ユウはそう言って、他のメンバーたちと部屋を出ていった。

「……緊張した……」

ぼそつと、沙織が言った。そんな沙織に、鷹緒は静かに微笑む。
「ふうん？　じゃあ、ちよっとお茶でもするか」

鷹緒はそう言っ、沙織を連れて楽屋ロビーへと向かっていった。
自動販売機でジュースを買って、沙織に差し出す。そして椅子に座って、缶コーヒーを飲んだ。

「……今日はどんな仕事なの？」

横目で鷹緒を見ながら、沙織が尋ねる。

「コンサート写真を撮る仕事」

「そのままだね……」

「まあな。俺もそろそろスタンバイ入るから、客席行けよ。そろそろ開場時間だろう」

「うん。ありがと、鷹緒さん」

「ああ」

そう言っ、鷹緒は沙織を楽屋口まで送っていった。

「鷹緒さん、終わったら会えない？」

真っ直ぐに鷹緒を見つめて、沙織が尋ねた。

「え……まあ、会えないこともないけど」

「一人で帰るの、嫌なんだけど……」

「……わかったよ。送りやあいんだろ？」

面倒臭そうに、しかし優しい瞳で、鷹緒がそう言っ。沙織も自分の強引な言葉に、苦笑して頷く。

「ごめんなさい」

「まあ、遅くなるしな……じゃあ終わったら、車で待っててくれよ。そこに停めてあるから」

鷹緒はそう言っ、楽屋口のそばにある駐車場を指差し、車の鍵を沙織に渡した。

「うん！」

「じゃあ、後でな」

鷹緒は楽屋口へと戻っていき、沙織は客席へと向かっていった。

熱狂の渦の中、BBのコンサートが始まった。男性歌手グループのBBは、リーダーのユウを筆頭に、センジ、リュウ、アキラの四人組ユニットである。熱狂的なファンの中で、沙織も負けじと四人を応援した。

コンサート終了後。沙織は言われた通り、鷹緒の車へと乗り込んだ。まだ夢から醒めない様子の沙織は、会場で売っていたBBの写真集を見ながら微笑む。

「悪い。待たせたな」

しばらくして、鷹緒がドアを開けて言った。

「あ、うつん……」

「なんだ、まだ余韻に浸ってるのか？」

「だって……あ、もう仕事終わったの？」

「ああ。それより、これから打ち上げがあるらしいんだけど、おまえも来るか？」

39：キャンセル

「ああ。それより、これから打ち上げがあるらしいんだけど、おまえも来るか？」

「え！」

鷹緒の言葉に、沙織は目を丸くする。

「近くのスタジオスペースで、軽くやるだけみたいだけど」

「行く行く。もちろん行く！」

「オーケー。じゃあ……」

その時、鷹緒の携帯電話が鳴った。

「ああ、悪い……」

鷹緒は車に寄りかかって、電話に出た。

「はい。ああ……どうした？」

沙織はそんな鷹緒を見ながら、車から出た。楽屋口は孤立しているのでファンの子はいないが、スタッフたちが忙しく搬出をしている。

「……誰かいないのか？」

少し深刻と見られる鷹緒の電話に、沙織は写真集を眺めながら時間を潰す。

「わかった。じゃあ今から行くから……ここからなら、そんなに時間もかからないはずだから……ああ、わかった」

鷹緒は電話を切った。

「沙織、ごめん。俺、急用が入って……」

「えー」

不満気だが切実な目で、沙織が鷹緒を見つめる。鷹緒もいつになく困った様子だ。

「悪い……よければ一人で行けよ。話はしておくから」

「やだよ。鷹緒さんがいないなら……」

沙織が正直に言った。いくら好きな歌手と一緒に居られても、誰

も知らないところへ一人で入るのには勇気がある。

「……じゃあ、帰るか？」

「んー……」

残念そうに、沙織が俯く。

「あれ、まだ行ってなかったんですか？」

その時、ＢＢのメンバーであるアキラが声をかけた。

「ああ。悪いんだけど俺、急用が入って……」

すまなそうに、鷹緒が言う。

「ええ、そんな……」

「悪いけど……」

「どうしたの？」

そこへ残りのＢＢメンバーが全員出てきた。

「諸星さん。今日はありがとうございました」

「いい写真、たくさん撮ってくれました？」

リュウとセンジが言う。

「うん。それはバッチリ。でも悪いんだけど、急用入っちゃって、打ち上げには出られそうにないんだ……」

鷹緒の言葉に、一同が残念がった。

「そうですか。ゆっくり話がしたかったんですけど……」

「本当にごめんな……」

鷹緒の言葉に、ユウが沙織を見つめる。

「まあ、仕方ないですよ。後日また集まる機会もありますし……沙織ちゃんも一緒に帰るの？ 同じ用事？」

ユウが尋ねる。

「あ、いえ……」

「そうなんだ。もしよければ、沙織ちゃんだけでも来ない？ ファンの意見を間近で聞けるチャンスだし、もちろん帰りはタクシーなりで送り届けるよ」

「で、でも……」

ユウの言葉に、鷹緒が沙織を見つめた。

「行ってきたら?」

「……鷹緒さんは?」

「俺は急用が出来たんだって……願ってもないチャンスじゃん。楽しんでこいよ」

軽く鷹緒がそう言う。

「おい、もう行くよ」

そこへ声をかけたのは、BBのマネージャーである。

「はい。どうする? 沙織ちゃん。やっぱり諸星さんが一緒じゃないと、心細いかな」

ユウがそう言っていると、マネージャーが駆け寄ってきた。

「どうかしたの?」

「ああ、彼、僕らのマネージャー!。諸星さんが打ち上げに来られなくなっちゃったんだけど、沙織ちゃんは迷ってるんだ。未成年だし、マネージャーが責任持って面倒見るって約束してやってよ。そうじやなきや沙織ちゃんも来づらいし、諸星さんも不安でしょ」

ユウの言葉に、マネージャーが事態を察して頷く。

「そういうことなら僕は大丈夫ですよ。家まで送り届ければいいんですよね? じゃあ、せっかくなんで一緒に行きましょうよ。バスに乗ってください」

マネージャーの言葉に、沙織は鷹緒を見つめる。

「よかったな、行ってこいよ。終わったら電話しろよ」

沙織の背中を軽く叩き、鷹緒が言う。

「……本当に行つていいの?」

「ああ。でも、ハメは外すなよ」

「外さないよ。じゃあ……行くからね?」

まだ不安げながらも沙織がそう言った。鷹緒がいなくとも、行きたい気持ちが強まっている。

「ああ。楽しんでこいよ」

鷹緒がそう返事をする、沙織はBBのメンバーに囲まれ、移動用のマイクロバスへと乗り込んでいった。鷹緒はそれを見届けると、

車に乗って去っていった。

「諸星さん、急用って、仕事かなあ？」

バスの中で、アキラが言う。

「さあ。案外、彼女のわがままとかじゃないの？ あの人、モテるでしょ」

センジが、沙織に言った。沙織は緊張しながら口を開く。

「さ、さあ。彼女とかは聞いたことないですけど……」

「へえ。硬派っぽいもんね、あの人」

「でも、残念だなあ。ゆっくり話したかったのに」

ユウが独り言のように呟いた。

「俺も。あの人の腕、やっぱ並みじゃないよ。さっき軽く撮ったっていうリハの写真見せてもらったけど、超カッコイんだ！ もちろんプロ意識も高いし、初めて撮ってもらった時、すごく気持ちがよくてさあ」

「わかるわかる」

BBのメンバーは全員、鷹緒のカメラマンとしての腕に惚れていた。コンサートが終わったばかりだが疲れた様子もなく、BBのメンバーは気さくに話を盛り上げる。

「沙織ちゃん、そんなに緊張しなくて大丈夫だって。君も正式にモデルになったんでしょ？ じゃあ、同じような業界じゃない。俺らのファンってことは嬉しいけどさ」

笑いながら、リュウが沙織にそう言った。沙織は少し慣れてきた様子で、笑顔で応える。

「はい。ありがとうございます」

一行は、打ち上げ会場へと向かっていった。

車を飛ばして鷹緒が向かったのは、都内のあるマンションだった。鷹緒はその一室のインターホンを鳴らす。

「はい」

出てきたのは、小さな女の子であつた。
「パパ！」

40：電話の相手

「パパ！」

「よう。久しぶりだな」

鷹緒はいつになく優しい笑顔でその子を見つめ、頭をくしゃくしゃと撫でた。

「どうぞ」

そう言つて、女の子は鷹緒を部屋に上げた。

女の子の名前は、石川^{いしかわ}恵美^{えみ}。現在六歳の、鷹緒と理恵の娘であつた。

「それで、理恵は？」

「お部屋にいるの」

鷹緒は寢室のドアを開けた。ベッドには理恵が眠っている。

「ママね、帰ってからすごく辛そうにしてて、お熱があるの。お薬飲むから大丈夫って言ってたんだけど、お薬なくて、寝てれば治るって言つて……」

懸命に恵美が説明をする。恵美は、理恵のいつもと違う様子に戸惑い、鷹緒に電話をして呼び出したのであつた。

「……恵美。起こして薬飲ませるから、コップに水汲んできて」
「うん」

鷹緒の言葉に、恵美はキッチンへと向かっていく。鷹緒は寝ている理恵に、そつと声をかけた。

「理恵……」

その声に、理恵はゆっくりと目を覚ました。

「……鷹緒？」

「ああ……」

「なに？ どうしたの……」

驚いて起き上がりながら、理恵が尋ねる。

「恵美から電話が来た。おまえが倒れたから、どうしようってね」

「ああ……ごめんね、鷹緒……」

辛そうに俯き、理恵が言う。

「おまえ最近、無理し過ぎなんだよ」

「わかってる。本当、ごめん……」

「いいから。薬買ってきたから、飲めよ」

そこに、恵美が水を持ってやってきた。

「パパ、お水」

「サンキュー」

鷹緒が水を受け取る。

「ママ、起きたの？ 大丈夫？」

心配そうに、恵美が理恵を見つめる。

「うん、大丈夫。ごめんね、恵美。心配かけて……このところ、ろくに話も出来てないのに。ごめんね」

「平気。でも、早く治してね」

「うん。ごめんね……」

理恵は何度も謝ると、鷹緒に促されて薬を飲んだ。

「鷹緒。ごめんね……」

「もういいから、寝ろよ。今日はここにいて……恵美のことは心配するな」

「うん……」

そのまま理恵は、すうつと眠りについた。

そこで鷹緒と恵美は、ゆっくりと理恵の寝室を出ていった。

「パパ、ありがとう」

恵美が笑ってそう言った。そんな恵美の笑顔につられるように、鷹緒も優しく微笑む。

「いいよ。それより、おまえは御飯食べたのか？」

「うん。七時までは、ベビーシッターさんがいるの」

「そうか。じゃあ風呂は？」

「まだ。パパ、一緒に入ってくれる？」

「ああ、いいよ」

恵美は嬉しそうにそう言って、風呂場へと駆けていった。母子二人の生活で、恵美は着実に大人びている。それから鷹緒は恵美とともに風呂へ入り、久々の父子の一時に、鷹緒は過去の結婚生活を思い出していた。

数時間後。理恵のマンションで、恵美を寝かしつけた鷹緒が、リビングのソファに座っていた。結婚生活の様々なことが思い出される。

その時、携帯電話が鳴った。

「はい」

『沙織です！ 今、大丈夫ですか？』

電話に出た鷹緒に、興奮気味な沙織の声が聞こえる。

「ああ。その様子じゃ、楽しめたみたいだな」

『うん、もう夢みたい！ ありがとう、鷹緒さん』

沙織の様子に、鷹緒は思わず微笑んだ。

「いや。で、そっちは終わったの？」

『うん。今、家に帰ったところ。二次会まで行けなかったのが残念。それより、急用ってなんだったの？ BBのみなさんも、すごく残念がってたよ』

沙織の言葉に、鷹緒は少し考えて言った。

「うん……まあ仕事関係だよ。じゃあ、早く寝ろよ」

『うん、おやすみ。今日はありがとう』

沙織の言葉に、鷹緒は優しく微笑み、電話を切った。

「だいぶ楽しめたみたいだな……」

鷹緒はそう言うと、ソファに寝そべった。

41：久しぶりの家族

次の日。

「鷹緒……」

鷹緒が目を覚ますと、理恵が鷹緒を見つめていた。

「ん……なんだ。もう起きて平気なのか？」

眠い目を擦りながら、鷹緒が尋ねる。

「うん、ごめんね。こんなところで寝かせちゃって……布団、出せばよかったのに」

「んー、面倒臭くて……」

鷹緒はそう言っていると、理恵の額に手を当てた。

「まだ熱っぽいな。今日は病院行つて、事務所は休めよ」

「駄目よ。今日はシンコンの会議があるのよ」

立ち上がる鷹緒の背中に、理恵が言う。

「事務所内でだろ？ んなもん、おまえがいなくても進められる。

代わりに俺が出てもいいし……いいから今日は休めよ」

「……うん。ごめん」

いつも毅然としている理恵だが、いつになく弱い一面を見せていた。鷹緒がそんな理恵を見るのは、もちろん初めてではない。

「何か食う？」

冷蔵庫を覗く鷹緒に、理恵が微笑む。

「ふふ……鷹緒が何か作ってくれるの？」

「おまえ、馬鹿にしてんだろ。俺だって、おかゆくらいは作れるぞ」

「そう？ でも鷹緒、基本的に料理は駄目じゃない。それとも、離婚してから少しは上達したの？」

「まあな……」

結婚していた二人だからこそ、出来る会話であつた。

「私は平気。熱も大分下がってきたから、自分で作れるわ。それより、恵美を保育園のバスに乗せてくれる？」

「ああ、いいよ。ここまで来るんだっけ？」

「うん。マンションの下まで来るから」

「わかった」

そこに、恵美が起きてきた。

「ママ！ もういいの？」

理恵に駆け寄り、尋ねる。

「うん。もう大分いいみたい。でも、まだ少しだけ熱があるみたいだから、今日は病院行って、家で休むね」

恵美の頭を撫でながら、理恵がそう言った。そんな理恵に、恵美は笑顔で口を開く。

「本当？ じゃあママ、今日は家にいるんだ。早く治してね」

「ありがとう、恵美」

「パン食べるけど、ママは？」

「ママは後でおかゆ作るから。それより、パパにも食パン焼いてあげて」

「はい」

手馴れた様子で、恵美が食パンを焼く。着実に朝食メニューが乗ったテーブルの前に、恵美がニコニコと、鷹緒と理恵を見つめた。

「なんだよ、恵美。やけに機嫌がいいじゃん」

パンをかじりながら、鷹緒が言う。

「だって久しぶりなんだもん。パパとママが並んでるの。いつもパパは、恵美としか会わないでしょ？ パパとママが同じ仕事場になったって聞いても、恵美はまだ行ったことないし……」

恵美の言葉に、鷹緒と理恵は互いを見合わせて苦笑した。鷹緒と理恵は、最近までほとんど会っていなかったが、鷹緒と恵美は一ヶ月に一度、会うか会わないかの割合で、たまに会っていたのだった。三人で食事するのは、以前仕事でかち合った時になりゆきで食事して以来、実に二年ぶりである。

「久しぶりだったって、恵美と会うのも久しぶりだしな」

「うん。この間会ったのは、ラムラブの撮影の時だね」

鷹緒の言葉に、恵美が頷いて言う。

ラムラブとは、子供ファッション誌である。恵美は赤ん坊の頃から子供モデルをしていて、鷹緒とも時々、仕事でかち合う時もあるのだ。

会う度に大人になっている恵美に、鷹緒は思わず吹き出した。

「なんか、だんだんおまえに似てくるなあ」

笑いを堪え切れないまま、鷹緒が理恵にそう言った。まるで恵美は、理恵のミニチュア版のようによく似ていて、しっかりしている。

「まあね。女は強いだよ」

「そうだな……じゃあ、そろそろ支度しろよ、恵美。遅れるぞ」

「あ、待って、待って」

恵美はすぐに支度を整える。

「鷹緒……本当にありがとうね」

コーヒーを飲んでいる鷹緒に、改めて理恵がそう言った。

「もういいって。やめろよ……じゃあ、あいつをバスまで送ったら、そのまま俺も事務所行くから。ヒロには俺から言っておく。おまえもちゃんと、病院行けよ。送ろうか？」

いつになく優しい口調で、鷹緒が言う。

「うつん、平気……病院、すぐそこだし」

「そうか」

「パパ、支度出来たよ！ 可愛い？」

お気に入りの服を見せびらかせながら、恵美が言った。

「ああ、可愛いよ。じゃあ行くか」

鷹緒はそう言って、立ち上がる。

「はい。ママ、大人しく寝ててね」

「ありがとう。行つてらっしゃい」

「行つてきます！」

恵美は嬉しそうに、鷹緒と手を繋いで部屋を出ていった。久々の家族の一時であった。

恵美を保育園のバスに乗せると、そのまま鷹緒は事務所へと向かっていった。

「鷹緒さん！」

事務所に着くなり声をかけたのは、沙織である。まだ事務所も開いたばかりの時間なので、ほとんど人もいない。

「沙織？　なんだよ、こんな早くに……」

鷹緒が驚いて言う。

「日曜だもん。レッスン、レッスン」

「モデルのか。関心、関心」

「なんだ、鷹緒。珍しく早いな」

その時、奥から出てきた広樹が言った。

「まあな。ああ……理恵が熱出してるから、今日は会社、休ませるから……」

その言葉に、広樹と沙織は一瞬動きを止めた。

42：嫉妬

「理恵が熱出してゐるから、今日は会社、休ませるから……」

鷹緒のその言葉に、広樹が驚いて口を開く。

「え、理恵ちゃん？　なんだよ、おまえ……何かあったのか？」

「何もないよ。ただ昨日、恵美から電話があつて、ちょっとな……」

「ちょっとって、おまえ……」

「だから何もないっての。理恵が熱出して倒れたつて、恵美が泣いて電話してくるから、様子見に行つただけだよ」

鷹緒と広樹の会話に、沙織は耳を疑つた。鷹緒と理恵がプライベートな時間を過ごす姿が、容易に想像出来る。元夫婦だったというその関係がいつ戻つてもおかしくないほど、沙織から見て二人は至近距離にいるように見えた。

「そうか……理恵ちゃん、来られないのか。シンコンについて、いろいろ詰めようと思つてたんだけど。でも、大丈夫なのか？」

「まあ、一日寝てればなんとかなるだろ。病院にも行かつて言つてたし……ただの働き過ぎだよ、あいつは。シンコンの詰めなら、俺も出るよ。あいつの代わりに」

鷹緒はそう言つと冷蔵庫へと向かい、缶コーヒーを取り出した。

沙織はそんな鷹緒を見つめている。

そんな沙織の視線に気付いて、鷹緒は沙織に近付いた。

「悪かつたな。昨日の打ち上げ、ドタキャンして……でも、ずいぶん楽しめたみたいじゃん。どうだった？　BBの打ち上げは」

「あ、うん。すごく楽しかつたつて、今もヒロさんに自慢してたところ……鷹緒さん、理恵さんの看病に行つてたんだ……」

無理に笑いながら、沙織が言つた。心の中は悲しくて不安でたまらない。

「おはようございます。あれ、どうしたんですか？　鷹緒さん、早いですね」

その時、出勤してきた牧が言った。鷹緒は苦笑しながらソファに座り、缶コーヒーに口をつける。

「なんだ？ みんなして、俺が早く出勤したらおかしいのか？」

「あはは。おまえは遅刻魔だからな」

遠くから広樹が言う。

「俺はカメラマンなんだよ。仕事先ならともかく、なんで事務員でもないのに定時に出勤しなくちゃならないんだよ」

「あら。事務員じゃなくても、社員じゃないですか。カメラマンでも定時に出勤してもらわないと」

鷹緒の言葉に、牧が言った。

「嫌なこった」

「あ、鷹緒さん。これ見ました？」

突然、牧が思い出したように、子供雑誌を差し出した。

「なに？」

「今月号のラムラブですよ。ほら、鷹緒さんの娘さん、載ってますよ」

表紙には、一人で大きく、恵美の姿が映っている。

「ああ。ラムラブの専属モデルだからな、あいつは……」

鷹緒は一瞬優しい顔をして、雑誌を見つめた。そんな様子を見つけて、広樹が苦笑して口を開く。

「牧ちゃん、あんまり鷹緒をいじめないでやってよ。ここじゃ、その話はタブーでしょ」

「うふふ、いじめてなんかいいですよ。それにここにはまだ、事情を知ってる人しかいないじゃないですか。鷹緒さんだって、娘さんの最新情報は知っておきたいですよね？」

「この程度の情報なら、俺でも知ってるよ」

牧の言葉を受け、鷹緒は雑誌をテーブルに置くと、自分のデスクへと向かっていった。

「これが、鷹緒さんの娘……」

テーブルの上に置かれた雑誌を取って、沙織がそう言った。その

様子に、牧が口を開く。

「沙織ちゃん、知らなかったの？」

「え、いえ。子供がいることは知ってましたけど……」

「そう。可愛いわよね、本当にお人形さんって感じで。目元とか、理恵さんそっくりでしょ？ 赤ちゃんの頃からモデルやってて、今じゃその年でベテランの域だからね」

牧はそう言うと、受付へと座った。

沙織は雑誌をペラペラとめくりながら、遠くで支度をしている鷹緒を見つめる。沙織の知らない鷹緒がいる。当たり前のことでも、沙織は苦しくなっていた。

「あ……私、今日は帰ります」

突然、沙織が言った。近くにいた牧が、驚いて振り向く。

「え、どうしたの？ 具合でも悪いの？」

「いえ、ちよつと。急用を思い出して……それに、理恵さんも今日は休みみたいですし……」

「どうしたの？」

そこに割って入ってきたのは、支度を終えて出かけようとしている鷹緒だった。

43：スタジオへ

「どうしたの？」

「鷹緒さん。どこか行くの？」

「ああ、スタジオ行くけど……おまえも来る？」

「思わず尋ねた沙織に、鷹緒が言う。

「う、ううん」

「なんで？」

「だって……理恵さんもないし、ちよつと急用を思い出して……」
もちろん沙織に急用などなかったが、鷹緒と理恵のことを考える
と居たたまれない気持ちになり、この場から逃げたくなる。

そんな沙織の気持ちも知らず、鷹緒はいつも通り口を開く。

「急用ってなんだよ。モデルの勉強より大切なこと？」

沙織は俯いた。そんな沙織を前に、鷹緒は言葉を続ける。

「理恵がいなかったら何もしなきゃ、なんにもならないだろ。ほ
ら行くぞ」

「なによ。命令ばかり……」

ふて腐れるように、沙織は口を尖らす。悔しさと悲しさで、涙が
出そうになった。

そんな沙織の顔を、鷹緒が静かに微笑んで覗きこむ。

「やりたくないならいいけど……でも、やるからには頑張るんじ
やなかったの？」

目の前の鷹緒の顔を見つめ、沙織は素直に頷いた。

「……うん」

「じゃあ来いよ。ついでに、おまえの宣材写真も撮っちゃおう」

「え！　だ、駄目だよ。今日は服だって普段着だし、髪もメイクも
気合入れてないもん」

思わず、沙織がそう言った。

「なんだ、そりゃ。いいから来いよ」

「そんな……」

鷹緒は半ば無理矢理に、沙織を連れて事務所を出ていった。

二人はそのまま車で街へと出ていった。沙織は横目に鷹緒を見つめ、口を開く。

「……どこ行くの？ スタジオじゃないの？」

「うん。マンシヨンのスタジオで撮ろう」

運転をしながら、鷹緒がそう言った。

鷹緒の言っているマンシヨンのスタジオとは、鷹緒の自宅と連なった部屋のことである。その一室は会社が所有している部屋で、機材も揃い、スタジオとして撮影でよく使われているようだ。

しかし沙織がよく知るスタジオは、会社近くにある地下のスタジオで、マンシヨンのスタジオでの撮影というのは、あまりピンとこない。

「どうして？」

「地下スタジオは、引越しの荷物とか放り込んであって、今はあんまり機材も揃ってないんだ。マンシヨンのスタジオなら、衣装もメイク道具もあるから……」

鷹緒のその言葉で、沙織は初めて鷹緒の意図を理解した。地下スタジオより、衣装もメイクも充実しているスタジオの方に行こうと言うのだ。鷹緒のさりげない優しさが、沙織の気持ちを高ぶらせる。……どう？ トレーニングは」

今度は鷹緒が尋ねる。助手席の沙織は、鷹緒の横顔を見つめた。

「う、うん。なんとかやってる……この間はスポーツジムで一日トレーニングしたし、あとは事務所でポーズのとり方とか歩き方とかいろいろ……」

「へえ。ちゃんとやってんだ」

「まあね……でも学校帰りならいいけど、毎日事務所に行くのは辛いかな。ちよつと家から遠いから……夏休みになったら毎日だし、ちよつと行きにくくなるかも」

沙織が少し、苦笑して言った。

「ああ。そうかもな……」

鷹緒はそう言っと、マンションの駐車場へと入っていった。

鷹緒の自宅マンションに着くと、鷹緒は自宅の部屋の隣にある、スタジオとなる部屋のドアを開けた。そこも沙織が前に来た時よりは、事務所の引越し荷物で溢れている。

「どんな服がいい？」

衣裳部屋で、鷹緒が沙織に尋ねる。

「うん……可愛いやつがいいな」

「最近、流行のはこの辺かな。まあ、おまえの宣材写真なんだから、好きにしるよ。俺はリビングにいるから」

そう言って、鷹緒は沙織に背を向けた。

「そんな。センス疑われちゃったら嫌だよ」

すかさず沙織が引き止める。鷹緒は怪訝な顔で沙織を見つめた。

「おまえ、そんなにセンス悪いの？」

「自信があるほうじゃないけど……」

「ったく……」

鷹緒は衣装の中から数着を選ぶと、壁のフックにかけた。どれも最近の流行ファッションで、個性的でもある。

選ばれた服を見て、思わず沙織が呟く。

「可愛い……」

「ほら、ここまで絞ってやったんだから、あとは好きなの着ろよ」

「じゃあ……これ」

沙織はそう言っと、白を基調としたワンピースを選んだ。そんな沙織に、鷹緒が笑う。

「選ぶと思った」

「え、なんで？」

「だっておまえ、よく白い服着てるし」

「あ、膨張色だから、やめておいたほうがいいかな？」

「真っ白じゃないんだから平気だよ。おまえなら似合うだろうし…
…じゃあ、顔洗って着替えてこいよ」

鷹緒はそう言って衣裳部屋を出ていった。さりげない鷹緒の台詞が、ますます沙織の気持ちを高ぶらせる。沙織の鷹緒への思いは、
どんどん真剣になっているようだ。

44：二人きりの撮影

しばらくして、衣装に着替えた沙織は、鷹緒の待つリビングへと向かっていった。

すると、リビングはすでにちよつとした機材が揃えられ、きちんとしたスタジオのようになっていた。鷹緒は待ちくたびれたように、ベランダで外の写真を撮っていた。

「ごめんなさい。遅くなって……」

沙織が声をかける。

「ああ……本当だよ。着替えに何分かってんだ。そんなんじゃ、モデルにはなれないぞ」

「はい。ごめんなさい」

沙織は素直に謝った。初めて着る服と、抜かりない着こなしをするために、着替えに時間がかかっていたのは、自分でもわかっている。

「メイク出来る？」

「習ってる最中……」

「……じゃあ、そこ座って」

指示通りに、沙織は椅子に座る。鷹緒はその前に座ると、メイク道具を構えた。

「え、鷹緒さんがメイクするの？」

「なんだ、不満か？」

「う、うつん……」

至近距離の鷹緒に、沙織は胸の高鳴りを抑えるのに必死だった。鷹緒は構わず、器用にメイクを進めていく。

「……た、鷹緒さん、メイクも出来るんだね」

「んー、まあ仕事柄、こうして人にメイクすることもあるし、昔は自分もやってたわけだから……」

「うつん。モデル時代の鷹緒さん、前に写真で見せてもらった。すご

くカッコよかったよ」

「なに、今は？」

「今……も……」

沙織の言葉に、鷹緒は静かに微笑んだ。

「お世辞はいらないけどな」

鷹緒は苦笑して立ち上がると、カメラを持った。

「じゃあ、そこに立って」

「もう撮るの？」

「当たり前だろ。じっとして」

鷹緒はカメラのファインダーを覗く。鷹緒の目が急に真剣になったので、沙織は緊張で動けなくなる。

「沙織。もっとリラックスしろよ」

あまりに硬くなった沙織に、鷹緒が言った。

「そ、そんなこと言ってたって……」

「練習の成果が出てねえなあ……理恵は何を教えてんだよ」

鷹緒が理恵の名前を出したので、沙織は少し悲しくなった。鷹緒は構わず、そばにあった椅子を沙織の横に置く。

「じゃあ、それに座って」

言われるままに沙織が座る。鷹緒がシャッターを切り始めるものの、沙織の表情はまだ強張っている。

「……沙織。そんなんじゃ、いい写真なんて撮れるわけないだろ。書類で落とされるぞ」

「だって……」

困った様子の沙織に、鷹緒が軽く溜息をついた。そして静かに微笑み、口を開く。

「……じゃあ、想像してみて。この一枚の写真で、審査員からプロダクションまで、多くの人が見るんだ。よければ仕事もたくさん来るわけ。コンテストに限らずな」

話をしながら、鷹緒はシャッターを切っていく。

「ちなみに、俺に撮ってもらいたい芸能人はたくさんいるんだ。お

まえは恵まれてんだから、さつさと慣れてその気になった方が得だぞ？ 俺は見た人が一瞬にしておまえに惚れる写真を撮ってやりたいんだよ」

「……余計、緊張しちゃうよ……」

沙織の言葉に、鷹緒は苦笑する。

「……じゃあ、その写真がおまえの好きな人も見るって想像してみたら？ 彼氏とは別れたみたいだけど、その後どうなんだよ」

「え……」

「今は好きなやついないの？」

鷹緒のその言葉に、沙織は赤くなった。

（目の前にいるよ……！）

45：恋心

（目の前にいるよ……！）

心の中で、沙織が叫ぶ。そんな気持ちを知らない鷹緒は、変わらずからかうように笑う。

「なんだ、いるのか。若いつてのは、恋多きことだなあ……じゃあ、そいつのことでも考えろよ。そいつがこの写真見て、おまえのことが好きって思えるような写真を撮ってやるから」

その言葉に、沙織は鷹緒のことではいっぱいになった。そして目の前にいる鷹緒を見つめると、恥ずかしさで真っ赤になる。それに気付いた鷹緒は、カメラを下ろした。

「……そんなに好きなんだ？ 真っ赤になるほどからかうように、鷹緒が言う。」

「嫌だ。そんなことないもん……」

「お、やつといい顔」

鷹緒がシャッターを切る。

「やだ、恥ずかしい！」

「アホか。じつとしてろっつーの」

気持ちが解れた様子の沙織に、鷹緒はここぞとばかりにシャッターを切った。

しばらくして。鷹緒はカメラをテーブルに置いた。

「よし、これで終わり」

「ああ、恥ずかしくて、よく覚えてない……」

沙織の言葉に、鷹緒が笑う。

「アハハハ。まあ、その方がいいんじゃない？ 今日はどうする？ 送るか」

「本当？ うん、送ってほしい！」

「ハイハイ……」

「なに？　今日は優しいね」

「俺はいつでも優しいですよ。それに今日は比較的、暇なんでね……」

その時、鷹緒の携帯電話が鳴った。

「じゃあ、着替えてこいよ」

鷹緒はそう言つと、電話に出る。沙織は頷いて、衣裳部屋へと戻つていった。

少しして、着替えて沙織が戻ると、鷹緒はまだ電話をしていた。

「わかりました。じゃあ、また今度……ええ、失礼します」

やっと終わった電話に、鷹緒は少し難しい顔をしている。沙織は静かに鷹緒へと近付いた。

「……長かったね。電話」

「ああ。昔、世話になつた人の仕事を手伝つことになりそうだね。いろいろ話してた……もう一件電話あるから、ちょっと待ってて。こっちはすぐ終わるから」

「うん」

そう言つと、鷹緒は電話をかけ始める。

「ああ、俺。諸星ですけど……うん、どうだ具合は。病院は？」

鷹緒のその口調で、沙織はすぐに、電話の相手が理恵だと悟つた。「飯は食つたか？　ああ……じゃあ、今から沙織送っていかなきゃならないから、その後に寄るから。じゃあな」

電話を切つた鷹緒を、沙織はじつと見つめる。

「……なに？」

その熱い視線に、鷹緒は怪訝な顔をして、沙織を見つめ返した。

「……理恵さん？」

「ああ。ちよつと心配だから……あとで様子見に行ってくる」

「……別れた人なのに……」

沙織の言葉に、鷹緒は目を逸らしてジャケットを羽織る。

「仕事仲間だからな……あいつも俺と一緒に、限界までやる性質だ」

し。ほら、行くぞ」

「いい」

沙織はそう言うと、玄関へ向かった。

「え？　おい、沙織？」

「いい……早く理恵さんのところに行ってあげなよ」

「……おまえは？」

「……私はいい。病気じゃないし、電車もあるし。じゃあね！」

沙織はそう言うと、部屋を飛び出していった。鷹緒は沙織の行動に、首を傾げる。

「なんだ？　あいつ……」

沙織はそのまま、電車へと飛び乗った。

（馬鹿バカ！　鷹緒さんってば、全然わかってない！　私の気持ちも、なんにも……）

心の中でそう叫んだ時、沙織はハツとして顔を上げた。流れる景色を背に、窓に浮かんだ自分の姿が映る。

（……知るわけない。何も伝えてないのに……）

沙織は遠くを見つめ、鷹緒のことを考えた。

（微妙な関係だな……まったく知らないわけじゃない。家族じゃないし、友達でもない。でも……やっぱり私、鷹緒さんが好きみたい……）

沙織はそのまま、自宅へと帰っていった。

46：書類審査

数週間後。沙織が事務所に出向くと、理恵が駆け寄った。

「沙織ちゃん！」

「理恵さん……？」

理恵の勢いに、沙織が怪訝な顔をする。あれからレッスンは続けているものの、鷹緒には二、三度顔を見た程度で、会う機会がない。「沙織ちゃん、まずは第一関門突破よ。シンコンの書類審査に通ったの！」

理恵が嬉しそうにそう言った。そんな理恵に、沙織も笑顔で驚く。

「え、本当ですか！」

「うん。まあ大丈夫だとは思ってたけれど、書類審査でかなり落とされるから……でも、これでひと安心ね」

「よかった……あとはどんな審査があるんですか？」

「二次審査はスタジオで、面接と特技披露ってところね」

「特技？」

「大丈夫よ、難しいことはないから。一発芸でも歌でも踊りでも、なんでもオーケー。一応ボイストレーニングも受けてるんだし、一緒に考えようね」

不安げな様子の沙織を元気づけるかのように、優しい笑顔で理恵が言う。

「はい……」

「三次審査はカメラテスト。そこからシンコン指定の雑誌数社と企業への貼り出しで、一般投票が行われるわ。あとは最終テスト。会場で審査員を前にもう一度特技を披露したり、いくつか衣装を替えて決めるのよ」

「なんか、すごそう……」

圧倒されるように、沙織が言った。

「狭き門なのは確かだけれど、事務所のバックアップもあるわけだ

し、あなたはもう他社の読者モデルで少しは人気を得ているわけだし、三次まで通れば可能性がないわけじゃないわ。私もすっかりサポートするから、最後まで全力で頑張りましょうね」

そう言った理恵の笑顔が、凜々しく見える。沙織は複雑な心境ながらも、微笑んで頷いた。

「はい」

「ああ、それから、鷹緒さんに聞いたんだけど……」

理恵の言葉に、沙織は一瞬硬直し、理恵の次の言葉を待った。

「沙織ちゃん、自宅から事務所まで来るの、少し大変なんですよ？」

「あ、はい……大した距離ではないですけど、少しだけ」

沙織は素直に答えた。先日、鷹緒に言ったことが、理恵に伝わっていることが少し悲しく思う。

「ううん、私も前から思ってたのよ。夏休みに入ったら、毎日のように来てもらわなくちゃならないでしょう？　ただでさえハードスケジュールなのに、移動だけで疲れちゃうんじゃないかと心配してたの。それで昨日、社長とも話したんだけど、夏休みの間は沙織ちゃんが泊まれるように、近くに部屋を取ろうかって……」

理恵の言葉に、沙織は驚いた。

「それは嬉しいですけど、いいんですか？　わざわざそんな……」

「もちろんよ。移動で疲れさせるなんて可哀想なこと出来ないわ。

そのくらいは事務所でするから心配しないで。近々部屋を探すからお母様にも先に伝えておいてくれる？　正式に場所が決まったら、事務所からも伝えるから」

「わかりました。ありがとうございます」

会釈をしながら沙織が言った。すでに移動が辛く感じていたため、近くに泊まれるのは願ってもないことだ。

「じゃあ、今日はもういいから。私、今日は娘の撮影につき合わなくちゃなくて、もう行かなきゃならないんだ。今度は週末ね」

「はい。お疲れさまです」

沙織に見送られ、理恵が出ていった。それと入れ替わりに、鷹緒が帰ってくる。

「おう、沙織。来てたのか」

鷹緒が声をかける。ちゃんと話すのは、先日の宣材写真撮影の日以来だ。

「う、うん……今、理恵さん出ていったよ」

「ああ、会ったよ……牧！」

そう言いながら、鷹緒は忙しく牧の机へと向かっていく。

「おかえりなさい、鷹緒さん」

牧が言う。

「ああ。それより、俊二の棚ってどこだっけ？」

「真ん中の段の、右から五番目ですよ。名札貼ってあります。どうかしたんですか？」

「あいつ、俺のカメラ持って先に出たくせに、自分のカメラ忘れたんだって。つたく、抜けてんだから……」

そう言いながら、鷹緒は壁に備えつけられた、扉付きの棚を開ける。

「きつと鷹緒さんのカメラを忘れちゃいけないって思って、必死だったんですよ。今日、ラムラブの撮影でしたよね？」

「ああ」

「え？ 鷹緒さん、ラムラブのカメラマンもやってるの？」

話を聞いていた沙織が、突然、話に入ってきた。そんな沙織に、鷹緒が口を開く。

「いや、たまにお呼ばれするんだよ。あそこ、専属カメラマンはいないに等しいから」

「ふうん……」

月刊ラムラブとは子供服雑誌であり、鷹緒と理恵の娘・恵美が、専属モデルとして起用されている。今日は必然的に親子三人が揃うのだと、沙織は気付いていた。

「なに、おまえ暇なの？」

沙織に向かつて、鷹緒が尋ねる。

「え、暇っていうか……」

「暇なら一緒に来るか？」

「え！」

別れた親子三人が顔を合わせるはずだという場に、さらりと誘われたので、沙織は驚いていた。

47：家族が揃う日

「なんだよ、その驚きようは」

「だ、だって……」

「まあ、子供雑誌ではあるけど、おまえも撮影現場に慣れておいた方がいいぞ？」

鷹緒の言葉に、沙織は頷く。

「うん……でも、いいの？」

「邪魔しなきゃな。じゃあ、牧。沙織連れて行ってくるから」

「はい。行つてらっしゃい」

牧に見送られ、鷹緒と沙織は事務所を出ていった。

「今日は車じゃないの？」

駅へ向かう鷹緒についていきながら、沙織が尋ねる。

「ああ。今日は時間がないから、身動きとりやすい電車。それに、先に俊二が俺の車に乗って行ってる」

そう言いながら、鷹緒は切符を二枚買うつと、沙織にも渡して改札を通つていった。

「で、でも、本当に行つていいの？ 理恵さんと、さっき分かれたばっかりなんだよ……？」

撮影現場には娘だけでなく理恵がいるということを、鷹緒が気付いてないのだと思つて、思い切つて沙織が言った。鷹緒が親子で揃う場面を、事情を知る沙織に会わせたくはないはずだと思つた。

沙織の言葉に、鷹緒は苦笑する。

「ああ、だからか……わけのわからんやつだな。関係ないじゃん」

鷹緒はそう言いながら、やってきた電車に乗り込む。

「……鷹緒さんは、関係ないの？」

動き出した電車の中で、やつと言つた沙織の言葉に、鷹緒は眉をしかめた。

「なに言ってるの？」

「え……？」

「俺もあっちも、それぞれプロとしてやってんだ。どんな事情があるって、仕事は仕事だろ？ 関係ないじゃん」

珍しく鷹緒が強い口調で言ったので、沙織はそれ以上、何も言えなくなってしまうた。

「……ごめんなさい」

そんな沙織に、鷹緒は小さく溜息をついた。

「……まあ、やりにくいのは確かだけどな……」

そう言って苦笑する鷹緒に、沙織もやっとな小さく微笑んだ。

「諸星さん」

撮影スタジオに着いた二人は、早速声をかけられた。雑誌の編集者である。

「おはようございます。遅くなりました」

鷹緒が言う。

「いいえ。こちらこそ、ご都合が悪い中、無理にお呼び立てしてすみません。それに、おたくの腕の良いお弟子さんが頑張ってくれますよ」

撮影はすでに始まっていて、鷹緒の弟分である俊二がすでに撮影にかかっていた。今日はもともと鷹緒は遅れる予定だったので、前半は俊二ということも了承済みである。

「それはよかったです。キリのいいところで交代させてもらいます」

「ええ、お願いします。こちらのお嬢さんは？」

編集者が、沙織を見て尋ねた。すかさず鷹緒が口を開く。

「うちの新人の小澤沙織です。今度シンコンに出ることになりました。撮影現場に慣れさせたくて……邪魔はさせませんので、隅にでも置いてやってください」

「そうでしたか、シンコンの……なるほど可愛いお嬢さんですね。うちのティーン向けファッション誌にも、ぜひ出てもらいたいなあ」

「機会があれば、是非お願いします」

鷹緒が、肘でつついて沙織を促す。

「小澤沙織です。よろしくお願いします」

すかさずお辞儀をして、沙織がそう言った。編集者は優しく微笑んで頷く。

「こちらこそ、よろしく願います。私はラムラブ編集者の河野です。諸星さんとは、もう結構長いつき合いになりますね。しかし、諸星さんが新人さんに親身になっているとは知りませんでしたよ」

「僕は誰にでも親身になってますよ」

笑って鷹緒がそう言った。

「あははは。それは失礼しました。小澤さん、ゆっくりしてってくださいね」

そう言つと、河野という編集者は別のところへ去っていった。

「鷹緒さん」

その時、俊二が声をかけた。

「おう、一段落着いた？」

鷹緒が尋ねる。

「はい。十五分休憩です」

「ご苦労さん。これ、カメラ」

「すみません……」

「いいよ。でも、もう自分のカメラ、忘れんなよ。後半は二人で一気にいくからな」

「はい」

「諸星さん！」

そこへ、そう言つて女の子が駆け寄つて来た。鷹緒と理恵の娘・恵美である。

48：娘

「諸星さん！」

「ああ。可愛いじゃん」

衣装のままの恵美を見て、鷹緒がさりとそう言った。

「ありがとう。あのね……」

恵美はそう言っ、両手を鷹緒の耳にあてる。

「あのね、この間はママを助けに来てくれてありがとう」

小声で恵美が言った。そんな恵美に、鷹緒は微笑む。

「いいよ。困った時はお互いさまだからな。もうすぐ始まるから、休んでおけよ」

「うん！」

嬉しそうに、恵美は去っていった。

「相変わらずですね」

小さく苦笑して、俊二が鷹緒を見た。

「何が？」

「いえ……」

押し黙った俊二を尻目に、鷹緒は恵美を見て微笑む。

親子関係であろうとも、職場ではそれを表に出してはならない。それが昔からの互いのルールで、恵美も職場では、鷹緒を父として見てはいなかった。それは私情を挟んではいけない場所もあるが、鷹緒が結婚していたことも、娘がいることも、ほとんど知られていないからであった。

「諸星さん、お願いします」

「はい」

スタッフの言葉に、鷹緒が立ち上がる。撮影はそのまま続行された。

「沙織ちゃん」

しばらくして、壁際で撮影の様子を見つめる沙織に声をかけたの

は、理恵であつた。

「理恵さん」

「どうしたの？　こんなところに……」

少し驚いた様子で、理恵が尋ねる。

「いえ……鷹緒さんが、撮影現場に慣れておいた方がいいからって

……」

「そっか。ごめんね、私が連れて来てあげられなくて……」

「いいえ。理恵さんは、今までどうしてたんですか？」

「他のつき添いのお母さんたちと話してたの」

二人は、慣れた様子でポーズをとる恵美を見つめる。

「すごいですね。あんなに小さいのに、いろんなポーズ取って……」

沙織が静かに言った。

「慣れよ。赤ちゃんの頃からモデルやらせてたから。楽しいみたいだしね」

「でも、すごいですね。鷹緒さんにも、ちゃんとカメラマンとして接してて……」

「……昔に決めた、決まりごとだから。それより、どう？　撮影現場は」

「うーん。やっぱり、慣れるには時間がかかりそうです。やっぱりまだちょっと、恥ずかしいかな……」

素直に沙織がそう言った。理恵は優しく微笑む。

「そう？　でも、きつとすぐにわかるわよ。気持ち良いんだから」

「あはは。理恵さんは、前にモデルやってたんですよね。どうしてですか？」

「私はモデルとしては背が小さい方だけど、一般的には高くてね……それがコンプレックスだったんだけど、それを克服するには、バレーボールの選手がモデルかって思ってた。たまたま友達に勧められたのもあって、オーディション受けてこの世界に入ったの。最初は私も恥ずかしかったけど、だんだん人に見られるのが楽しくなったのよ。雑誌に出たら、反響もあつたし」

「へえ。そうなんですか」

「まあ、慣れることよ」

理恵がそう言うと同時に、撮影が終わった。

「ママ」

そこに、恵美が駆け寄ってくる。

「お疲れさま」

「ママもお疲れさま……このお姉ちゃんは？」

恵美が沙織を見て尋ねた。

「諸星さんの親戚の、小澤沙織ちゃんよ。今度のシンコンに出るの。理恵がそう説明をする。それを聞いて、恵美の顔が輝く。

「諸星さんの親戚なの？ シンコンに出るの？ すごい！」

「それより、恵美。ご挨拶は？」

理恵に促され、恵美がハツとしてお辞儀をした。

「石川恵美です。よろしくお願いします」

「小澤沙織です。こちらこそ、よろしくお願いします」

突然、改まって挨拶をした恵美に、沙織も挨拶をした。そして二人は、顔を見合わせて笑う。

「沙織。帰るぞ」

そこへ、鷹緒が声をかけた。恵美は鷹緒を見つめると、表情を変えて口を開く。

「……諸星さん、沙織ちゃんと一緒に帰るの？」

「ああ。俊二も一緒だけどな」

「……」

突然、恵美が押し黙った。

「……今度、新しくなった事務所来いよな」

恵美の寂しさを察して、鷹緒がそう言った。途端に、恵美の顔は元通り明るくなる。

「本当？ 行ってもいいの？」

「もちろん」

「うん、行く！」

嬉しそうに恵美が言ったので、一同も微笑んだ。

「じゃあ、私たちもそろそろ……お疲れさまでした」

理恵はそう言って、恵美を連れて去っていく。鷹緒たちも荷物を持って、俊二が乗ってきた鷹緒の車へと乗り込み、事務所へと戻っていった。

「お疲れ」

三人が事務所に戻ると、広樹が出迎えた。

「なんだ、ヒ口。一人か？」

鷹緒はそう聞きながら、返事も聞かずに奥へと入っていった。

「ああ、一人で残業だよ。沙織ちゃんも一緒だったんだ？」

「はい。撮影現場に慣れようと……」

沙織が答える。広樹は頷くと、話題を変えた。

「そつか。あと、夏休みの宿泊場所の件だけ……」

広樹がそんな話を持ち出す。沙織の家から事務所までは少し遠く、学校帰りに片手間で寄ることは苦にならなくても、毎日わざわざ出向くには少し遠いのである。

通えない距離ではないので、沙織はすまなそうに口を開く。

「はい……すみません」

「いやいや、いいんだよ。確かに少し遠いもんね。理恵ちゃんも気にしてたし。でも場所とか、どこか希望はあるのかな。ビジネスホテルとかでもいいの？」

「はい。近くで寝られればどこでも……」

その時、カメラをいじりながら話を聞いていた俊二が首を傾げた。

「ホテルなんかより、うちのスタジオでいいんじゃないですか？」

「スタジオって……あの半地下のか？ 殺風景で、女の子の暮らす場所じゃないだろう」

俊二の言葉に、広樹が言う。

「違いますよ。マンションの方。鷹緒さんの部屋と繋がってる……あそこ、今の時期はほとんど使ってないし、使うにしても控え室も

別にあるんですし、他の道具や撮影に支障はないんじゃないですか？　ねえ、鷹緒さん」

奥から出てきた鷹緒に、俊二が話を振った。

「なに？　何の話？」

話が掴めず、鷹緒が尋ねる。

「沙織ちゃんの宿泊場所ですよ。マンションのスタジオじゃ駄目ですか？」

「って、俺のマンション？」

49：宿泊場所

「つて、俺のマンション？」

鷹緒が煙草を咥えながら言った。

「そうだな、その線を忘れてた。あそこなら鷹緒もいるし、いざという時は頼りになるんじゃない？ 親戚同士なら心強いだろう」

広樹も賛同する。その話の内容に沙織も頷いた。鷹緒のすぐそばにいられるということが、とても嬉しい。

「いいんだよ。だいたい家から事務所まで遠いったって、四十分程度だろ？ そんなわがまま言ってるくらいなら、カプセルホテルかなんかでいいんじゃないの？」

面倒臭そうに、鷹緒が言う。

「馬鹿か。そんなところに女の子一人置いておけるわけないだろ。だいたい、最初はおまえが言い出した話だろうが……べつに部屋が繋がっていろいろが隣だろうが、大して会うこともないだろう。沙織ちゃんは、どう？」

広樹が沙織に尋ねる。

「わ、私は……それでいいです。それが……いいです」

素直に沙織がそう答えたことで、広樹は大きく頷いた。

「よし。じゃあ、これは事務所の決定だ。今やあそこは事務所の持ち物なんだからな」

「わかったよ。でもおまえ、俺の部屋に勝手に入るなよ」

鷹緒が沙織に言う。そんな鷹緒に、沙織は口を尖らせた。

「わかってるもん。覗いたりしませんよ……」

「じゃあ決まりだな。よかった。いろんな手間が省けたよ」

「主に金だろ？」

広樹の言葉に、鷹緒が言う。

「ハハハ。どこも厳しいご時世なのよ……」

「じゃあ、ちゃんと片付けろよ。控え室だって、最近ほとんど使

ってないんだし」

「ああ。今度ちゃんとやるよ」

「じゃあ帰るか。ヒ口、おまえは？」

鷹緒が広樹に尋ねる。広樹は苦笑して首を振った。

「僕は残業。仕事が溜まつちゃって……」

「いろんな仕事に、手出し過ぎなんだよ」

「ハハ。それを言うなよ」

「悪いけど、今日は先に帰るぞ」

「ああ、もちろん。手伝ってもらつような仕事じゃないし、こつちももう少しで終わるから大丈夫」

「じゃあ、お先に」

一同は広樹を残して、事務所を出ていった。

ある日。大きな荷物を持った沙織が、理恵とともに事務所所有のスタジオであるマンションへとやってきた。夏休みに入った沙織は、シンデレラコンテストのためのレッスンを本格的に受けることになっており、事務所近くにあるこの場所から、レッスンへと通うことになっている。

このマンションは、以前は鷹緒と理恵が住んでいた部屋であり、隣の部屋には未だ鷹緒が暮らしている。

「沙織ちゃん、ここは来たことあるんだっけ？」

理恵が尋ねる。

「あ、はい……この間も、ここで写真撮ってもらいました」

「ああ、宣材写真ね？　じゃあ少しは勝手がわかるわね。寝室は控え室を使つて。もしかしたら撮影に何度か使うかもしれないけど、控え室は使わないようにさせるから」

「ありがとうございます」

「昨日、掃除したばかりだから、まだ行き届いてないところもあるかもしれないけど……勝手に使つてね」

「はい」

そう返事をする、沙織はリビングに荷物を置いた。理恵は手際よくお茶を入れる。

「あ、あと注意事項。そのドアなんだけど……」

リビング部分のドアを指さして、理恵が言った。

「鷹緒さんの部屋と繋がってるんですよね……？」

沙織が、理恵の言葉を遮って言う。

「そう、知ってたのね」

「はい……」

「心配なら鍵をつけてもいいんだけど、彼に限って親戚で未成年のあなたをどうこうすることないと思うし、まあ安心して」

理恵の言葉に、沙織が笑う。そして沙織は、静かに口を開いた。前から気になっていたことだ。

「あの……ここって、理恵さんと鷹緒さんが暮らしてたんですよね？　どうして二部屋あるんですか？」

その沙織の問いかけに、理恵は苦笑に似た微笑みを浮かべる。

「うーん……私たちは結婚しても、やっぱりお互いにプライベートな部分をきちんと持ちたかったのよね。お互いに生活リズムも全然違うし、私も彼も頑固だから、一緒に住むとなったら合わないのよ」
そう言って笑った理恵につられて、沙織も微笑む。

「ここに住む前は、小さなマンションで一緒に暮らしてたんだけど、生活リズムが違うから、お互いに気を使って生きるわけじゃない？　疲れちゃってね……だから、仕事も軌道に乗ってきたところだったし、結婚資金とかもあったしで、少し無理して二部屋買ったの。そのドアはあんまり使わなかったけど……唯一、夫婦を繋いだドアかな」

「……じゃあこの部屋は、理恵さんにとって思い出の場所なんですね？」

話を聞いて、沙織が言った。理恵は少し考えると、静かに首を振る。

「うーん。そうね……でも、今は事務所所有のスタジオだし、私が生活していた頃とはまったく違うわよ。だから気にせず好きに使って。でも鷹緒の部屋には勝手に入っちゃ駄目よ。怒るから」

「わかってます」

二人は苦笑した。

「じゃあ、今日から約一ヶ月、ここで頑張つてね」

「はい」

理恵の言葉に、沙織が頷く。今日から一人暮らし同然で、ここに住むことになる。不安もあったが、今は楽しいほうが大きい。

「じゃあ、私はこれから事務所に戻って、いろいろやらなきゃならないから。何かあったら、すぐに電話してね」

「はい。ありがとうございました」

理恵の言葉に頷いて、沙織は玄関まで見送り、口を開く。

「あの……鷹緒さん、今日は出張なんですよね？」

「ええ。確か、京都へ撮りだつて聞いているわよ。今日は帰らないみたい」

「そうですか……」

「じゃあ行くね。戸締りはちゃんとすること。あとは明日八時に、事務所へお願いね」

理恵はそう言つて、部屋を出ていった。

「なんだ……鷹緒さん、今日は帰らないんだ……」

部屋に一人残された沙織は、リビングへと戻つていった。ふと、リビングにつけられたドアが気になる。いけないと思いつつも、沙織はドアに手をかけた。

50：新生活

ドアの向こうをそつと覗くと、薄暗い鷹緒の部屋が見える。あまり生活感が感じられず、もちろん人の気配もない。沙織はそつとドアを閉めた。

「鷹緒さんと理恵さんが、暮らしてた場所か……」

沙織は少し、この部屋が嫌になった。きっと楽しい結婚生活だっただろう。二人の姿が目に見えただ。

その夜。沙織は寝つけずに起き上がると、リビングへ水を飲みに行った。電気をつけるとソファに座り、水を一気に飲み干す。

まだこの部屋に慣れていないからか、まったく寝られる気配がない。沙織がぼうつとしていると、突然、リビングのドアが開いた。「キヤー！」

驚いた沙織が、途端に悲鳴を上げる。しかし目の前には、鷹緒の姿があった。

「うわ、おまえか」

そう言う鷹緒も、少し驚いた表情を見ている。

「た、鷹緒さん！ 超びっくりした。な、なんでここにいるの？」

京都に撮影じゃ……」

「ああ。早く終わったから、日帰りで帰ってきたんだ。おまえ、今日からここか……忘れてた」

「ひどい。もう夏休みだよ？ 夏休み入ったら私がここに住むってずっと前から言ってたじゃない。もう、本当びっくりした！」

沙織は驚きながらも、笑って答える。

「こつちもびっくりしたよ。ここの電気ついてるのがドアの隙間から漏れてたから、消し忘れかと思った。それより、初日から夜更かしてんじゃねえよ。さっさと寝ろ」

「わかってるよ。でも、眠れないんだもん……」

「なに、ホームシック？」

「違う！」

二人は互いを見つめて、思わず笑った。

「まあ、夏休みつてことは、シンコンまでもう少しつてことだな。ラストスパート、気合入れて頑張れよ」

「はい！」

真夜中ということと、鷹緒に会えたという喜びで、沙織はハイテンションで答えた。そんな沙織に、鷹緒も笑う。

「つたく、夜中だつていうのに元気なやつだな。俺ももう寝るぞ」

「えー」

「俺は疲れてんの。おまえも明日早いんだろ？ 早く寝ろよ」

「うん。鷹緒さんは、明日は何時？」

沙織が尋ねる。

「九時に事務所」

「九時か……ねえ、私は八時なの。一緒に行こうよ」

「一人で行け。それに俺は、おまえより一時間遅いんだよ」

「少しだけ早起きすればいいだけじゃない。いいでしょ？ 私はシンデレラ候補なんだから」

「まったく……わかった、いいよ。どうせ仕事、山積みだし」

駄目もとで言った沙織の言葉に、少し嫌そうに、しかし優しく鷹緒が言った。そんな鷹緒に、沙織の興奮は更に高まる。

「嘘、嬉しい！ 言ってみるものだね。じゃあ明日、朝ごはん作つてあげるよ。何時に起こせばいい？」

うるさいほど元気な沙織に、鷹緒は苦笑して返事をする。

「……七時半」

「オーケー。じゃあ、七時半に起こすね。おやすみなさい！」

俄然やる気の出た沙織は、そう言つて立ち上がった。鷹緒も、自分の部屋へ繋がるドアに手をかける。

「……おやすみ。早く寝ろよ」

「はい」

鷹緒はそのまま、部屋へと戻っていった。

沙織も部屋に戻ると、鷹緒と朝食や出勤を一緒に出来ることに、大きな幸せを感じていた。もっと近くにいたいと思う。

興奮した沙織は、そのまましばらく眠れぬ時を過ごした。

次の日。早くに目を覚ました沙織は、まだ静かな鷹緒の部屋のドアをそつと開いた。朝の光がカーテンの隙間から漏れているが、部屋の中は薄暗いままだ。

数えるほどしか入ったことのない鷹緒の部屋は、沙織にとって未知の世界であった。

改めて、部屋をぐるぐると見回してみる。生活感があまりないリビングだが、テーブルの上には無造作に、カメラや書類などが置かれている。

ふと時計を見ると、まだ七時前である。沙織は鷹緒の寝室には行かず、自分の部屋に戻って、キッチンへと向かった。そして朝食の準備をする。朝食が出来上がったのは、七時三十分ギリギリであった。

すると、リビングのドアが開いて鷹緒が入ってきた。

「わ！ 鷹緒さん……なんだ。起きちゃったの？」

「もう三十分……」

まだ眠そうにしながら、鷹緒は時計を指差して、約束の時間が過ぎたことを示す。

「わかってる。朝食作ってたなら、時間かかっちゃって……今、起こしに行こうと思ってたところ」

「あっそ……」

「おはよう」

51：新しい朝

「おはよう」

「んー……」

鷹緒はソファにくつたりと座った。その姿は、すぐにも眠ってしまいそうである。

「……眠い？」

「おかげさまで……」

沙織はそんな鷹緒の前に、朝食を並べた。パン食ではあるが、目玉焼きや数種類のおかずが乗っている。

「へえ。料理出来んの？」

感心したように、鷹緒が言った。そんな鷹緒に、沙織はむきになつて口を開く。

「見くびらないでよ。このくらいは、誰だつて出来ます」

「そうか。俺、料理は全然駄目だから、この程度でも感動する」

そう言つて微笑んだ鷹緒に、沙織は手を差し出した。

「さあ、めしあがれ」

「いただきます」

二人は、朝食を食べ始めた。

それから少しして、支度を終えた二人は、車で事務所へと向かつていった。

「わあ早い。やっぱり家から通うのとは違うよ……」

あつという間に着いたので、沙織がそう言つた矢先、鷹緒は車走路肩につけて口を開く。

「沙織。ここで降りて」

「え、鷹緒さんは？」

「早く起きたから、今日の仕事始める。スタジオにいるって、ヒロカ牧に伝えて」

「わかった」

「あと、今日は仕事早く終わると思うから、なんなら事務所で待ってるよ。どうせ帰るところ一緒なんだし」

鷹緒の言葉に、沙織は大きく頷いた。

「うん、待ってる！」

「ああ。じゃあな」

沙織を残して、鷹緒はそのまま去っていった。

夕方。

「鷹緒さん、遅いわね」

定時を過ぎて人がいなくなった事務所で、鷹緒の帰りを待つ沙織に、唯一、残業をしている牧が言った。

「はい……今日は早く終わるからって、自分から言っただのに」

そう言った沙織は、ソファに座ってつまらなそうにしている。そんな沙織に、牧は苦笑する。

「まあ、もうすぐ帰ってくるわよ。でも今日は、社長も理恵さんもないし静かね。二人揃って打ち合わせだっけね……」

「そうですね。理恵さんには、今日もしごかれましたけど……」

「そう。トレーニングはどう？」

「きついですよ、マッチョになりそう。ウォーキングだけでも、筋肉痛になっちゃいます」

沙織の言葉に、牧が吹き出した。

「そっか。もうすぐだもんね、シンコン。今週、二次審査でしょう？ 通るといいわね。三次までいけば、鷹緒さんもあるわけだし。」

もうトロフィーも、もらったも同然ね」

「あはは……頑張ります」

沙織は鷹緒の名を聞いただけで、力が湧き上がるかのように笑って答えた。

「すみません」

その時、入口から男性が声をかけてきた。牧にも沙織にも、面識

はない。

「はい。どちらさまでしょう？」

突然の客に、牧は慌てて立ち上がり、そう声をかけた。そんな牧に、男性は事務所内を見渡し、口を開く。

「諸星鷹緒さん……おいでになりますか？」

「申し訳ございません。諸星は、只今席を外しております……失礼ですが、どちらさまでございますか？」

牧の言葉を受けて、男性は優しい笑顔で会釈をした。

「内山と申します。諸星さんとは、古くからの仕事仲間で……何時頃帰られるか、わかりますか？」

「もうすぐ帰ると思いますか……」

「そうですね。海外から帰ったばかりなのですが、近くまで来たものですから、ぜひ久しぶりに会いたいと思ひまして……」

内山と名乗った男は、大きなスーツケースを持ったまま、牧に笑いかけている。

「そうでしたか。事務所はもう終わりなので、大したお構いも出来ませんが、そういうことでしたらどうぞ中で待つてらしてください。古くからの知り合いでしたら、きっと諸星も喜びますよ」

牧が応接スペースに案内しながら言う。沙織はというと、近くのデスクの前に座り、そのやりとりを見つめていた。

その時、社内の電話が鳴ったので、牧が電話に出る。沙織は手持ち無沙汰で、給湯室へと向かっていった。そして牧の代わりにお茶を入れる。

そこに、沙織の携帯電話が鳴った。見ると、メールである。

『ごめん。仕事が長引いた。もうすぐ事務所に着きます』

鷹緒からである。沙織は微笑むと、電話を終えた牧が顔を出した。

「あ、ごめんね、沙織ちゃん」

「いえ。私、やりますよ。牧さん、他にも仕事残ってるんでしょう？」

お茶を入れながら、沙織が言った。牧は少しすまなそうにして頷

く。

「ありがとう。電話、社長からだったわ。今から帰るからって、その一言だけ」

「そうですか」

「じゃあ私、仕事の続きやるから、あとお願いね。でも事務所は閉めてあるんだし、鷹緒さんのお知り合いみたいだから、お相手はしなくていいからね。沙織ちゃんは、事務員じゃないんだから」

「はい」

牧の言葉に頷くと、沙織はお茶を持って、応接スペースへ向かった。

そこでは、内山が立って外を眺めている。

「あの……お茶、どうぞ」

沙織がそう言つと、内山は笑ってソファに座った。その笑顔は、とても可愛い。

「ありがとう。君はずいぶん若く見えるけど、事務員さん？」

内山の質問に、沙織は首を振る。

「いえ。私は……」

「ああ、モデルさん」

その言葉に、沙織は驚いた。

「え、どうして……」

「その立ち方が、モデルっぽい」

意識していなかったので、沙織は驚いて笑う。

「本当ですか？」

「本当だよ。僕、前にモデルやってたから」

「モデルさんだったんですか？」

「うん。今は記者として、主にパリで活動中」

「パリで？　じゃあ、パリコレとかも？」

「何度か出たこともあるけど、今は見る側だね」

その話を聞いて、沙織は頷く。

モデルだったという内山は、かなりの長身で、身のこなしも格好

が良い。

「おかえりなさい」

その時、牧の声とともに帰ってきたのは、鷹緒であった。鷹緒は内山を見て、顔色を変える。

「……おまえ……」

鷹緒は内山を見つめたまま、やっとそれだけを口にした。

「先輩。お久しぶりです」

内山がそう言ったその瞬間、鷹緒の顔が一気に陰しくなり、内山に駆け寄り、殴りつけた。

52：異質な訪問者

鷹緒が内山を殴りつけた。

沙織と牧はわけがわからず、その光景を見つめている。鷹緒は、内山の襟元を掴んで、離そうとしない。

「た、鷹緒さん……」

やっこのことで、沙織が止めに入ろうと声をかける。しかし、それを遮ったのは、内山の笑い声だった。

「ハッハッハッハ。やっぱり！ 先輩、僕が帰国したと同時に、真っ先に僕を殴ると思ってましたよ」

内山が言った。鷹緒はまだ怒りが収まらないといった様子で、内山の襟を一層強く掴む。

「豪。てめえ……」

「離してください。先輩が殴りにくる前に、自分から殴られに来てあげたんですから」

不敵な笑みを浮かべながら言う内山に、鷹緒はもう一発、頬を殴る。その瞬間、内山は床へと倒れこんだ。同時に鷹緒の眼鏡が落ち、フレームが折れるように曲がる。

「豪……！」

そう言つて、凍りつく社内の時を戻したのは、帰ってきたばかりの理恵である。

一同は理恵を見つめた。その後ろには広樹もいて、目を大きく見開きながら、静かに口を開いた。

「内山……豪……」

「ヒロさん。理恵……噂通り、勢揃いで楽しそうですね、この事務所は」

内山がそう言ったところで、もう一度、鷹緒が内山の襟元を掴んだ。

「やめて、鷹緒！」

そんな鷹緒を止めたのは、理恵だった。それと同時に、広樹も止めるように二人の間に立つ。

「……」

目の前の広樹から目を逸らし、鷹緒は静かに内山から離れた。

「……どういうことだ？ 急に日本へ帰ってきて……それに噂通りって、何のことなんだ？」

内山を見つめて、冷静に広樹が尋ねる。沙織と牧は、その場から一歩も動くことが出来ず、その様子を見つめていた。

「別れた夫婦が同じ事務所にいるんだ。そんな面白い情報、僕にだってすぐ届きますよ」

「じゃあ、だから戻ってきたのか？」

「まさか。僕だって暇じゃないんです。ただ、理恵に会いに来たんですよ」

内山のその言葉に、理恵の表情が変わった。鷹緒は眼鏡を拾うと、ソファへと座り、そばに立っている沙織を見つめる。

「……帰るか」

鷹緒はボソッとそう言うと、立ち上がった。

「待て、鷹緒。打ち合わせを……」

「後にしてくれ」

広樹の言葉を、いつになく強い口調で鷹緒が拒む。

「いえ、僕が出ていきます。今日は挨拶に寄っただけですから。お騒がせしました。では、また……」

内山はそう言うと、静かに事務所を後にした。

「待って！」

その後を、理恵が追っていく。二人の姿は、すぐに見えなくなった。

静けさだけが残る事務所を、広樹の携帯電話の音が打ち消した。再び時間を取り戻した空間で、鷹緒は前髪をかき上げながらソファに座り、外を見つめる。手にはひしゃげたフレームの眼鏡が握られ、沙織の目に、初めて鷹緒の素顔が映った。

同時に、鷹緒の携帯電話にも着信が入る。鷹緒は電話に出ると、淡々と会話を始めた。

そこに電話を終えた広樹がやってきて、鷹緒の前のソファに座る。「ごめんね……なんか、おつそろしいところに出食わせちゃったね」すまなそうにしながら、沙織と牧に広樹が言った。牧は首を振る。

「いえ、ごめんなさい。こんなことになると思わなくて……」

「いいんだよ。強盗とかじゃなくてよかった」

「はい……でも、誰なんですか？ あの人、鷹緒さんの知り合いだった……」

牧が尋ねる。その質問に、広樹は小さく微笑んだ。

「そつか。牧ちゃんは知らなかったね……まあ鷹緒や理恵ちゃんのモデル時代の仲間みたいなものだよ。でも、あいつは昔からいろいろ事件を起こしててね……みんなそれぞれ確執があるんだ。気にしないでいいよ。今後あいつが来ても、客として扱ってやって。べつに危険なやつではないから」

「はい……」

「はあ……まったく、ハタ迷惑なやつ……」

広樹が珍しく溜息をついて言った。そこに、電話を終えた鷹緒が、目の前の広樹を見つめる。

そんな鷹緒に、広樹が口を開く。

「……おまえも、事務所で手を出すなよ」

「……仕方ないだろ」

苛立った様子的のまま、鷹緒が答えた。

「まあ、仕方ないけどね……」

広樹の言葉を聞きながら、鷹緒は煙草を咥える。

「……沙織。もうちょっと待ってて。すぐ終わるから」

「う、うん……」

鷹緒の言葉に、沙織は頷いた。

今度は広樹が牧に声をかける。

「ああ、牧ちゃん。遅くまでごめんね……もう大丈夫だから、帰っ

ていいよ」

「はい……じゃあ、失礼します」

突然の修羅場に、牧もまだショックを隠しきれない様子で、静かに事務所を後にした。

「……じゃあ、軽くやつちやおうか」

頭を切り替えるように、ハキハキと広樹が言った。鷹緒は無言でノートを開く。

そのまま軽い打ち合わせが、二人の間で行われた。沙織は話に入れないので、ベランダから外を眺める。

あんな鷹緒は見たことがない。怖いと同時に、何があったのかと考えずにはいらなかった。

53：嵐のあと

「沙織」

しばらくして、鷹緒がベランダにいる沙織に声をかけた。

「悪いな。ずいぶん遅くなった……」

「ううん」

「飯、食いに行こう。ヒロがおごってくれるってさ」

「うん……」

沙織は、鷹緒と広樹とともに、近くのレストランへと向かっていった。

「ビッグ・キャラメル・イチゴ&チョコレート・フルーツパフェで
ございます」

ウェイトレスが、鷹緒に大きなパフェを差し出しながら言う。

「おまえ……その激甘党、なんとかしろよ」

呆れ顔で広樹が言った。鷹緒は食事もそこそこに、大きなパフェを頼んだようだ。

「いいだろ。好きなんだから……甘いもん食べるのが、俺のストレス
解消法なの」

「まったく……」

そこで広樹は、元気のない沙織に気がついた。

「どうしたの？ 沙織ちゃん」

「あ、いえ……」

沙織は小さく首を振って、苦笑する。広樹も静かに口を開く。

「さっきの、びっくりしちゃったよね……ごめんね」

「いえ、べつに。広樹さんが悪いわけじゃないし……」

「まあ、ね……」

沙織と広樹は、黙々とパフェを食べている鷹緒を見た。二人の視線に気付き、鷹緒は顔を上げる。

「……なんだよ？」

「いや……」

広樹の反応に、沙織はこのことには触れてはいけないのだと思った。

「……沙織、まだ飯食ってんのかよ。俺、もうすぐデザートも食い終わるぞ」

小さく苦笑しながら、鷹緒が言う。その顔は、いつもの鷹緒である。

しばらくして食事を終えた鷹緒は、広樹と分かれ、沙織とともにマンションへと戻っていった。

「今日は待たせて悪かったな。明日は俺、早いから送れないけど、頑張れよ。二次審査、今週だろ？」

部屋のドアの前で、鷹緒が沙織にそう言う。

「うん……」

「じゃあな」

まだ元氣のない沙織を尻目に、鷹緒は自分の部屋へと入っていった。

「はあ……」

沙織は溜息をつく、自分の部屋へと入る。鷹緒と内山、そして理恵や広樹に何があったのかわからないが、知りたいと思いつつ聞くことすら出来ない空気に、沙織は苛立ちすら覚えていた。

鷹緒は、帰るとすぐにシャワーを浴び、ベッドに寝そべった。ついさっき内山を殴ったことが、頭から離れない。そしてそれを見ていた理恵や広樹の顔も、エンドレスに思い出される。

「……豪が帰ってきた……」

ぼそつとそう言ったその時、家の電話が鳴ったので、鷹緒は受話器に手を伸ばす。

「はい」

『……』

相手は何も言わない。鷹緒は首を傾げる。

「……もしもし？」

「……あ……」

女性の声が聞こえた。鷹緒はピンときた。

「理恵か？」

鷹緒が言った。すると、力のない声が聞こえてくる。

「……う……ん」

電話の相手は理恵であった。

「……どうした？」

少し苛立った様子で、しかし優しく、鷹緒が尋ねる。しかし鷹緒には、理恵がどうして電話をかけてきたのか、力のない声なのかかわかっていた。

「豪と何があった？」

何も言わない理恵に、鷹緒が具体的に尋ねた。そんな鷹緒に、理恵が静かに口を開く。

「……ごめん。なんでもない」

「馬鹿か。何かあるなら言えよ……」

「ごめん、どうかしてた。鷹緒に言うことじゃなかった……ごめん
理恵の言葉に、鷹緒は静かに息を吐く。

「……俺だって、部外者じゃないぞ」

「うん。でも……」

「……もう、家か？」

「うん……」

「じゃあ、今からそっちに行く」

「……でも」

「おまえ、今、一人じゃないほうがいいよ」

いつになく優しい鷹緒の言葉に、理恵が涙ぐむ。

「ごめん、鷹緒。ごめん……」

「もういいっての。支度したら、すぐ行くから……」

「うん……」

鷹緒は電話を切ると、すぐに支度を始めた。

沙織はリビングで、テレビを見ながらお茶を飲んでいた。しかし、ふとしたきっかけで、やはり内山が鷹緒たちとどういう関係なのかが気になる。

沙織は意を決して、鷹緒に直接聞くことにして立ち上がった。そしてそのまま、リビングから繋がった鷹緒の部屋がどうなっているのか、ドアに耳を当ててみる。慌てて人が歩いているような、足音が聞こえた。

沙織は思わずドアを開ける。

「鷹緒さん！」

54：動揺

「鷹緒さん！」

その声に反応して、鷹緒が振り向く。鷹緒はリビングのテーブルに置いた財布などを、上着のポケットに詰め込んでいた。

「なんだ……勝手に入るなって言っただろ」

「ごめんなさい。ちよっと、聞きたいことあって……」

鷹緒の言葉に、沙織が恐る恐る言う。

「なに？」

「あ……出かけるの？」

直球で聞くのが怖くて、まずは目先の疑問を尋ねた。

「ああ、ちよっと……」

沙織の質問に、鷹緒は言葉を濁す。

「ごめん。じゃあ、やっぱり今度でいい……」

「そう……じゃあな。早く寝ろよ」

鷹緒はそう言うのと、部屋を出ていった。

（あんな鷹緒さん、見たことないから気になるのに、なんか聞ける雰囲気じゃないんだよね……帰ってから、今度こそ聞こう……）

残された沙織は気になっていることを聞けず、肩を落として自分の部屋へと戻っていった。

とあるマンションの一室。鷹緒がインターホンを鳴らすと、理恵が出てくる。

「ごめんね……」

一言目に、理恵がそう言った。それを受け、鷹緒は静かに首を振る。

「いいよ……恵美は？」

「うん。お風呂出てから、すぐに寝ちゃったわ」

「そう……」

「上がって……」

「ああ……」

二人は部屋へと入っていった。リビングのテーブルの上には、ビールの空缶が数本ある。

鷹緒はソファに座ると、理恵を見つめた。

「おまえ、飲み過ぎ……」

「うん。なんか、勢いで……」

「やめろよ。酒に走るのは」

「うん……」

鷹緒は、理恵が飲んでいたと見られるビールに口をつける。理恵は静かに口を開いた。

「どうして帰ってきたんだろう。豪……」

「……」

鷹緒は押し黙った。

「……何があつた？」

長い沈黙の後、鷹緒がやっとそれだけを口にした。理恵はうつろな目をして俯く。

「追いかけて……言っただわ。どうして帰ってきたのって……」

理恵の回想――。

「豪、待って！」

事務所の外でエレベーターを待つ内山を、理恵が引き止めた。内山は変わらぬ笑顔で、理恵を見つめる。

「久しぶり」

「なんで……なんで？ どうして急に帰ってくるのよ！」

理恵が言っただ。その時、エレベーターが開いたので、内山は乗り込んだ。

「連絡するよ。今度、ご飯でも食べに行こう」

変わらぬ口調でそう言っただ内山に、理恵もエレベーターに乗り込

む。

「嫌よ、勝手に決めないで。どういっつもり？ 鷹緒が怒るのも無理ないわ」

「あはは……相変わらず、鷹緒先輩のパンチは効くなあ」

「馬鹿！」

嫌悪感を露にして理恵が言う。そんな理恵に、内山が微笑んだ。

「どう？ 元気そうだけど……先輩とはうまくやってるの？ ヒロさんもいるなんて、楽しそうだね」

「あんたに関係ないわ。だいたい、どうして知ってるのよ。私がヒロさんと組んだこと……」

「知ってるさ。僕にだって、日本にも友人はいるよ。それより、どこまでついてくるつもり？」

とつくにエレベーターを降りた二人は、夜の街を歩いていた。

理恵は答えずに、叫ぶようにして言葉を続ける。

「なんなのよ……急にいなくなって、急に現れて、挑発して殴られて……何がしたいのよ！」

「……君のもとに戻ってきたただだよ」

内山が言った。理恵の目が、一層大きく見開かれる。

「……馬鹿言わないで……」

理恵が言った。しかし、動揺しているのは明らかだ。そんな理恵に、内山も続ける。

「馬鹿はどっち？ 僕はずっと君が好きだった。そんな僕が、君が鷹緒先輩と同じ事務所にいるって聞いて、放っておけると思った？ もう、夫婦じゃないのに」

「……自惚れないで。あんたが戻ってくる余地はないわ」
その言葉に、内山は一瞬、悲しそうな顔を見せる。

「そうかな……」

内山はそう言うと、理恵の唇にキスをした。

一瞬、理恵の動きが止まる。しかし次の瞬間、内山の頬を叩いた。
「もう……二度と私の目の前に現れないで！」

理恵は涙を流しながらそう言つと、夜の街へと消えていった。

55：後押し

理恵の話を聞きながら、鷹緒は数本の煙草を吸っていた。しかし、どれも火をつけるものの、吸う気配はなく、すべて灰となってピールの空缶へと落ちていく。

「……」

沈黙になった中、鷹緒はソファにしっかりと寄りかかり、本棚の上に置かれたいくつかの写真を見つめた。ほとんどが恵美の写真だが、中には鷹緒と一緒にのものもある。その中の一つに、広樹や内山も写っている集合写真のような写真もある。

「……」

「私、豪がわからない。嘘ばかりついて、いつも混乱する……」

何も言わない鷹緒に、理恵がそう言った。鷹緒は静かに、最後の煙草をもみ消す。

「……そうだな。あいつは馬鹿で嘘つきで、生きる価値すらない人間だ」

鷹緒はそう言って、理恵を見つめた。理恵はその言葉に、深く傷ついた顔をしている。鷹緒はそんな理恵を見て、静かに微笑んだ。

「あいつ、確かに嘘つきだけど、おまえに言ったことは本当なんじゃないの？」

「え……？」

「それに、俺があいつの悪口言って、おまえが不快な思いをした……おまえの本心はそれだろ？ おまえもたまには、素直になれよ……」

それを聞いて、理恵は静かに涙を零す。

「鷹緒……？」

「あいつ、帰国したその足で、誰を訪ねてきたと思う？ おまえでもヒ口でもなく、俺を訪ねてきたんだぞ？」

「え？ うん……」

その言葉の意味がわからず、理恵は生返事をする。

「俺に殴られにきたんだぞ？　その意味が、おまえにはわかんないの？」

鷹緒の言葉に、理恵はハツとした。

「……豪が私と寄りを戻したいって、そう言っているのは本当のことだっていうの？　あいつは計算高い男なのよ。私がそう信じるって、計算して鷹緒に殴られたかもしれないじゃない！」

理恵が言った。興奮して、涙が止め処なく溢れている。

そんな理恵に対して、鷹緒は俯いたまま静かに口を開く。

「そんなこと言ったら可哀想だよ、あいつ……少なくとも昔、俺と張り合った男だぞ？」

二人の間に沈黙が走る。内山豪は、以前鷹緒と張り合って、理恵を取り合いました仲であった。

「じゃあ、どうしたらいいの？　私……このままじゃ、なんにも出来ない……」

子供のように泣きじゃくる理恵を、鷹緒はそっと抱きしめた。鷹緒の腕の中で、理恵は暖かさを感じる。

「落ち着く。鷹緒といると……」

何も言わず、鷹緒は理恵を抱きしめる。そして静かに口を開いた。「……今まで一人でよく頑張ったよ、おまえは。だから……もういいんじゃないのか？　自分の気持ちに正直になれよ。そうじゃなきゃ、俺だって……」

「うん……うん……」

鷹緒に抱きつきながら、理恵が返事をする。泣きじゃくったままの様子は、いつもの毅然としている理恵ではない。

少しして、鷹緒は理恵を離すと、携帯電話を取り出して電話をかけ始めた。そして繋がったことを確認すると、何も言わずに理恵に差し出す。理恵はそのまま、受話器に耳を当てた。

『もしもし？』

電話の向こうからは、内山の声が聞こえる。

「……豪？」

内山の声を聞いて、理恵はますます涙を流した。

『理恵？』

「……うん」

そんな理恵を残して、鷹緒は携帯電話を渡したまま、理恵のマンションを後にした。

マンションでは、沙織が鷹緒の帰りを待っていた。鷹緒と理恵、そして内山がどういう関係なのか、考えれば考えるほど、気になつて仕方がない。なにより、鷹緒のことをもっと知りたいと思う。

鷹緒を待つ沙織は、何度も鷹緒の部屋に繋がるドアを開けてみた。勝手に入るなと言われているが、すぐにでも会いたいと願う自分がいる。

しかしその日、何時になつても、鷹緒が帰ってくることはなかった。

次の日。眠い目で沙織が事務所へ向かうと、広樹が声をかけた。

「おはよう、沙織ちゃん。なんだか眠そうだね」

「あ、おはようございます、ヒロさん。いえ、ちょっと……大丈夫です」

沙織が苦笑して言う。

「鷹緒は一緒じゃないの？」

「はい……昨日はどこかへ出かけたみたいで、帰ってきてない感じでしたし……」

「そうなの？ 今日とは定時に来るって言ってたんだけど、来ないな……理恵ちゃんも。ああ昨日、何かあったかな……」

「え？」

意味深な広樹の言葉に、沙織が聞き返す。

「あ、あの。昨日の内山って人……」

沙織がそう言いかけた時、広樹は電話を取っていた。

「え、なに？」

「いえ……なんでもないです」

「そう、ごめんね。ちよつと電話」

広樹は電話をかけ始める。

「あ、もしもし……あれ、理恵ちゃん？　僕、理恵ちゃんにかけちゃったのか……え？　あ、はい……」

広樹は電話を切った。すると、すぐに理恵が入ってきた。

「ごめんね、ヒロさん。ちよつと遅刻しちゃった……」

寝不足気味で、少し目を腫らした理恵が言う。

「いいよ……鷹緒は？」

「うん。一緒じゃないけど……」

その時、鷹緒がやってきた。広樹が声をかける。

「おう、鷹緒。おはよう」

「ああ、悪い。定時に来るって言ったのに」

「いいよ。ファックス、いくつか届いてるよ。いつものように机の上」

「うん」

鷹緒は自分の机へと向かっていった。そこに、理恵が後をついていく。その光景を、沙織はじっと見つめていた。

56：気になる関係

「諸星さん」

理恵が声をかける。事務所では、二人がかつて夫婦だったと知っている者はほとんどいないので、態度もあくまで他人行儀である。ファックスを見つめながら、鷹緒が返事をする。

「ん？」

「これ……昨日はごめんなさい……」

他の人に見つからないように、理恵がそつと携帯電話を差し出した。昨日、鷹緒が理恵に貸したままの携帯電話である。鷹緒は優しく笑った。

「大丈夫？」

「うん。ありがとう……」

「ああ」

それ以上は何も聞かず、鷹緒はファックスをまとめて理恵に背を向けた。理恵も、もうそれ以上は何も言わない。

そのまま鷹緒は、慌しく広樹に近付いた。

「ヒ口。俺、打ち合わせに行ってくる」

「ああ。鷹緒……」

広樹が言いかけた。内山が帰ってきたことで、内山と確執のある鷹緒と理恵に心配を抱いているものの、人目もあるのでこの場では聞くことが出来ない。

「うん？」

「あ、いや……なんでもないよ。行つてらっしゃい」

広樹の言葉に、鷹緒が察して苦笑する。

「何もないよ。じゃ、行つてきます」

小さな声でそう言った鷹緒は、沙織と目が合った。鷹緒は小さく微笑み、沙織の背中を叩く。

「頑張れよ」

「う、うん……」

「行ってきます」

鷹緒はそう言っと、事務所を後にした。

沙織の目に映る今日の鷹緒は、いつもと同じように見えて違う気がした。

「沙織ちゃん？」

その声に、沙織はハツとして顔を上げた。するとそこには、沙織の顔を覗き込む理恵の顔がある。

「理恵さん……」

「どうしたの、ぼうつとして。大丈夫？」

「あ、はい。なんでもないです……」

「そう。今日はボイストレーニングよね？ その前にとりあえず、奥の部屋に行きましょう」

理恵はそう言って、沙織とともに奥の部屋へと入っていった。

「……どうかした？ シンコンが不安なのかな？」

奥の部屋に入るなり、理恵が沙織に尋ねる。沙織は驚いて顔を上げた。

「え？」

「なんか、心ここにあらずって感じだから……」

「そ、そうですか？」

沙織が言う。顔に表れているということなど、考えていなかったのだ。

「落ち込んでるように見えるわよ。何か悩みごとでもある？」

理恵の言葉に、沙織は一瞬戸惑った。しかし理恵の目を見つめると、静かに口を開く。

「あ、あの……昨日、鷹緒さんと会ったんですか？」

意を決して、沙織が尋ねた。

「あ、いえ、あの……昨日、鷹緒さんが出かけるの、気付いたから……」

言い訳をするように、少し焦った様子で沙織が続けて言った。そ

んな沙織に、理恵は少し驚いた表情を見せた後、静かに微笑む。

「沙織ちゃん、もしかして、彼のこと……？」

少し悪戯な瞳で、苦笑しながら理恵が尋ねた。沙織は困った様子で否定する。

「いえ、そういうんじゃない、あの……」

「そう？ それならごめんね……でも、もし私と鷹緒に何かあると思つて落ち込んだりしてるんなら、それは間違いだからね」

静かに微笑んで、理恵が言った。

「……でも、お二人は、夫婦だったんですよね？」

「そうだけど、もう昔の話よ？」

「……鷹緒さんは、そうは思つてないんじゃないですか？」

沙織の言葉に、理恵が驚いた顔を見せる。

「……どうしてそう思ふの？」

「だって……ヒロさんが前に、鷹緒さんは恋人を作らないつて言つてたから……」

「……だからって、私と別れたことが原因で、恋人を作らないんじゃないわよ。もちろん、それがきっかけで、私がトラウマ作っちゃったのかもしれないけど、彼がまだ私を好きでいてくれるとか、そういうのはないわよ」

理恵が言った。沙織は切実な目で理恵を見つめる。

「どうしてそう思ふんですか？ 鷹緒さんが、理恵さんを好きでいることはないなんて、どうして断言出来るんですか？」

勢いをつけて沙織が言った。理恵はそれを聞いて、静かに微笑む。

「……出来るわよ。あんな別れ方したんだもん……昔から、私たちは水と油で、しょっちゅう喧嘩ばかり。もうそれが楽しいと思える子供じゃないわ。沙織ちゃん、やっぱり鷹緒のこと……？」

理恵に尋ねられ、沙織は小さく頷いた。

57：小さな告白

「沙織ちゃん、やっぱり鷹緒のこと……？」

理恵に尋ねられ、沙織は小さく頷いた。

「……そう」

見守るような瞳で、理恵も頷く。沙織は重い口を開いた。

「なんか……気になって。もっと知りたいって思ってるだけで、好きかどうかなんて……」

「気になるってことが、恋なんじゃないのかな」

その時、電話が鳴った。

「あ、ごめんね」

理恵は電話を取る。沙織はお茶を飲みながら、時計を見た。理恵はすぐに電話を終えて立ち上がる。

「沙織ちゃん。私、打ち合わせが早まっちゃって、もう出かけなきゃならないの……ボイトレは、一人で行けるかな？」

「あ、はい。大丈夫です」

「そう。ごめんね……ボイトレが終わったら、事務所の誰かに迎えに行かせるから、その後は夕方までスポーツジムね。それが終わる頃には、私も事務所に帰ってこれると思う。夜にはシンコンの打ち合わせがあるから、沙織ちゃんも一緒にいてね」

「わかりました」

「じゃあ、行って来ます」

理恵は慌しく事務所を出ていった。

残された沙織は、上の空でいた。理恵が鷹緒と関係はないと言っても、説得力がない。聞きたいことの半分も聞けず、沙織の不安は最高潮に達していた。

夕方。スポーツジムにいた沙織を、牧が迎えにきた。

「いいんですか？ 牧さん、事務員なのに、私なんかを迎えにきち

やって……」

事務所に帰る途中で、沙織が尋ねる。牧は笑って答える。

「いいの、いいの。たまには私も、日の光を浴びたいもの」

「あはは。もう夕日ですけどね……」

「あーあ。今日も事務所に缶詰めの日だったわ」

「でも、一人でも帰れるのに、すみません」

「いいんだってば。副社長命令だし。それに今日はシンコンの打ち合わせだから、定時に事務所閉めることになってて、もう誰もいないのよ」

二人は事務所へと戻っていった。

牧が言う通り、いつもは実質上遅くまで開いている事務所が、今日は定時刻で閉められていた。そんな事務所を、牧が開ける。

「誰もいない……」

事務所の静けさを感じ、沙織が言った。

「そりやそうよ。今、お茶入れるわね」

「あ、私やります」

「いいわよ。お湯沸いてないみたいだから、これから沸かすし。あ……お腹空いてない？ 会議で軽くいるかもしれないから、私、買って来るわね。沙織ちゃんはどこでゆっくりしてて。電話が鳴っても出なくていいし、誰か来ても開けないで。すぐ戻るから」

「はい……」

そう沙織が返事をする、牧は事務所を出ていった。

残された沙織は、応接スペースのソファに座り、事務所をぐるりと眺める。広いその部屋は、モデル部署と企画部署が対称的に分かれている。

沙織は、企画部署の奥に置かれた、鷹緒の机に向かった。たくさんファックスやメモが置かれ、写真や書類が無造作に積み上げられている。汚らしいが、鷹緒らしい物が散乱する机である。

「鷹緒さん……好き……です……」

鷹緒の椅子に座り、机をなぞりながら、静かに沙織が言った。誰

も知ることのない、沙織の心からの告白だった。

その時、遠くでカチャリという音が聞こえ、沙織は慌てて立ち上がった。すると、入口には小さな女の子が立っている。鷹緒と理恵の娘、恵美である。

「あ……恵美ちゃん」

近付きながら、沙織が声をかける。前に一度だけ会ったことがある。

「沙織ちゃん」

恵美も沙織を覚えていた。事務所を見渡しながら、口を開く。

「誰もいないの？」

「うん、そうなの……でも、もうすぐお母さん帰って来ると思うよ。約束してるの？」

「うん」

「じゃあ、中に入って待っててね。あ、そろそろお湯沸いたかな……」

沙織はそう言って給湯室へと向かい、缶ジュースを持って戻ってきた。

「ジュースあったよ。どうぞ」

自分の家のように、慣れた様子で沙織が差し出す。恵美は嬉しそうに、それを受け取った。

「ありがと。今日は打ち合わせだよな？ 遅くなるのかな……」

ジュースを飲みながら、恵美が尋ねる。

「さあ……でも恵美ちゃんもいるし、きつと早く終わるよ。終わったら、お母さんと食事でも行くの？」

「うん。ママとパパと、お食事に行くの」

「え、パパって……鷹緒さん？」

沙織の言葉に恵美は驚き、笑顔で口を開く。

「そっか。沙織ちゃん、パパの親戚だから、パパとママが結婚してたこと知ってるんだね！」

「う、うん……」

「恵美、パパの写真あるよ。見せてあげる」

恵美はそう言って、おもちゃのようなロケットペンダントを差し出した。沙織はそれを覗き込む。小さい写真の切り抜きが、ペンダントに入っている。

「え……？」

沙織は写真を見て驚いた。その小さな写真に、鷹緒の顔はない。多少若い頃のものではあるうが、どう見ても鷹緒ではない。

「え……これが、パパ？」

「うん。恵美のパパ」

「これが……鷹緒さん？」

もう一度、沙織は目を凝らして写真を見つめる。

そんな沙織に、恵美がきょとんとした表情で首を振った。

「違うよ」

「え？」

「諸星さんもパパだけど、恵美の本当のパパじゃないんだよ」

58：新たな疑問

「諸星さんもパパだけど、恵美の本当のパパじゃないんだよ」

「……え？」

恵美の言葉に、沙織は耳を疑った。いつか鷹緒が、自分で恵美を娘だと言っていたはずだ。

考え込む沙織に反して、恵美は言葉を続ける。

「あのね、パパは恵美のパパだけど、血が繋がってないの。本当のパパは、ずっと外国に行ってたの。恵美は会ったことないから覚えてないけど、やっと帰ってきてくれたから、一緒に暮らすんだよ。ママが言ってた」

「……それ、本当なの？」

淡々とそう言う恵美に、沙織が聞き返す。

「うん。沙織ちゃんはパパの親戚だから、教えてあげる」

「この人……内山さん？」

沙織が写真に目を凝らして言った。小さくてよくわからないが、鷹緒でないなら内山だと思った。

恵美は尚も笑顔で頷く。

「そうだよ。知ってるの？」

「知ってるってほどじゃ……」

その時、牧が帰ってきた。

「ただいま。あら恵美ちゃん、いらっしやい」

「牧ちゃん。こんばんは」

二人が挨拶を交わす。少なからず面識はある。

そんな二人のそばで、沙織は顔色を変えて考え込んでいた。

（恵美ちゃんの言っていることは本当なの？ 鷹緒さんの娘じゃない……じゃあなに、鷹緒さんは、それを知っているの……？）

「沙織ちゃん、どうしたの？」

固まっている沙織に、恵美が尋ねる。沙織は慌てて我に返ると、

硬い笑顔で首を振ることしか出来ない。

「うっん。なんでもないよ……」

「沙織ちゃん」

そこに、牧が声をかけた。

「は、はい」

「今、社長から連絡があつて、もうすぐ着くそうだから。悪いけど私は先に帰るわね。会議室に、すでに缶のお茶と軽食をセットしてあるから」

「わかりました」

「じゃあ、先に帰らせてもらうわね」

「お疲れさまでした」

牧は事務所を出ていった。

「ただいまー」

そこに、入れ違いで理恵が帰ってきた。すぐに恵美が駆け寄っていく。

「ママ！」

「ああ、恵美。待たせてごめんね……これから打ち合わせだから、もう少し待ってね」

「うん」

「ただいま」

そこに、広樹と二人の男女が入ってくる。

「理恵ちゃん、沙織ちゃん。週刊トウインクルラックの赤城君と、SYテレビの水上さん。鷹緒ともよく組んで、昔からの知り合いなんだ。今回、沙織ちゃんの記事を載せてくれるってことで、お呼びしたわけです」

「はじめまして。副社長でシンコン担当の石川です。彼女がうちから出す候補者の、小澤沙織です」

広樹の言葉を受け、理恵が沙織を紹介し、挨拶を交わした。

「よろしく願います」

「じゃあ、会議室へ行きましょう」

広樹は二人を案内して、奥の会議室へと入っていった。

「さて、じゃあ私たちも行きましょう。恵美、ここで静かに待ってね」

「わかってるよ」

理恵の言葉に頷くと、恵美はソファに座って本を読み始めた。

そこにもう二人入ってきた。鷹緒と、先日事務所を騒がせた、内山豪である。異様な組み合わせに、沙織は一瞬、息を呑む。

「パパ！」

その言葉に、沙織はハツとする。恵美が駆け寄ったのは、鷹緒の方だった。

「よう」

「よう！」

親しげに、鷹緒と恵美が挨拶を交わす。その後、恵美がじつと内山を見つめた。

「あの……」

少し恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに、恵美が内山に声をかける。

「何を照れてんだ、おまえは」

鷹緒は苦笑して、恵美の頭を軽く叩くと、会議室へと向かっていった。

残された理恵と内山と恵美だが、内山が恵美を抱き上げたことで、幸せそうな家族に見えた。沙織は静かに、会議室へと小走りで向かった。

「鷹緒。理恵ちゃんは？」

会議室に入って来た鷹緒に、広樹が尋ねる。

「外で話してる。すぐ来るよ」

そう言つて、鷹緒も席に着いた。その後を、沙織がやってくる。

「あ、沙織ちゃんはこっちね」

広樹に促され、沙織は指定された席に着いた。その時、すぐに理恵と内山が入ってくる。

「これで全員だね。じゃあ、始めますか」

59：打ち合わせの夜

「これで全員だね。じゃあ、始めますか」

そう言つと、広樹の仕切りで打ち合わせが始まる。

「えーと、ご存知とは思いますが、私がWISM企画プロダクション社長の木村です。今日はシンコン企画のためにわざわざお集まりいただきまして、ありがとうございます。面識のある方ばかりではありませんが、一プロジェクトの仲間として、改めまして軽く自己紹介お願い出来ますか」

そう振られ、隣にいた雑誌記者の赤城から水上と、順番に自己紹介が始まる。

やがて内山の番になった。内山は先日と打って変わり大人しくふるまっているが、その不敵な笑みだけは変わらない。

「フリー記者の内山です。先日までパリ支部にいましたが、日本に戻ってきました。こちらの事務所の方とは、昔からの知り合いですね。世話になっていきますし、シンコンは僕自身も興味があるので、僕が手掛けている記事や、知ってる伝手なんかを当たって、是非貢献したいと思っています。よろしく願います」

内山の自己紹介が終わり、数席離れたところにいた理恵が会釈する。

「副社長の石川です。シンコンの担当でもあります。皆様と一緒に進めていくことが出来、大変心強いです。うちから推薦するシンコン候補者は、隣に座る彼女一名です。新事務所になって初めてのビスクイイベントですので、是非一丸となって成功させたいと思っています。よろしく願います。では、候補者を紹介します。小澤沙織です」

理恵が、隣にいる沙織を見て言った。沙織は緊張しながら、お辞儀をする。

「小澤沙織です……まだ全然、経験とかも何もなく不安も多いで

すが、みなさんのお力を無駄にしないよう、頑張りたいと思います
…… よろしく願いします」

少しぶっきらぼうに、言葉を選びながら沙織が言う。そんな沙織に、暖かな拍手が起こった。

沙織が緊張から解き放たれると、今度は数席離れたところに座る鷹緒が、軽くお辞儀をする。

「WISM企画カメラマンの諸星です。それぞれ、いつもお世話になってます。僕は三次審査のカメラマンの一人としても関わる事になっていますが、もともと彼女を引き入れたのは僕ですので、それなりに本腰入れてやりたいと思っています。よろしく願います」

少し早口めに鷹緒が言った。自己紹介は、一周回って広樹に戻ってきた。

「ありがとうございます。では早速、本題に入りましょう。まず今後の日程からですが……」

広樹が続ける。それから二時間ほど、打ち合わせは続いた。

打ち合わせが終わると、一同はそれぞれに帰っていった。

「理恵」

自分のデスクで書類を片付けている理恵に、鷹緒が声をかける。給湯室で片付けをしていた沙織は、それに気付いて、その様子を覗いた。

「打ち合わせついでで話したら、コンテスト雑誌のビックスターベストと、ティーン雑誌のWLから、シンコン取材の申し込みがきた。明日にでも電話してやって。これ、担当者の名刺」

鷹緒が、名刺を差し出しながら言う。

「ありがとう」

「恵美は？」

「……豪と先に、ファミレス行ったわ」

「そう」

鷹緒の静かな微笑みが、理恵の心を締めつける。

「早く行ってやれよ。ずっと待ってたんだろ？ 恵美」

「うん……鷹……」

理恵がそう言いかけた時、広樹が会議室から出てきた。

「やれやれ、無事終わったな。みなさん帰ったね？」

「ああ」

「どうする？ どっか飯でも食いに行く？」

「俺はパス……スタジオで仕事する。食事するなら、沙織連れてってやって」

「ああ、いいけど……」

「じゃあな」

そう言つと、鷹緒は足早に事務所を出ていった。それと同時に、理恵も口を開く。

「ヒロさん。私も、もう行かなきゃ……」

「うん……あのさ。あんまり干渉したくはないけど……どうなったの？」

広樹の言葉に、理恵は苦笑する。

「どうもなつてません。じゃあ、お先に失礼します。沙織ちゃん、また明日ね」

理恵は沙織に声をかけ、事務所を出ていった。

「沙織ちゃん、片付けはもういいよ。ご飯食べに行こうよ」

「はい……」

沙織は広樹とともに、事務所を後にした。

「あの……鷹緒さんと理恵さんと、内山さんって人……どういう関係なんですか？」

60：過去への扉

「あの……鷹緒さんと理恵さんと、内山さんって人……どういう関係なんですか？」

レストランで食事をしながら、沙織が尋ねる。広樹が一番聞きやすいと思った。

「どういう関係って……そういうことは、直接本人たちに聞きなよ」苦笑しながら、口を濁して広樹が言う。沙織は俯いた。

「だって、聞きづらいじゃないですか。でもすごく気になって……何度も聞こうと思ったんですけど、なんか聞ける雰囲気じゃなくて……」

「うーん……まあ、それぞれ確執があるのは確かだけど。もともとあの三人は、同じ事務所のモデルだったんだ。それで知り合って……まあ一言で言えば、鷹緒と豪は、理恵ちゃんを取り合ったライバルってところだろうな……」

「……じゃあ、恵美ちゃんが鷹緒さんの子供じゃないってというのは、どういうことなんですか？」

「えっ？」

広樹が、驚いて聞き返す。

「どういうこと？」

「あの……恵美ちゃんが言ってたんです。鷹緒さんは、本当の父親じゃないって……」

沙織が言った。広樹さえ知らないまずい話題だったのだろうか、冷や汗が伝う。

考えるようにしながらも、驚いて広樹が口を開く。

「嘘だろう？　僕は鷹緒の娘だって、そう聞いているよ。そんな話、聞いてない……」

「あ、じゃあ、私の聞き間違いですね……」

説明のつかない出来事で、広樹にも否定されたので、沙織は恵美

の言うことを思い直した。しかし、気になることが多過ぎて、もやもやした気持ちは晴れないままだった。

地下スタジオでは、鷹緒が一人、煙草を吸っていた。リクライニングの椅子に寄りかかりながら、眠るように物思いにふけっている。

『あの、諸星鷹緒さんですよ？』

鷹緒の脳裏で、遠い日が蘇る。

「え？」

若き鷹緒が言った。

「私、石川理恵です。先月から所属になりました。よろしくお願いします」

緊張しながらも、滲刺とした笑顔で、若き理恵が言う。まだお互いに、少年といえる年だ。

「ああ、どうも……」

「あの。BOYS&GIRLSの専属モデルやられてるんですよ？ 毎号買ってます。ファンなんです。よろしくお願いします！」

それが、鷹緒と理恵が初めて出会った時だった。

それから間もなくして、理恵も鷹緒が専属でやっている雑誌のモデルに起用される。それからというもの、二人は度々仕事でか合うことが多くなり、鷹緒のファンだという理恵に、鷹緒も次第に心開いていった。

「鷹緒」

ある日、だいぶ慣れてきた理恵が、休憩中に鷹緒をそう呼んだ。

「呼び捨てにすんなよ」

そう言うものの、鷹緒は強い口調ではない。

「なんとなく、呼んでみただけ」

理恵が少し照れながらそう言った。鷹緒は、急に押し黙る。

「……怒った？」

そんな鷹緒に、理恵が不安そうに言う。鷹緒は苦笑して、理恵を

見つめた。

「つき合おうか」

「え！」

鷹緒の言葉に驚きつつも、理恵は次の言葉を求める。

「おまえ、すごい勢いなんだもん。いいよ、俺でよければ、つき合
つても」

「嘘……」

「嫌ならいいけど？」

意地悪そうに、鷹緒が言う。

「やだやだ、いい。もちろんいい！ 嬉しい！」

慌てて理恵が言う。そんな理恵に、鷹緒が吹き出した。

その日から、二人は恋人になった。じゃれ合うように語り合い、
時に喧嘩もする。二人は自然につき合い出し、人知れず同棲が始ま
り、そのまま結婚に至った。まだお互い十代の、早い結婚であった。

「先輩！」

二人の結婚生活が始まってすぐに、同じ事務所の後輩である内山
豪が、鷹緒に声をかける。理恵よりも後輩ではあるが、年は理恵よ
り内山の方が上だ。人懐っこい性格の内山は、特に鷹緒と理恵にま
とわりつき、よく行動をともしていた。

「先輩。今日の夕飯なんですか？」

「知らん」

内山の問いかけに、そっけなく鷹緒が言う。

「またまた。今日も愛する新妻の手料理でしょ？ 昨日のカレーも、
マジ美味かったっす」

「おまえ、まさか今日も来るつもりじゃないだろうな？ 終電なく
なったって泊めてやってから、このところ毎日じゃん」

「いいじゃないですか。さあ、行きましょう！」

「ったく……」

内山は鷹緒について、鷹緒の家へと向かっていった。

鷹緒と理恵の関係は、仕事関係で揉めるとわかっていたので人には知らせないということでしたが、鷹緒に密着している内山は、必然的に知ることとなっていた。

「おかえり……って、またあんた？」

夫である鷹緒の帰りを出迎えた理恵が、内山を見てうんざりして言う。

「そりゃないよ、理恵。今日も理恵の美味しい手料理、食べさせてもらいにきました！」

「あんたね。毎日毎日なんなのよ。私はあんたのためにご飯作ってんじゃないの。それに、年上だからって後輩なんだから、呼び捨てにしないでよね」

「まあまあ……」

言い合っている理恵と豪に、半分相手にしないで、鷹緒が奥へと入っていく。1DKの小さなマンションは、鷹緒と理恵の物がうまく融合されている。

「鷹緒。豪に言つてよ。毎日来るなって……」

夜。ベッドの中で、理恵が鷹緒にそう言った。

「言つたつて、あいつは来るだろ。家知つてんだから……」

「ああ、もう！ 何なの、あいつ……私たちの時間を返せって感じ」
「んー……」

鷹緒は目を閉じて、生返事をする。

「鷹緒。もう寝ちゃうの？ 明日の予定は？」

「……ヒロと会う約束してる……」

「ヒロさんと？ そつか。ねえ、鷹緒……」

理恵がそう言いかけた時、鷹緒はもう眠っていた。

「……馬鹿」

理恵は鷹緒に背を向けて、目を閉じた。

しばらくして、企画事務所に勤めていた広樹の勧めで、鷹緒の力

メラマンとしての仕事が増えてきた。その頃から、鷹緒と理恵の距離は少しずつ離れていったのだった。

61：水と油

「鷹緒……鷹緒ったら！」

現代――。

その声に、鷹緒が驚いて目を開けると、そこには理恵が立っている。

「なんだよ。びっくりさせんなよ……」

「何が仕事よ。眠ってたじゃない」

「そうか……？」

眠い目を擦りながら、鷹緒が大きなあくびをする。

「……今、何時？」

「十一時半……」

鷹緒の問いかけに、理恵が時計を見て言った。

「どうしたの？ あいつは……恵美は？」

「うん……もう帰ったわ」

理恵は鷹緒を見つめた。鷹緒は椅子に座ったままで、下から理恵を見上げている。

「……それで、なに？」

沈黙を破って、鷹緒が尋ねた。理恵は重い口を開く。

「私ね、どうしたらいいのかわからなくて……鷹緒とは、終わったってわかってる。だけど職場が一緒だし、恵美のことずっと気にかけてくれて、嬉しかった。それで……」

理恵がそう言いかけた時、鷹緒は椅子から立ち上がった。

「鷹緒……」

「おまえさあ……それ、どういふつもりで言ってるの？」

心なしか怒った様子の声で、鷹緒は背を向けながら言う。

「え……」

「俺にどうして欲しいんだ？ 告白か、後悔か？ もう一度つき合うつもりか？ 恵美を引き取って欲しいのか？ おまえにわからない

気持ちだが、俺にわかるわけないだろ」

少し強く、しかし静かにそう言った鷹緒の言葉は、いつになく重く、理恵の心に突き刺さった。

「……ごめん。どうかしてたね、私……」

「違う！ 俺はおまえと別れたからって、おまえのことをないがしろにするつもりはないし、避けるつもりもねえよ。おまえの強いところも、弱い部分も知ってるつもりだ。だから、おまえが困った時や、恵美が呼んだら駆けつける。だからおまえも、少しは素直になれよ！ おまえがフラフラしてたんじゃ、俺だって……どこへも行けなくなるだろう？」

「鷹緒……」

鷹緒はいつになく早口で、理恵を見つめていた。理恵は小さく頷く。

「ごめんね……こんな話、鷹緒にするべきじゃないってわかってたんだけど、他に言える人いなくて……」

「それはどうでもいいよ……」

溜息交じりで、鷹緒が言う。

「……わかってる」

そう言って、理恵は押し黙る。鷹緒は煙草に火をつけ、半地下の階段に面した窓のそばに立った。

長い沈黙が、二人を包む。

「……水と油だね。いつまで経っても、私たち……」

沈黙を破って、理恵がそつとそう言った。

「……そうかもな」

煙草の煙を吐き、鷹緒が口を開く。

「……理恵」

「鷹緒」

鷹緒の言葉を避けるように、理恵が呼んだ。

「鷹緒。私……私ね、やっぱり豪が好きなの……」

理恵が言った。鷹緒は口を挟む様子もなく、静かに聞いている。

「好きで好きで仕方がないのよ……忘れようとしても、全然忘れなかった。それどころか日増しに想いが強くなる……こんなこと、鷹緒に話すことじゃないってわかってる。だけど、怖いの……このまま豪を好きでいていいのか。このままじゃ私、おかしくなりそうで……」

理恵が涙を流しながら、鷹緒の腕を掴んで言った。鷹緒は静かに理恵を離すと、煙草を消して、もといいた椅子に座る。

「……理恵？」

静かに鷹緒が言った。理恵は尚も泣きながら俯いている。

鷹緒は小さく溜息をつく、立ち上がって理恵の前へ歩いていった。理恵は泣いているばかりだ。鷹緒はそんな理恵の手を取ると、激しくキスをした。そしてそのまま、テーブルへと倒れ込む。理恵は、拒否することも受け入れることもなく、ただ泣いているだけだ。少しして、急に理恵がハツとしたように顔を背けた。しかし、鷹緒は尚も続けようとする。

「やつ……嫌だ！」

理恵はそう言って、鷹緒を突き飛ばして起き上がった。その途端、理恵の長い爪が、鷹緒の頬を傷つけていた。

「ご、ごめん……」

理恵が言った。

「……もう帰れよ」

「血が出る……」

「帰れ。俺はもう、おまえの顔なんて見たくないんだよ……！」

鷹緒は静かにそう言うと、理恵に背を向けた。

一瞬、理恵は目を丸くさせると、我に返って小さくお辞儀をする。
「ごめん。ごめんね……」

そう言うと、理恵はそのまま去っていった。

理恵が去った後、鷹緒はしばらくその場に立ちすくんでいた。唇に触れながら、今の出来事を振り返る。ふと床を見ると、理恵のつけていたつけ爪が一枚落ちていた。壁の鏡を見つめると、左の

頬に小さな切り傷がある。鷹緒は俯いた。

回想――。

「はい、諸星です」

数年前のある日、電話の受話器を取って、鷹緒がそう言った。

『ヒロだけど』

相手は、広樹である。

「ああ、なに？」

『またオファーが入ったよ。この間紹介した、デカイ仕事』

「お、マジで？ サンキュー」

『でさ、おまえ今日、暇？』

広樹が尋ねる。

「夜は空いてるけど、なに？」

『この間のギャラも預かってるし、飯でも食いに行かない？ 理恵ちゃんも誘ってさ』

「ああ、いいけど……あいつ今、出かけてるんだ。今日は遅くなるらしいから、一緒に無理だな」

『そっか。じゃあ仕方なく、野郎二人で飲むか。七時に駅でいいか？』

「ああ。じゃあ、後でな」

鷹緒は電話を切り、出かける支度を始めた。

広樹より早く着いた鷹緒は、駅で広樹を待ちながら、座り込んで煙草に火をつけた。そして、行き交う人並みを見つめながら、持っていたデジタルカメラで、徐にシャッターを切り始める。

その時だった。ファインダー越しに、鷹緒の目が奪われた。カメラから目を離して立ち上がると、一人の女性が立ちすくんでいる。理恵であった。隣には内山がいる。二人は腕を組んでいて、どこから見てもカップルであった。

62：裏切り

「鷹緒……」

理恵はすぐに内山から離れ、明らかに動揺していた。

「……なに。どういうこと？」

二人を交互に見つめながら、鷹緒が言った。理恵は押し黙る。

「今日は仕事だったんじゃない……？」

そう言いながら、鷹緒の頭は混乱していた。

「うん、仕事よ……豪と一緒に……」

しどろもどろで理恵が言った。その時、内山が不敵に微笑んだ。

「なに言ってるんですか、先輩。この状況、見てわからないんですか？」

「ちよつと、なに言うのよ、豪！」

内山の言葉に、慌てて理恵が止めに入った。しかし、内山は言葉を続ける。

「だって、この状況だよ？ 認めちゃおうぜ。先輩、僕たちつき合ってるんですよ」

「……なに言ってる……なに言ってるんだ、おまえ」

目を丸くさせ、鷹緒がやっと状況を察して言った。

「見ての通りです。今だって、ホテル帰りですよ。ほら」

ホテルのライターを見せ、内山が言った。そのライターを、無言で鷹緒が振り払う。

「あーあ。落ちちゃったじゃないですか」

そう言っただけがみこむ内山は、くすりと笑った。

「でも、お気楽な人ですね。今まで本当に気がつかなかったんだ……僕たち、もう三ヶ月もこの状態なのに」

内山の言葉に、鷹緒が逆上した。その途端、内山の頬に鷹緒の拳が飛ぶ。

「うわ！」

勢いよく内山が倒れた。それと同時に、行き交う人の目も釘づけになる。

その時、広樹が走り寄ってきた。

「なにしてんだ、鷹緒！」

尚も殴ろうとする鷹緒を、広樹が必死に止めようとする。だが鷹緒は、内山を離そうとしない。

「うるさい！」

「やめろって！ 何があつたか知らないけど、こんなところでなにやってんだ！ 仕事だつてなくなるぞ」

体当たりで止める広樹に、鷹緒が理恵を見つめる。理恵は怯えた表情をしたまま、何も言おうとはしない。そんな理恵に、鷹緒は背を向けた。

「鷹緒……」

理恵が、やっとそう口にする。

「どっか行けよ……もう、おまえの顔なんて、二度と見たくない！」
鷹緒はそう言うと、その場から去っていった。広樹は理恵の方を見つめながらも、鷹緒について去っていった。

「鷹緒！」

早足で歩く鷹緒を、追いかけながら広樹が言う。だが鷹緒は、無言のまま歩いていく。

「鷹緒、待てよ。何があつたっていうんだ？」

「……あいつら、つき合ってるんだとさ」

険しい表情で、苦笑しながら鷹緒が言った。その言葉に驚き、広樹は一瞬、言葉を失った。

「まさか、そんなこと……」

「……飯、食いに行こうぜ」

二人は、近くの料理屋へと入っていった。

「……確かなのか？」

料理を口にしながら、広樹が尋ねる。聞きにくい状況でありながらも、放っておけない。

鷹緒はうつろな表情をしながら、重い口を開いた。

「……考えてみると、思い当たる節がいくつもある。最近あいつ、仕事と言っては遅くなってたし……」

「でも……」

「……もういいんだ。しよせん俺たちは、水と油。こうなる運命だつて、俺たちが結婚した時から、おまえら言ってたじゃん」

苦笑しながら、鷹緒が言う。

「それは、冗談だよ。本気で言うはずが……」

「……もういいんだ」

「いいつて、おまえ……」

「いいんだ……それより、飲もうぜ」

日本酒を注ぎながら、鷹緒が言った。広樹もそれ以上、何も言えなかった。

夜中十二時をとくに回って、鷹緒は自宅マンションへと帰っていった。しかし、部屋に人の気配はない。ふと見ると、リビングから繋がった隣の部屋の明かりが漏れているのが見える。

同じマンションに二部屋持つ夫婦は、互いに家を持っている感覚で、プライベートも別々である。それは、互いの生活リズムがあまりにも違うということからだったが、今となっては空しさだけが残っていた。

一方、理恵もリビングにいながら、鷹緒が帰ってきたことを悟っていた。しかし、今は合わせる顔がない。話はしたかったが、何を言ったらいいのかわからない。

二人は互いの気配を感じながらも、今日は顔を合わせることはなかった。

次の日。鷹緒は朝早くから仕事に出かけた。理恵と内山のことが気になって仕方がないが、今は忘れようと思う。先のことは、まったく考えられなかった。

その日も遅くに帰ってきた鷹緒の部屋に、今日は理恵が待っていた。

63：話し合い

その日も遅くに帰ってきた鷹緒の部屋に、今日は理恵が待っていた。

「おかえりなさい……」

少し怯えた様子で、理恵が出迎える。

「……ああ」

返事をするものの、鷹緒は理恵を見ようとはしない。

「あの……話があるの」

「悪いけど、明日から出張なんだ」

顔を背けたまま、鷹緒が答える。

「時間は取らせない……だけど、話しておきたいの」

「なにを？ 言い訳なら聞きたくない」

「言い訳じゃないわ」

「じゃあなんだよ。俺を説得するつもりか。別れ話か？ もうどうでもいいんだよ、おまえのことなんか」

鷹緒の言葉に、理恵が深く傷ついた顔をする。しかし、理恵はすぐに口を開いた。

「言い訳なんかしない……鷹緒に何を言われたって、私が傷つく権利なんかない……」

そう言いながらも悲しさに震える理恵は、必死に涙を堪えているように見えた。

鷹緒は小さく溜息をつく、冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、ソファに座った。理恵はその前に座る。

「私が全部悪いの……だけど、わかって。私、鷹緒が嫌いなんじゃない」

理恵が言った。鷹緒は俯く理恵を見つめ、静かに口を開く。

「でも、豪が言ってたことは、本当なんだろう？」

「……うん」

「三ヶ月前からって言ったな……それから今日までずっと、俺に隠れて会ってたことは事実なんだろう？」

「う……ん」

自分のしたことに後悔し、理恵は涙を流していた。鷹緒はきつく拳を握ったまま、冷静を保とうとしている。

「……きっかけは？」

「三ヶ月前のショーの時……豪と一緒にモデルやってて、打ち上げに行ったの。鷹緒も仕事で遅くなるからって、はしゃいでた……鷹緒、もうずっと忙しくて、最近寂しいって。豪にそれを打ち明けた……豪、親身になって聞いてくれて……」

「だから浮気したのか？」

ズバリと言う鷹緒に、理恵は涙を拭う。

「ごめんなさい……」

「謝ってほしいんじゃない。べつに一度や二度の浮気なら、まだ許せるよ。でも違うんだろ？」

「……ずっと、豪のことが気になってた……」

理恵の告白は、鷹緒の胸を締めつけた。

「……ごめんな」

突然、鷹緒がそう言った。理恵は驚いて、鷹緒を見つめる。

「おまえの気持ちに気付かなかった……おまえ、もうずっと豪のことが好きだったんだろ？ それなのに、俺が縛ってた。その上、仕事で構ってもやれなくて……それは事実だ。邪魔者は、俺の方かもな……」

鷹緒の言葉に、理恵が首を振る。

「違うよ！ どうして……どうしてそんなこと言うの？ 怒ればいいじゃない。怒って、私を殴りつければいいじゃない！ どうしてそうしないの。そうでもしてくれないと、私……」

悲鳴のように、理恵が言った。そんな理恵に、鷹緒は静かに口を開く。

「……楽になれよ。俺だって、おまえの寂しさや傷ごと抱けるほど、

人間出来てないし、ここで元のさやに戻ったって、しばらくは俺のスケジュールだって埋まってる。おまえの寂しさ紛らわせることなんて出来ないよ……」

「鷹緒……」

訴えかけるような目で、理恵は鷹緒を見つめていた。鷹緒は眉をしかめて、俯いている。

「豪だつて……あいつのことは、よくわかってるつもりだ。あいつの態度はいつだって気に食わないけど、あいつがおまえのことを好きだつてことは、前から知ってた……知ってておまえのそばに居させた俺にも責任がある。なによりおまえ、もう豪の方に気持ちが傾いてるんだろう？ そのくらいは、俺にだってわかるよ」

二人の間に沈黙が走る。もう、理恵は何も言えなかった。

「……私、鷹緒と別れたくない……」

しばらくして、理恵がやっとそれを口にした。鷹緒は理恵を見つめる。

「俺だつて、別れたくないよ。でも……このままじゃいけないと思う」

「……」

「理恵……俺たち、水と油だつて言われてきたけど、俺はそうは思っていない。俺たちはこれで終わりじゃない……しばらく時間を置こう。俺も真剣に考えるから」

鷹緒はそう言うのと立ち上がり、寝室へと入っていった。理恵は、その場で泣き崩れた。

次の日の早朝。一睡も出来なかった鷹緒は、静かに部屋を後にする。

互いの部屋に、もはや理恵の気配はない。理恵は内山のところに出ていったのだと確信し、鷹緒は一人、仕事へと向かっていった。

64：不器用な男

一週間後。東京に戻った鷹緒は、その足で広樹の事務所へ向かった。

「おかえり。どうだった？ 広島は」

広樹が尋ねる。

「うん、仕事は順調。料理はうまいし、最高だった」

「鷹緒。早々なんだけど、大事な話があるんだ」

改まった様子の広樹に、鷹緒が首を傾げる。

「なに？」

「おまえ、正式にうちの事務所に入ってくれないか？」

「……」

「まだモデル事務所所属だろ？ カメラマンとして認められてきてるのに、ほとんどフリーで活動してるじゃないか。うちの事務所はまだ立ち上げて間もないけど、おまえには当初からずいぶん手伝わってもらってるし、仕事も回してるよな。おまえももうモデルの仕事はほとんど請けてないんだし、ここらで正式にカメラマンとして来てくれないか？ おまえが来ればうちも助かるし、今まで以上に仕事を回せるように頑張るよ」

広樹の言葉に、鷹緒が笑った。

「ずいぶん、見込まれたもんだな……」

「僕は本気だよ」

真剣な眼差しの広樹に、鷹緒が俯く。

「うん……正直言うと、いろいろ考えてた。どっちみち、そろそろモデル事務所は辞めようと思ってたんだ」

「じゃあ……」

「ああ。まあとくに、俺はこの事務所の人間だって感じがしてたよ」

「じゃあ、よろしく頼むよ！」

「ああ」

二人は握手を交わす。

「そうだ、夕飯は食べたのか？」

「いや」

「じゃあ、食べに行こう」

そう言つて、二人は事務所を出ていった。

「どこにしようか。いつものところでいいか？ 必ず誰かしらに会うんだけどな……美味いから仕方ない」

「ギョーカイ人の巣窟か」

鷹緒が、苦笑して言う。

「どちらかというモデルが多いな。この辺、モデル事務所が多いから」

二人はそう言いながら、近くの料理屋へと入っていった。雰囲気の良いその店は、全席個室で隠れ家風を気取り、業界人御用達と人気である。広樹もまた、行きつけの店にしていた。

「あ、諸星さん！」

店に入るなり、鷹緒が声をかけられた。鷹緒が所属しているモデル事務所の後輩である。

「なんだ、おまえらも食事か」

苦笑して、鷹緒が言った。

「はい、一緒に飲みましょうよ。あと何人が来てますよ」

「ゆつくり飲みたいから、今度な」

「残念です……」

後輩は、そのまま去っていった。

「別の店にしようか。もしかしたら、理恵ちゃんも……」

広樹が察して言う。鷹緒は表情を変えずに、中へと入っていく。

「いいよ、べつに……」

二人は、仕切られた個室へと通された。早速、酒を交わしながら、広樹が尋ねる。

「……それで、その後どうなったんだよ？」

「どうって？」

「だから、その……理恵ちゃんとかさ」

「……さあ」

「さあつて、おまえ……」

静かに微笑んで、鷹緒は日本酒を飲む。

「俺の出張もあつて、会ってないよ。出る時には、すでに出てった後みたいだったし……まあ、このまま離婚かもな……」

鷹緒の言葉に、広樹が身を乗り出した。

「……本気で言ってるのか？」

「本気もなにも……しょうがないだろ？ あいつが別のやつ好きになつて浮気して、ただそれだけのことじゃん」

煽るように酒を飲みながら、鷹緒は溜息をつく。

「おい、飲み方考えろよ……」

「なんか……わかんないんだよ」

静かに、鷹緒がそう言った。

「え？」

「女の愛し方……とかさ、結婚とか。俺には、もともと結婚なんて無理だったのかも……」

「鷹緒……」

「……俺、あんまり親に愛された記憶もないし、親も再婚だから、普通の家庭っていうのがよくわかってなくて……義理の兄弟とも馴染めなくてさ。そんな中で、自分自身が作る家庭つての、よく考えてなかった気がする」

広樹は口を挟むことなく、鷹緒の話を黙って聞いている。鷹緒は話を続ける。

「あいつのことも放りっぱなしで……だから俺、あいつを責められる立場じゃない。俺も苦しみたくなかったし、あいつも苦しめたくない。いっそ嫌いになれたらよかった……そうしたらあいつ、もっと早くに俺のところから出ていけたのに……」

鷹緒の言葉に、広樹は絶句した。ここまで鷹緒が本心を言うのは、広樹自身も聞いたことがなかった。なにより鷹緒の不器用さが、広樹を締めつけるように伝わる。

「本当だ。居たんですね、先輩」

そこに、空気を一瞬にして打ち壊す人物が現れた。内山である。

65：宙ぶらりんの日常

「豪、帰れ！」

焦るように広樹が言った。このタイミングは最悪である。

それに反し、内山は聞く耳を持たず、仕切りの中へと入ってきた。鷹緒は静かに内山を見つめたまま、何もしゃべらない。

「ひどいな、ヒロさん。ヒロさんが怒鳴るなんて、珍しいや……それより、少しやつれたんじゃないですか？ 先輩」

不敵な笑みを浮かべながら、内山が鷹緒を見て言った。

「おまえ……」

そう言っただけで逆上しそうな広樹の腕を掴み、無言のまま鷹緒が止める。

「鷹緒……」

「……理恵は、おまえのところにいるのか？」

冷静さを装って、鷹緒が尋ねた。内山は頷き、微笑む。

「ええ、いますよ。今日は家で休んでいます。このところ、さすがに塞ぎ込んでいて……」

「豪。理恵と離婚してほしいなら、離婚届を書かせて送ってくれ」
鷹緒の言葉に、内山の目が丸くなった。

「……離婚……するつもりなんですか？」

「さあ……ただ、あいつとおまえがそう決めるんなら、送れって言ってるんだ」

さっきまでの態度とは打って変わって、内山は明らかに動揺している。

「なんなんですか、それ……大人を装ってるんですか？ 僕は、あなたから理恵を……」

「おまえこそ、なに言ってるんだ？ おまえがやったことだろう？」

内山がどうして動揺しているのか、鷹緒にはわからなかった。ただ内山は固まって、一点を見つめたままにいる。

「僕は先輩に憧れてて、それで……」

「……だから理恵を利用したのか？ そんななら許さねえぞ」

急に、鷹緒の目つきが変わる。内山は、そんな鷹緒に首を振った。離婚という言葉聞いて、動揺が続いている

「違う。理恵のことは好きだけど、先輩にも憧れて……」

「……豪。おまえが理恵を好きで、理恵がおまえを好きなら、もうしょうがないじゃん。俺のが邪魔者だろ？ まあとにかく理恵と話し合って、今後を決めろよ……俺は仕事も忙しくなってきたし、二人が決めたら、従うよ……」

鷹緒はそう言って、立ち上がった。

「ヒロ。出よう」

「あ、ああ……」

放心する内山を残して、二人は店を後にした。

内山は動揺していた。鷹緒が理恵と離婚することなど、考えてもいなかった。ただ、理恵が好きだった。尊敬する鷹緒の恋人を、奪ってみたいという気持ちもある。鷹緒を負かしてやりたいという気持ちもある。

内山は、しばらくその場に立ちつくしていた。

数週間後。鷹緒は元いたモデル事務所を辞め、正式にカメラマンとして、広樹の経営する事務所へと入った。

理恵や内山とは、あれからまったく連絡がなく、会うこともない。そのため、まだ離婚はしてないので、形としては別居ということになっている。理恵の部屋は前と変わらずあったが、理恵が戻ってくることはなかった。

「鷹緒さん！」

出先から事務所に戻るなり、鷹緒に声をかけたのは、元気印の三崎茜^{きあかね}。十八歳のカメラマン志望の少女だ。彼女の父は、鷹緒がカメ

ラマンとして世話になった師匠のような人物で、鷹緒をこの世界に引き込んだ人でもある。茜は最近この事務所で、事務やアシスタントのアルバイトを始めていた。

「おかえりなさい、鷹緒さん。ねえ、これからデートしよ。スウィーツがすごく美味しい店発見したんだ。甘党の鷹緒さんなら、絶対気に入るから！」

「ハイハイ、今度な」

軽くあしらって、鷹緒が言う。

「なによ。私は三崎晴男の娘だぞ。ないがしろにしたら、パパが許さないんだから」

「確かに、親父さんには世話になってるけど、それとこれとは別」

「そんなこと言わないでさ、私とつき合おうよ」

「気が向いたらな」

それは日々繰り返される、明るい事務所の幕閉めであった。

「やれやれ。今日もフラれたね、茜ちゃん」

苦笑して、広樹が言う。

「いいんです。諦めないもん。鷹緒さん、格好良いから……結婚してたってどうだって、関係ないです」

茜が言った。茜は鷹緒が結婚していることを知っている、数少ない人物である。鷹緒と広樹が高校生の時代から知っており、理恵とも面識がある。

傷心の鷹緒が仕事以外に救われたのは、茜の存在があつたからかもしれない。事務所に居る時、鷹緒は嫌なことを忘れられた。自分を慕ってついてくる茜は、いい気の紛らわしとなっていた。茜もそれを知ってか、猛アタックを続ける。二人の会話は漫才のようにリズムカルに進み、事務所はいつも明るかった。

ある日、鷹緒がスタジオで仕事をしていると、茜がやってきた。

66：胸さわぎ

「やっぱりまだいたんだ。これ、差し入れです」

茜が缶コーヒーを見せて言う。

ちょうど仕事が一段落していた鷹緒は、伸びをしてコーヒーを受け取った。

「おう、サンキュー」

「……ねえ。まだ理恵さんから連絡ないの？」

茜が尋ねた。

「なんだよ、急に……」

「だって……もう一ヶ月以上経つんでしょ？ 私から連絡しようか。理恵さんとは、知らない仲じゃないんだし……」

「馬鹿だな。変な気を使うなよ」

鷹緒が苦笑して言う。そんな鷹緒に、茜は口を尖らせる。

「子供扱いしないでください」

「だって子供じゃん。おまえ、俺と初めて会った時、まだ小学生だったんだぜ？」

「それはそうだけど……」

「おまえの親父さん、今、ニューヨークだっけ？ 向こうの専属カメラマンになってから、ずいぶん経つんじゃない？」

話題を変えて、鷹緒が言った。

「うん。順調みたいよ……娘のことなんか、構ってられないって感じ」

「……寂しいの？」

「ちよつとね」

「……わかるよ」

二人は苦笑した。

「ねえ、鷹緒さん。どうやってたら、私とつき合ってくれる？」

突然、茜が尋ねた。それを聞いて、鷹緒は静かに笑う。

「……やめとけよ、こんな男」

「どうして？ 鷹緒さん、格好良いよ？」

「格好良くても悪くても、駄目なもんは駄目。俺はまだ事実上結婚してるし、当分恋人も作る気なんてないの。面倒くさいんだよ、そういうの」

うんざりした様子で、鷹緒が言う。めげずに茜は続ける。

「じゃあ、とりあえず離婚してよ」

「あのなあ……」

そう言う鷹緒に、茜は熱い視線を送っている。鷹緒は苦笑した。

「……わかった。じゃあ、おまえが今の俺の年くらいになったら、考えてやる」

「わかった。それまで待つ！ だから鷹緒さんも、それまで浮気しないですよ？」

「そうだな……考えるだけは考えるよ」

苦笑して頷く鷹緒に、携帯電話が鳴った。鷹緒は反射的に、電話に出る。

「はい」

『……鷹緒？』

その声は、紛れもなく理恵だった。

「……理恵？」

『うん……ごめんね、連絡もしないで……』

久々の理恵の声に驚きながらも、鷹緒は安心感を覚えていた。

「いや。どうした？」

『あの……』

「うん？」

『ごめん。なんでもないの……』

理恵の声とともに、車が通り過ぎる音が聞こえる。

「……外なのか？ どうした？ なんでもないってことはないだろう」

いつもと違う様子の理恵に、鷹緒は胸騒ぎを覚えた。

「理恵？」

『……』

「理恵。そっちに行くから、場所教える！」

もはや居ても立ってもいられず、鷹緒が言った。

『平気…… 本当に、なんでもないの。ごめんね……』

そこで、電話が切れた。

鷹緒は舌打ちをして、理恵に電話をかけ直す。しかし、すでに電源が切られているようで、通じない。

慌てて財布をズボンのポケットにねじ込むと、鷹緒は上着を羽織った。そんな鷹緒に、茜が口を開く。

「理恵さん、どうかしたんですか？」

「ちよつと出かける。おまえももう帰れよ」

そのまま茜を置いて、鷹緒は街へと飛び出していった。

鷹緒は一目散に、内山のマンションへと向かった。内山に電話をかけるが、一向に繋がらない。

内山の部屋に着くと、鷹緒は愕然とした。部屋には新入居者用の公共案内が下げられている。恐る恐る部屋のドアを開けると、中はがらんとしていて何一つない。

「……理恵……？」

鷹緒はそのまま、心当たりを探し続けた。何があったかはわからないが、力ない理恵の声を聞いて、探さずにはいられなかった。

数十分後、ふと気が付いて、鷹緒は自分のマンションへと戻っていった。すると、マンションの前の花壇に腰かける、理恵の姿があった。

「……行くところ、なくなっちゃった……」

静かに微笑んだ理恵は、心なしかやつれた感じで、鷹緒の胸を締めつける。

「馬鹿か、おまえは……なに電源切ってたんだよ」

鷹緒は、思わず理恵を抱きしめた。理恵の目から、涙が溢れ出る。

「ごめん……」

「本当、馬鹿か、おまえは……」

そう言いながら、鷹緒は理恵を離そうとはしなかった。

67：壊れかけた夫婦

鷹緒の部屋に上げられた理恵は、小さくなってソファに座っている。鷹緒は温かいコーヒーを入れてやると、理恵に差し出した。理恵はそれを受け取るものの、俯いて何もしゃべらない。そんな理恵に鷹緒が尋ねる。

「……何があつたんだ？」

「……豪がいなくなったの……」

鷹緒の問いかけに、理恵が答える。受け取ったコーヒーに、口をつける気配はない。ただじっと、肩を落として座っている。

「……どうして？」

「……」

「理恵？」

押し黙っている理恵に、鷹緒が続ける。

「さっき豪の家へ行つた。もう何もなかった。電話も通じなかった

……一緒に住んでたんだろう？　何があつたんだ？」

「……私、子供が出来たの……」

理恵の言葉に、鷹緒は衝撃を受けた。間違いなく、自分の子供ではない。事実を知ってショックを隠しきれなかったが、冷静を装うと、鷹緒は必死に耳を傾けた。

「……それで？」

「初めは、豪も喜んでくれてたみたいだった。だけど……遠出の仕事で数日間、私がいないうちに、部屋に何もなくなつてて……」

「……嘘だろう？」

信じられないといった様子で、鷹緒は目の前で泣いている理恵を見つめた。理恵は静かに、持っていた紙を差し出す。

“少しの間お別れです。だけど、僕は君も子供も愛してるよ”

たったそれだけの、内山からの手紙だった。鷹緒は手紙を丸めると、電話を手取る。

「……どこに電話するの？」

理恵が尋ねる。

「事務所の社長だよ。社長なら、あいつのことくらい知ってるだろ」
「駄目よ。今、何時だと思ってるの？」

「関係ねえよ」

「もういいよ。結局、あいつはそういうやつなのよ。鷹緒だって知ってるじゃない……」

肩を落として理恵が言う。そんな理恵の肩を、鷹緒が両手で掴んだ。

「じゃあ、子供は？ 子供はどうするんだよ。父親はあいつだろ！」

「……関係ないよ。豪は逃げたんだもん。今時シングルマザーなんて、珍しくないよ……」

「馬鹿か！ 生まれてくる子供の気持ち、考えろよ！」
珍しく鷹緒が怒鳴った。

「鷹緒……」

「とにかく、あいつは俺が見つけてやるから……おまえはここにいろ。そっちの部屋は、まだおまえの部屋なんだから……」

鷹緒の優しさが、理恵の心を包む。

それから深夜というのにも関わらず、鷹緒は手当たり次第に電話をかけた。しかし、モデル事務所の社長でさえも、内山が消えたことすら知らなかった。

数日後。あらゆる手を尽くしても見つからない内山に、鷹緒はどうすればいいのかわからなくなっていた。

「おかえりなさい……」

仕事帰りの鷹緒を、理恵が優しく出迎える。まるで夫婦に戻ったかのような光景だ。しかし、理恵の元気はなく、鷹緒に遠慮がちである。

「ごはん作ってたんだ。まだでしょ？」

「ああ……いいのに、べつに……」

「でも、私に出来ることなんて、このくらいだから……」

理恵の言葉に、鷹緒が眉をしかめた。

「卑下すんなよ。おまえらしくない……俺たち、戸籍上はまだ夫婦なんだ。変に気を使われると、俺も疲れる……」

鷹緒が言った。

ここしばらく、理恵は今までの理恵らしくなく、鷹緒は苛立ちと戸惑いを隠しきれない。

「……ごめん」

謝る理恵に小さく溜息をついて、鷹緒は無言でソファに座った。そんな鷹緒に、理恵が料理を差し出す。

「……理恵。これからどうする？」

突然、鷹緒が尋ねた。今の理恵にとっては、まだ聞かれたくない台詞だった。鷹緒に甘えるわけにはいかず、行くところもない。一人で一からやっていくほか、選択肢はない。

「うん。なんとか一人でやっていくつもり……」

静かに理恵が言う。

「一人って、子供は？」

「ちゃんと産んで育てる……大丈夫。もう鷹緒には、迷惑かけないから……」

「迷惑って……」

「これ、書いておいた。今まで連絡もしないで……それなのに、勝手に転がりこんでごめんね」

理恵がそう言って、離婚届を差し出した。鷹緒は質問を続ける。

「……それで、おまえはどうするの？」

「わからないけど……とりあえず、これからお腹も出てくるし、モデルの仕事は出来ないから、どこか仕事探すわ。部屋も早く見つけて、出ていくから……」

「……それで、やっていけないの？」

鷹緒の言葉に涙ぐんで、理恵が首を振る。

「そんなのわかんないよ！ でも……やらなきゃいけないんだもん！」

溢れる涙を必死に拭っている理恵を、鷹緒は静かに見つめていた。やがて、そつと口を開く。

「……やり直そうか」

68：傷ついた二人

「……やり直そうか」

「……え？」

突然の言葉に、理恵がゆっくりと顔を上げる。鷹緒は言葉が続けた。

「あいつのことは置いておいて、このままやり直そう……子供の父親は、俺になるよ」

信じられない言葉だった。鷹緒に落ち度は何もない。自分が鷹緒を裏切ったまでの話だ。鷹緒のところから飛び出し、違う男の子供を身ごもって帰ってきた自分を、鷹緒は何も言わずに受け入れ、子供の父親にまでなるといふ。

理恵は、鷹緒にそこまで言わせた自分が悲しくなった。

「駄目だよ。もう、鷹緒に迷惑……」

「だからさあ……夫婦間に迷惑はつきものだろ？俺がいいって言うてんだから、それでいいじゃん」

軽く微笑んだままそう言う鷹緒に、理恵は首を振り、堪え切れない涙を流す。

「どうしてそこまでしてくれるの？私、鷹緒を……」

そう言う理恵を、すかさず鷹緒が抱きしめる。

「もう、それ以上言うなよ。俺だって、どうしていいかわかんないんだから……だけど、おまえの子供なら、俺だって愛せるよ……」

「……」

「理恵？」

「ごめんね……ごめんね……」

理恵が鷹緒に抱きついて言う。鷹緒も理恵を抱きしめたまま、しばらくそうしていた。

これからどうしたらいいのか、二人にもわからなかった。ただ、内山がいなくなったことで、二人の心はまた繋がるうとしていた。

意地もプライドも、今の二人の間には通用しない。不器用な二人は、互いの傷をなめ合いながら、元のさやに戻ったのである。

それから数カ月後、娘の恵美が生まれた。広樹にさえも、恵美は鷹緒の子供だと言っていた。鷹緒は、持てる愛情を惜しげもなく恵美に注ぎ、本当の父親のように接することに心に決める。そんな鷹緒に、理恵は罪悪感に駆られながらも、夫婦としての自信を取り戻そうとしていた。

そんなある日。鷹緒のもとに一本の電話が入った。もといたモデル事務所の社長からである。

「え、豪の行方がわかった！」

自宅にいた鷹緒は、思わずそう叫んだ。理恵は買い物に出かけていて、それを聞かれてはいない。

『そうなんだ。突然電話が来てね。そろそろ除名しようかと思ってたんだけど、危機一髪繋ぎとめたよ』

社長が説明をする。

「それで、どこにいるんですか？ あいつは」

『それがさ、パリにいるって言うんだ。知り合いがいるらしくて、フリーで記者をやりながらモデルを続けたいと言ってきた。こっちもそろそろ、パリコレ組が向こうへ行く予定だったから、放っておくことにしたよ……連絡先も聞いたけど、連絡するか？』

「はい、お願いします」

『じゃあ、ファックス送るよ』

「お願いします。ありがとうございました……」

鷹緒は電話を切ると、呼吸を整えた。内山に対する怒りが湧き上がる。

すると、一通のファックスが届いた。そこには内山がいるという

現住所と電話番号が記されている。鷹緒は意を決して、パリの電話番号へと電話をかけた。

『ハイ』

受話器の向こうから、内山の声が聞こえる。

「……俺がわかるか？」

怒りを落ち着かせるように、鷹緒が静かに言った。

『……鷹緒先輩ですね。かかってくると思ってました。事務所に連絡入れたから……』

「おまえ、どういうつもりだよ？」

『僕の娘は元気ですか？』

内山の言葉に、鷹緒は目を丸くする。

「おまえ、なんで娘だって知って……」

『僕だって、日本に友達くらいいますから』

その言葉にいちいち苛立ちながらも、鷹緒は冷静さを保とうとした。

「……どうするつもりだ、理恵は。子供は？」

『考え中です。それまで、二人をよろしく願いますよ、先輩』

「てめえ……今度会ったら、覚えておけよ」

鷹緒の言葉に、内山が笑う。

『あははは。それじゃあ、しばらく日本には帰れそうにないな』

「笑ってんじゃねえよ！」

目の前の棚を叩いて、鷹緒の怒りが頂点に達した。

『先輩……僕、しばらくこっちでやっていきたいと思ってます。帰ったら先輩に殴られに行きますんで、それまでは放っておいてください』

「なんだと、豪！」

その時、鷹緒は後ろに気配があることに気がついた。そこには、買い物から帰ってきた理恵が立っている。

69：夢の終わり

鷹緒がふり返ると、そこには買い物から帰ってきた、理恵が立っている。

「……豪って？」

驚く理恵に、鷹緒が無言で受話器を差し出す。

差し出された受話器を取り上げるように掴むと、理恵は叫ぶように問いかける。

「豪?!」

『……理恵? ごめんね』

「馬鹿! どうして急にいなくなったりするのよ。子供が重いなら……私が嫌いになったなら、そう言ってよ!」

理恵の言葉に、内山が一瞬押し黙った。そして静かな口調で語りかける。

『違うよ……ただ今の僕は、結婚出来る経済力も思考もないんだ。今結婚したって、きつとフラフラしちゃうと思う。だから僕も辛いけど、今は離れたところから見てるよ。それで、いつかきつと迎えに行くからね』

「勝手なこと言わないで……都合のいいことばかり言わないでよ!」

『理恵……』

「さよなら!」

理恵は涙を流してそう言つと、思い切り受話器を置いた。電話は切れてしまった。

「理恵」

鷹緒が声をかけるも、理恵は無言のまま涙を拭いて振り向き、買ってきた食材を黙々と冷蔵庫に詰め始める。そんな理恵の後姿を、鷹緒はただ見つめていた。

「……もういいの。完璧に冷めたわ。あいつは結局、自分のことし

か考えてないのよ。うまいこと言って、私のことも恵美のことも考えてない。もうどうでもいい。忘れる……」

自分に言い聞かせるように、理恵が言う。それが本心ではないことを知りながらも、鷹緒は頷いた。

「おまえの人生だ。好きに生きろよ」

「……うん。そうね」

鷹緒と理恵は、そのまま変わりなく過ごした。数年間は穏やかな日々だった。恵美も着々と成長していく。

そんな中で、数年後。突然、理恵が恵美とともに姿を消した。しかしその頃、鷹緒も少なからず、生活に限界を感じていた時だった。同じことを感じながら互いに離れたことで、自然に離婚へと発展する。

離婚はしても、互いの近況は耳に入った。父親がいないことを一番心配していた鷹緒は、月に一度程度で、恵美と会う機会を作った。恵美が子供モデルをしていることで、仕事でもかち合うこともある。二人は互いに話す機会こそほとんどないものの、何らかの接点を持ち続け、今日まで自然体なつき合いをしていたのであった。

ハッと、鷹緒が目を覚ました。

「はあ……なんでこんな昔の夢……」

頭を抱えて、鷹緒が言った。時計を見ると、もう夜中の二時を回っている。鷹緒は溜息をつく、仕事を再開した。

次の日。鷹緒が事務所に行くと、一番に理恵の顔が見えた。

「おはよう」

微笑みながら、理恵が声をかける。

「……おはよう」

鷹緒も答える。普段と同じでいながらも、どことなく違う。

しかし、理恵は清々しい顔をしていた。鷹緒に、「おまえの顔なんて見たくない」と言われても、それが鷹緒の本心ではないと知っていたからだ。それは、過去に同じことがあったからこそ気付いた、鷹緒の後押しという優しさであった。

理恵は、もう同じ過ちを繰り返すわけにはいかないと思った。内山を選んだ以上、幸せにならねばならない。もう鷹緒の元へは帰れないが、元の夫として、後ろには鷹緒がいる。心強い温かさが、理恵を包んでいた。

「昨日はごめんね……」

「……いいよ」

鷹緒と理恵は、静かに微笑を交わした。たったそれだけで、わかりあえる何かがある。

「おはようございます……」

そこに、沙織がやってきた。すかさず理恵が口を開く。

「おはよう、沙織ちゃん。じゃあ、早速行きましょうか」

「なに？ 今日は何かあんの？」

落ち着く暇もない様子に、首を傾げて鷹緒が尋ねた。

「美容院へ行って、それから二つも取材があるのよ」

「へえ。それはそれは……行ってらっしゃい。頑張れよ」

鷹緒が沙織に言う。しかし、沙織は元気がないようだ。

「どうした？」

「べつに、なんでもない……」

沙織の言葉に、鷹緒は静かに笑う。

「じゃあ、俺も仕事行ってくる」

鷹緒はそう言うと、事務所を出ていった。

「どうしたの？ また鷹緒のこと？」

美容院を終え、レストランで食事中に、理恵が沙織に尋ねた。沙織は朝から元気がないままだ。

沙織は困った顔をしながらも、意を決して理恵を見つめる。

「あの。気になることがあって……」

「うん、なあに？」

「あの……内山さんって人、理恵さんや鷹緒さんと、どういう関係なんですか？」

単刀直入に、沙織が尋ねた。理恵は静かに微笑んで、沙織を見つめる。

「……内山豪はね、私の恋人だった人なの。あんまり言いたくないけど、それが原因で鷹緒とも別れることになって……豪は昔から誰とでもあんなだから、あんまり気にしないで」

「でも……」

「……私ね、豪とつき合うことにしたんだ。だから鷹緒を狙うライバルは、一人消えたわよ」

イタズラな目で理恵が言った。

70：気になる真相

理恵の言葉に、沙織は驚いた。鷹緒との関係を気にするばかりで、理恵に恋人が出来たことなど考えていなかったからだ。

「え、本当ですか？」

「うん。だから安心して仕事に没頭してちょうだい。それに彼、今はフリーのはずだから」

そう言う理恵は、沙織の恋を応援しようと思っていた。それを察してか、沙織も強力な恋のライバルがいなくなったということに心が軽くなる。

「あの、もう一つだけいいですか？」

沙織は勢いで、もう一つの疑問を尋ねることにした。

理恵も、大事な候補者である沙織の不安が拭えるなら、なんでも答えようという姿勢が見える。

「なあに？」

「あの…… 恵美ちゃんが、鷹緒さんの子供じゃないっていうのは…… 本当ですか？」

あまりに唐突な質問であつたが、沙織は真剣な目で尋ねる。その質問には、さすがの理恵も驚いていた。

「……それ、鷹緒が？」

「いえ、恵美ちゃんが。本当…… なんですネ？」

その言葉に、理恵は静かに微笑んで頷く。

「そう。恵美が言ったの……」

「はい……」

「……うん。あの子は、私と豪の子供よ。それは、鷹緒も豪も知ってるの。でも、他は誰も知らないわ。ヒロさんでさえも…… 私たちのことを知ってる人は、みんな鷹緒の子だと思ってる。それは、鷹緒がそうしろって言ったからんだけど……」

理恵の話に聞き入るように、沙織は理恵を見つめていた。

「……どうして？」

「……ぶっちゃけて言うとな、私が豪と浮気したのよ」

苦笑して、理恵が言った。もう何も隠す必要はないと思った。ずいぶん年下ではあるが、鷹緒の親戚であり、鷹緒を真剣に恋している沙織に、理恵はすべてを話す決心をする。それは、すべてを話すことで、自分の心を軽くしたかったという気持ちもあったかもしれない。

「えっ……」

その重い真実に、沙織は耳を傾ける。

「寂しかったからって言ったら、自分を美化してることになると思うけど……鷹緒が忙しくて寂しかったのは事実だし、豪のことは気付いたら好きになってたの。だから、鷹緒とはうまくいかなかった……」

「……」

「自業自得だけだね。だけど豪が消えて、恵美が生まれて……鷹緒は恵美を、自分の子供のように接してくれた。だけど今度は私が、息が詰まるようになってしまったの……すべてを許してくれる鷹緒と一緒にいることが、苦痛になってた。自分の罪が大きく残ったままにいるのが、私には耐えられなかった……」

「……理恵さん」

「だから私は、鷹緒から離れたの。自分勝手と言われても仕方がない。だけど、どうすることも出来なかった……」

遠い目をしながら、理恵が言った。

「……沙織ちゃんは、鷹緒の家庭がどんなふうだったか、知ってる？」

突然、理恵がそう尋ねた。沙織は首を振る。実際、親戚といっても、鷹緒のことはあまり知らない。

「そう。鷹緒はあんまり、家族のことは話さないんだけど……家族に愛された経験が少ないらしくて、いつも家族の温もりみたいなものを求めてた……だから結婚して、家族を作ってあげたいって思っ

たの。だけど、駄目になって……」

「……」

「私が恵美を一人で産むって言った時も、何もかも許して自分が父親になるって言うてくれたのは、恵美が一人で生まれることが、鷹緒に相当な抵抗があったからだと思うんだ……」

「理恵さん……」

真実を知って心は重くなったが、すべてを知ることが出来て、沙織は晴れた気持ちにもなっていた。

「沙織ちゃん。私は今の鷹緒のことは知らないし、もう何とも思っていないわ。だから、それを気にして上の空になったりするのはやめて。もし何か気になることがあったら、なんでも話して。私だってここまで話したのは初めてだもん」

加えて理恵が言った。すべてを話してくれた理恵に、沙織は少し申し訳なく思うも、嬉しくもなる。

「ごめんなさい……」

「いいのよ。さあ、これから取材よ。心機一転、頑張ろうね」

「はい！」

二人は取材の場所へと向かっていった。

その夜、沙織をマンションまで届けた理恵は、マンションの玄関で、帰ってきたばかりの鷹緒と出会った。

71：密談

その夜、沙織をマンションまで届けた理恵は、マンションの玄関で、帰ってきたばかりの鷹緒と出会った。

「……今、帰り？」

鷹緒が尋ねた。

「うん。今、沙織ちゃん送り届けて……鷹緒も今、帰り？」

「見ての通り」

コンビ二袋を見せて、鷹緒が言った。そんな鷹緒に、理恵は苦笑する。

「またコンビ二弁当で済ませてるの？」

「おまえ、知らないな。今のコンビ二弁当は、家で食うよりよっぽどバランスいいんだぞ」

「またそうやって、屁理屈言って……」

「正論だ」

二人は笑った。

「……鷹緒。仕事のことで、ちょっと話があるんだけど……」

突然、理恵が言った。

「いいけど……じゃあ、家まで送ろうか。車の中でいいだろ？」

「うん……」

二人は駐車場へと向かい、車へと乗り込んだ。

「で、話ってなに？」

動き出した車の中で、鷹緒が尋ねる。

「うん。沙織ちゃんのことなんだけど……」

「沙織がなにか？」

予想外の話の内容だったので、鷹緒が驚いて尋ねる。

「気付いてる？ 沙織ちゃんの気持ち……」

理恵がズバリを言った。理恵はそう言って、鷹緒の横顔を見つめる。

鷹緒は口を濁すように、軽く鼻を掻いて生返事をした。

「ああ……うん」

「そう。気付いてるのね？」

その言葉に、鷹緒は小さく息を吐く。

「気付いてるっていうか……よくある十代の馴れ合いだと思ってたけど。なにかあるの？」

沙織が鷹緒に恋をしているということは、鷹緒も薄々感づいていたのだった。だがそれが本気の恋かどうかまでは、恋愛に疎い鷹緒にはわからない。

「沙織ちゃん、純粹なのよ。だから、いちいちあなたのすることに反応してる……このままだと、あなたの一言で潰れちゃったりすると思うの……」

「……だから、何事もないようにして？」

「まあ、そうね」

「面倒臭いなあ……」

理恵の言葉に、鷹緒が溜息をつきながら言う。

「そう言わないで。シンコンまで間もないんだから」

「……わかったよ」

そう返事をして、鷹緒は煙草に火をつけ、話題を変える。

「どうだった？ 取材は」

「ああ、うん。記者の方も気に入ってくれたみたいで、ノリがよかったわ」

「そう。よかった」

「……沙織ちゃんに、いろいろ聞かれたわ。全部話した……」

「全部って？」

プライベートの話題に戻した理恵に、鷹緒が尋ねた。

「豪のこととか、恵美のこととか……恵美ね、自分から沙織ちゃんに言ったんですって。鷹緒とは血が繋がってないって」

「ふうん。そう……」

「……鷹緒は恋人を作らないの？」

その質問に、鷹緒は大きく煙を吐く。

「なんで？　自分が落ち着いたら、俺の恋愛事情に首突っ込みたくなつたの？」

「ごめんなさい……」

「……そっちこそ、どうなんだよ」

眉をしかめながら、鷹緒が言った。

「うん、もう大丈夫……私だって、あれから少しは大人になったもん。恵美だっているし。これからは、豪ともちゃんと向き合って、つき合っていくつもり……」

「ふうん……」

「……鷹緒が、また背中押してくれたんだよね。だからもう、鷹緒には迷惑かけないようにする」

「……あつそ」

鷹緒は煙草を消すと、流れる景色を見つめた。

部屋に戻ると、鷹緒は煽るように酒を飲んだ。なんだか空しい思いがする。

その時、リビングのドアがノックされた。

72：二次審査

「……どうぞ」

鷹緒がそう返事をする、ひょっこりと沙織が顔を覗かせる。

「……入ってもいい？」

「うん……」

頷く鷹緒の前に、すかさず沙織が座る。目の前の沙織を見つめて、鷹緒が口を開いた。

「なに？」

「ちよつと眠れなくて。話してもいい？」

「ああ、いいよ……」

沙織の言葉に、溜息交じりで鷹緒が返事をする。

「なんだか嫌そう……」

「そんなことねえよ……冷蔵庫に何かあると思うから、飲み物持ってきていよ」

「うん」

沙織は立ち上がって、冷蔵庫を覗く。缶コーヒーやビールがゴロゴロしている中、パックのお茶などもある。缶コーヒーを取って、沙織はリビングへと戻っていった。

「この家、缶コーヒーはやたらあるね」

「ハハ。夜起きてることが多いからな。たまにまとめ買いするんだ。事務所の差し入れを貰うこともあるし」

「へえ」

「どう？ シンコン二次審査、もうすぐじゃん」

「覚悟は出来たから、前進あるのみ！」

「おお。頼もしい」

二人は笑った。

「鷹緒さん。あのね、シンコンが終わったら、聞いてほしいことがあるの……」

改まって、沙織が言った。

「なに？」

「……その時になったら言う。だから、聞いてくれる？」
遠まわしに、愛の告白であった。

「ああ。いいよ……」

その言葉にホッとした様子の沙織は、急に笑顔になる。

「よかった。じゃあ私、シンコン頑張るからね。ちゃんと見ててね」

「ああ。見てるよ」

「うん。じゃあ、戻るね。おやすみ」

「おやすみ。早く寝ろよ」

「うん」

そのまま沙織は、自分の部屋へと戻っていった。

沙織は、間違いなく鷹緒に告白しようとしていた。だが今はオーディションも控えているため、そんな勇氣までは出ない。ただ、昼間に理恵から事実を聞いて、沙織の思いは膨れ上がっていた。鷹緒の不器用なまでの優しさが、理恵を通して痛いほど伝わる。どうしても、自分の想いを伝えたいと思った。

一人になった鷹緒は眼鏡を外し、ソファにぐったりと横になった。ここ数日、内山のことで気持ちが張り詰めた状態になり、疲れているのも事実である。鷹緒はそのまま眠りについた。

それから数日後。沙織はシンデレラコンテストの二次審査へ向かった。

二次審査は、審査員による面接だ。緊迫した空気の中、たくさんの少女が順番を待っている。中にはテレビで見たことのあるタレントもいる。沙織は少し自信を失くして俯いた。

その時、持っていたカバンの中で、携帯電話のバイブが震えた。

「沙織ちゃん。電源は切ってって言ったじゃない」

隣に居た理恵が言った。理恵もまた、今日ばかりは少しピリピリ

している。

「ごめんなさい」

慌てて沙織が携帯電話を見ると、着信は鷹緒からだった。

「もしもし！」

すごい勢いで、沙織が電話に出る。

『おう、元気そうだな。調子はどう？』

いつもと変わらぬ鷹緒の声が聞こえる。その声を聞いて、沙織の心は落ち着いた。

「うん、平気……今、順番待ってるところ」

『そうか。どう？ 雰囲気は』

「うん。何か、場違いって感じ……」

『ハハハ。それはみんな思ってるだろうよ。自信持っていけよ』

「う、うん……」

『大丈夫か？』

鷹緒の優しさが、沙織の心を軽くする。声を聞けば聞くだけ、勇気が出る気がした。

「うん。大丈夫……心配してかけてくれたの？」

『そりゃあ、まあな……おまえだったら、いつも通りで大丈夫だと思っから。三次審査に俺もいることだし、気持ち楽にして頑張れよ』
その言葉は、沙織を芯から支えるように、強くさせる。

「ありがとう……」

『じゃあ俺、出先だから……』

「うん。ありがとう」

『ああ。じゃあな』

そこで電話は切れた。沙織は嬉しさに微笑む。そんな様子を見て、理恵が口を開いた。

「鷹緒さんから？」

「はい。頑張ってた……」

「そう。じゃあ、頑張らなきゃね」

「はい」

沙織は何かを吹っ切ったように、面接の順番を待った。

二次審査を終えて、沙織は理恵とともに事務所へと戻っていった。追跡取材もあったため、沙織は緊張し通しだった。

唯一救われたことは、鷹緒から激励の電話が入ったことだ。あれがなければ、二次審査どころではなかったかもしれない。

「おかえりなさい。お疲れさま！」

事務所に入るなり、広樹や牧が沙織に声をかける。

「ありがとうございます。でも、結果はどうなるか……」

苦笑して沙織が言う。二次審査の合否は、後日書類で発表されることになっている。今はまだ手ごたえさえ感じられない。

二次審査を終えてホッとしながらも、未だ緊張した様子の沙織に、広樹が明るく声をかけた。

「最善を尽くしてくれたんだ。何も言うことはないよ。これからみんなで食事に行こうと思ってるんだけど、よかったら沙織ちゃんも一緒に行こうよ」

「はい」

事務所の雰囲気になった様子で、沙織が答える。そこに鷹緒が帰ってきた。

73：合否結果

そこに鷹緒が帰ってきた。すかさず広樹が声をかける。

「早いな、鷹緒」

「打ち合わせだけだから。おう、おかえり。どうだった？ 二次審査は」

鷹緒は沙織を見て尋ねる。

「やるだけのことはやったつもり……」

沙織の言葉に、鷹緒が微笑む。

「上出来じゃん。広樹、飯でも食いに行こうぜ」

「今、それ話してたところだよ」

一同は近くの料理屋へと足を運んだ。沙織の労いの意味も含め、その日の夕食会は楽しいものとなった。

終わってから、鷹緒は沙織を連れて、車で家へと戻っていった。

「部屋が隣つてのも、いいもんだな。送る手間が省ける」

鷹緒が言う。

「うん……」

「疲れたろ？ 今日はずっと寝ろよ」

「うん……」

さすがに疲れきった様子の沙織に、鷹緒は優しく微笑む。沙織は部屋まで送ってもらうと、そのまま倒れるように眠ってしまった。

鷹緒は沙織を送り届けると、自室へと入っていく。沙織の頑張りに、鷹緒も感心していた。自分にもいつかあったであろう情熱を、少しばかり沙織が思い出させてくれたような気がした。

数日後。事務所に、シンデレラコンテスト二次審査合格通知が届いた。次は三次審査のカメラテストがある。そこには鷹緒もカメラ

マンの一人として、参加することになっていた。

「なんか嘘みたい。本当に三次審査まで行けるなんて……」

事務所で、合格通知を見ながら沙織が言った。隣りには理恵がいて、同じように胸を撫で下ろしている。

「まだまだ、これからよ」

「はい……でも三次審査は鷹緒さんがいるんですよね？ 私、鷹緒さんと同じ事務所だし、ひいきだって失格にならないのかな……」

少し心配そうに、沙織が疑問をぶつける。理恵は軽く首を振った。「それなら大丈夫よ。カメラマンは三人。一人はフリーカメラマンだけど、もう一人は大手プロダクション所属のカメラマンよ。二次審査に合格している子の中には、その大手プロ所属の子も何人かいるはずだもの。先方もわかつていることだし、何の問題もないわ。被写体がしっかりしていればね」

「それが問題なんですよ……みんな可愛い子ばかりで、びつくりしました」

二次審査の様子を思い出し、沙織が俯いて言う。

「天下のシンデレラコンテストだからね。でも大丈夫よ。沙織ちゃんだって負けてないんだから。美形なのは、家系なのかしら」

理恵がそう言った時、鷹緒と助手の俊二が戻ってきた。

帰るなり、鷹緒は沙織に気がつき、近付いていく。

「おう。受かったって？ さすがじゃん。あとは最終審査まで一気だから、三次もその勢いで頑張れよ」

「うん！」

真っ先に鷹緒が声をかけてくれたので、沙織は嬉しそうに返事をする。

「こんにちは……」

その時、入口からそんな声が聞こえ、一同は振り向いた。

「あ、鷹緒さん！」

鷹緒に向かってそう叫んだのは、若い女性であった。派手なＴシャツにＧパン姿というラフな格好だが、そのふくよかな胸は隠しき

れない。

「おまえ……！」

鷹緒は、声にならないといった様子で驚いている。

「茜ちゃん！」

それに続いて、理恵と牧が同時に叫んだ。数年前まで広樹の事務所
所にいた、鷹緒の元助手である、三崎^{みさきあかね}茜だ。

茜の父親は、カメラマンとしての鷹緒を育てたような、鷹緒の尊敬する写真家である。そんな人物の娘である茜は、数年前にアメリカでカメラマンを続ける父を追って、事務所を辞めたはずだった。

「あ、牧ちゃん、久しぶり。あれ？ 理恵さんまで！」

茜は驚いたように、鷹緒と理恵を交互に見つめる。

「ふうん……楽しそうですね」

74：新たな訪問者

「ふうん……楽しそうですね」

そう言って、茜が目を細めて笑う。

「おまえ、何しに来たんだよ……」

そんな茜に、鷹緒が冷たく言った。

「冷たいなあ。でも鷹緒さん、全然変わってなくてよかった」

「とにかく入って。今、お茶入れるから」

牧はそう言って、給湯室へ向かう。

「……そっち、応接室」

そう言って、鷹緒は応接スペースを指差した。茜は変わらず鷹緒を見つめ、口を開く。

「鷹緒さんは？ 私、鷹緒さんと話したい」

「俺は仕事」

「じゃあ、ついてく」

「アホか。俊二、行くぞ」

鷹緒が俊二を呼ぶ。

「俊二？ 新しい助手さんだ」

興味津々で、俊二を見ながら茜が言う。鷹緒は溜息交じりに頷いた。

「そうだよ……」

「いつ頃帰る？ 話がしたいんだけど。ほら、パパから鷹緒さんに……」

その時、鷹緒は茜の口を手で塞ぎ、そのまま引きずるように入口の方まで連れていった。

「なによ」

人気のないエレベーターホールで、鷹緒の手から逃れた茜が言う。「あのことは、まだ誰にも言っなよ」

真剣な顔で鷹緒が言う。茜は首を傾げた。

「どうして？」

「どうしても。今はシンコンにかかりつきりだからな」

「シンコンって、シンデレラコンテスト？ ああ、もうそんな時期か」

「そうだよ。だから、どっちみちそれが終わらないと、俺は動けないからな」

鷹緒の言葉に、茜は頷いた。

「……わかった。じゃあ、一つだけ教えて」

「なんだよ？」

「どうして理恵さんがいるの？ 別れたんでしょ？」

ズバリと、茜が言った。

「……さあな」

触れられたくない話題に、目を逸らして鷹緒が答える。

「あ、まさか！ 元さやに戻ったの？」

茜の言葉に、鷹緒はうんざりした様子だ。茜は鷹緒の高校生時代から知り、結婚も離婚もすべてを知っている人物の一人である。

「違うよ……あいつは豪とよろしくやってんの」

「本当？ じゃあ鷹緒さん、まだフリー？」

「うるせえな……」

バツが悪そうにしながら、鷹緒が頭を掻いて言った。

「いいの、それがわかれば。じゃあ今夜、仕事が終わったら食事でも行こ」

「今日は遅くなる……」

「待ってるもん。食事してくれなきゃ、みんなに言いふらしちゃうぞ」

「おまえなあ……」

相変わらずの茜の勢いに、鷹緒は少し呆れ顔だ。

だが、そんな鷹緒に動じず、茜は変わらぬ笑みをこぼす。

「じゃあ、後でね！」

茜はそう言って、事務所へと入っていった。それを見計らって、

俊二が出てくる。

「鷹緒さん、あの人は……？」

凄い勢いの茜に圧倒されながら、俊二が尋ねる。

「……前にいた、俺の助手。おまえとはギリギリ被ってなかったな……行くぞ」

「はい」

二人は、事務所を出ていった。

「話は終わったの？」

牧が茜に尋ねる。二人は以前、同時期に同じ事務所で働いていたために、仲が良い。

「うん。牧ちゃん、本当に久しぶりだね」

大胆に笑って茜が言う。茜のおかげで、いつも忙しく騒然としていた事務所は、違う意味で明るく騒がしくなる。

「もう。いつも突然なんだから……」

「あはは。ごめん、ごめん。たまに日本に帰りたくなるのよね……」
お茶を受け取りながら、茜が言った。その時、茜と理恵の目が合った。

「理恵さん。お久しぶりです」

座り直して、茜が言う。

「ええ。本当に……」

「豪さんと寄り戻ったそうですね。今、鷹緒さんに聞きました」

図々しい口調でそう言った茜に、理恵は苦笑した。

「あはは……うん、まあね……」

「ラッキー！ 本格的に、強力キャラがいなくなったのね！」

「もう、茜ちゃんったら、相変わらずね。まだ鷹緒さんのこと好きなの？」

「当然！ 出会った頃から好きだったんだもん。あら、こちらは？」
牧の言葉を受けた茜が、沙織を見て尋ねる。

「小澤沙織ちゃん。今度のシンコン候補者よ。ついでに、鷹緒さん

の親戚」

鷹緒の親戚と聞いて、茜の目が輝いた。

75：豆台風のお越し

「マジ？ 鷹緒さんの親戚かあ。あの人にもそういう人がいたのね……はじめまして。私、三崎茜といいます。よろしくね」

可愛い笑顔で、茜が言った。

「……小澤沙織です。よろしくお願いします」

茜の勢いに呆気を取られながらも、沙織も挨拶をする。そんな沙織の手を取って、茜が握手をした。

「さすが鷹緒さんの親戚。可愛い！」

「あ、ありがとうございます……」

「実は私もね、シンコン出たことあるんだよ」

「え、本当ですか？」

茜の言葉に、沙織が驚いて言った。そばにいた牧が頷く。

「そうだったわね。茜ちゃん、グランプリ取ったんだっけ？」

「過去の栄光だけだね……今みたいに、全然グレード高くないし」

「いつ頃の話ですか？」

沙織が尋ねる。茜は少し照れながら、口を開いた。

「十七の頃だから、八年前か。うわ、年取ったな……」

「へえ、十七歳……」

二人はしばらくシンコンについて話した。

沙織は茜から聞く審査の内容などで、少しずつ緊張したり、気持ち的和らいだりするのだった。

「そろそろ事務所閉めなきゃね……ヒロさん、まだかしら」

しばらくして、理恵が言った。牧は時計を見て頷く。

「そうですね。今日は得意先周りやるって張り切ってましたけど、もうそろそろじゃないかしら」

「あの人、意外と外回り好きなのよね」

一同は、理恵の言葉に笑った。その時、広樹が戻ってきた。

「あ、ヒロさんすごい。以心伝心！」

茜が叫んだ。茜に気付いて、広樹が駆け寄る。

「おお、茜ちゃん。ずいぶん早かったじゃない。夜になると思ってたよ」

「なんだ。ヒロさん、茜ちゃんが来ること知ってたんですか？」

「うん、電話もらってたからね。バタバタしちゃって言いそびれたよ。鷹緒とは会ったの？」

牧の言葉を受け、広樹が茜に尋ねる。茜は頷いた。

「さつき、ちよこつとだけ」

「あははは。その様子じゃ、いつも通りの反応か」

「いいんです。優しくせにクールなところがカッコイイんだから茜の言葉に、広樹が苦笑する。

「あいつもモテるなあ……さて、着いて早々だけど、事務所閉めようか。僕はまだ仕事が残ってるから、みんな先に帰っていいよ」

「じゃあヒロさん、私も残っていいですか？」

茜が尋ねる。

「鷹緒を待つつもり？ 頑張るねえ」

「待ってるって、約束したんです」

「あはは。もちろんいいよ。僕もいろいろ話したいし」

「はい」

広樹の言葉に、茜はソファに座り直した。

「ヒロさん。沙織ちゃん、ずっと待ってたんですよ。はい、これ」

理恵が、二次審査の合格通知を広樹に渡して言う。

「ごめん、ごめん。合格通知だね！ まあ、ここまでは想定内だ。

三次審査は……来週か。ラストスパートかけなきゃね」

「はい」

沙織も笑顔で返事した。

「じゃあ、我々は帰りましょうか」

理恵が、沙織と牧に言う。

「はい。じゃあ、お先に失礼します」

理恵と牧は、事務所を後にした。

沙織は鷹緒を待つという茜のことが気になりながらも、理恵たちについて事務所を出ていった。

「茜ちゃんのパワーは相変わらずね……さすが豆台風」

外に出るなり理恵が言った。

沙織は首を傾げる。

「豆台風？」

「ああ、鷹緒がよく言ってたのよ、茜ちゃんは豆台風みたいだって。一種のあだ名ね」

「へえ」

「でも彼女がいると、事務所の空気が一気に明るくなるんですね。じゃあ、私はここで。また明日」

牧はそう言くと、別方向へと走っていった。沙織と理恵は駅へと歩いていく。

歩きながら、沙織は苦笑して口を開いた。

「茜さん、鷹緒さんのことが好きなんです。すごい勢いで、びっくりしちゃった……」

「うん。あの子の情熱はすごいわよ。まあ、若いつてそういうことなのかな……私も彼と初めて会った頃は、あんな風にはしゃいでたもん。でも、茜ちゃんは一途よね。私が結婚する前から、あんな調子だったから」

「へえ……」

「でも、あんまり気にすることないわよ。彼とあの子は漫才コンビって言われてたんだから」

「あはは。なんか、わかる気がする……」

笑ってそう言いながらも、沙織は茜のことが気になっていた。

事務所では、机に向かう広樹に、茜がお茶を差し出した。

「ありがとう」

「いいえ」

二人が笑顔で会話をする。

「相変わらず、お仕事大変そうですね」

「うーん、まあね。でも事務所も拡大しちゃったし、頑張らないと」
「……ヒロさん。どうして理恵さんを副社長にしたんですか？」

茜が尋ねた。

「どうしてって……」

「鷹緒さんの気持ち、考えなかったんですか？　一緒にいて、平気なはずなのに……」

突然、必死の顔になった茜に、広樹は静かに微笑む。

「うん……それは僕も考えたよ。だけどお互いによく話し合ったし、それは大丈夫だと信じた……それに、理恵ちゃんはその事務所で経験も積んできてるし、事務所拡大には必要な人材だと思うてるよ」
「……」

「まあ、君もしばらくは鷹緒と一緒に居られるじゃない。また事務所が明るくなって嬉しいよ」

「ヒロさん……」

「もう少しで仕事終わるよ。鷹緒もそろそろ帰ってくるんじゃないかな」

「……邪魔してごめんなさい」

そう言うと、茜は応接スペースへと戻っていった。茜は、鷹緒が理恵と一緒にいることが辛かった。

76：飲み会

「ただいま……」

鷹緒が事務所に戻ると、応接スペースで眠る茜の姿が見えた。苦笑しながら、鷹緒は奥へと進む。

「ったく、これだよ」

「おかえり」

そう言った広樹に頷き、鷹緒は自分のデスクに置かれた伝言などに目を通す。

「ああ。まだ仕事？」

「もう終わったよ。シンコンの資料を読んだところ。そっちは？」

「見ての通り。俊二も先に返したし。さあ、飯食いに行こうぜ。腹減って死にそう」

鷹緒はそう言っていると、帰り支度を始める。

「ああ。でも茜ちゃん、寝てるみたいだな」

「さすがに疲れてんだろ。長旅だからな」

「じゃあ、起こしたら可哀想だよ」

「それじゃあ朝まで起きねえぞ、あいつ」

「あはは、言えてる」

二人は笑いながらも、すぐに真剣な顔をした。

「……いよいよだな」

広樹が言った。

「まだまだ。シンコンは、これからだからな」

鷹緒は小さく溜息をついて、茜に声をかけた。

「茜。飯食いに行くぞ。おい！」

なかなか起きようとしないう茜に、怒鳴るように鷹緒が言う。

「うーん……」

「早くしないと、置いてくぞ」

「あ、待って！」

やっと気付いて、茜が飛び起きた。広樹は苦笑する。

「もう。寝かせといてあげればいいのに」

「だから、そうしたら朝まで起きないっての。ほら行くぞ」

「はい！」

三人は、近くの居酒屋へと向かっていった。

「乾杯！」

三人は酒を交わしながら、食事を始める。

「でも、本当に久しぶりだよな。もう何年？ 五年くらいになるかな。茜ちゃんがいなくなつて寂しかったよ」

広樹が言つた。茜も笑つて頷く。

「私ですよ、ヒロさん。パパを追いかけてニューヨークに行つたはいいけど、パパはパパで厳しいし、娘のことなんてお構いなしなんだもん。波乱の人生を送つてましたよ」

「親父さん、元気なのか？ まあ、この間電話あつた時は、相変わらずみたいだったけど」

今度は鷹緒が言つた。三人は共通の話題で盛り上がる。

「うん、もう超元気。そうそう、鷹緒さんに電話するなら、私が居る時にしてくれればいいのにね」

「ご冗談を」

久々に会つた三人に笑いが絶えることなく、夜中まで飲んでいった。

「うーん……」

「おい、広樹。大丈夫かよ？」

広樹を担ぎながら、鷹緒が言つた。

「うっん、気持ち悪い……」

「つたく、弱いくせに飲み過ぎなんだよ」

そう言つて、鷹緒はタクシーを止める。

「大丈夫か？ 行き先言えるな？」

「うん……おやすみー」

タクシーへと乗り込んだ広樹は、陽気に手を振って去っていった。鷹緒は溜息をついて振り向くと、今度は茜が電信柱に寄りかかって眠っている。

「ったく、どういつもこいつも……」

うんざり顔の鷹緒は、茜に駆け寄る。

「おい、茜。こんなところで寝るな」

「わーい。鷹緒さーん！」

酔った茜が、鷹緒に抱きついて言った。

「帰国早々、問題児だな。おまえは……ホテルどこだよ？　タクシー拾うから」

「ホテル？　そんなの取ってないよ」

「え、だって、しばらくこっちにいるんだろう？　どこかアテでも

……」

「鷹緒さんちー」

「アホか」

酔って絡む茜を立たせながら、鷹緒が言う。

「だって広いじゃん」

「関係ないし」

「じゃあなに？　女の子一人、路頭に迷えっての？」

「逆ギレすんなよ」

茜は、そのまま眠ってしまった。

「おい。起きろって！」

「うーん……」

「ったく、どうすりゃいいんだよ……」

鷹緒は溜息をつきながら、仕方なくタクシーを拾い、茜を連れて自分のマンションへと向かっていった。

77：誘惑

「ほら、着くぞ」

タクシーの中で、鷹緒が言った。

「ん、ここは？」

茜が目を覚まして尋ねる。

「俺んち。でも、一泊だけだからな」

「わーい。鷹緒さんち！ 久しぶり。まだここなんだ」

見覚えのあるマンションに、茜が笑う。少し寝たからか、もう酒はだいぶ抜けた様子だ。

二人はタクシーから降りると、マンションへと入っていく。

「あと、騒ぐなよ」

「なによ。女囲ってるわけでもあるまいし」

「隣に沙織がいるんだよ」

「沙織って……鷹緒さんの親戚っていう？」

「そう。シンコン終わるまで、ここに置いてんだよ。実家、少し遠いから」

そう言って、鷹緒は部屋の鍵を開けた。

「わあ。変わってない！ 鷹緒さんの部屋だ」

リビングまで駆け込んで、茜が言う。

「だから、騒ぐなって……」

そう言う鷹緒に、茜が抱きついた。

「……まだ酔ってんのか？」

「違う。私、今でも鷹緒さんのことが好きだよ……」

真っ直ぐな目で茜が言った。鷹緒は無言のまま、茜を見つめている。

「……」

「もう私、二十五だよ。前に鷹緒さん、“今の俺と同じ年になったらつき合っの考える”って言ってたよね？ あ頃の鷹緒さんの年、

もうとつくに越したよ」

「……確かに、おまえは大人になったよ」

「……鷹緒さん」

茜は、鷹緒の眼鏡を取った。

「なにすんだよ」

「いいじゃない。どうせ伊達でしょ？ 前みたいに、私を見てよ」
そう言って、茜は鷹緒にキスをしようとする。

その時、リビングのドアがノックされ、鷹緒は茜から離れた。

途端に、茜は持っていた鷹緒の眼鏡を落とし、鷹緒が踏んでしまった。

「イテッ……」

割れた眼鏡が、床にある。だが鷹緒はそれ以上、何も言おうとしない。そんな鷹緒を尻目に、茜がリビングのドアを開けた。

「ハイ」

茜がドアを開けたので、向こう側にいた沙織は驚いた。

「茜さん……」

「そんなびつくりした顔しないで。まあ、確かにいいところではあったんだけど、やましいことは何もないから。さあさあ、入って」

ドアを大きく開けて、茜が言う。

「勝手に決めんな……沙織、何か用か？」

ソファに座りながら、鷹緒が尋ねる。

「あ……うん。シンコンのことで、もうすぐ三次審査だから、いろいろ聞こうと思って……」

長めの前髪に隠れながらも、鷹緒の顔に眼鏡がないので、沙織は興味深そうに鷹緒を見つめている。

軽く頭を掻きながら、鷹緒は口を開いた。

「三次はカメラテストだけだし、大して頑張りようがないよ……まあ、俺に任せとけって」

「うん……」

「じゃあ、沙織ちゃん。私と語り合おうよ。シンコンについて、い

ろいろ教えてあげる！ 私、ホテル取ってなくてさ。今日だけ鷹緒さんのところにお世話になるうかって考えてたの。前も遅くなつて、ここでみんなで雑魚寝なんてよくあったし。そんな顔しないで、気にしないでちょうだいよ」

弾まない会話を遮って、茜が言った。

「それより、沙織ちゃんが隣なんて助かる。ねえ、よかつたらそっちに泊めてくれない？ やっぱ男女が同じ屋根の下ってのはまずいと思うんだよね。ほら私つてば、前より色っぽくなってるからさ。鷹緒さんもドキドキしちゃうでしょ？ 沙織ちゃんさえよければ、シンコン終わるまで……」

「茜。なに勝手に決めてんだよ」

どこまでも続きそうな茜のマシガントークに、鷹緒が言う。

「もちろん、沙織ちゃんが嫌って言えばしょうがないもん。どうする？ 私をそつちで寝かせるか、鷹緒さんと添い寝させるか」

少し沙織を挑発するように、茜が言った。

「誰が添い寝だ……床で寝ろ」

うんざりしながらもそう言う鷹緒だが、茜と仲が良いということは一目瞭然である。

沙織は静かに口を開いた。

「……私は構わないですけど」

「やった！ じゃあ鷹緒さん。そういうことで、また明日」

茜はそう言うと、沙織を連れて鷹緒の部屋を出ていった。

「ったく。本当に、いつまでたっても豆台風だな……」

鷹緒は、溜息混じりにそう言った。

78：真夜中の告白

「ねえ。沙織ちゃんも、鷹緒さんのことが好きなんだね！」

隣のリビングで、ソファに座りながら茜が言った。沙織は小さく頷く。

「茜さんも……ですよね？」

「そう。私はもうずっと鷹緒さん一筋よ。じゃあ、私たちライバルか……でも私はオトナだし、待つのは慣れてるの。沙織ちゃんは沙織ちゃんて頑張ってね。私は私のやり方で口説く！」

すごい勢いで茜が言うので、それがおかしく思えて、沙織が笑った。

「あ、笑った。可愛い」

「もう、茜さんったら」

「私ね、うるさいかもしれないけど、気持ちは沙織ちゃんと一緒だから。だから、一緒に頑張ろうね……」

重いまぶたに、茜はそのままソファに横になると、すぐに眠りについていった。

沙織は一瞬で寝入ってしまった茜に苦笑すると、毛布をかけてやり、寝室へと向かっていく。同じ恋のライバルだが、憎めない人だと思った。

鷹緒は割れた眼鏡を拾うと、ソファに座ってそれを見つめた。片方のレンズが完全に割れている。前に豪とやり合った時にもフレームがひしゃげてしまっていたので、今回はかりは再起不能なようだ。大して目が悪いわけでもないが、思えば十年以上かけているその眼鏡は、生活の一部になっている。

「はあ……」

溜息をついて、鷹緒は棚に眼鏡をしまった。

「ったく、豆台風が……」

そう呟いた時、リビングのドアがノックされた。鷹緒は返事をする。

「……はい」

「わ・た・し……」

茜の声が聞こえる。

「……そちらのドアは、現在封鎖されております」

冷めた目で、鷹緒はリビングのドアを見つめながら言った。
すると勢いよくドアが開き、茜が入ってきた。

「なによう!」

「勝手に入るなよ」

「まあまあ」

「……沙織は?」

鷹緒が尋ねる。

「もう寝ちゃったみたい。私もいつの間にか寝てて……鷹緒さんは、
相変わらず夜型人間ですねえ」

「誰かさんのせいで、目が冴えちゃっただけだよ」

「ふうん? 私が来たことが、そんなに嬉しいんだ」

「なに馬鹿言つて……」

そう言う鷹緒に、茜が熱い視線を送る。

「……なんだよ?」

「久しぶりだね。眼鏡のない鷹緒さんを見るのも……」

「俺だつて、人前で外すのは久しぶりだよ」

小さく溜息をつきながら、鷹緒が言った。

「いいじゃない。どうせ伊達でしょう? 女よけか。鷹緒さんは、
眼鏡がない方がカッコイイの」

「アホか。だからって、大事な眼鏡壊されてたまるかつーの」

鷹緒は軽く、茜の頭を叩いた。

「イタツ。まあ、私のせいで壊しちゃったのはごめんなさい……」

「……もういいよ。どうせ伊達だろ?」

軽く笑うと、鷹緒は台所へと歩いていった。そして冷蔵庫を覗い

て尋ねる。

「コーヒ―？ ビール？」

「もちろん、ビール」

茜の言葉に、鷹緒がビールを手渡す。そんな鷹緒に、茜が不気味に笑った。

「うふふふ」

「なんだよ。気持ち悪い……」

「やっぱり優しいんだ。私、そういうところが大好き」

あっけらかんとそう言う茜に、鷹緒が苦笑する。

「相変わらずだな、おまえは」

「……鷹緒さん。私、まだ鷹緒さんのこと好きよ。鷹緒さんはどう？ 気持ちは変わらない？ 私のこと、女として見れない？」

ズバズバとそう言う茜は、鷹緒を見つめたまま目を反らさない。

「……そうだな。あの頃から……もしまた誰かと結婚するんだとしたら、おまえだろうと思ってたよ……」

79：返事

「もしまた誰かと結婚するんだとしたら、おまえだろうと思ってたよ」

鷹緒が静かにそう言った。

茜も初めて聞く言葉に驚き、耳を傾ける。

「……本当に？」

「ああ。だけど……」

「だけど？」

「悪いけど……俺、おまえがいくら頑張ってくれても、もう結婚とか恋愛とか、そういうの考えられないと思う」

いつになく真剣な顔で、鷹緒が言った。鷹緒もまた、茜から目を反らすことはなかった。

冗談交じりではなく、面と向かってフラれたのは初めてだった。絶望的な気持ち茜が襲う。

「なんで……なんでよ！ 私の愛が足りないならもっと頑張るよ。」

うざいんだったら、ニューヨーク帰る。それでも駄目なの？ どうして！」

鷹緒の胸元を掴んで、茜が言った。

「どうしてって……しょうがないだろ」

「しょうがないもん！」

「茜……」

そう言う鷹緒は、本気で困っているようだ。

「嫌だ……嫌だ！」

茜は鷹緒にそう言いいいながら、鷹緒の肩を平手で叩き続ける。鷹緒は直立不動のまま、やがて静かに口を開いた。

「……いつか……俺、おまえに逃げたことあったよな？ 理恵と別れて、おまえと一緒にいたらどんなに楽かっと思った……」

「そっだよ。鷹緒さん、私の胸で安心して眠ったじゃない……」

二人の過去が浮き彫りになる。

たった一度だけだが、二人は一つになった時があった。それは、鷹緒が理恵と別れてしばらくした日の、互いに求め合った一度だけの朝だった。

「うん……でも、やっぱりおまえとつき合っことは出来なくて、しばらくして、おまえは日本を発つただろ？ あれからずいぶん年が過ぎたけど、本質的に俺は何も変わってない……鈍くて不器用で、人の気持ちなんて考えられない、ちっぽけな男だ……」

「……鷹緒さん？」

鷹緒の言葉に戸惑いながら、茜は鷹緒を見つめる。

「あれからいろいろ考えてきたつもりだけど、俺は多分、もう人は愛せない……というより今までも、本気で人を愛してきたかどうか疑問なんだ……もし俺がまた結婚したいと思うようなやつが現れるとしたら、そいつが俺の最後の一人になるんじゃないかな……」

自問自答を繰り返すように、鷹緒が続けた。

そこまで鷹緒の本音を聞くのは、茜自身も初めてだった。

「その最後の一人は、確実に私じゃないの……？」

「うん。多分……」

ゆっくりと、静かに鷹緒が答えた。茜は続ける。

「……1%の可能性も、私にはないの？」

「……うん」

躊躇いながらも、鷹緒がきっぱりとそう言ったことで、茜は満面の笑みを零した。

「わかった。でも私の気持ち完全に晴れるまで、私の恋は消えないから」

「……わかった」

「はつきり言ってくれてありがとう……じゃあ寝るね。おやすみなさい」

そう言つと、茜は隣の部屋のリビングへと戻っていった。

鷹緒にこれだけきっぱりとフラれたのは初めてだったが、逆に晴

れた気持ちもあった。

茜はその夜、失恋に泣き腫らした。もういくら頑張っても、鷹緒が振り向くことはないのかもしれない。絶望感が、茜を包んだ。

鷹緒も、部屋で思い悩んでいた。決して茜が嫌いではない。さっきの会話はすべて本心だった。だが鷹緒の中で茜は、一度も恋愛の対象としては見れていない。それでもなお慕ってくる茜に、本音を言うことできっぱりと答える必要があると、前々から思っていた。

数年間で、自分も少なからず新しい環境が出来ている。そんな中で茜が前へ進むためにも、もう鷹緒は優柔不断ではいけないのであった。

数日後。茜はそのまま、沙織の部屋に居ついてしまった。鷹緒に初めてきっぱりとフラれたが、特に鷹緒への接し方に変わった様子もない。

沙織も、茜が居ることが嫌ではなかった。なにより鷹緒の部屋に居つくよりはいいと思う。二人は次第に打ち解け、沙織はコンテストについてのアドバイスも、進んで茜に尋ねていた。

「鷹緒さん。出張って本当？」

事務所で、茜が鷹緒に言った。

「ああ、九州にな……それよりおまえ、もうここの人間じゃないんだし、毎日事務所に入り浸るのやめろよ」

「私は沙織ちゃんのマネージメントをしてるんです」

「それなら理恵がやってる。泊めてやってるだけでも感謝しろ」

「ひどーい」

「じゃ、行ってきます」

そう言つと、そばに居た沙織と茜を尻目に、鷹緒は慌しく出ていった。

「鷹緒さんも、相変わらず忙しいんだ……シンコン三次審査の直前に帰ってくるんだってね」

「はい。でも、三次審査で会えるから……」

茜の言葉に、沙織が言う。

「そっか。カメラマン、鷹緒さんだもんね。きっと綺麗に撮ってくれるね」

「えへへ……」

二人は笑いながら、鷹緒の話をした。

80：三次審査

数日後、シンデレラコンテスト三次審査、当日。

あれから鷹緒に一度も会うことなく、沙織は今日を迎えていた。緊張しながら順番を待つ。だが、鷹緒に会える喜びを噛み締めていた。気付けば沙織は、鷹緒の存在が日増しに大きくなっていることを思い知らされている。

「七十二番の方、どうぞ」

そう言われ、沙織が立ち上がる。

理恵は心配そうに見つめているが、ここから先は理恵も入ることが出来ない。

「行つてきます」

沙織はそう言うのと、部屋の中へと入っていった。

大きなホールのような部屋は、大きく仕切られている。三人のカメラマンによるカメラテストだが、一人一人行われるようだ。仕切りごとにカメラマンがいるらしい。

一人目は、大手プロダクション所属のカメラマンだった。

カメラテストの様子も審査対象になるようで、審査員が遠くから見ている。

「じゃあ、目線そのままこっちにください」

中年のカメラマンが言った。

最初は固い表情だった沙織も、練習を思い出して徐々に慣れていく。数枚の写真を撮ったところで、次のブースに行くよう指示された。

隣のブースには、鷹緒がいた。久しぶりに見る鷹緒に、沙織は嬉しくなった。

鷹緒はまだ前の少女を撮っている最中で、少女に笑いかけている。その様子が遠い存在のように思えて、沙織の胸を締めつけた。

「はい。次、お願いします」

そう言いながら、鷹緒が沙織に気付いた。優しく笑いながら、鷹緒が口を開く。

「諸星です、よろしく。お名前と番号をどうぞ」

「……七十二番。小澤沙織です。よろしくお願いします!」

少し緊張気味に、しかし鷹緒と会えた喜びに頬を染め、沙織が言った。

「はい、よろしくお願いします」

それに応えて、鷹緒も笑った。

「じゃ、そこに立って」

鷹緒の指示に、沙織が所定の位置に立つ。急に鷹緒の目が真剣になった。鷹緒に写真を撮られるのは初めてではないが、緊張する。

限られた時間の中で、カメラマンも必死のようだった。被写体がよければ、撮れる写真のグレードも高い。なにより、自分が撮った写真でグランプリに選ばれば、カメラマンの質も上がるというものだ。

鷹緒はそんなことは考えていないように思えたが、一心不乱に仕事をこなしているように見えた。だが、写真を撮る時の鷹緒は、いつ見ても楽しそうに輝いている。

「まだ緊張してる? もっと笑顔が欲しいな」

そんな鷹緒の言葉に、沙織が笑う。しかし、まだ表情が固い。

「……なあ。俺、太ったと思わない?」

おもむろに鷹緒がそう言った。沙織は素に戻って聞き返す。

「え?」

「出張で福岡に行ったんだけど、毎食ラーメンでさ。あまりの美味さに、夜食まで食っちゃった」

「毎食? ウッソ!」

鷹緒の言葉に乗って、沙織が言う。

「ホント。すごい美味いんだもん」

「あははは。だからって……」

「よし、いい顔撮れた」

カメラを離し、鷹緒は沙織に笑いかける。

「お疲れさま。その調子で頑張つてね」

そう言った鷹緒に、沙織は大きく微笑み、お辞儀をする。

「ありがとうございました！」

良い表情をして、沙織は次のブースへと向かっていった。あつという間の時間であつた。鷹緒も微笑んで、仕事を続けた。

カメラテストが終わって、沙織は理恵のもとに戻っていった。

「どうだった？」

すかさず理恵が尋ねる。

「緊張したけど、面白かったです」

「そっか。鷹緒さんもいた？」

「はい、バッチリ仕事してましたよ。今日はこれで終わりだそうです」

沙織が、最後にもらった紙を見せて言った。理恵はそれを見て頷く。

「じゃあ、帰ろっか」

「はい」

二人は事務所へと戻っていった。

三次審査はカメラテストだが、後日一般投票がある。一週間後に出るいくつかの週刊誌に、沙織たちの写真が出る予定だ。またインターネットや街頭インタビュー、各所の企業にも張り出されることになっている。それらの一般投票、審査員投票によつて、最終審査へ上がれることになっていた。カメラテストを終えた今、三次審査で沙織が出来ることはもうなかった。

その日、沙織はマンションで、遅くまで鷹緒の帰りを待っていたが、鷹緒は帰ってこなかった。

次の日。沙織が事務所へ行くと、広樹が声をかけた。

「沙織ちゃん。昨日はお疲れさま」

「お疲れさまです」

沙織が返事をする。

「どうしたの？ 今日はおフじゃないの？」

「あ、はい。でも、なんか暇で……」

「あはは。たまのオフも、確かに辛いものがあるよね。茜ちゃんは？」

「まだ寝てました」

二人は苦笑する。もはや茜は沙織の同居人となっており、自由気ままにしている。

「そう。ああ、じゃあちよつと、鷹緒の様子見てきてくれないかな？ 食料調達してさ」

そう言つて、広樹が二千円を差し出す。

「いいですけど、スタジオですか？」

「うん。昨日から缶詰め。シンコンの写真、加工してるはずだよ」

「でも、写真は現像したら終わりなんじゃ……」

「それは、シンコン実行委員会の方ね。それとは別に、これと思う写真をカメラマンが提出するんだ。何人でもいいんだけどね」

「へえ……」

「だからカメラマンも審査員の一人つてわけ。審査を左右するもんでもあるしね。とにかく飯もろくに食つてないと思うから、何か買つて行つてやつて。沙織ちゃんも、好きな物買つていいよ」

「わかりました。ありがとうございます」

沙織は鷹緒に会えることで、嬉しそうに事務所を出ていった。

81：差し入れ

健康に良さそうな弁当を選び、お茶と缶コーヒーを買つと、沙織はスタジオへと向かつていった。

半地下の広いスタジオは、眩しい日の光もほとんど入らない。そんな中で、ぽつんと鷹緒がパソコンに向かっていている。

「……鷹緒さん」

沙織が声をかけると、鷹緒が振り向いた。

「おう……どうした？」

「差し入れ。ヒロさんから」

「サンキュー……おまえが来たつてことは、今何時だ？」

時計を探しながら鷹緒が尋ねる。この場の雰囲気は、まるで深夜だ。

「十時半」

「ああ、もうそんな時間か……」

伸びをしながら鷹緒が言った。そして立ち上がると、沙織から弁当を受け取る。沙織も座つて、弁当を開けた。

「……昨日はお疲れさまでした。ありがとうございました」

改まって、沙織が言った。

「いえいえ。仕事ですから」

二人は笑った。そして沙織は、鷹緒の目の前にあるパソコンを指さす。

「見てもいい？」

「ああ……」

沙織がパソコンを覗くと、そこには沙織とは違う少女が映し出されていた。沙織は不安げな表情をして、画面を見つめる。

「……推薦するの、私じゃないの？」

「え？」

「ヒロさんが言ってたの。三次審査はカメラテストで、一般と審査

員投票だけじゃなくて、カメラマンによるベスト写真も審査を左右するって……」

「おまえのは、さつき終わったとこだよ」

弁当を頬張りながら、鷹緒がプリンターを箸で差して言った。そこには、沙織の姿が打ち出されている。

「これ、私？」

沙織は信じられないといった表情で、写真を見つめる。まるで自分ではないような、可愛い少女がそこにいた。

「運がよかったな。俺がカメラマンなんて」

不敵に微笑みながら、自慢気に鷹緒が言う。

「うん。でも、どうして他の子も？」

「ああ、なんかそこに写真があると、手を出したくなるんだよね……もちろんおまえのことは推薦するけど、他にも何人かいい写真撮れた子がいるから、それだけは一応加工しておくだけだよ」

「そうなんだ……」

鷹緒は早々に弁当を食べ終わると、缶コーヒーを開け、煙草に火をつけた。

「……鷹緒さん、眼鏡どうしたの？」

突然、沙織が尋ねた。

先日から、鷹緒はいつもかけていた眼鏡をしていない。聞く暇もなかったが、そこには素顔のままの鷹緒がいる。

「……壊れた」

大きく煙草の煙を吐きながら、鷹緒が言った。

「買わないの？」

「んー、もともと伊達みたいなものだったしな」

「へえ……なんか眼鏡をしてない鷹緒さんって、若い人みたい」

「ハハ。なんだそりゃ」

鷹緒は苦笑しながら伸びをした。そんな鷹緒に、沙織が口を開く。

「ねえ、鷹緒さん……」

「ん？」

「……茜さんとは、つき合ってたの？」

「え？」

突然の込み入った質問に、鷹緒は聞き返した。

「……なんで？」

「ううん。なんか仲良さそうだから……」

「ハハハ。あれが？」

鷹緒は煙草を揉み消して、言葉を続ける。

「あいつは、俺の写真家の先生の娘。小学生の頃から知ってるし、あいつは昔からああなの」

「でも、鷹緒さんのこと好きだって言ってくれてるのに……何度フラれたかわからないって、茜さん言ってたよ」

そんな沙織の言葉に、鷹緒は静かに微笑む。

「……今はまだ面倒くさいんだ。仕事一筋だからな、俺は……さて、仕事するか」

「あ、ここにいてもいい？ 今日はおフなの」

沙織が言う。鷹緒と一緒に居たかった。

「邪魔しないならな。でも、つまらないぞ？」

「平気」

「……じゃあ、ご勝手にどうぞ」

そう言って、鷹緒は仕事に戻った。

沙織はそのまま、部屋の隅で本を読んだり、気ままに過ごしていた。

夕方近くになって、やっと鷹緒が立ち上がる。その頃には、あまりの穏やかな時間に、沙織は眠り込んでしまっていた。

「沙織、起きろよ。終わったぞ」

鷹緒の声に、沙織は目を覚ました。

82：投票結果

鷹緒の声に、沙織は目を覚ました。

「あれ……終わったの？」

「ああ、もう夕方だ。夕飯食べに行くか」

「うん。でも、終わった仕事、正式に現像しに行ったりしないでいいの？」

沙織が尋ねる。

「こっちは三次審査の集計の頃で全然平気だから。最悪、出さなかったていいし。ただ、ファイナルのベストフォト賞っていう賞のために、カメラマンがどれだけいい写真を撮れたかっていう、審査の参考程度のもものだからな。あってもなくてもいいんだよ」

「え、じゃあどうして、寝る間を惜しんでまでやってるの？」

「そりゃあ、事務所としてはおまえの写真は必要だし、俺は仕事をずるずる引張るのが嫌いなんだよ。ほら、行くぞ」

そう言って、鷹緒はスタジオを出ていく。沙織も慌ててついていった。

「あーあ。太陽逃したな……」

夕暮れの街を見ながら、鷹緒が呟く。

「本当。私も休みを逃したな」

「だから、ここにいてもつまらないって言っただろ」

「いいの！」

沙織は、鷹緒のそばに居られる幸せを感じていた。他愛もないこの時間が好きだった。

数日後。早くもシンデレラコンテスト三次審査の一般投票が行われた。街頭インタビューのほか、インターネットやテレビ局、企業などで写真が張り出され、数社の雑誌で同じコーナーを組み、大々

的に行われる。

「わあ、出てる。可愛く撮れてるじゃない！」

雑誌を見て、茜が言った。

三人のカメラマン別に、少女たちの写真が並んでいる。二次審査で絞られたといっても、その数はかなりある。

「やっぱりどの子も、鷹緒さんの写真が一番いい顔してるわ。もちろん、沙織ちゃんも！」

茜が言った。沙織は照れながら雑誌を見つめる。素直に、鷹緒の才能はすごいと思った。

一週間後。三次審査の一般投票集計が始まった。その結果次第で、最終審査まで行けるかがわかる。

正直、沙織が受かるかどうかは誰にもわからなかった。美少女といえど、みな美少女だ。結果は、今日の午後七時までに電話がくれば合格となっていた。

事務所の電話の前で、事務所の関係者一同が張りついているが、鷹緒だけは仕事でいない。

「ああ、もう。トイレにも行けないわ」
牧が言った。

「わかる。僕もだよ」

広樹も苦笑して言う。

その時、鷹緒が帰ってきた。

「ただいまー……」

「静かに！ 電話の音が聞こえなかったらどうするんだよ」

慌てて広樹が言った。鷹緒は一瞬、怪訝な顔をして、奥へと入ってくる。

「……馬鹿馬鹿しい。みんなして何やってんだか。電話使っていないか？」

「馬鹿はおまえだ！ 少しは考えろよ！」

「なんだよ、ピリピリしやがって……」

鷹緒はそのまま奥の社長室へ向かい、携帯電話をかけているようだった。

その時、約束の七時になった。一同は落胆の顔を見せる。そばにいた沙織も、申し訳ないといった表情である。

「まあ、よくやったよな……」

「そうだね。残念だけど……」

「おい、広樹」

落胆している一同をよそに、鷹緒が社長室から出てきた。広樹は珍しくイライラした様子で、鷹緒に振り向いた。

「なんだよ、おまえは……」

「シンコンのファイナルだけど、沙織の衣装どうすんだ？」

「衣装って……落ちたのにか？」

「え？ まだ連絡いつてないのか？」

その時、電話が鳴った。慌てて広樹が電話を取る。

「はい、WISM企画プロダクションですが……」

「遅くなって申し訳ありません。全日本・ミス・シンデレラコンテストご応募の、小澤沙織さんの事務所さんでよろしいでしょうか？」

慣れた様子の、男性の声だった。

「はい、はい。そうです！」

「遅くなりましたが、おめでとうございます。小澤沙織さん、合格です」

「本当ですか！」

『はい。つきましては、来週グランプリファイナルがございますので、よろしくお願い致します。詳細につきましては、これからファックスをお流し致しますので』

「わかりました。ありがとうございます！」

広樹は電話を切った。そして鷹緒を見つめる。

「鷹緒、おまえ……知ってたな！」

「当然。俺はシンコンのカメラマンだぞ？」

苦笑しながら鷹緒が言う。しかし一同はホッとした様子で、口々に歓喜の声を上げた。

「本当ひどいわ、鷹緒さん！ でも、ということは、沙織ちゃんはファイナルに行けるってことよね？」

「そうだよ。やったね！」

「ああ、よかった……」

沙織も胸を撫で下ろした。そんな沙織に、鷹緒が微笑みかける。

「悪かったな。言えなくて……」

「……いつから知ってたの？」

「ん……今朝だよ。打ち合わせに行ったら、ちょうど集計が終わったところだったわけ。まあ、身内でもしゃべっちゃいけないのがルールだからな……悪かったよ」

苦笑しながら、鷹緒が言った。

「よかった……」

「よし、じゃあ今日は、パーっと飲みに行こう！」

「賛成！」

一同は、そのまま近くの小料理屋へとなだれこんでいった。

沙織は受かってよかったという安堵感と、決勝まで残ってしまったという荷の重さに、少し不安な表情を見せていた。

「沙織。疲れてるか？」

飲み会が終わり、店を出たところで、鷹緒が沙織に尋ねた。

「え？ ううん、大丈夫……」

「じゃあ、ドライブでも行く？」

83：ドライブ

「じゃあ、ドライブでも行く？」

突然、鷹緒がそう言った。思わぬ誘いに、沙織は大きく頷く。

「え？ う、うん！」

「ええ、いいなあ」

茜が羨望の眼差しで見つめる。

「おまえは一人で帰れ」

鷹緒が言う。

「まあ、今日は沙織ちゃんが主役だもんね……おとなしく帰りますか」

「おう。じゃあ、お先に」

そう言うのと、鷹緒は沙織を連れて、駐車場へと向かっていった。

「どうしたの？」

車に乗り込むと同時に、沙織が尋ねる。

「べつに？ ただ、もうすぐファイナルじゃん。息抜きも必要だろ？」

鷹緒は車を走らせる。そんな鷹緒の優しさが心地良かった。

しばらくして車が止まったのは、沙織の実家であった。電話はよくしているのだが、このところ帰っていない。

「ここ……」

「たまには顔見せてやれよ。心配してたから」

鷹緒の言葉に、沙織が驚く。

「電話がきたの？」

「しょっちゅうくるよ」

「もう、お母さんったら……」

二人は苦笑して、玄関へと向かっていった。久々の我が家に、沙織もとても嬉しかった。

「沙織、おかえりなさい」

家に入るなり、母親が出迎える。

「鷹ちゃんも、お世話かけてごめんなさいね」

「いえいえ。おかげさまで、事務所も大助かりですよ」

「さあ上がって」

二人は中へと入っていった。相変わらず父親は忙しらしく、母親は親しいない。

「もう、沙織がいなくなってから、本当につまらないのよ、この家」
「嘘ばかり。お稽古事で忙しいくせに」

母親の言葉に、沙織が突っ込む。

「うるさいわね。それで、どうなの？ グランプリまで行けるなんて思ってたかったら、本当に嬉しかったのよ。もちろん私もお父さんも投票したからね」

「ありがとう。来週ファイナルだって」

「そう。テレビとかにも出るのよね？ ドキドキしちゃう」

「相変わらずミィハーだなあ……」

久しぶりに会う母親を前に、沙織はその日、鷹緒とともに遅くまで話をしていた。

「今日はありがとう」

帰りの車の中で、沙織が言った。鷹緒は前を見つめたまま、優しく微笑む。

「いいや。お疲れさん」

「そろそろ顔を出そうと思ってたの」

「ああ、喜んでてよかったじゃん」

「うん」

「沙織……まだ元気あるか？」

変なふうに、鷹緒が尋ねた。

「え？ うん……」

「星、見に行こうか」

「うん！」

鷹緒の提案に、沙織が乗る。

「よし」

鷹緒はそのまま、近くの峠まで車を走らせた。

「わあ……」

車から降りた沙織は、圧倒されるように空を見上げて言った。決して地方の山ではなく、そばには住宅街もあるはずだが、星空が綺麗に見えている。

「結構すごいだろ？」

「うん、すごい……」

沙織は本当に感動していた。空を見上げたまま倒れそうな沙織を、鷹緒が押さえる。

「大丈夫かよ？」

「うん、なんか圧倒されちゃって……すごいね」

後ろから沙織の腕を掴んだまま、鷹緒も一緒に空を見上げた。

「ああ。ここは割と近いから、嫌なことがあつたりすると、よく来てた……」

「……一人で？」

「ああ。ここに連れてきたの、おまえが初めてだよ」

「……嬉しいな……」

鷹緒の腕の中で、沙織はこれ以上ないというまでの幸せを感じていた。

しばらくして、鷹緒が口を開く。

「さあ、帰るか」

「うん……」

少し寂しくなりながらも、沙織は幸福感を噛み締めて車へと乗り込み、マンションへと帰っていった。

「今日はありがとうございました」

部屋の前で、沙織が言う。

「いえいえ、こちらこそ。遅くまでつき合わせまして」

鷹緒は自分の部屋の鍵を開け、沙織に微笑みかける。そしてつけ加えて言った。

「……沙織。もうすぐファイナルだけど、焦らずいけよ。おまえは、そのままでもいいから」

「うん、ありがとう。おやすみなさい！」

沙織は笑ってそう言っていると、自分の部屋へと入っていった。

鷹緒はそれを見届けると、部屋のドアを開けた。

84：最終審査

翌週。全日本・ミス・シンデレラコンテストの最終審査がいよいよ行われる。総勢二十名に絞られたシンデレラ候補は、沙織を含め、みな緊張していた。

「じゃあ沙織ちゃん、頑張つてね。あんまり緊張せず楽しむのよ」

「楽にしてね。ファイト！」

「頑張つてね。僕たちは客席で応援してるよ」

理恵に続いて、茜と広樹が言った。他には沙織を追って取材を続ける記者たちもいる。中には記者の豪もいた。

「精一杯頑張ります」

緊張しながらも、沙織が応える。心配そうにしながらも、理恵たちは客席へと向かっていった。

ここからは、理恵たちに出ることは何もなく。たった一人、沙織は受付へと進んでいく。すると受付のそばに、鷹緒の姿があった。受付に並ぶ少女たちを写真に収めているようだ。

沙織は一瞬にして顔を紅く染める。

「諸星さん！」

三次審査で打ち解けた様子の少女たちが、鷹緒に声をかける。少女たちもまた、知っている顔にホッとした様子だ。

「いよいよだね。頑張つてね」

写真を撮りながら、鷹緒は少女たちに労いの言葉をかけている。

そんな中で、沙織の番になった。

「いい顔一枚ください」

鷹緒の言葉に、沙織が吹き出した。すかさず鷹緒がシャッターを切る。

「ありがとう。中でも撮らせてもらうと思うから、よろしく。頑張つてな」

「はい！」

沙織は良い返事をする、中へと入っていった。鷹緒がそばにいるという安心感が強くあった。

それからしばらくして、衣装に着替え、メイクも終わった沙織は、他の候補者とともにステージへと上げられた。軽く説明があっただけで何があるかはわからない。けれど舞台袖から見える鷹緒の姿に、沙織は心を落ち着かせた。

ふと隣を見ると、可愛らしい少女が立っていた。テレビでも見たことのある、駆け出しのタレントである。

（こんな子まで出るんだ……）

沙織は少し不安になったが、もう一度鷹緒を見た。すると鷹緒も気付いて、小さく手を振る。もう後戻りは出来ないと、沙織は覚悟を決めた。

最終審査は、ファッションショー張りの衣装審査だ。水着ではないものの、少女たちのプロポーションを見ている。顔と釣り合わない体系は却下なのだ。それに関しては、ファイナルまで残った少女たちだけあって、みな相応である。

それが終わると、歌唱力審査が行われた。本来なら特技披露であるが、ファイナルに残った少女がみんな歌が得意ということだったからである。

恥ずかしさを堪えて沙織も歌った。ボイストレーニングに通っただけあって、少しは聞けるようだ。

それが終わると、あつという間に審査員の審議に入った。いよいよ発表である。三次審査の一般投票結果も加算される。まだ一般投票の結果は公表されていない。

審査結果は、鷹緒も固唾を飲んで見守っていた。二十名の最終候補からグランプリに選ばれるのは、たった一人である。タレントもいる中で、沙織の優勝は難しいと、鷹緒は睨んでいた。

しばらくして、審査結果の発表となった。

「お待たせいたしました。それでは早速、発表いたします。まずはリビー宝石賞です」

各賞が発表される。スポンサーの賞や審査員長賞など、さまざまだ。

「それでは次に、ベストフォト賞の発表です。エントリーナンバー十六番、小澤沙織さん！」

沙織が呼ばれた。

しかし、これで優勝は逃したことになる。特に規定はないものの、別の賞を取った人間がグランプリに選ばれたことは過去にない。それは沙織を含め、誰もが知っている事実である。

鷹緒は、しまったと思った。自分の撮った写真で選ばれたのだろう。ベストフォト賞を取らないためにも、わざと二番目に良い写真を選んだはずだった。賞を取れたことには素直に嬉しかったが、複雑な思いを感じた。

「三人のカメラマンが一押しした、小澤沙織さんです」

審査員がそう言うと、後ろのスクリーンにはカメラマンたちが提出した写真が映し出される。三人のカメラマン全員が、沙織を推薦したのである。それには鷹緒も苦笑した。

85：シンデレラのゆくえ

「それでは、準グランプリの発表です」

着々と発表される中、後は準グランプリとグランプリだけとなった。

「準グランプリは…… エントリーナンバー十六番。小澤沙織さんです！」

その言葉に、沙織は一瞬、わけがわからなくなった。

「えっ……」

「一度に二つの賞を取ったのは、今回が初めてだということです。

さあ沙織さん、どうぞ」

信じられないといった様子で、沙織が前に出た。

グランプリではないものの、準グランプリだ。ベストフォト賞でも満足していた沙織は、大きな目を一層開いて驚いている。それがかき消すかのような、目眩がしそうなほどのスポットライトを浴びて、沙織はゆっくりと前へ出た。

「さあ、史上最多の賞獲得、並びに準グランプリになられた感想はどうですか？」

マイクを向けて、司会者が尋ねる。

「あの。本当にびっくりしてて……でも、本当に嬉しいです。ありがとうございます！」

頭の中が真っ白といった様子だが、素直に沙織が言った。客席から大きな拍手が沸き上がる。

「やってくれたよ……」

鷹緒も信じられないといった様子で、拍手をしながらそう言った。グランプリは予想通りだった。駆け出しのタレントである。おかげで無名ながら準グランプリを取った沙織が、実質上のグランプリといっても過言ではない。人々の目は沙織に向いていた。場慣れし過ぎていない沙織の素朴さが、シンデレラコンテストの真の意味を

見出していたのかもしれない。

コンテストが終わると、沙織は記者陣に囲まれた。カメラのフラッシュが絶え間なく沙織を襲う。その中に鷹緒もいた。インタビューが続き、さまざまなカメラとマイクが沙織に向けられている。

沙織が解放されたのは、三十分ほど経ってからであった。

「おめでとう！」

理恵とともに、広樹や茜、更には沙織の母親までもが沙織に駆け寄った。その様子まで、テレビカメラで追いつけられている。

「お母さん！」

驚きながらも嬉しそうに、沙織が母親を見て言った。

「来てたの？」

「うん。でも本番前だと動揺しちゃうと思って、ずっと客席にいたのよ。おめでとう！ やったじゃない！」

満面の笑みで、涙まで浮かべた母親が言う。沙織もつられて涙ぐんだ。

「ありがとう。なんだか夢みたい……」

「よくやったわよ。今日は盛大にお祝いしなきゃね」

一同は事務所へと帰っていった。

その日は事務所で盛大なパーティーが行われた。事務所の人間が揃い、もちろん鷹緒もいる。大騒ぎの中で、沙織が鷹緒に近付いた。

「鷹緒さん……覚えてる？」

沙織が言った。突然の言葉に、鷹緒が首を傾げる。

「なにが？」

「ほら。シンコン終わったら、話があるって前に言っただじゃない」
前から決めていた、沙織から鷹緒への愛の告白である。鷹緒もそれを薄々感付いてはいた。

「ああ、うん……」

「聞いてくれる？ 後ででいいから」

「うん。わかった」

鷹緒の言葉に、沙織が微笑む。

「約束だよ」

「ああ……」

「鷹緒さん。ヒロさん、また酔っ払っちゃうよ」

その時、茜が鷹緒に声をかけた。視線の先には、すでにフラフラな様子の広樹がいる。

「ああ。またあいつ、あんなに飲みやがって」

「そうじゃなくて、ほら。あの話……」

「ああ……おい、ヒロ。まだやることあんだろ」

鷹緒がそう言っ、広樹の腕を掴む。広樹は酒で顔が真っ赤で、そろそろダウンしそうだ。

「大丈夫か？」

「もちろんだよ」

そう言うものの、広樹はすでに酒臭い。

「ヒロ。あの話」

「ああ、あの話……」

急に広樹が真面目な顔に戻った。そして小さく溜息をつく、手を叩いて注目を仰ぐ。

「みんな。お楽しみ中悪いけど、聞いて」

広樹の言葉に、一同が注目する。

「突然ですが、この諸星君が、しばらく日本を離れることになりました。詳しいことは、鷹緒、よろしく」

簡単な言葉だが、一同はそれを聞いて固まっている。椅子に座った広樹に反して、鷹緒は一歩前に出た。

86：告げられた現実

「突然ですが、この諸星君が、しばらく日本を離れることになりました」

広樹の言葉に、一同は凍りついた。

「鷹緒さん……」

「嘘でしょう？」

牧や俊二が、口々に言った。

「ああ……急でごめん。でも、これは前から決めてたことで、シンコン終わるまでは黙っていようと思ってたんだ。こんな日に言うのもなんだけど、今日は全員揃ってるし、直接言いたかった」

鷹緒が言った。沙織も信じられないといった様子で見つめ、静かに口を開く。

「……どこに行くの？」

「ニューヨーク。俺が昔、世話になってた茜の父親がニューヨークに住んでて、新しく雑誌を作ったり展開してるんだ。手伝ってほしいと、数ヶ月前に電話で誘われた。シンコン終わったら俺の仕事も一区切りつくし、なにより世話になった人に借りを返したいと思ってた……広樹とも話して、しばらくの間休職という形を取らせてもらうことにしました」

「じゃあ、茜ちゃんが来たのって、もしかして……」

鷹緒の言葉に、牧が茜を見て言った。茜は苦笑する。

「そうです……事前打ち合わせも兼ねて、鷹緒さんを迎えにきたってところかな……」

「どのくらい行っちゃうんですか？」

「契約は二年……」

事務員の問いかけに、鷹緒が答える。

「二年も。そんな……」

「まあ、とにかく俺は、その人の役に立ちたいと思ってるし、俊二

ももうカメラマンとして成長してる。事務所としても安定してきてるし、俺一人がいなくなっても大丈夫だって、自信があるから行くんだから。それに、ここを辞めるわけじゃない。まあ、クビになるかもしれないけどな」

その言葉に、笑う者は誰もいなかった。ただ一同、悲しみに暮れている。

「おいおい。今日はめでたい席なんだから、こんな暗い雰囲気やめろよ」

「そうですよ。ほら、新しい門出を祝して、もう一回乾杯しましょうよ！」

鷹緒と茜がそう言うが、一同は動揺を隠し切れない。そんな時、広樹が大いびきを上げた。

「あはは。こいつは大物だなあ」

「あはははは」

一気に場の雰囲気は明るくなったが、一同が隠しきれない不安や悲しみは残ったままだった。

「じゃあ悪いけど、社長も寝ちゃったことだし、そろそろお開きにしようか……」

そんな鷹緒の言葉に、一同は苦笑しながらも頷き、片付けを始める。

沙織もそれに続くが、悲しみは拭えない様子だ。鷹緒はそれを尻目に、片付けに参加する。

そんな様子を理恵が見つめていた。副社長である理恵すら聞かされていなかった事实に、衝撃を受けていた。

片付けを終えると、パラパラと人は帰っていった。

「ヒロ、起きろよ」

数人だけが残った事務所で、鷹緒が広樹の頬を軽く叩く。しかし広樹は、一向に起きようとはしない。

「まったく……」

そう言つて鷹緒が振り向くと、そばには沙織と理恵、そして茜が立っている。

「ここはいいから、おまえらも帰れよ。こいつ、当分起きないと思うから……」

鷹緒の言葉に、理恵が口を開く。

「鷹緒、本当なの？ どうして今まで黙ってたのよ」

「どうしてって……俺はおまえに、なんでも話さなきゃいけないの？」

反発するように鷹緒が言う。それに反して、理恵も首を振った。

「そうじゃないわ。でも、仮にも私は、この事務所の副社長なのよ？」

「社長のヒロには言つたよ」

「鷹緒……」

鷹緒の態度に、理恵は溜息をつく。

「ごめんなさい、理恵さん。口止めされてたものだから……」

茜もすまなそうにそう言った。

理恵は鷹緒に質問を続ける。

「いつから決まつてたことなの？」

「……沙織の宣材写真撮つてた時だから……結構前だよ」

「そんなに前から？ どうしてヒロさん、何も言わなかったのかしら……」

理恵の言葉に、鷹緒は軽く頭を搔くと、苛立つように溜息をつく。

「……俺が口止めてた。おまえもみんなもシンコンに向かつてたし、事務所も拡大したばかりだったから、あんまり揺るがすようなこと言いたくなかった」

「だからって……」

「とにかく、もう決まつたことだ。恨み言ばかり言つてないで、今後を頼むよ。俺だつて、ここを辞めるわけじゃないんだから。ほら、今日はもう帰れ。みんな疲れてるだろ」

追い立てるように、鷹緒が言う。理恵は仕方なく頷いた。

「わかったわ。今日は帰るけど……明日にでも、詳しいことを聞かせて」

「もう言ったけどな……」

「じゃあ、もう一度聞かせて」

「……わかったよ」

鷹緒が苦笑して言う。理恵は振り向くと、沙織と茜を見つめた。

「じゃあ、帰りましょうか」

「あの、私……」

その時、沙織が言葉を発した。

87：絶望

「私、鷹緒さんに話が……」

理恵と茜が、沙織を見つめる。鷹緒はそばにあった机に座り、頷く。

「……そうだったな。じゃあ、沙織は後で俺が送るよ」

「そう。じゃあ、今日はこれで……」

理恵と茜はそのまま事務所を出ていった。

事務所には、眠った広樹のほか、鷹緒と沙織だけになった。広樹はソファへ横になり、大きないびきで熟睡している。

「相変わらず、すげーいびき」

苦笑して、鷹緒が言った。沙織は押し黙っている。そんな沙織を、鷹緒が見つめた。

「おまえは大丈夫なのか？ さすがに疲れてんだろ」

「……大丈夫」

重苦しい雰囲気、鷹緒は小さく溜息をつく。やがて沙織が口を開いた。

「鷹緒さん、本当に行っちゃうの？」

「……うん」

「どうして……私の気持ちに、気付いてるくせに！」

思わず大きな声で、沙織が言った。その目は熱く、鷹緒を見つめている。

鷹緒は机に腰をかけたまま、沙織を見つめた。

「……じゃあ、おまえは俺にどうしてほしいの？」

「どうって……」

「俺は日本を離れる。それは変えられないし、決めたことだ」

静かな言葉だったが、揺るぎない決意のような拒否が感じられる。沙織はもう何を言っても、鷹緒に自分の気持ちは届かないのだと悟った。

「わかった……もういい」

「……送るよ」

そう言っ、鷹緒が静かに立ち上がる。だが沙織は強く首を振った。

「いい」

「送る。こんな夜に、一人じゃ危ない」

「いいってば！」

沙織は鷹緒の手を振り払うと、事務所を飛び出していった。

「沙織ちゃん……！」

事務所の入っているビルの下で、茜が声をかけた。

「茜さん……」

「ちよつと気になって……待ってたの」

その言葉に、沙織は茜に抱きついた。

「ひどい！ どうして言ってくれなかったんですか？ 茜さん、鷹緒さんがいなくなっちゃうの知ってて、どうして私の気持ち、応援するなんて……！」

泣き叫ぶように沙織が言った。涙が止まらないようで、肩をしきりに震わせている。

「沙織ちゃん。ごめんね……」

そう言った茜の目に、沙織を追いかけてきた鷹緒が映る。

鷹緒は茜に、軽く頷くような合図を送ると、そのまま事務所へと戻っていった。沙織は背を向けていて、鷹緒にはまったく気付かなかった。

「……帰ろう。沙織ちゃん」

泣きじゃくる沙織の肩を抱いて、茜が言った。しかし沙織は首を振る。

「でも、このままだと……」

「……実家に帰ります。お母さんにも会いたいし……」

沙織の言葉に、茜は頷いた。

「そう……じゃあ送るわ。今日はお酒も飲んでないし、鷹緒さんの車のキーを預かったたまだったから」

茜はそう言うのと沙織を連れ、鷹緒の車で沙織の実家へと向かっていった。

「……鷹緒さんを、責めないであげてね……」

車の中で茜が言った。沙織はその言葉に押し黙る。

「……」

「私の父はね、カメラマンやってて、鷹緒さんが弟子みたいになってた頃があるんだ。父は私よりも鷹緒さんをすごく可愛がってた……私も鷹緒さんが好きで、カメラマンになりたくなっただ」

静かに、茜が自分の生い立ちを話し始める。

「数年前から、父は友人に誘われてニューヨークに渡ったの。私も後から父を追いかけて、外国のカメラ技術を学んだつもり。父は向こうの雑誌社でカメラマンとして働いてただけど、今度単独で新しい雑誌を作ることになってね」

「……」

沙織は俯き加減で、茜の言葉に耳を傾けている。

「父が好きにやりたい雑誌を作ろうってことでね。それでどうしても、鷹緒さんにも手伝ってもらいたって父が電話して、鷹緒さんが了承してくれたってわけなの。私もはじめ、鷹緒さんがアメリカに来るわけないって思ってたんだけど、父には恩を感じてるみたいで……」

「……茜さんは、鷹緒さんを迎えにきたんですか？」

88：ライバル

「……茜さんは、鷹緒さんを迎えにきたんですか？」

やっと沙織が、そう尋ねた。

「うん……一度、日本には帰ってきたいって思ってたしね。迎えにきたっていうよりは、事前打ち合わせが、おもな目的だったけど……」

「……」

「沙織ちゃんの気持ち、応援してなかったわけじゃないよ。私だって、鷹緒さんのことが好きだもん。良きライバルだと思ってる。でも、私だってまだ相手にされてないんだよ？ それに、一緒にニューヨークへ行くからって、ビジネスなんだから」

「だからって……」

沙織は少し、茜が許せなかった。日本を離れ、見知らぬ土地で一緒に活動するならば、鷹緒は本当に遠いところへ行ってしまうのではないか。茜といつ両想いになるかもわからない。沙織は気が気でなかった。

そんな沙織の気持ちを察するかのように、茜は静かに笑う。

「沙織ちゃん。もしかして……私のこと、ずるいって思ってる？」

「……」

「私から言わせれば、沙織ちゃんだってずるいと思うけどなあ」

「え？」

茜の言葉に、沙織は驚いて顔を上げる。

「だって鷹緒さんの親戚なわけじゃない？ 鷹緒さんの子供の頃とかプライベートなこととか、そういうのいっぱい知ってるんじゃない？ だから、おあいこじゃない」

納得出来るような出来ないような顔で、沙織は俯いた。

「でも……私なら諦めない」

加えて茜が言った。茜は微笑んで、横目で沙織を見つめている。

「私が沙織ちゃんの立場なら、鷹緒さんを追いかける。追いかけても諦めないわ。いつかきつと会えるもの。その日が来るまで、私は鷹緒さんを好きでい続けれると思う」

沙織は戸惑っていた。そこまでさっぱりと言える茜を、すごいと思った。

「私も……諦めない」

しばらくして、沙織がそう言った。その言葉に、茜が手を差し出す。

「やっぱり私たち、良きライバルになりそうね。沙織ちゃんなら大歓迎よ」

沙織も微笑んで、茜と握手をした。

「そんなこと言っていていいんですか？ 私のほうが若いし、これからなんだから」

無理に笑って、強気に沙織が言う。負けじと茜も口を開く。

「言ったなあ。でも私なんて、アメリカも一緒だもん」

「あ、それはずるい！」

「あはは。沙織ちゃんなら大丈夫よ……私、フラれたんだもん……」

突然、真顔で茜がそう言った。沙織は驚きながらも、いつもの調子だろつと微笑む。

「え？ またまた……それで諦める茜さんじゃないんでしょう？」

「……そうね」

二人は笑った。

「ありがとうございます」

実家に戻った沙織は、送ってくれた茜に礼を言った。

「ううん。今日はおめでとう、沙織ちゃん。じゃあまたね」

茜はそう言って、去っていった。

シンデレラコンテストに入賞したという栄誉と興奮は、まだ高まったままだ。沙織は車を見送ると、すぐに家には入れずに俯いた。一人になって、鷹緒がいなくなってしまうという悲しみがまた込み

上げる。怒りに似た感情が、沙織を襲う。

沙織は実家を見つめると、気持ちを切り替え、家へと入っていった。

「ただいまー」

帰ると同時に、両親が出てきた。

「え、ただいま……なにごと？」

両親を前に、沙織が言う。

「おかえり！ 今日には帰らないと思ってたから。おめでとう、沙織！」

誇らしげな顔で、両親がそう言った。自分の娘が国民的コンテストに入賞するということは、今まで不安で一杯だった両親の心を、一瞬にして軽くしている。

「さあ、入って入って」

久しぶりの我が家は、沙織の沈んだ心を包み込むような、優しい感じがした。

真夜中。事務所に茜が戻ってきた。鷹緒は一人、ソファでビールを飲んでいる。

「なんだ……戻ってきたの？」

鷹緒が茜に言う。

「電話、繋がらなかったから……」

「ああ、電源切ってた……事務所のやつらが、真相聞きに電話が殺到……あいつは？」

「……沙織ちゃん、実家に戻るっていうんで、送り届けました。これ、車のキーです」

「おう、サンキュー」

そう言って、鷹緒は車の鍵を受け取ると、ポケットへとねじ込む。茜は辺りを見回した。

「……ヒロさんは？」

「社長室で寝てるよ。あのいびきじゃ、俺も参るからな」

苦笑しながら、鷹緒は立ったままの茜を見つめる。

「……ビール飲むか？」

「いえ、今日はこのまま帰ります」

「電車ないだろ。車使えよ」

そう言つと、鷹緒はポケットを探る。

「いいです。タクシー拾うから……」

「そうか。どうした？　いつもの勢いは」

笑いながら鷹緒が尋ねる。茜はどこか他人行儀で、真剣な顔をして、鷹緒に何かを語りかけようとしている。

「……ひとつ、聞いてもいいですか？」

「なに？」

ソファに座っている鷹緒は怪訝な顔をして、そばに立っている茜を見つめた。

「沙織ちゃんのこと、どうするつもりですか？」

「……どうって？」

「なにも今日言うことはなかったんじゃないですか？　いつみんなに言うのかと思ってたけど、今日じゃなくなつて……沙織ちゃんの晴れ舞台なのに……」

その言葉に、鷹緒は静かに口を開く。

「……さっき言った通りだよ。今日しか全員集まる時はないと思つたし……もうすぐ日本を離れるんだ。前から決めてたことだよ」

「でも、もっと早くでもよかったんじゃないですか？　こんなギリギリまで待たなくても……いくらなんでも今日言つなんて、沙織ちゃん可哀想……」

「いつ言つたって同じことだろ。それに、あいつはすぐ態度に表れるからな。シンコン前に言つてたら、あいつはシンコンどころじゃなかっただろうし……」

「本音が出ましたね。鷹緒さんも、沙織ちゃんのこと好きなんですよっ？」

89：隠れた本音

「鷹緒さんも、沙織ちゃんのこと好きなんでしょう？」

茜が言った。

鷹緒はその言葉に驚いた後、笑い飛ばした。

「あははは。なんで俺が沙織を……」

「とぼけないでください。私がどれだけ鷹緒さんを見てきたと思ってるんですか？　いくら親戚だからって、鷹緒さんは沙織ちゃんを構い過ぎです！」

「……そう？」

茜の言葉を上から受けて、鷹緒はビールに口をつける。

「それに、みんなからいろいろ聞きました。沙織ちゃんのために、好きなアーティストのコンサートチケットを取ってあげたり、そのために好きでもない仕事引き受けたって……」

「BBのコンサートのことってんの？　誰から聞いたか知らないけど、そんなことはないよ……」

尚も話を続ける茜に、鷹緒がうんざりした様子で言う。

「それだけじゃない。撮影現場に連れていったり、隣の部屋に住まわせたり、送ってあげたり……そんなの鷹緒さんじゃない！　私の知ってる鷹緒さんは、いつも人を寄せつけなくて、笑ってても遠くて……それなのに、どうして沙織ちゃんには……！」

そう言う茜の口を、突然、立ち上がった鷹緒の手が塞いだ。

「……それ以上言うなよ」

静かに鷹緒がそう言った。その顔はどこか辛そうで、しっかりと茜を見据えている。

「鷹緒さん？」

「俺だって、一歩も前進してないわけじゃない……おまえが知ってる、数年前の俺とは違うんだろ」

鷹緒は静かに微笑んでそう言うと、茜に背を向けた。茜の目が潤

む。

「じゃあ、どうして私の口を塞ぐの？ 凶星だからじゃないんですか！」

「それ以上言うなって言ってるだろ！」

強い口調で鷹緒が言った。その言葉に、茜の瞳から涙が溢れ出る。「どうして？ 理恵さんのことが過去に出来たら、私、鷹緒さんの一番近くにいけると思ったのに……」

茜の言葉を受け、鷹緒はソファに座った。

「……馬鹿だな。俺なんて、過去を引きずってばかりの、情けない男なのに……」

「そこが、格好良かった……」

「……」

二人は一瞬、押し黙る。

「……教えてください。どうして沙織ちゃんのこと……？」

一瞬の沈黙を破り、茜は尚もそう尋ねた。

「だから、なんでもないって……」

「嘘つかないでください。私には聞く権利があります」

「ねえよ」

「教えてください！」

茜が鷹緒の前に、座り込んで言う。鷹緒は髪をかき上げると小さく息を吐き、口を開く。

「……べつに。ただ放っておけなかったただだよ……」

そう言った鷹緒は溜息をつき、言葉が続けた。

「茜。あいつは俺の親戚なんだぞ？ あいつの親含めて、俺の子供の頃まで知ってる。いわば弱みを握られてるも同然なんだ。あいつに何かあったら、俺はあいつの母親に何をされるかわからないし、下手なこと出来るかっての」

ソファに寝そべって鷹緒が言った。その言葉に、茜も俯く。

「親戚か。微妙ですよね……」

そんな茜に、鷹緒は天井を見つめたまま口を開く。

「……茜。俺さ、今はこれからのことしか考えらんないんだ。日本に後悔は残したくない。おまえも、気持ち切り替えてくれ」

その言葉に、茜は頷いた。

「わかりました……これからは、ニューヨークへ向けての、仕事モードでいきます」

茜はそう言つて立ち上がる。これ以上、追求は出来ないと思った。

「ああ。じゃあ俺、寝るから。おやすみ」

「ここですか？ 風邪引いちゃいますよ」

「夏だから平気だよ、じゃあな。おまえも気を付けて帰れよ」

「はい……」

茜は事務所を出ていった。煮え切らない態度の鷹緒だったが、少しだけ、本心を覗けた気がした。

鷹緒はそのまま目を閉じた。茜の言葉が、頭の中でこだまする。

鼓動が早く、体が熱いのは、浴びるほど飲んだビールのせいだろうか。脳裏には、沙織の姿があつた。

次の日。鷹緒が目を覚ますと、広樹がコーヒーを入れていた。

「ヒロ……」

「おはよう。僕、また酔つて寝ちゃったみたいだね……」

入れたばかりのコーヒーを差し出し、広樹が言った。鷹緒は苦笑する。

「まあな。おまえ、その酒癖悪いのなんとかしろよ」

「ハハハ……それで、どうだった？」

「なにが？」

「いや、昨日のこと、覚えてなくてさ……言つたんだよね？ ニューヨークに行くこと……」

「なに、おまえ、何も覚えてないのか？ まあ確かに、途中から寝てたけどな……」

コーヒーに口をつけるや否や、呆れて鷹緒が言った。

「打ち明けたところまでは覚えてるんだけど……」

「……みんなびっくりしてたよ。暗い雰囲気になったから、すぐにお開き」

「だろうな。そりゃあびっくりするよな……沙織ちゃんは？」

「……なんで？」

広樹の言葉に、鷹緒が驚いて尋ねる。

「だって、一番びっくりする人物だろう？」

「……まあ、ショックは大きかったみたいだけど……理恵も怒ってたし」

「まあね。副社長には言うべきだったと思うけど」

「いいんだよ」

鷹緒は遮るようにして言った。

「……いつから行くんだっけ？」

「……来週」

「本当、間もないな……」

「ああ……まあ、後を頼みますよ。やり手の社長さん」

二人は笑って、朝焼けの街を見つめた。新しい幕開けのような、美しい朝だった。

90：告白

しばらくして、沙織が事務所へやってきた。すると、まだ眠気眼の広樹が出迎える。

「沙織ちゃん。おはよう」

「おはようございます……ヒロさん、一人ですか？」

辺りを見回しながら、沙織が尋ねる。

「うん。鷹緒は、さっき出てったよ」

「そうですか……」

少し残念なような、ホツとしたような気持ちで、沙織は頷いた。

「おはようございます」

そこに、理恵と数人の事務員がやってきた。

「沙織ちゃん、早かったのね。今日はスケジュールぎっしりよ。なにせシンコンの準グランプリだからね！ 鷹緒さんも、結構アポ取って来てくれてたみたいだし……」

理恵が言った。

「社長。鷹緒さん、今日休みですよ。昨日からかけてるのに、電話切ってるみたいなんです。真相聞こうと思ってたのに！」

広樹の周りを事務員たちが囲む。誰一人知らされていなかった鷹緒の渡米に、一同はやきもきしているようだ。

「まあまあ。僕も口止めされてたんだよ。確かにシンコンでみんなが張り切ってる時に、言うべきじゃないと思っただ……」

困ったように広樹が言う。

しかし、なおも事務員たちは質問を続ける。

「いつ行っちゃうんですか？ 鷹緒さん」

「ああ。来週って言ってたかな……」

「来週！ もうすぐじゃないですか！」

「うん……今度、お別れパーティー的なことは企画するからさ。ああ、もうこんな時間だ。僕も得意先に電話しなくちゃ」

広樹はたじろきながら、事務員たちから逃げるように社長室へと入っていった。

そんな会話を聞きながら、沙織も理恵も口をつぐんだ。副社長の理恵ですら、鷹緒が日本を離れるということは少しも聞いておらず、未だ動揺を隠せないようだ。

「……さあ、行きましようか」
やがて、理恵がそう言った。

沙織は吹っ切るように微笑み、頷く。

きちんと告白する前に鷹緒に拒絶され、沙織はもうどうしていいのかわからなくなっていた。出来るだけ早く忘れられれば、と思った。

その夜。沙織はインタビューなどで引っ張りだこの仕事を終え、鷹緒のマンションへと戻っていった。

そろそろ夏休みが終わるため、沙織も荷物の整理などをしなければならぬが、もうしばらくはシンデレラコンテストの準グランプリ受賞者として、スケジュールがぎっしりである。

沙織は部屋に戻るとリビングへ向かった。

同居人の茜は帰っているようだが、寝室ですでに眠っているらしい。沙織はさすがに疲れて、ソファへと倒れ込んだ。ふと隣の鷹緒の部屋が気になったが、開ける勇氣はもうない。

「……鷹緒さんの馬鹿」

そつと沙織がそう言った。その時、鷹緒の部屋から何かが崩れるような、大きな音がした。

その音に、沙織はハッと起き上がる。そしてゆっくり立ち上がると、鷹緒の部屋へ続くドアをそつと開け、覗き込んだ。

鷹緒の部屋は、ダンボールで埋め尽くされるように溢れ返り、床には鷹緒が座り込んでいる。

「鷹緒さん……！」

沙織が思わず声をかけた。

「ああ……帰ってたのか」

苦笑して、鷹緒が言う。

「……どうしたの？ 大丈夫？」

「うん。ちよっと、手が滑って……」

鷹緒のそばには、棚の上にあったと見られるダンボールが転がり、中の物が散乱している。

物をよけて、鷹緒はゆっくりと立ち上がる。沙織は居たたまれなくなつて、鷹緒に背を向けた。

「沙織……」

その時、鷹緒が呼び止めた。沙織は、その場から動けなくなつてしまった。

「……ごめんな。シンコン終わって間もないのに。おまえが受賞したら、少なからずサポートはしてやるつもりだったんだけど……」

「だったら……どうして！」

そう言つたところで、沙織は鷹緒の顔を見て押し黙つた。鷹緒はいつになく真剣な眼差しで、沙織を見つめている。

「本当にごめん……でも俺、おまえが準グランプリになつて、本当に嬉しいよ」

「……ずるいよ、鷹緒さん！」

鷹緒の言葉に、カツとなつて沙織が叫んだ。

「どうしてそんなこと言うの？ 私の気持ちに気付いてるくせに……私、鷹緒さんのことが好きだよ！ シンコンやろうと決めたのだつて、今までずっと頑張ってきたのだつて、みんな鷹緒さんがいたからなの！」

沙織は勢いで告白をしていた。そんなことよりも、鷹緒に想いが通じないのが悔しくてたまらず、沙織の目から涙が溢れ出る。

そんな沙織を見つめた後、鷹緒は沙織を静かに抱きしめた。

沙織は驚きながらも、その暖かな鷹緒の腕の中で、安らぎと絶望を感じていた。

「ごめんな……」

もう一度、鷹緒が謝った。謝ることしか出来なかったのかもしれない。

沙織は更に悲しくなる。

「もう、いいよ……」

しばらくして、沙織はやっとそれだけを口にした。

「沙織……」

「もういいから、謝らないで……」

鷹緒の腕から離れ、沙織は背を向ける。

「……さよなら。元気でね……」

沙織はそう言つと、部屋へと戻っていった。

寝室へ駆け込むと、一人泣いた。鷹緒の本心は見えなかったが、ハッキリと告白しても、想いは伝わらなかったようだ。そう思うと、涙が止まらない。

一人になり、鷹緒は部屋に残ったまま、後片付けを続けた。そして大きな溜息をつく。

鷹緒の心もまた、大きく揺れていた。

91：送別会

数日後。事務所近くの居酒屋で、鷹緒と茜の送別会が行われた。沙織のほかにも、事務員全員が集まったが、その席に肝心の鷹緒はいない。

「ねえ、鷹緒さんはまだですか？」

事務員の一人が広樹に尋ねた。広樹は苦笑して、電話を見つめる。

「ああ、来るとは言ってたんだけど……仕事が長引いてるのかな」

「仕事っていったって、簡単な打ち合わせでしょう？　もしかして来ないとか？」

「ありうる！　鷹緒さん、こういう席ってあんまり来ないもんね。数人とだったら飲むくせに」

事務員同士が、盛り上がるように言う。

「まあまあ、みんな。じゃあ先に一度、乾杯しようよ。茜ちゃんは一足先に日本を発つんだから」

広樹が言った。

一同の目が、茜に向けられる。

「そうなんですか？　茜さん、いつ発つんですか？」

「明日です。もともと私、鷹緒さんに向こうでのことを、説明や打ち合わせに來ただけだから……」

「そうなんですか。鷹緒さんもうすぐ発つんですね？　急すぎますよ。寂しくなるなあ……」

「悪い。遅くなって……」

その時、やっと鷹緒が現れた。

「遅い、鷹緒さん！」

「待ちくたびれましたよ」

一同が口々に言う。

「いろいろ支度してたからさ……」

「なんにしても主役が來たぞ。乾杯しよう！」

広樹の言葉に、一同がグラスを持って盛り上がる。

「では茜ちゃん、うちの稼ぎ頭が、ニューヨークで腕を磨けるチャンスに、乾杯！」

「あはは。かんぱーい！」

一同は酒を酌み交わし、そこは一瞬にして大盛り上がりの会場となった。

鷹緒と沙織は、お互い離れたところに座り、目を合わすことも話すこともなかった。

次の日。沙織が目を覚ますと、茜が支度をしていた。

「茜さん……」

「沙織ちゃん。お世話になりました」

茜が言った。茜は今日、一足先に日本を発つことになっている。

「いえ……」

そう言う沙織は、最近ずっと沈んだままだった。

鷹緒のことは好きだが、遠くに離れてしまう今、早く忘れたいと思う。もう拒否されるのが怖かった。しかし、そう簡単に忘れられるはずもなく、悩みだけが膨らんでいる。

そんな沙織を尻目に、茜が鷹緒の部屋を覗いた。

「やっぱり帰ってないか……」

「え？」

「鷹緒さん、挨拶回りしているらしくて、あんまり帰ってないみたいよ。荷物ももう送ったみたいだし、いい機会だからいろいろ処分したって言うてたから、もぬけの殻って感じね……」

その言葉に、沙織も鷹緒の部屋を覗いた。

確かに家具はあるものの、殺風景な感じがする。

「沙織ちゃん。ずっと黙っててごめんね……鷹緒さんが、ニューヨークに行っちゃったこと」

改まって茜が言った。そんな茜に、沙織は首を振る。

「……もういいんです」

「いいって……」

「きっぱりフラれましたから……」

「告白したの？」

沙織は頷く。

「ごめんって言われました……」

「……諦めちゃうの？」

また茜が尋ねる。沙織は少し考えた後、ゆっくりと頷いた。

「もう嫌なんです。辛い……」

「……そう。でも、それも一つの選択だけど、本当に鷹緒さんのことが嫌いになったり、忘れるくらいになるまで、諦めるのはとっておくのもいいんじゃない？ まあ、私はそんなことを考えて、もうずっと鷹緒さんに恋してるけどね」

「茜さん……」

茜は変わらず、明るく微笑んだ。

「私はいいわよ、ライバルが減ったほうが。私は後悔したくないの」
「……」

「じゃあ私、もう行かなくちゃ。お世話になりました。ありがとう、沙織ちゃん。また会おうね」

茜は沙織を挑発するようにそう言つと、大きなスーツケースを持って玄関へと向かっていった。

元気がないまま、沙織も玄関まで見送る。茜の挑発には、もはや乗れる気にはなれなかった。

「気をつけて……」

沙織の言葉に、茜は頷く。

「ありがとう……頑張つてね。これから売り時じゃない」

「はい。でも、今まで鷹緒さんがいるから頑張ってきたのに、なんかもう、どうしていいのかわからなくて……」

そう言った沙織の肩を、茜が思い切り叩いて微笑む。

「いいじゃない。二年経ったら鷹緒さんは帰ってくるのよ。もっと」

綺麗になつて、見返してやればいいじゃない。あの時私を振つたことを後悔させてやるって、思つていればいいじゃない」

「茜さん……」

茜は沙織の手を取り、握手をした。

「じゃあね。私も沙織ちゃんに負けないように、女を磨いておくわ」

茜はそう言つと、沙織の部屋を出ていった。残された沙織は、複雑な思いでいた。

数日後。鷹緒の出発の日となつた。

92：別れの日

数日後。鷹緒の出発の日となった。

沙織は鷹緒のマンションから実家へ戻っていた。コンテストも終わり、もうすぐ夏休みも終わるため、もう鷹緒と同じマンションから事務所へ通う必要はなくなっている。

鷹緒のことが気になりながらも、沙織は拒絶されるのが怖くて、もう鷹緒に会う気にはなれなかった。

「沙織！」

沙織が部屋にいと、母親が呼んだ。

「なに？ お母さん」

そう言つて廊下へ出ると、なおも母親が呼ぶ声がある。

「沙織！ 事務所の社長さんが来てるわよ」

「え、ヒロさんが？」

そのまま一階へ降りていくと、リビングでは母親と広樹が話している。広樹は沙織を見るなり、明るく手を振った。

「やあ、沙織ちゃん。元気？」

「はい。どうしたんですか？」

「改めてお礼だよ。コンテスト入賞のね。バタバタしちゃって、ちゃんとお礼出来てなかったから」

「いろいろいただいたのよ」

母親はそう言つて、沙織にもお茶を出した。沙織は椅子に座り、広樹を見つめる。

「事務所に祝いの品がたくさん届いたんで……この度は本当におめでとうございます。そしてありがとうございます。これからどんどん沙織ちゃんを売り込んでいくつもりですので、今後ともよろしくお願いします」

そう言う広樹に、沙織は困ったように俯く。

鷹緒がいなくて、沙織はこれ以上モデルをやる意味はないと思っていた。しかし広樹の顔を見ると、面と向かつては言いにくい。

「ヒロさん。私……」

言いかけたものの、沙織はそれを飲み込んだ。

「どうしたの？」

「……いえ」

「でも鷹ちゃんがいなくなってしまうのに、この子一人で大丈夫かしら……鷹ちゃんは大丈夫だって言ってたけれど……」

母親の言葉に、沙織は顔を上げた。

「え？ お母さん、鷹緒さんと話したの？」

沙織が、食いつくように尋ねる。

「この間、電話があつたのよ。そうそう、コンテストの日に、お礼を兼ねてね」

「そんなこと、一言も言わなかったじゃない」

「だって沙織が帰ってきたから、嬉しくて忘れちゃってたのよ」

苦笑して母親が言う。

「それで……鷹緒さん、なんて？」

「だから、鷹ちゃんいなくて大丈夫かって聞いたら、事務所の人は安心出来るから、下手に自分がいるより大丈夫だろうって」

母親が答える。沙織は鷹緒という名前が出るだけで、大きく揺れていた。

「鷹緒さんが……」

「ああ。鷹緒から、これ預かってきたんだ。沙織ちゃんに」

思い出したように、広樹が大きな茶封筒を沙織に差し出す。沙織はそれを受け取ると、不安と期待にゆっくりと封筒を開けた。

中には、大きな沙織の写真が数枚入っている。宣材用に撮ったものと、コンテストの審査用に撮られた写真である。

「あら、いい顔してるわね」

写真を覗き込んで、母親が言った。広樹は頷き、立ち上がる。

「一押しの写真ですからね。じゃあ僕、そろそろ行きます。鷹緒を

見送りに行くので……」

「鷹ちゃん、今日出発だったわね。寂しくなるわね……」

母親はそう言いながら、広樹を送りに立ち上がった。

沙織は写真を封筒に入れ、後に続こうとする。その時、沙織の目に、封筒の底に残った小さな封筒が映った。

その封筒を開けると、中には一枚のスナップ写真が入っており、その写真の裏には文字が書かれているようだ。

“俺が一番気に入ってる写真です。これからも頑張れ”

そんな鷹緒の字であった。表の写真は、コンテストでベストフォト賞を受賞した写真である。沙織のこれ以上ないといった、笑顔の写真だ。

沙織自身も良い写真だと思った。その笑顔はまるで、これからもこんな笑顔で頑張れという、鷹緒のメッセージが込められている気さえする。

「ヒロさん！」

沙織は思い立ったように、玄関に向かう広樹のもとへと駆けつけた。そして必死の形相で、広樹を見つめる。

「ヒロさん、私も空港へ連れてってください！ 鷹緒さんに言いたいことがあるんです！」

93：新しい出発

「ヒロさん、私も空港へ連れてってください！ 鷹緒さんに言いたいことがあるんです！」

広樹に向かって、沙織がそう言った。

「え？ ああ、僕はいいけど……」

了承を促すように、広樹は母親を見る。母親は頷いた。

「私もいいわよ。鷹ちゃんに、気をつけてねって伝えてちょうだい」
「わかった！」

沙織はすぐに支度をする、広樹とともに空港へと向かっていった。

「すみません、ヒロさん。急について来たりして……」

車の中で沙織が言った。

広樹は運転をしながら、笑って首を振る。

「いいよ。忙しい時期だから、みんな見送りたいのに出来なくて、僕しか空港へ行かないんだ。君が行けば、鷹緒も喜ぶよ」

「……それはどうかね」

「きつと喜ぶよ」

断定するように、広樹が言う。

「……それならいいですけど」

「……怒らないでやってね。急に日本を発つこと」

広樹の言葉に、沙織は押し黙る。

「あいつ、本当に沙織ちゃんのことは気にかけてたんだよ。僕が無理やり事務所に誘ったわけだし……あいつも今後フォローしてくれようとしてたし、ここ数日もずいぶん駆けずり回って、うちの事務所や君の仕事に関して、売り込んでくれてたみたいなんだ」

「え……」

「頑張ろうね。鷹緒がいなくても」

「……はい！」

広樹の言葉に、沙織は大きく返事をした。沙織にもう迷いはなかった。想いは伝わらなかったが、鷹緒の優しさが痛いほど伝わっている。

空港。出発ロビーのベンチで、鷹緒が座っていた。ろくに寝てないのか、そのまま眠り込んでしまっている。

「鷹緒」

そんな鷹緒を揺り起こしたのは、広樹である。

「ん……ああ、広樹。遅いんだよ。寝ちゃったじゃん」
「もう一人いるよ」

広樹が退くと、鷹緒の目に沙織が映った。

「沙織……」

「僕、飲み物買ってるから」

そう言って、広樹はその場を離れる。残された鷹緒は沙織を見つめ、静かに微笑んだ。

「久しぶり」

「あ、うん……」

沙織が生返事をする。まだ、素直に向き合えない恥ずかしさがある。

「実家に戻ったんだろ？ お母さん、元気？」

「うん。あ、お母さんが、気をつけてねって……」

「ああ、うん……」

鷹緒は微笑んで、軽く頷いた。

「私も……ありがとう。これ、受け取ったから」

そう言って、沙織は鷹緒からもらった封筒を抱きしめる。中には大判の沙織の写真とともに、鷹緒からのメッセージが書かれている写真もあるはずだ。

「ああ……」

少し照れるように鷹緒が頷くと、沙織も微笑み、口を開く。

「私はもう大丈夫……一人じゃないし、頑張る。鷹緒さんも頑張ってるね。私、鷹緒さんが帰る頃には、きつといい女になってるから！」
沙織の言葉に、鷹緒が笑った。

「期待してるよ」

鷹緒がそう言った時、搭乗アナウンスが流れ、広樹がやってきた。

「はい、コーヒー」

広樹が缶コーヒーを差し出す。鷹緒はそれを受け取ると、立ち上がった。

「サンキュー……じゃあ俺、もう行くよ」

「そっか……」

「いろいろ頼むな、ヒロ」

「ああ、こっちは任せとけ。おまえも頑張れよな」

「おう。じゃあな」

少し照れながら、鷹緒は二人に微笑むと、身軽な荷物を持って歩き始める。

「鷹緒さん！」

その時、沙織が鷹緒に駆け寄った。

「鷹緒さん、これ持って行って」

普通サイズの茶封筒を差し出して、沙織が言った。

「……なに？」

「飛行機の中で見て」

「……わかった。じゃあな」

沙織の肩を軽く叩くと、鷹緒はそのまま搭乗口へと消えていった。

「……行っちゃったな」

広樹がボソッとそう言った。沙織は静かに頷く。

「はい……」

「寂しくなるけど、僕たちも寂しがってる暇はないよね」

横目で見つめる優しい広樹に、沙織も微笑んだ。

「……はい」

「帰ろうか」

「はい」

二人は頷くと、空港を去っていった。

鷹緒は搭乗口のロビーで、沙織に渡された封筒を開けた。中には鷹緒が送った沙織へのメッセージ付きの写真が入っている。

“俺が一番気に入ってる写真です。これからも頑張れ”

写真の裏に書かれた鷹緒のメッセージの隣には、新しくメッセージが書かれている。沙織が車の中で書いたと見られるメッセージであつた。

“ハイ、頑張ります！ 鷹緒さんも頑張つてね！”

そう書かれている。そして写真の隅に小さく、もう一つメッセージがあつた。

“好きです”

今の沙織の精一杯な、小さな愛の告白であつた。

鷹緒は静かに微笑むと、日本を発っていった。

94：夢の共演

鷹緒が日本を発った後、沙織は主にモデルとして活躍の機会が広がっていった。後にその多くは、鷹緒が取ってきた仕事だと知った。学校が始まった頃には、沙織はちよつとした有名人で、友達からも写真を強請られるようなこともある。

沙織は、“頑張る”という鷹緒との約束を胸に、与えられた仕事をこなしていこうと張り切っていた。

それから一年後。

鷹緒からの連絡は、沙織宛てには一度もなかった。ただ、たまに事務所に入るらしい連絡で、鷹緒のニューヨークでの活躍を聞いていた。

そんなある日――。

「え、BBと？」

事務所で、沙織が驚いて言った。目の前には、副社長であり、すっかり沙織のマネージャーと化した理恵がいる。

「そうなの。前にBBと話したことがあったんですって？ そのBBからオフア―なの。新しい飲料水のCMでBBが起用されることになったんだけど、その相手役にどうかって」

理恵の説明に、沙織の目が輝いた。

BBは未だに人気歌手グループであり、沙織もファンで何度かコンサートにも行っている。鷹緒の伝手でコンサートの打ち上げにも行ったことがあり、BB本人たちと少しだけだが話したこともあるのだ。そんな過去が一気に噴き出す。

「やりたいです！」

沙織が言った。仕事を始めて消えかけていたミーハー心も、BB

と聞けば盛り上がる。

「じゃあ、返事しておくわね」

微笑みながら、理恵が言った。

夏休み中の沙織は、いつもより忙しかった。受験も控えているのだが、ノッているこの時期に仕事を疎かにするわけにもいかず、事務所で受験勉強に励むこともしよっちゅうだ。

そんな中で、沙織の初めてのCM撮影が開始された。しかも共演はBBという、未だ人気絶頂の歌手グループと組むということは、沙織にとっても大きな前進となることを意味する。

「沙織ちゃん！」

撮影現場で一番最初に声をかけたのは、BBのリーダーであるユウであった。

「ユウさん」

少し躊躇いながらも、気さくに話しかけてくれるユウに、沙織も笑顔で応える。

ユウは笑顔で言葉を続けた。

「すっかり有名人だね。こんなふうに共演出来るなんて嬉しいよ。シンコンで準優勝したのは知ってたけど、会う機会もなくて、お祝いも言えずにごめんね」

「知っててくださっただけですか？ そんな、こちらこそ。私のこと覚えてくださっただけで……」

久しぶりの本物のユウを前に、沙織はまだ緊張していた。

それに構わず、ユウは気さくに話を続けてくれる。

「もちろん覚えてるよ。諸星さんも売り込んでたし。諸星さんとは連絡取ってるの？ ニューヨークなんてすごいけど、残念だな。僕らまだまだ諸星さんに撮ってもらいたかったんだよ。今度、ニューヨークで写真集撮ろうかなんて話もあるくらい」

「へえ、そうなんですか！ いえ、私は全然連絡取ってないです…事務所の方には、たまに連絡あるみたいですけど……」

「あはは。諸星さんらしいな……とにかく、これからよろしくね、沙織ちゃん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

二人は握手を交わした。

その後、ＢＢ全員が集まり、スタッフも交えての打ち合わせが始まった。ＣＭについての説明やコンセプトが伝えられる。

新しい飲料水のＣＭ出演者は、ＢＢと沙織の五人で構成される。炎天下でバスケットボールを楽しむＢＢに、沙織が飲料水を差し出す。沙織は、飲料水を差し出す時に言う「ハイ」の一言のみの台詞だが、ＢＢと共演し、またその一言だけという台詞が、印象づけられるであろうことは間違いなかった。

打ち合わせが終わると、早速撮影が始まった。演技や台詞をほとんどやったことがない沙織は、緊張のし通しだったが、ＢＢのメンバーがサポートしてくれた。

特にリーダーのユウは、よく気遣ってくれるので、沙織は徐々にコツを掴んでくるのだった。

「沙織ちゃん」

撮影が終わるなり、ユウが沙織に声をかけた。

「ユウさん。ありがとうございます！」

「こちらこそ。初めてなのに、うまかったね」

「いえ、そんな……足を引っ張っちゃってごめんなさい。なかなかオーケー出なくて……」

「そんなことないよ。それより、これなんだけど……」
そう言って、ユウが封筒を差し出す。

95：誘い

「そんなことないよ。それより、これなんだけど……」

そう言つて、ユウが封筒を差し出す。

「え？」

「一枚だけけど、今度やる僕らのコンサートチケット。よければ観に来て。あと、よかつたらこれ、僕の携帯番号……早くもCM第二弾やること決まつてるみたいだし、これから会う機会もあると思うからさ」

「え、いいんですか？」

頬を染めて、沙織が驚いて言つた。憧れのユウの携帯番号である。沙織は震える手で、それを受け取る。

「もちろん。あ、でも友達とかには教えちゃ駄目だよ」

「はい、もちろんです。あ、私の携帯は……」

二人は携帯電話番号を教え合つた。

目の前にいる人気歌手と知り合いになれた驚きと喜びが、沙織を包んだ。

BBコンサートの当日。仕事があつたため、沙織は少し遅れて会場に到着した。すでに、いつも通りのすごい熱気である。席に着いた沙織は、ファンたちに混じつて声を上げる。たまには一人でこういうのもいいと思つた。

前回、鷹緒の仕事で連れて来てもらったことを思い出す。まだただの女子高生だった沙織が、今では目の前でスポットライトを浴びるBBと共演している。不思議な感覚が沙織を襲い、酔つたようになる。

コンサートが終わると、そろそろと人が帰ってゆく。それに混じ

って、沙織も腰を上げた。楽屋に行こうとも思ったが、ＢＢ直々の誘いとはいえ今回は鷹緒もない。裏に入れるはずがないと思い、礼は今度しようと考え、沙織は会場を後にした。

しばらくして、駅へと歩いている途中、沙織の携帯電話が鳴った。画面には、ＢＢのリーダーであるユウと映し出されている。

沙織は驚いて電話に出た。

「は、はい」

『沙織ちゃん？ 来てくれたんだね。ステージから見えたよ』

「ユ、ユウさん、もう電話して大丈夫なんですか？ さつき終わったばかりなのに……」

ぞろぞろ歩いているファンの目を気にして、沙織は小声で尋ねる。
『うん、もう慣れたもんだよ。ツアーだから今日が終わりじゃないし。もうみんな、さつさと帰り支度してるところ。もし時間があるなら、一緒に食事でもどう？』

あまりにも軽い誘いに、沙織は相手が人気歌手ということを一瞬忘れそうになる。

「え、あ、はい。構いませんけど……」

しどろもどろで、沙織が答えた。プライベートで男性から食事に誘われたことはあまりない。

『よかった。今、どこにいるの？』

「駅に向かって歩いてるところです」

『じゃあ、駅の裏手で待っててくれる？ えっと……出待ちの子がいるからもう少しかかるけど、すぐに向かうよ』

そう言って電話は切れた。

突然のデートの誘いに、沙織も否応なしに盛り上がる。相手は憧れていた歌手である。沙織のミィハーな部分が、久々に露になっていた。

人気のない駅裏は、酔っ払いしか通らない。そんな薄暗い道路に、一台のスポーツカーが停まった。中でユウが会釈する。沙織は嬉し

そくに駆け寄った。

「どうぞ、乗って」

ユウが窓を開けて言った。

「じゃあ、あの……お邪魔します」

照れくさそうにそう言っていると、沙織は助手席へと身を置いた。

車はそのまま、夜の街へと走り出す。

「ごめんね、あんなところで待たせて。怖かったよね……」

すまなそうにユウが言った。沙織は首を振る。

「いえ。こっちこそ、コンサートのすぐ後だっていうのに、誘って
もらっちゃって……」

「ううん。一度ゆっくり話したいと思ってたんだ。何か食べたいもの
ある？ 僕、お腹ペコペコ」

「すごい運動量ですもんね。いえ、私はなんでも平気ですから、ユ
ウさんにお任せします……」

「じゃあ、肉系いきますか」

二人は、ユウの行きつけというハンバーグステーキハウスへと向
かっていった。

「この店、すごく美味いんだ。芸能人も御用達って感じでね。初
めて事務所の社長に連れてきてもらった時は、あまりの美味さに涙
が出るほど感動しちゃったくらいだよ」

ユウが言う。まるで昔からの友人のように、沙織に接してくれる。

沙織は緊張しながらも、次第に打ち解けていった。

96:デート

「どう？ 芸能活動は」

食事をしながら、ユウが尋ねた。沙織は苦笑して口を開く。

「芸能活動ってほどじゃないけど……でも、楽しいです」

「モデル業が多いんだよね。タレント業はしないの？ 女優とかさ」

「私、あんまり機転利かないから……トーク番組とか、いくつかオフアーはいただいているみたいなんですけど、あんまりうまくしゃべれないと思つて、事務所の人もまだつて感じで言ってます」

「じゃあ、女優さんでいいじゃない。台本見て覚えるだけ。演技は大変だけど、大して機転はいらないよ」

「演技なんて出来ないですよ……あ、ドラマと言えば、この間までやってたドラマ、見てましたよ。ユウさん主演で、すごいよかったです」

沙織が言った。

ユウは照れながらも、嬉しそうに微笑む。

「見てくれてたの？ 恥ずかしいな、下手ついで……」

「そんな！ 最終回なんて私、泣きっぱなしだったんですよ」

「本当？ 嬉しいなあ」

二人は会話を弾ませていった。

食事を終えると、ユウが沙織を家まで送り届けてくれた。

沙織は夏休み中だけ、事務所近くで寮代わりに使っているワンルームマンションで暮らしていた。同じマンションに数人の所属モデルやタレントが暮らしている。最近は事務所が忙しいため、鷹緒のマンションスタジオは休みなく撮影などに使われているようだ。そのため、今年はそこで暮らすことは出来なかった。

「ここでもいいの？」

ユウの質問に、沙織は頷く。

「はい、あのマンションなんです。数部屋、事務所が押さえていて、上京したての子とかが暮らしてるんですよ。たまたま空きがあったんで、私も夏休みだけお世話になることになって……」

「そうなんだ」

「じゃあ……今日は本当にありがとうございました！」

「いいえ、こちらこそ。また一緒に食事でもしようね」

「はい！」

沙織は深々とお辞儀をすると、車から降りる。ユウは軽く会釈をして車を走らせていった。

それを見届けると、沙織はマンションへと入っていく。恋心に似た胸の高鳴りを覚えていた。

次の日。沙織は早朝に目を覚ました。今日は午後から雑誌の撮影があるが、起きてしまつて暇ということもあり、早くに事務所へ行くことにした。

「ああ、届いたよ」

沙織が事務所に入るなり、大声で広樹が電話をしているのが見えた。電話の受話器を肩と耳で挟みながら、大きなダンボールをこじ開けている。

「それよりさ……あ、沙織ちゃん」

突然、話の途中で広樹が沙織に声をかけた。沙織は軽く会釈する。

「おい、沙織ちゃん来たぞ……よくないよ。ちよつと待つてろよ」

広樹は受話器を差し出す仕草をしながら、沙織を手招きする。

「え？」

「沙織ちゃん。鷹緒だよ、鷹緒」

「え！」

沙織は驚いた。今まで事務所宛てに鷹緒からの連絡はあったようだが、それはいつも沙織がいない時間だった。あまりの偶然に、沙織は広樹に駆け寄り、素早く受話器を受け取った。

「た、鷹緒さん?!」

震える声で、沙織が尋ねる。

『おう……元気か?』

少し遠めだが、変わらぬ声がそこにあった。一年ぶりの、鷹緒の肉声だ。

97：声

『おう……元気か？』

少し遠めだが、変わらぬ声がそこにあった。一年ぶりの、鷹緒の肉声だ。

「鷹緒さん……うん、元気。鷹緒さんは？」

涙目になりながら、沙織が嬉しそうに言った。

『俺？ まあまあかな……』

「そっか……メールしても、全然返事くれないんだもん」
口を尖らせて沙織が言った。

鷹緒のメールアドレスは知っていたので、何度か送っているものの、向こうからは一度も返事が来たことはない。

『ああ、悪いな。あんまりそういうの得意じゃなくて……それよりCMの仕事取ったんだって？ BBと共演なんて、やったじゃん』
話題を逸らすように、鷹緒が言った。

「う、うん。これも鷹緒さんのおかげでしょ？ 鷹緒さん、BBの専属カメラマンだったんだし……」

『べつに、俺は根回ししてねえよ。もっと自分に自信を持てよな』

「うん……」

鷹緒の声が、心地よく響く。

『じゃあ、頑張れよ』

「あ、鷹緒さん」

終わりそうな会話に、沙織がとっさに鷹緒を呼ぶ。

『なに？』

「あ……ううん。鷹緒さんも頑張ってたね」

思い留まって、沙織は静かにそう言った。相変わらず忙しいであろう鷹緒を、これ以上引き止めるわけにはいかない。

『おう。じゃあ、ヒロに代わって』

「うん……」

沙織は広樹に電話を代わる。短い電話であつたが、沙織の心を一気に軽くした。そのまま広樹は、鷹緒としばらく話をしていた。

「沙織ちゃん、ちよつと」

電話を終えて、広樹が沙織を呼んだ。

「はい？」

「これ、鷹緒が関わつてる雑誌だよ」

そう言つて、広樹がダンボールから取り出した雑誌を差し出す。

「ええ！」

沙織は嬉しそうにそれを受け取り、中をめくつた。欧米らしい雑誌の質で、英字が並ぶ。フォト雑誌らしく、美しい写真が連なっている。雑誌の最後には“Takao Moroboshi”の名前があつた。

「それ、茜ちゃんのお父さんたちが立ち上げた雑誌でね、鷹緒が関わつてるやつ。やつとちゃんと送つてきやがつて……でも、向こうでもよくやつてるみたいだね」

広樹が言つた。

沙織は渡された雑誌を抱きしめ、広樹を見つめる。

「あの。これ、いただけませんか？ お金はちゃんと払いますから」

「あはは。いいよ、いいよ。もちろん持つてつて。最初からそのつもりだし」

「ありがとうございます。じゃあ私、もう行きます！」

沙織はお辞儀をしてそう言つと、雑誌を抱きしめながら事務所を飛び出した。

そのまま沙織は近くのカフェでじっくりと鷹緒の雑誌を読んだ。表紙の写真はクールな感じで、外国人が写っている。アングルや雰囲気、明らかに鷹緒の写真だと思つた。

午後の仕事の時間まで、沙織はずっとその雑誌を眺めていた。

数日後、早朝――。

沙織の部屋のインターホンが激しく鳴った。同時に携帯電話も鳴る。

まだ寝ていた沙織は、眠気眼で電話に出た。

「……はい？」

『沙織ちゃん？ 今、玄関にいるの。開けて！』

すごい勢いでそう言ったのは、理恵である。

「理恵さん……？」

わけもわからず、沙織は急いで玄関のドアを開けた。すると、すぐに理恵が入ってくる。

「ど、どうしたんですか？」

不安げにそう尋ねる沙織を、理恵は息を整えて見つめる。

「沙織ちゃん、よく聞いて……あなたこの間、ＢＢのユウさんと食事に行ったって言ってたわよね？」

理恵が尋ねた。特に報告義務はないが、ユウからコンサートに誘われたことや、その後に食事に行ったことを、沙織は理恵に告げていた。

「え？ はい……」

「食事に行つて、本当にそれだけ？」

「はい……何かあったんですか？」

沙織は怪訝な顔をする。理恵は溜息をついた。

「よく聞いてね。今日、スクープフラッシュユマガジンという雑誌が発売されるわ。ゴシップネタの雑誌だけど、それに、あなたとユウさんが出る」

98：スクープ

「よく聞いてね。今日、スクープフラッシュマガジンっていう雑誌が発売されるわ。ゴシップネタの雑誌だけど、それに、あなたとユウさんが出る」

「えっ！」

目を丸くさせ、沙織は驚いた。

理恵は言葉が続ける。

「詳しくはまだわからないけど……たぶん、あなたとユウさんの熱愛が報じられると思うわ」

「熱愛って、そんな！ 私、食事に行っただけで……」

「真実がどうかじゃないの。読者はゴシップを望んでるから……うちの事務所はつき合いを規制することはないけど、あなたはまだ新人だし、心配なの。こっちも手は打つけど、相手は人気歌手グループのリーダーだからね……スキャンダルとして、しばらくは出回ると思うわ」

沙織は言葉を失った。顔面蒼白で、どうしたらいいのかわからない。

「こっちも出来るだけのことはするけど、少し覚悟しておいてね。ましてやあなたは、まだ学生なんだし……」

「……ごめんなさい」

「いいのよ……今日は幸いお休みだし、ゆっくりしてちょうだい。あとで何か買ってくるから。念のため、今日は家から出ないこと」

「はい……」

「じゃあ、起こしてごめんね。また来るから」

少し疲れた表情で、理恵は去っていった。

沙織はその後、あまりの反響の大きさに、辛い思いをすることになる。雑誌には、“BBリーダー・ユウ、熱愛発覚”の文字が躍り、相手として沙織の実名まで出ていた。

その日から、沙織の携帯電話が引つ切りなしに鳴った。同級生や知人からの電話やメールは、真相を確かめるものが多く、中には中傷的なものもある。

人気歌手の恋話ということで、芸能ニュースにも取り上げられ、沙織は一躍、違う意味での有名人となってしまう。スキャンダルを嫌う仕事からは、断りの電話を入れられた。

沙織はどうしていいのかわからなくなった。

数日後。リビングに放置された携帯電話が、また震えた。沙織は一瞬躊躇したが、尚も鳴り続ける携帯電話を手取る。画面には、ユウの名前があった。

「はい」

相手がユウとわかり、沙織はすぐに電話に出た。

『あの……沙織ちゃん？』

間違いなく、ユウの声が聞こえる。

「はい」

『ユウです。今、大丈夫？』

「はい……」

『ごめんね、こんなことになって。もっと早くに電話したかったんだけど、それどころじゃなくて……本当にごめん……』

ユウの言葉が心に沁みる。沙織は静かに口を開いた。

「そんな。ユウさんだけのせいじゃないです」

『でも、元気ないね。本当にごめん……』

「大丈夫です。本当に……」

そう言うものの、沙織は正直参っていた。鷹緒がいなかったため、心から支えてくれる人が近くにはいない気がする。

沈黙の後、ユウが口を開いた。

『沙織ちゃん。こんな時にあれだけど……僕とつき合わない？』

突然のユウの言葉に、沙織は驚いた。

「えっ？」

『この報道はしばらく冷めないと思うんだ。だったら、ちゃんとつき合って公表すれば、今よりは君を守れる。堂々と、君と一緒にいられる』

「ユウさん……」

そんなユウの言葉に、沙織は驚きを隠せなかった。まるで夢でも見ているのかと思う。

『僕は本気だよ。気付いてなかったみたいだけど、僕は君と出会った時から、君に惹かれてたと思う。最近君に会って、やっぱり好きなんだって気付いた……』

ユウの声は本気であった。

沙織は嬉しさを噛みしめながらも、突然の告白に、今は何も考えられない。

『突然だし、こんな時期だけど、僕は本気だよ。事務所には何も言わせない……君が好きだよ。君さえよければ、僕たちつき合おう』

ユウはそうつけ加えた。

沙織の気持ちは複雑だった。ユウのことが嫌いなどではない。むしろ好きである。けれど、鷹緒への恋心が冷めたわけではないのだ。『あの……ごめんなさい。私、びっくりしてるんです。こんな大きな反響にも、ユウさんがそういうふう to 私のことを想ってくれたことも……だからびっくりして、今は何にも考えられないっていうか……』

正直に沙織はそう言った。いくらユウのファンといえど、二つ返事でつき合うことなど出来ない。

『うん。ごめん、こっちこそ……なんか突っ走っちゃって』

「いえ……」

『じゃあ、また連絡するよ。しばらく迷惑かけちゃうと思うけど……何かあったら言ってね』

優しいユウの言葉が包む。沙織は嬉しいような恥ずかしいような、

そんな感覚を覚えた。

「はい、ありがとうございます……」

『じゃあ、また……』

そこで電話が切れた。

ユウからの告白はとても嬉しかった。しかし、今の沙織は何も考えられないほど、心身ともに疲れきっている。

「はあ……どうしたらいいんだろう」

沙織はそのままベッドに寝そべると、携帯電話を見つめた。壁紙にしている写真は、鷹緒の送別会の時に撮った集合写真だった。人数が多いため、主役の鷹緒さえも小さく映っている。鷹緒の写真は、これしか持っていない。

その時、持っていた携帯電話が震えた。

「メールだ……」

沙織はメールを開くと、すぐに起き上がって、食い入るようにメールを見つめる。

“先日はどうも。元気そうでした。沙織の頑張りは聞いています。これからも頑張ってください”

送信者は、鷹緒であった。

「た、鷹緒さん！」

99：揺れる心

「た、鷹緒さん！」

沙織はすぐに、返信を出した。

“メールありがとう！ そっちに行つて一年も経つのに、メールくれたの初めてだね。実は今、すごく落ち込んでます……どうしたらいいのかわからないよ”

弱気な言葉を並べて、沙織は送信する。

しばらく経つて、鷹緒にしては律儀にも返信が届いた。

“ヒロたちもいるんだし、何かあったら遠慮せずにやつらに相談しろよ”

鷹緒のメールに、沙織は携帯電話を握りしめた。

「なによ。一番一緒にいたい時に、手も届かないところにいるなんて……」

沙織は泣きたくなった。好きな人には想いが伝わらず、同じ国にもいない。少なくとも一年前よりは、鷹緒への熱は冷めた気がする。なにより近くにすぎる相手がいなくても平気なほど、沙織はまだ大人ではなかった。

「ユウさん。私……」

その夜、沙織はユウから告白されたことを思い出し、ずっとユウのことを考えていた。

次の日。沙織は、広樹と理恵に相談をした。ユウから告白されたことを正直に言う。

「……沙織ちゃんは、どうしたいの？」

広樹の言葉に、沙織は押し黙った。やがて静かに口を開く。

「私、なんだかいronなことがあって、何も考えられなくて……でも思っただんです。ユウさんのことは、ずっとファンで憧れてて、こ

の告白が夢じゃないかって思うくらい。もしそれが本当に本気だったら、私……ユウさんのそばに、いたいと思います……」

沙織が言った。

未だ動揺は続けているものの、これが一晩考えて出した結論だった。

「……鷹緒のことは、もう過去のことなのね？」

苦しそうに俯く沙織に、理恵が尋ねた。沙織は小さく頷く。

「それももう、わからないんです……急に離れ離れになって、連絡もまったくなくて。あの時の気持ちが恋だったのかも、今はわからない……鷹緒さんは大人で親戚で、だけど遠い存在で、もしかしたらBBよりも遠い存在だったのかもしれないです……」

沙織は思い悩んでいた。鷹緒との日々は遠く、あの頃の恋という気持ちが錯覚に思えてくる。

鷹緒がいなくなってから、不安と寂しさの中で一人頑張ってきた沙織。そんなところに出てきたユウはいとも簡単に、揺れる沙織の心に入りこんでいた。

広樹と理恵は顔を見合わせた。そして広樹が口を開く。

「僕らは沙織ちゃんが後悔しないのなら、それでいいんだ。だけど相手は大物だ。新人の君に良い影響をもたらすとは思えない……増える仕事もあるだろうけど、減る仕事のが多いと思うんだ」

そんな広樹の言葉を、沙織は俯き加減で聞いている。

広樹は言葉を続けた。

「それに君はまだ学生だし、学校への配慮も必要だろう？ つき合うのは構わないけど、公表するのは待ってもらえないだろうか。もちろんそれは僕の方から、ユウさんや向こうの事務所と話すよ」

「はい……任せます。正直、本当につき合えるのかは疑問ですし、こつもマスコミに張りつかれてたんじゃ……」

そう言って大きな溜息をつく沙織は本当に参っているのだと、広樹と理恵は深く受け止めた。

「そうだね……とりあえず、君からユウさんには返事をするといい

よ」

「はい……ごめんなさい。迷惑かけて……」

「いや、いいよ。鷹緒もびっくりするだろうな。親戚の君が、こんな大物とつき合うんだから」

広樹の言葉に、沙織は驚いた。

「鷹緒さんには……知らせないでください。何を言われるかわからないし……」

沙織がそう言った。深い理由は見当たらないが、まだ鷹緒に知られたくはないと思う。

そんな沙織に、広樹が笑顔で頷く。今後の苦労は目に見えていたが、沙織の想いを事務所として踏みにじるようなことはしたくなかった。

「うん、わかったよ。でもよかったね、沙織ちゃん。憧れの人と想いが通じて」

「……はい」

まだ複雑ではあったが、沙織も微笑む。

鷹緒への想いがどうなのか、今は沙織自身にもわからなくなっていた。しかしユウから告白を受け、沙織は確実に、そばにいるユウへと傾きかけていた。

その夜、沙織はユウに電話をかけた。

『はい!』

すぐに、ユウの声が聞こえる。その勢いは、まるで少年が好きな女性から電話を受け取った時のような、新鮮なものであった。

「あの、沙織です……」

『う、うん、どうしたの。大丈夫?』

「はい、あの……」

『……昨日の返事?』

ユウが察して尋ねる。

「はい……」

『……うん』

二人の間に、緊張が走った。

100：君に囁くラブソング

二人の間に、緊張が走った。そして沙織が口を開く。

「あの。ひとつだけ、聞いてもいいですか？」

『うん』

「ユウさんは有名だし、カッコイイし、それなのにどうして私なんかを……」

沙織は疑問をぶつけた。

全国規模のコンテスト準優勝者とはいえ、ユウが出会ってきたはずの芸能人たちと比べれば、自分は大した顔でも体系でもないことは自覚している。

『なんだ、そんなこと？』

緊張する沙織に反して、電話の向こうから聞こえてきたユウの声は、呆れたような、明るく笑った声であった。

『人を好きになるのに、理由なんかなくてしょ。そりゃあテレビに出てる芸能人みたいに、顔が可愛いければ可愛いほどいいかもしれないけど、そうそう自分と合う人間っていないよ。それに沙織ちゃんも可愛いじゃない。もっと自信を持ちなよ。シンコン準優勝者の君でも、そんなふうに思うんだね』

そんなユウの言葉は、沙織の不安を一気に吹き消したような、そんな気がした。

「ユウさん。私、ずっとユウさんに憧れてました。だから……本当に、私なんかでよかったら、その……」

言いにくそうに、沙織はそう言った。

『それって、もしかして……いいの？』

「は、はい……」

『やったー！』

電話の向こうで、ユウが絶叫する。本当に嬉しそうだ。

「ユ、ユウさん？」

『あ、ごめん。なんか一人で盛り上がったちゃって……でも、よかった。フラれるんだとばかり思ってたから……』

「そ、そんな……」

嬉しそうなユウに、沙織も微笑む。恥ずかしさと嬉しさが混じり合う。

やがてユウが尋ねてきた。

『でも、事務所の人には言ったの？ 大丈夫？』

「あ、はい。うちは恋愛とか自由なんで……でも相手がユウさんだから、新人の私にはいろいろ不利だろうって。だから、公表は……」
沙織の言葉を聞いて、ユウは静かに口を開く。

『そうだね……まだ沙織ちゃん、学生だもんね。わかったよ。僕も忙しいし、あんまり二人きりで一緒にいるとかは、実際出来ないと思うんだ。事務所の人の意見は正しいと思うし、時期が来るまで公表は控えようか』

すべてを察してユウが言った。その心遣いが、沙織はとても嬉しかった。

「ありがとうございます……」

『いいよ。僕は君とつき合えるっただけでいい。でも、あんな記事書かれたんだ……何かあった時も、これからは堂々と君を守る』

まるでラブソングを囁かれているように、沙織の心は解されていた。

その日から、沙織とユウの秘密の交際が始まった。

しばらくマスコミの目から離されることはなかったが、実際にユウが沙織と会っている暇もないほどに忙しかったため、その報道は次第に激減していく。それと同時に噂も消えるようになり、沙織も以前と同じように仕事を続けていった。

また、ユウが心配していたような過剰な報道もそれほどなかった。沙織は学校の同級生などから、真相を聞かれたりはしたが、答えられるはずもない。

沙織とユウは、二人きりで会うことなどほとんど出来なかったが、毎日のメールや電話のやりとりで、その交際を続けていった。

それから数カ月後、沙織は無事に高校を卒業し、都内の短期大学へ通うこととなった。それと同時に、本格的に芸能活動をするため、事務所近くに一人暮らしを始める。

「よし。これでなんとか暮らせるかな」

最後のダンボールを片付け、新居となる部屋を見渡して、沙織が言った。

すると、携帯電話が鳴る。

「はい。あ、ユウ？」

電話の相手は、未だ順調に続いている、恋人のユウである。二人はもう、呼び捨てで呼び合える仲となっていた。今では、たまに二人きりで食事に行ったりもしている。

『沙織？ 引越しは終わった？』

「うん、今」

『ごめん、手伝えなくて』

「いいよ、そんなの。それに、ユウが引越し手伝う姿なんて、想像つかない」

笑って沙織が言う。それに比べられるように、ユウも笑った。

『あはは。そうかな？ それより今日、久々に早く終わりそうなんだ。一緒に食事でもしない？』

「うん、するする！」

『じゃあ迎えに行くよ。七時半に』

「オーケー。あとでね」

沙織は電話を切った。

つき合ってみると、ユウは普通の男性で、人気歌手とはまったく違った顔を見せる。そんなユウが、沙織はたまらなく愛しかった。

101：秘密の交際

「今日はコンサートの打ち合わせがあったんだけどさ、企画目白押しできつと楽しくなると思うよ。コンサートには、沙織も来てくれるよな？」

ユウの部屋で、ユウが沙織にそう言った。

二人のデートは、ユウの部屋で過ごすことが多かった。外だと目立つ上、リスクも大きい。ユウの住むマンションは、オートロックで駐車場も地下のため、そうそう人に会うことはなかった。駐車場に出入りの際は、沙織が体を隠しておけばバレることはないのだ。そんな他人にはあまりない苦勞を抱えながらも、二人の交際は順調だ。

ユウの話を聞きながら、沙織は笑って頷く。

「もちろん行くよ。今回のコンサートも、楽しくなりそうだね」

「うん、頑張るよ。ああ、そういえば諸星さん、もうニューヨークに行って二年じゃない？ そろそろ帰ってくるんじゃないかなったっけ？」

突然、ユウがそう尋ねた。

久しぶりに聞く鷹緒の名前に、沙織の目が一瞬揺れた。だが、前よりその情熱は確実に薄れてしまっている。

「ああ、うん。わかんない。私には全然連絡くれないから。でも、この間ヒロさんが、少し長引きそうって言ってた……」

「そう、長引くんだ……」

ユウが残念そうに言ったので、沙織は微笑んだ。

「ユウは本当に鷹緒さんのこと、尊敬してるんだね」

「うん、まあね。僕は前から趣味で写真を撮ってたんだけど、あの人の写真はずつとすごいって思ってたんだ。こっちは被写体だけど、思った以上にカッコよく撮ってくれるしさ。気持ちがいいんだ、撮ってもらおうと」

「うん……わかる」

沙織もその経験者であった。鷹緒は、沙織がカメラの前で緊張していても自然と解してくれ、仕上がった写真は別人のように写っている。そんな鷹緒の腕に惚れこんでいる人が、ユウ以外にも多くいるということは、沙織にも理解出来る。

「諸星さんに、言っていないでしょ？　僕らがつき合ってること…

…」

「うん……会話もろくにしてないからね」

「じゃあ、知ったら驚くだろうな」

「そうだね……」

二人は笑った。

「……寂しくない？」

突然、ユウがそう尋ねた。その意味がわからず、沙織が聞き返す。

「え？」

「だからさ、諸星さんがいなくなって、寂しくない？」

「どうして？　私たち、ただの親戚だもん……」

「でも、好きだったんでしょう？」

ユウの言葉に、沙織は驚いた。

「……どうして？」

「知ってるよ。見てればわかるもん。前に沙織をコンサートに誘った時、沙織ってば、僕らよりも諸星さんとはかり話してたし、態度がね」

「あ、あれは緊張してたんだよ。BBのコンサートだし、楽屋まで入れてくれたから……」

赤くなって沙織が言う。

「僕はその頃から、沙織のことが気になってただけだな……」

ユウの悪戯な瞳に、沙織が真っ赤になって天井を見上げる。そして一つ咳払いをすると、ユウを見つめた。

「でも、もう昔のことだよ？」

沙織の言葉に、ユウは嬉しそうに微笑んだ。

「よかった……ずるいかもしれないけど、諸星さんが日本を離れたって聞いて、チャンスかなって思ってたんだ。あれから会う機会も全然なかったからアタック出来なかったけど、こうして沙織とつき合えてよかった」

正直なユウの言葉に、沙織は恥ずかしそうに微笑みながらも、首を傾げた。

「どうして？ ユウはモテモテなのに。鷹緒さんと張り合うことないじゃない」

「いやあ、確かに僕はモテモテだよ。だけどあの人、大人じゃない？ 仕事面の姿勢や技術だけじゃなくて、男としていろいろ尊敬出来る人だと思う。そんな人のことを好きな子を、どうやったら振り向いてもらえるのか、結構真面目に考えてた」

「変なの。天下のＢＢのリーダーなのに」

弱気なユウの言葉に、沙織が吹き出して言った。ユウも微笑む。

「変かな？ 僕はただのユウだよ」

「うん。今はわかる」

二人はそつとキスをした。

102：スキヤンダル

それから数カ月後――。

鷹緒が日本を発つてから、二年半が過ぎようとしていた。二年契約で行ったものの、鷹緒が帰る気配はないが、日本でも鷹緒の写真が多く起用され続け、ニューヨークに居ながらにして、仕事に自由しない状況になっていた。

「へえ。じゃあ、諸星さん、全然帰って来る気配がないんだ？」

いつものようにユウの部屋で、沙織はユウと話をしていた。もう真夜中の時間である。

沙織は口を尖らせ、頷いた。

「うん。事務所の人が言つてた……もう知らない。親戚だつていうのに、私には全然連絡してくれないし」

「ハハハ。あの人、そういうのダメじゃなさそうだね……あ、沙織」

突然、ユウが窓の外を見て言った。

「え？」

「雪！」

「わあ、本当だ！　どうりで寒いはずだね……」

二人は揃って窓の外を見つめた。外は二月の終わりで、今の時間は特に冷え込んでいる。

「寒いね……」

そう言う沙織の肩を、ユウはそっと抱き寄せた。

「うん……戻ろう」

二人はリビングの中心へと戻っていく。

めったに会えない二人だが、二人きりのこの時間だけが、すべてを繋ぎとめるような、絶対の時間であった。

数日後。マスコミの嵐が、再び沙織を襲った。またもスクープ雑誌が、ユウと沙織の熱愛を報じたのである。

すでに一度沈下されたスキャンダルは、再び一気に燃え上がった。

「すごいハッキリ出ちゃったわね……」

事務所では、理恵が頭を抱えてそう言った。

写し出された写真には、沙織とユウが、ユウの部屋で寄り添っている写真が写っている。それは数日前に二人で雪を見上げた、その時の写真であった。

「どこからこんな……」

沙織も溜息をついて言う。

「張り込んでいたのね。まあ、今まで何度か報じられはしてたけど、その度にすぐに沈下出来ていたのが不思議よね。ＢＢ側の事務所のおかげだろうけど。でも今回は……」

その時、事務所の電話が鳴った。

「もう！今日は鳴りっ放しだわ」

「ごめんなさい……」

虚ろな目をしながら沙織が謝る。前回とは二人の関係も立場も違うが、どうしていいのかわからなくなる。

その時、事務員の牧が理恵に手招きした。

「理恵さん。ＢＢ事務所の社長さんからお電話です」

「はい」

理恵はすぐに電話に出る。

『お電話代わりました。副社長の石川です。はい、あいにく社長は席を外しております……』

話を続けている理恵を尻目に、沙織は自分の出ているスクープ記事を見つめた。そこには、はっきりと自分の姿が写し出され、ありもしない噂が書き立てられている。

「沙織ちゃん。電話、代わって」

その時、理恵がそう言ったので、沙織は受話器を受け取った。

「もしもし……」

『沙織？』

受話器の向こうから聞こえたのは、ユウの声であった。その声を聞いた途端、沙織は安心すると同時に、泣きたくもなる。だがそれを堪えて、沙織は口を開いた。

「ユウ？」

『うん。沙織、大丈夫？ 今、うちの社長と、君の事務所の副社長さんで話をしてもらった。今回のことは、前とは状況が違うだろう？ 君も高校生じゃないし、新人モデルでもないんだ。それに、僕と正式につき合ってる。僕、ずっと考えてた。みんなに君との交際を公表しようって……君さえよければ、記者会見するよ。一緒にやなくていい。僕がやる』

ユウの決意に満ちた言葉だった。

103：記者会見

『僕、ずっと考えてた。みんなに君との交際を公表しようって……』

君さえよければ、記者会見するよ。一緒にやなくていい。僕がやる』

「ユウ……」

『正直言つと、公表したからどうってことじゃないと思うんだ。仕事にだって影響するかもしれない。だけど、このまま隠し通すよりは、僕は公表したい。隠れてコソコソ会うんじゃないくて、君とちゃんと向き合いたいんだ。公表すれば悪いこともあるかもしれないけど、少なくともマスコミはしばらくすれば引くと思うし、もう隠す必要もなくなる。君さえよければ、すぐにでも記者会見を開こうと思うてる』

ユウの言葉に、沙織は泣けてきた。

「うん、私も……もう、隠れて会うのは嫌……」

沙織はやっとそう口にした。

隠れて会うのは当たり前だと思い込んでいた。ユウはみんなのユウであると思っていた。しかし、ユウから公表したいと言ってきたのは、沙織を愛してくれている証拠だと思う。

『じゃあ、今夜にでも記者会見を開くと思う。しばらくは沙織のところにマスコミが行くと思うけど、沙織はあんまりマスコミ慣れしてないんだし、無理はしないで。またしばらくは会えなくなるかもしれないけど……すぐに会えるよ』

「うん……」

『じゃあ、また……』

「ユウ。ありがとう……」

『ううん。じゃあね』

二人は静かに電話を切った。

それから沙織は、自分の不甲斐なさを恥じた。自分はユウのように強くもない。実際、自分が記者会見などを出来る度量ではないこ

とは、よくわかつている。また迷惑をかけ通しだった事務所の人たちは、一言も沙織を責めることなく、沙織を全力で支えてくれている。そんな中で沙織も、もっと成長しなければならないと、焦りを感じていた。

その夜。夕方のニュースで、ユウの記者会見が映し出された。

「それでは、あの記事のことは本当なんですね？」

記者の一人がそう尋ねた。ユウは頷くと、静かに口を開く。

「はい。書いてあることはデタラメばかりですが、僕は写真の女性とおつき合いさせていただいています」

「その女性とは、以前噂になったモデルで活躍されている、小澤沙織さんというのは、間違いないですか？」

「……そうです」

「何年くらいのおつき合いになりますか？」

「一年ちよつとだと思えますけど……」

「結婚は考えていらっしゃるのですか？」

「まだそこまでは……でも、真剣におつき合いさせていただいています」

ユウはハッキリと記者の質問に答えていった。そんな中で、事務所の間人間が割り込む。

「それでは、そろそろ時間のほうが押してまいりましたので、この辺で終わらせていただきたいと思います」

その言葉に、ユウは立ち上がる。

そんなユウに、記者がもう一つ質問をぶつける。

「ユウさん。ファンの方々に一言！」

「……僕もプライベートでは普通の男です。どうか応援してください。僕も仕事でみなさんにそれを返したいと思っています」

ユウはそう言うと、記者会見場を出ていった。

記者会見の様子を、沙織はテレビに食い入るように見ていた。ユウの愛情が、痛いほど伝わってくる。

その日から沙織とユウは、マスコミに執拗に追われていった。しかし今回は、公表したことできっぱりとお互いのことを言うようになっていく。それだけでも、互いにとっては救われた。

仕事もファンも少しは減っていったが、マスコミが騒ぎ立てなくなる頃には、徐々にそれも持ち直していった。

三月。まだ寒さが残る夜、東京のとあるコンサートホールでは、BBのコンサートが行われていた。寒さも感じさせぬ熱気ある会場では、一人でユウの姿を見守る沙織の姿があった。

関係者席を用意されていたものの、周りは関係者を利用してやってきた、熱狂的ファンの子が多いようだ。沙織は帽子を目深に被ると、マフラーに顔を埋めて、コンサートを見つめていた。

恋人の姿はスポットライトを浴びて輝き、この時だけは沙織の恋人ではないと感じさせられる。

「今日はみんな、ホントにありがとう！ これからもよろしくねー！」

ユウが叫ぶと、ファンたちも叫ぶ。アンコールを終えると、BBたちは袖の奥へと消えていった。

会場が明るくなり、ざわざわと人の波も会場を出ていく。沙織はゆっくりと立ち上がると、人の波へとついていった。関係者席という区切られた席なので、帰り道も比較的スムーズだ。

「ヤベ。携帯落としたっばい！」

前を歩いている少女が、突然振り向いてそう言った。

人波に逆流するので、後ろにいた沙織は突き飛ばされるように倒

れこんだ。

「あ、ごめんなさい！」

前にいた少女は素直に謝り、沙織を見つめる。沙織は首を振って立ち上がると、少女の驚く顔に気が付いた。

「あんた……小澤沙織！」

少女の言葉に反応して、前を歩いていた人たちが一斉に振り向く。

「えー、なに？ 彼氏利用してビツプ席かよ」

「意外とブサイクー」

一気に罵声が飛ぶ。沙織は目をきよろきよろさせて一礼すると、もと来た道に戻ろうとした。

「待ちなさいよ。なに逃げようとしてんの？」

気がつけば、沙織は一気にBBファンたちに囲まれていた。マスコミよりもなによりも、ファンたちが恐く見える。

「なに、その顔。何もしないって」

ファンたちはそう言いながらも、沙織の腕を掴んで床へと引き倒し、沙織の帽子やマフラーをはぎ取るようにする。

「これ、変装のつもり？ バレバレだから」

「BBファンに一言ないの？ ユウ取ったくせにさ」

「……取ってないです」

静かに、沙織が言った。

「あ？」

「べつに、あなたたちから取ったんじゃない。私たちは真剣に……」

「うざいんだけど！」

反論した沙織に向かって、ファンの一人が足を蹴り上げる。

「何してんだ！」

その時、そんな声とともに、警備員が駆けつけた。

「べつに何もしてませーん。転んだ人がいるだけでーす」

逃げる様子もなく、ファンたちはそのまま去っていった。

「おい、大丈夫か？」

そう言う男性の声に、沙織は顔を上げる。沙織の目には、信じら

れない人物が映った。

「た、たっ……鷹緒さん?!」

目の前には、沙織の顔を覗き込む鷹緒の姿があった。

「た、たつ……鷹緒さん?!」

沙織の目の前には、沙織の顔を覗き込む鷹緒の姿があった。

二年半ぶりの再会であるが、沙織は急な出来事に、状況を把握出来ない。

「ただいま」

そんな沙織に反して、笑みを浮かべ、鷹緒が反応を楽しむかのようについにそう言った。

「お、おかえり……なさい……」

思わず沙織もそう返すが、未だ目の焦点すら合わない様子だ。

「なにアホ面してんだよ。帰国早々、元気そうなところ見せてくれんじゃん」

不敵な笑顔とともに変わらぬ口調の鷹緒は、二年半前より少し痩せ、更に大人っぽく見える。

「ど、どうして? ニューヨークにいたんじゃ……」

「十数時間前までな。ほら、立てるか?」

鷹緒に支えられ、沙織が立ち上がる。しかし、コンクリートの床に倒れ込んだため、スカートから覗く膝からは、血が出ていた。

「痛っ……」

救護室に向かった二人。沙織はそこで軽い処置を受け、もう客が誰も居なくなつた会場へと戻っていった。

「楽屋、行くんだろ?」

鷹緒はそう言つて、沙織を促す。

沙織には、まだここにいるのが鷹緒だということが信じられない。

「なんか、信じられない……」

「あつそ。じゃあ置いてくぞ」

スタスタと楽屋へ向かう鷹緒に、沙織は慌ててついていった。

「諸星さん！」

楽屋でのユウを初めとするＢＢの反応も、沙織と同じだった。

「本物ですか？　いつ帰ったんですか。そんな噂、全然……」

「さっきだよ。まあ、急だしね……」

「うわ。帰国したてで僕らのコンサート来てくれたなんて、感激だな」

感激した様子でユウが言った。

鷹緒は苦笑すると、からうかうように口を開く。

「それより、うちの可愛い親戚が、君のせいで怪我したんだ。つき合ってるんなら、ちゃんとファンも納得させてほしいね」

「えっ、ファンの子が沙織に怪我を……って、諸星さん、僕らがつき合ってること知って……？」

「そりゃあ、知ってるよ」

「ど、どうして？　ヒロさんには……」

驚いた沙織が、二人の会話に入って言った。鷹緒は苦笑する。

「口止めてたんだろ？　でも日本でのニュースは嫌でも耳に入るし、おまえは俺の親戚だしな。ヒロも教えてくれたよ」

「ヒロさんってば、約束が違う……」

「当然だろうが。じゃあ、俺は事務所に行かなきゃならないんで。

沙織はここににいるだろ？」

鷹緒が沙織に尋ねる。

「あ……」

「今日は諸星さんと一緒に帰りなよ。久々の再会でしょ？　後でメールするから」

ユウの言葉に、沙織は静かに頷いた。ユウも頷くと、鷹緒を見つめる。

「諸星さん、しばらくはこっちにいるんですよね？」

「そのつもりです」

「じゃあ、また僕らの写真撮ってくださいね。沙織を頼みます。今日はありがとうございました」

「こちらこそ、お邪魔しました。お疲れさま」

鷹緒はそう言っと、沙織とともに会場を後にした。

「びっくりしちゃった。全然帰ってくる気配なかったんだもん。一度メールくれたきりで、全然音沙汰ないし……」

タクシーの中で沙織が言う。

鷹緒は空港から直に来たようで、大きなスーツケースをトランクに収めている。

「向こうで区切りついたから。ったく、二年契約だったのに、ずるずる引つ張りやがって……」

「じゃあ、もうこっちにいられるんだね？」

「ああ、そのつもり」

「よかった……」

沙織はそう言ったところで、ハツとした。思わず出た「よかった」という言葉だが、沙織自身にも説明しがたい安心感があつた。

「本当、急だよな、おまえは」

事務所で合流した広樹が、飲み屋でビールを飲みながらそう言った。広樹の前には、鷹緒と沙織が並んで座っている。

「俺も突然解放されたんだよ。ベテラン写真家にね」

「それって、鷹緒さんの師匠っていう、茜さんのお父さんの？」

苦笑している鷹緒に、沙織が尋ねる。

「ああ。向こうでも散々振り回されたけど、いい経験になったよ」

「そうみたいだな。また腕上げたんじゃないのって、いくつかの編集者からも言われたよ」

広樹が言った。鷹緒は軽く微笑んで口を開く。

「日本じゃないからよく見えるだけだろ。でも、こっちも仕事を兼任出来てよかったよ。まさか向こうでこっちの仕事が出来ると思わなかった」

「売れっ子だからな、おまえは」

前と変わらぬ鷹緒と広樹の会話に、沙織は嬉しさを噛み締めながら二人を見つめていた。

106：祝賀会

「それはそうと、沙織も出世したな。ファンに詰られるほど、ユウとの仲が表沙汰になってるとは知らなかった」

からかうように、鷹緒が沙織に言った。

「か、からかわないでください。私だって、あんなに囲まれたのは初めてだよ。でもグッドタイミングだったね。どうしてわかったの？ 私があそこにいるって……」

「俺、途中から入ったんだけど、おまえが居た関係者席の反対側で見てたんだ。ヒロからおまえがコンサートに行ってるって聞いてたし、すぐにおまえのことは見つけたんだけど、反対側だしコンサートの最中だから声かけられなくてさ。終わってから追いかけたら、あんなことになってるだろ？ 急いで警備員呼んで、駆けつけたってわけ」

「ひどい。もっと早くに声かけてくれてたら、あんなことにはならなかったのに……」

「馬鹿言つなよ。おまえがさっさと出ていくのが悪いんだろ？」

「だって……」

「あははは。久々の再会は楽しいな。さあ、今日はじゃんじゃん飲もう。僕の奢りだからね」

楽しげなひとときに、広樹が言う。

「じゃあ、日本酒追加ね」

「ハイハイ。じゃんじゃんどうぞ」

三人は遅くまで盛り上がっていた。

「あー、もう。帰国早々、俺の手を煩わせるな、おまえは」
広樹を軽く背負いながら、鷹緒が言った。広樹はひどく酔っている。

「だって、久々だからさあ。ねえ？ 沙織ちゃん」

「ハイハイ。うう、寒い……あ、タクシー！」

タクシーに向かって鷹緒が手を上げた。そして止まったタクシーに、広樹を乗せる。

「ヒロ。行き先言えるな？」

「うん、じゃあね」

広樹はそのまま、タクシーで去っていった。

「ったく……」

「あはは。相変わらずだね、ヒロさんも」

笑って沙織が言った。そんな沙織に、鷹緒も微笑む。

「ああ、おまえもタクシーで帰れよ。今、拾うから」

「鷹緒さんは？ あのマンションに戻るの？」

「今日はビジネスホテルでも行くよ。うちは二年半そのままだから、帰って早々掃除とか面倒だし」

鷹緒はそう言つと、タクシーを拾おうと道路を見つめる。そんな鷹緒に、沙織が口を開いた。

「私はいいよ。この近くだから、歩いて帰れるし」

「ああ、一人暮らししてんだっけ？ でももう遅いし」

「大丈夫だって」

「……じゃあ、送るよ。俺も一旦、荷物取りに事務所に戻らなきゃいけないし……」

「……うん」

二人は、沙織の家まで歩き出した。変わらぬ鷹緒の優しさが、沙織の心に沁みる。

「……茜さんは、元気？」

しばらくして沙織が尋ねた。

茜はともに鷹緒を好きだった、恋のライバルである。鷹緒とともにニューヨークで過ごしていたはずだが、音沙汰もない。

「さあ、元気じゃない？」

「え？ だって、一緒に仕事してたんじゃ……」

「それは最初の数ヶ月だけ。それからあいつ、知り合いの仕事でパ

りに渡って、今はドイツ辺りにいるらしいよ。近々結婚するらしいし」

鷹緒の言葉に、沙織は飛び上がるほど驚いた。

「ええ！ 誰と？」

「向こうで知り合ったやつだろ？」

「だ、だって、茜さん……」

「ハハ。信じらんねえよな。あれだけ俺に体当たりしてきたくせに、あっち行って数ヶ月もしないうちに恋人出来て、運命の人だって言ってたよ」

苦笑しながら鷹緒が言った。ライバルがいなくなり、沙織は嬉しいような悲しいような思いになる。

「へえ。そうなんだ……」

「結婚するらしいから、あいつの親父さんからとりあえず解放されたわけ。今は親父さんも、ドイツに様子を見に行ってる。まあ茜のことだから、そのうちひょっこり顔出して、挨拶しにくるよ」

「……寂しくない？ 慕ってくれた人が、結婚しちゃうなんてさ……」

思い切って沙織が尋ねた。

107：再会の事務所

「……寂しくない？ 慕ってくれた人が、結婚しちゃうなんてさ……」

思い切って沙織が尋ねた。そんな沙織に、鷹緒は笑う。

「ハハ……喜ばしい限りですよ」

「ふうん、そういうもの。じゃあ、私がユウとつき合ってることも……」

「ん？」

「う、ふうん。なんでもない。あ、うちはそこです……」

続く言葉を飲み込んで、沙織は数軒先のマンションを指差して言った。小さいが表通りに面し、セキュリティもしっかりしているようだ。

「あ、お茶でも……」

「いい。恋人以外の男を、絶対中には入れるなよ」

言いかけた沙織に、鷹緒が拒否して言った。

「う、うん……」

「じゃあな。早く中入れよ」

「うん……鷹緒さん、本当にこれからは、ずっとこっちにいるんだよね？」

確認するようにもう一度、沙織が尋ねた。

鷹緒は頷き、微笑む。

「ああ、とりあえずはな」

「うん……じゃあ、またね」

「ああ。おやすみ」

沙織が中へ入るのを確認すると、鷹緒は事務所へと戻っていった。

部屋に入ると、沙織は嬉しさに思わず顔をほころばせた。鷹緒が帰ってきた。そう思うと、心が弾んで仕方がない。その時、カバン

の中で携帯電話が震えた。

「あ、忘れてた！」

沙織はカバンを漁ると、携帯電話を取り出す。

鷹緒との再会に、携帯電話の存在すら忘れていた。画面を見ると、いくつかメールが来ているのがわかる。

「ユウから二回もメールあったんだ……」

「こっちは終わりました。諸星さんに今日来てくれたお礼、伝えておいてください」

“盛り上がってるのかな？ もう遅いので今日は寝ます。おやすみ”
沙織はすぐに返信する。

“気付かなくてごめんね。今帰りました。ヒロさんと鷹緒さんと三人で話してました。久々にいろいろ話して盛り上がったよ。遅くなつてごめんね。おやすみなさい”

そう返信すると、沙織はベッドに寝そべり、携帯電話のデータを呼び起こす。さっき撮ったばかりの、鷹緒と広樹の写真があった。

「本当に、帰ってきたんだ……」

沙織はそのまま、眠ってしまった。

次の日の早朝。

鷹緒に会いに、沙織は事務所へと向かっていった。まだ事務所が開いて間もない時間だが、事務員が群がっている。案の定、その中心には鷹緒がいた。

「鷹緒さん、おかえりなさい！ 帰って早々、事務所で寝泊りなんて、なにしてんですか」

「よかった、変わってない。でも、ちょっと痩せたんじゃないですか？ 向こうの料理、合わなかったですか？」

事務員がそれぞれに、鷹緒に言う。

「おまえら、うるさい。二日酔いで寝起きだったのに……」

「あははは。相変わらずだなあ」

その時、沙織の後ろに人影があった。副社長の理恵である。それを見つけた鷹緒が、優しく微笑んだ。

「ただいま」

鷹緒が声をかける。

「おかえりなさい」

理恵はそう言いながら、鷹緒に近付いていく。鷹緒は一同を見つめ、立ち上がった。

「みんなも相変わらず元気そうで安心した……じゃあ俺、一度家帰るから」

そんな鷹緒に、理恵が声をかける。

「あ、部屋だけど、スタジオの掃除の日に、ついでにちょこちょこ掃除しておいたから。細かいところまでは出来てないけど、それなりに綺麗のはず」

「ああ、マジで？ サンキュー、助かる。これから大掃除しなきゃいけないと思ってた。じゃあ風呂でも入って、挨拶回り済ませてくるよ」

「帰国早々、挨拶回りですか。仕事人間だなあ」

事務員たちが鷹緒に向かって、口々にそう言った。

「当然、常識。じゃあ、今度ゆっくりな」

鷹緒はそう言つと荷物を抱え、入口のところにいる沙織に近付く。

「入らないの？」

「あ……うつん」

「じゃあ、またな」

沙織の肩を軽く叩くと、鷹緒は事務所を出ていった。

その日から、鷹緒は二年半前と変わらず、仕事に明け暮れる日々を送っていた。

沙織にとつて違うことは、自分の周りの環境だけ。そこに鷹緒が違和感なく入ってきたように、二年半の月日を越えて、新たな日々

が始まっていった。

108：祖父母の家

夏――。

沙織は何事もなく過ごしていた。与えられた仕事も順調で、モデルだけでなく今ではちょっとしたタレントもどきな仕事もくるようになっていた。ユウとは相変わらず限られた時間の中で会っていたが、それでも順調に交際は続いている。

鷹緒は帰国間もなくして、日本でのスケジュールが一気に抑えられた。そのため、あちこちに引つ張り回され、二年半前の鷹緒よりも更に忙しくなったと感じるほどである。沙織ともほとんど会う機会はなかった。

ある日。沙織はお盆休みを利用して、家族揃って母方の祖父母の家へ行くことになっていた。いつもはほとんど休みのない沙織の父親も、一人暮らしをしている大学生の兄も、久々に帰ってくるということで実現したものだった。

久々に一家揃った小澤家は、数年ぶりに祖母の家を訪ねる。

「わあ、変わってない。おばあちゃんの家！」

沙織が目を輝かせて言った。それに頷いて沙織の兄、雅人も口を開く。

「本当、ずいぶん来てなかったもんな。俺は中学生以来かな……夏休みには、よくここに来て遊んでたのに」

「いらっしやい。雅ちゃんも、沙織ちゃんも、大きくなったわね」

祖父母が沙織たちを見て言った。優しそうに目を細めている。久しぶりに会うというのに、その笑顔で沙織の心は一気に解れていた。「おじいちゃん、おばあちゃん、お久しぶりです。お世話になります！」

一同は中へと入っていった。

「相変わらず、お庭も広いなあ」

縁側に座りながら、沙織が言う。

「沙織ちゃん。沙織ちゃんの写真あるわよ」

そう言つて、祖母がアルバムを持って隣に座つた。

「へえ、俺も見たい」

雅人も興味津々でアルバムを覗きこむ。そこには幼い頃の沙織と雅人がいた。

「うわあ、いくつだろう。俺が五歳くらいかな？」

「じゃあ、私は二歳？」

沙織がアルバムをめくると、見知らぬ少年が映つた。

「あれ？ この人……」

「鷹緒兄ちゃんだろ？ よく遊んでくれたじゃん」

雅人が言つた。

沙織の祖母は鷹緒の伯母に当たる。沙織はそれを聞いて、写真に目を凝らす。

「え！ そういえば、そうかも……」

「これは鷹緒が十六歳くらいの時じゃないかしらね」

祖母が言つた。沙織は祖母を見つめる。

「鷹緒さんも、よくここに來てたの？」

「ああ、沙織ちゃんは覚えてないのね。鷹緒は高校生時代、ここで暮らしてたのよ。卒業してから家を出て、すぐに結婚してしまったけれどね……」

祖母の言葉に、沙織は驚いた。

「え、鷹緒さんが、ここに？」

「俺は覚えてるよ。俺たちがここに遊びに來た時は、いつも一緒に遊んでくれたじゃん」

「へえ。鷹緒さんが……」

雅人の声を聞きながら、沙織はもう一度写真を見つめる。

当時、あまりの幼さに消えてしまった記憶が、写真を通して蘇る

ような気がした。なにより写真に写っている鷹緒は、まだあどけなさが残る少年で、今の自分よりも年下であり、知らない時代がそこにあった。

「さあ、そろそろご飯にしようかしらね」

祖母がそう言ったので、沙織も立ち上がる。

「おばあちゃん、私も手伝う。でも、このアルバムは貸してもらっていい？ 後でじっくり見るから」

「いいわよ」

沙織は祖母について、台所へと向かっていった。

その夜。大人たちが盛り上がる中、沙織は縁側でアルバムを見返した。幼い頃の自分の隣には、間違いなく鷹緒の姿があった。見覚えのある眼鏡をかけている。日本を発つ直前までかけていた眼鏡だ。この写真を見て、年代物だったことがわかる。

（私の知らない鷹緒さん。親戚なのに、何も知らない……）

心の中で沙織はぼりつと呟いた。

109：アルバムの少年

「沙織ちゃん。もう寝る？」

そこに、祖母が声をかけた。

「あ、まだ大丈夫……」

「酔っ払いばかりだから、つまらないでしょう？」

「うん。これ、ありがとうございました」

沙織はそう言っ、アルバムを祖母へ返す。

「いいのよ。これを見ると、みんなずいぶん大きくなったことがわかるわね」

「うん……」

「鷹緒と、同じ職場にいるんですって？」

その時、祖母が尋ねた。

「あ、うん。最近は、あんまり会わないけど」

「そう。元気にしてる？ ちっとも連絡よこさないから……」

まるで母親のようにそう言った祖母に、沙織は軽く笑う。

「うん、元気そうだよ。なんかおばあちゃん、鷹緒さんのお母さんみたいだね」

「そうね……」

「私、小さい頃の鷹緒さんとの記憶、あんまりないから……ここに暮らしてたって聞いて、びっくりした。仕事で一緒だし親戚だけ、なんにも知らないんだって思った……」

祖母は頷きながら、沙織の隣に腰を落ち着かせた。遠い日を思い返すように、祖母の目は暖かい。そして静かに口を開いた。

「鷹緒の父親は政治家だね。あの子が……鷹緒の母親が死んで、それからすぐに父親が再婚したのよ。その人との子供が生まれた時には、鷹緒も思春期真っ只中で、荒れて荒れて……父親はそんな鷹緒を表に出したくなかったみたいけど、とうとう放り出すように、うちに連れて来てね。しばらく預かることになったのよ。それが、

鷹緒が十五歳の時……」

祖母の言葉に耳を傾ける沙織は、知られざる鷹緒の過去を知った。「でも、今ではあの子がカメラマンとして活躍しているのを見て、ホッとしているのよ。沙織ちゃんもモデルさんになって、誇らしいわ」

「おばあちゃん……」

相変わらず優しい祖母の瞳に、沙織もつられて微笑む。

「そうそう、鷹緒がカメラに興味を示したのは、この家でのよ。鷹緒がおじいちゃんから古いカメラをもらって、よく庭で花とか虫とか撮ってたわ……ほら、この写真を撮ったのも鷹緒よ。今思えば、写真を撮ることがあの子にとって、救いになってるのかもしれないわね……ああ、ごめんなさいね。こんな昔話思い出しちゃって」

沙織が写っている写真を指差しながら、祖母がそう言った。

まだ子供だった鷹緒が撮ったという、ごく普通の写真である。しかし言われてみれば、鷹緒らしい写真といえるかもしれない。

苦笑している祖母に、沙織は首を振った。

「うん。鷹緒さんにそんなことがあったなんて知らなかった……なんか今では親戚というよりも、仕事の先輩って感じだから、不思議な感じ。でも、いろいろ知れてよかったな」

「そう。まさか鷹緒と沙織ちゃんが同じ職場で働くとは、思ってたかったわ。あの子はどう？ うまくやってるのかしら？」

「うん。スケジュールも一杯みたいだし、ニューヨークに行っても日本の仕事までやってたんだもん。すごい人だと思う……」

そう言った沙織に、祖母はホッとした顔を見せる。

「そう、よかった……あの子は母親がいないから、私が母親代わりみたいなところはあるのよ。あの子は私たちには優しくんだけど、いつも寂しそうで、不憫でなかったから……」

「へえ……」

「本当に優しい子でね……そうそう、いつだったかしら。あの子がここに来てすぐの時、黒板の字が見えづらいつて言うから一緒に眼

鏡を買いに行っただけで、店の中で申し訳なさそうにしているね。一生大事にしますなんて……眼鏡なんてそう高いものではないのに、そういうところまで気を使うというか、私たちにも気を許してなかったのかしらね……何にしても買い与えられることを嫌って、結局何もしてあげられなかったのよ」

苦笑しながら祖母が言った。そう言う祖母は、どこか寂しそうだった。

「そんなことないよ。鷹緒さん、眼鏡が壊れるまでずっとつけてたし、きつと今でも大切にしていると思うよ。それに優しいところも、変わってないと思うし……」

祖母を見つめて沙織が言った。そんな沙織に、祖母も微笑む。

「ありがとう。私はあなたみたいな可愛い孫がいて幸せだわ。でも今でも一番心配なのが、甥っ子の鷹緒なのよ……沙織ちゃんは今まで真っ直ぐ生きてきたと、私も誇りに思ってるわ。だけど鷹緒は、いつも不器用でね……沙織ちゃんも鷹緒よりもずいぶん年下だけど、同じ職場同士、鷹緒のことよろしくお願いね」

沙織は少し考えた後、小さく頷いた。祖母の心配そうな顔に、それ以上は何も言えなかった。

110：結婚報告

数日後。

「沙織ちゃん。茜ちゃんからエメールが届いたんだ」

仕事を終えて事務所に戻った沙織に、広樹が言った。すでに事務所は閉じていて、広樹しかない。

受け取ったエメールは茜から事務所のみんな宛てで、茜の結婚報告が書かれているほか、結婚相手との写真が同封されている。

「知ってた？ 茜ちゃん、結婚したんだってさ。あれだけ鷹緒に熱上げてたのに、遂に諦めたか……」

苦笑しながら広樹が言った。

沙織は頷き、同封の写真を見つめる。そこには幸せそうな茜の姿があった。

「前に鷹緒さんから聞きました。でも素敵な人みたいですね」

「うん。結婚か…… どんどん追い越されるなあ」

広樹の言葉に、沙織が笑う。

「ヒロさんは、そういう話あんまり聞かないですけど、結婚はしないんですか？」

「あはは、痛いなあ。しないってわけじゃないけど、相手がねえ……今はまだ事務所も手一杯だし、なんてね」

「大変ですよ……」

「まあね…… 鷹緒みたいにさっさと結婚しちゃうやつもいれば、僕みたいにそんな気配すらないやつもいるわけだよ」

それを聞いて、沙織はふと尋ねる。

「鷹緒さんって、十代の頃に結婚したんですよ？」

「そう、十九だったかな？」

「えっ、じゃあ理恵さんはもっと下ですよ？ もしかして、学生結婚？」

驚いた沙織に、広樹は手を振って否定した。

「いや、理恵ちゃんはモデル一筋で、高校には行つてなかったからね。学生結婚ではないよ。でも鷹緒が十九だから、理恵ちゃんは十七か……」

「何の話してるんですか？」

そこに、外回りから帰ってきた理恵が顔を出す。

「ああ、理恵ちゃん、おかえり。今、君と鷹緒の結婚当時のことをね」

「何を言ってるんですか。そんな昔の話を……」

広樹の言葉に、苦笑しながら理恵が言う。それに続いて、沙織も口を開いた。

「でも、すごいですね。十代で結婚なんて……」

「すごくないわよ、幼いだけ。慎重ではあったけど、周りも見えなくなつててね……さあ、こんな古臭い話は終わりにしてください。ヒロさん、子供が風邪引いてるんで、これで帰らせてもらいますね」

「恵美ちゃん、大丈夫なの？」

急いで片付けている理恵に、広樹が尋ねる。

「はい。今朝、病院にも連れて行つたし、大丈夫です。たまに大きな風邪引くんですよ……じゃあ、お先に」

理恵はそう言つと、事務所を出ていった。

「風邪か。今年の風邪は熱かららしいし、気をつけようね……それより、沙織ちゃんはどうしたの？ 仕事終わつたんだよね？」

そう尋ねてきた広樹に、沙織は少し照れ笑いする。

「あ、さっき仕事終わつたんですけど、家に帰っても一人だし、事務所に誰かいないかと思つて……」

「ああ、たまに一人でいたくない時もあるよね。今日はユウさんと会わないんだ？」

「最近会つてないです。今はツアー中だし、なかなか……」

「売れっ子とつき合うのも大変だね……じゃあ、よければ鷹緒の家に行つてきてくれない？ あいつ、今日は直帰してて明日も休みな

んだけど、休み中にやっておくって言うてた仕事、持って帰ってないんだよ。明日取りに来させるのも可哀想だしね」

沙織は頷いた。全然会わない鷹緒に、会いたい気持ちもある。

「いいですよ。でも休み中にまで仕事なんて、鷹緒さんも大変そうですね」

「あいつは仕事人間だからね。それでもなけりゃ、一人身でやってられないよ。じゃあ頼むよ」

「はい」

沙織は大きな封筒を受け取って、事務所を出ていった。

鷹緒の家へ行くのは、鷹緒が日本を発って以来である。

111：久しぶりの部屋

鷹緒のマンションに着いた沙織は、少しドキドキしながら部屋の呼び鈴を鳴らした。

「はい」

中から面倒臭そうに、鷹緒が出てくる。沙織は預かった封筒を差し出し、久しぶりの鷹緒の顔を眺めた。

「あの、ヒロさんから預かって……」

「うん、聞いた。ったく、明日取りに行ってもよかったのに……」
「でもヒロさんが、明日わざわざ来なくて済むようにって」

「んー、サンキュー」

鷹緒は封筒を受け取るが、それ以上何も言おうとしない。
そんな鷹緒に、沙織は眉を顰めた。

「お茶でもどうぞとか、ないの？」

「なんで？ 届けに来ただけだろ」
「すかさず鷹緒が言い返す。」

「……もういいです」
沙織はムツとしてそう言った。なぜあれほどまでに鷹緒が好きだったのか、わからなくなるような仕打ちに見えた。

「……上げれよ」
そんな沙織に、軽く溜息をつきながら鷹緒が言う。

「いいです」

「いいから、上げれ。話がある」

鷹緒は強引に沙織の腕を掴むと、中へと引き入れた。

「イタ……」

「入れよ」

そう言って中へと入っていく鷹緒に、沙織は仕方なく後に続いた。数年ぶりの鷹緒の部屋は、以前とほとんど変わっていないようである。

「……おまえ、いくら頼まれごとの仕事でも、男の部屋にホイホイ来んなよ」

リビングに着くなり、強い口調で鷹緒がそう言った。思わぬ言葉に、沙織は驚きに目を見開く。

「え……」

「ヒロにも俺から言っておくけど、俺だって親戚とはいえ、男なんだ。それに、おまえはただでさえＢＢのユウとつき合ったり、世間に目立つことしてんだから、こういうことさえスキャンダルで命取りになったりするんだよ。気をつけるよな」

そこで沙織は、初めて鷹緒の言葉を理解した。

「うん。ごめんなさい……」

沙織は素直に謝ると、言葉を続ける。

「でも、そんなに強く言うこと……」

そんな言葉を背中であきながら、鷹緒は冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、沙織に差し出した。沙織はそれを受け取って、思わず微笑んだ。

「……なに？」

笑っている沙織に、首を傾げて鷹緒が尋ねる。

「ううん。全然変わらないなって思っ」

「なにが？」

「缶コーヒーが、冷蔵庫にぎっしり入ってるところとか」

沙織の言葉に、鷹緒も苦笑した。

「……ついついね」

鷹緒はそう言うソファに座り、缶コーヒーを口につけた。

沙織もそれに続いて別のソファに座り、コーヒーを飲む。すると視線の先に、本棚に入っているレンズのない眼鏡が見えた。

「あっ！」

思わず叫んだ沙織を、鷹緒は怪訝な顔をして見つめる。

「なんだよ……」

「忘れてた！ この間、おばあちゃんの家に行ったよ」

その言葉に、鷹緒は一瞬きよとした。

「ふうん……それで？」

「それでって……いろいろ聞いちゃった。鷹緒さんが、あそこに住んでたことか」

「ん……元気だった？ 伯父さんも伯母さんも……」

少しバツが悪そうにしながら、鷹緒が尋ねる。

「うん。でも、連絡くらいしてあげたら？ 全然連絡くれないって、ちよつとグチってたよ、おばあちゃん。母親代わりなんでしょ？」

「どこまで聞いたんだよ……」

顔をしかめてそう言いながら、鷹緒はソファに寝そべった。

渋い表情の鷹緒に首を傾げながらも、沙織は祖母に教えてもらったことを思い出す。

「どこまでって……高校時代に、おばあちゃんの家に取り取られて住んでたとか、カメラを始めたきっかけは、おじいちゃんだとか、その程度かな」

「ふうん……なに、家族で行ったの？」

「うん。私もすごく久しぶりだったんだ。今までお父さんも仕事で忙しかったし、お兄ちゃんや私も受験とかなんだで行けなくて……今年はお父さんも私も同時期にお盆休みもらえたし、お兄ちゃんも帰ってくるってことになったから。一泊だけど、すごく楽しかったよ」

「そう……」

鷹緒はそのまま、目を閉じた。

「鷹緒さん。寝ちやうの？」

「いや、なんかだるい……」

「寝るなら、寝室行った方がいいよ。私ももう行くよ……」
そう言つて、沙織は立ち上がった。

「ああ……」

沙織の言葉に起き上がるものの、鷹緒はソファに座ったまま目を閉じて、呼吸を整えるように深呼吸している。

その様子を見て、沙織は鷹緒に近付いた。

「具合悪いんですか？ だるいつて……」

「ああ、平気。いつものことだから……」

「いつものことって……熱は？」

沙織が鷹緒の額に手を近付ける。一瞬触れた額は、じわりと汗が滲み、とても熱かった。

「いいつて！」

そんな沙織の手を、鷹緒が払い除けた。沙織は口を開く。

「よくないよ！ すごい熱じゃない。ごめんなさい、気付かなくて

……一緒に病院行こうよ。確か、近くに救急病院……」

「いいよ。明日行くから」

「……絶対行かないでしょ」

「よくわかるな」

笑ってそう言う鷹緒に、沙織はめげずに鷹緒の腕を掴んだ。

「いいから、行こう」

「ただの風邪だよ」

「ただの風邪でも駄目」

「うるさいな……おまえに関係ないだろうが。さっさと帰れよ」

うんざりした様子で鷹緒が言った。その言葉に、沙織は力ツとなる。

「関係ないわけじゃない！ 私は鷹緒さんの親戚だよ。それに私まだ、鷹緒さんのこと好きだもん！」

112：焦り

「関係ないわけじゃない！ 私は鷹緒さんの親戚だよ。それに私まだ、鷹緒さんのこと好きだもん！」

とっさに出た言葉に、鷹緒も驚いたが、沙織自身も驚いていた。ユウとつき合い始めてから、鷹緒のことを意識したことはほとんどない。それは鷹緒が帰国してから変わることもなかったことで、沙織には、鷹緒のことは過去の話になっていたはずだった。

「あつ……違う。好きっていつても、恋とかそういうんじゃない……」

言い訳のように沙織が続けた。沙織の心臓はバクバクと音を立てるように、激しく動いている。

そんな沙織に、鷹緒が笑った。

「馬鹿だな。本気にするかっての」

そう言う鷹緒に、沙織は少し傷ついた。だが焦りを隠すように、沙織は言葉を並べる。

「と、とにかく、追い出そうとしたって駄目よ。病人は病人らしくしてなさい。じゃあ、病院へは明日連れて行くとして、今日はもう寝なきゃ駄目だよ。はい、早く寝室行って」

沙織は鷹緒の服を軽く掴んで、寝室へと連れていった。そして鷹緒をベッドに寝かせると、濡れたタオルを額に乗せてやり、市販の薬を飲ませてやる。

「今日はこのくらいしか出来ないけど、明日は病院行ってね。私もついていってあげる」

横になった鷹緒に、沙織がそう言った。

「いいよ。子供じゃないし、一人で行ける」

「一人だったら行かないでしょ。そのくらい、わかるもん」

「ハハ……そっか。沙織、お母さんみたいだな」

軽く笑いながら、鷹緒がそう言った。

沙織の脳裏に、知る限りの鷹緒の過去が浮かぶ。実の母は亡くなり、厳しい父と再婚相手。再婚相手に子供が生まれた時、鷹緒はどんな気持ちだったのだろう。

両親が当たり前のようについて、喧嘩しつつも仲の良い兄を持つ沙織は、想像するだけで寂しくなった。沙織の心は、重く沈む。

「……沙織？」

そんな沙織に、鷹緒が声をかけた。

我に返って、沙織は鷹緒を見つめる。

「え？ あ、ごめんなさい……なんか、ぼつとしちゃった」

「大丈夫か？ 風邪、移るなよ」

「うん、平気。そういうんじゃないし……」

そう言いながらも心が晴れるはずもなく、沙織は黙りこんだ。

鷹緒は沙織を見つめると、静かに微笑んで口を開く。

「……本当にどうした？」

目を泳がせながら、沙織は思い切って尋ねることにした。

「こんな時に……変なこと聞いてごめん。でも、すごく気になって

……」

「なに？」

「……鷹緒さん、家族には会ってるの？」

沙織が尋ねた。

本当は違うことが聞きたかった。子供の頃の心境を聞いてみたかった。鷹緒がどんな少年時代を過ごしたのか、鷹緒の口から聞いてみたい。だが、鷹緒の過去を聞くことは禁句だと思った。それなのに聞いたのは好奇心に過ぎなかったが、沙織は鷹緒を好きだった頃のように、鷹緒のすべてが知りたいと思った。

「……なんで、そんなこと？」

怪訝な顔をして、鷹緒が尋ねる。

素直に返事をもらえなかったことで、沙織は諦めがついた。

「ごめん。やっぱり、なんでもない……」

「……伯母さんに、何か言われたのか？」

ゆつくりと口を開き、鷹緒が尋ねる。

「え？」

「何か知ったから、聞きたいんじゃないの？」

鷹緒は起き上ると、曲げた膝に頬杖をついて沙織を見つめた。その目は綺麗だが、どこか寂しそうで、目を逸らせないほど鋭く沙織を貫いている。

113：少年時代

「知ったっていうか……私ね、家族の大切さとかってあんまり考えたことなく……鷹緒さんから家族の話とか聞いたことないし、おばあちゃんと一緒に暮らしてたこと聞いて、もし私が鷹緒さんと同じ境遇だったらって考えちゃうんだけど、想像つかないっていうか……」

正直に沙織はそう話した。鷹緒に見つめられ、何を言ったらいいのかわからず言葉にはなっていなかったが、それを聞いて鷹緒は静かに微笑んだ。

「……俺の親父が、政治家だったのは知ってる？」

「うん、聞いた……」

鷹緒の言葉に、沙織は頷く。

「親父は昔から厳しくて、成績が少し下がったくらいでも、めっちゃくちや叱られた。それでも、母親がいた頃は全然よかった。厳しいのは当たり前だったし。でも母親が死んで、親父が再婚して、子供が生まれて……その時、思ったんだ。『ああ、俺は何のためにここにいるんだろう』って……」

沙織は目を見開いた。祖母伝手に聞く話とは、まるで違う現実感が伝わる。

鷹緒は話を続ける。

「今まで散々勉強して、それなりに仲の良かった家庭だったのに、同じ家の中で新しい家族が生まれていくのを目の当たりにして、俺は邪魔者なんかじゃないかって……」

「……」

「べつに再婚相手が嫌だとか、そういうんじゃないかった。優しい人だったし、自分の子と俺を差別しないように接しようとしてくれてたと思う……だけど俺はやっぱり駄目で、家に帰らない日が続いた。親父は世間体を気にしてたから、俺を家から出さないようにしたけ

ど、それは逆効果だ。俺も無茶やってたし、親父もとうとうさじを投げてね……。それから、伯母さんの家に引き取られたんだ。親父の家系には、知られたくなかったんだろうな……」

鷹緒は淡々と話していた。互いに目も合わせず、独り言のように鷹緒の過去が溢れ出す。

そんな話に耳を傾けながら、沙織は何も言えなくなっていた。

「それ以来、ほとんど親父には会ってないし、連絡も取ってない。籍抜いてくれたってよかったけど、それも出来ないのは、やっぱり世間体だろうな……。まあ、勘当同然だ。だから俺も家族と思ってないし、正直どういふものを家族っていうのかわからないんだよな……」

「……」

「だから伯母さんの家で、まだ小さいおまえらと会った時……幸せそうでムカついた」

その言葉に、沙織は驚いた。

「え？」

「……おまえらの家族は、俺が理想に描いてたような家族だった。優しい母親と、家族のために働く父親。仲の良い兄妹。夏休みの度に祖父母の家に遊びに来て、毎日楽しそうだった。そんなおまえたちが羨ましかったよ……。いや、それが普通なのかもしれないけど、当時の俺にはまったくわからない世界だったから……」

「鷹緒、さん……」

沙織はそう言いかけた。だがその先、なんと声をかければいいのかわからない。

そんな沙織を尻目に、鷹緒はベッドに寝そべった。

「憧れてた。そんな家族を作ること……俺の家族は誰もいない。いるとすれば伯母夫婦だと思ったけど、それも違う。そんな時、理恵と会って……理恵が言った。『じゃあ、新しい家族を作ろう』って。でも駄目だったからな……」

寝そべった鷹緒を見つめ、ベッドのそばに立ったまま、沙織はそ

の話聞き続ける。

「なんか漠然としてるんだ。家族の記憶も薄れてて……おまえたち家族を見本にしようとしても、わからない。変にひねくれてて、あいつが離れていく時も、自分のほうが邪魔者なんだって思ってた。あいつを追いかけることもしなかった。そんな俺が家族なんて求めちゃいけないだつて、後で気付いた……だからもう家族とかそういうのには、憧れないようにしてる……」

鷹緒の言葉に、沙織の目からは涙が溢れ出ていた。止め処なく溢れる涙に、沙織は顔を隠す。

そんな沙織に気付いて、鷹緒はもう一度起き上がった。ベッドのそばに立っている沙織は、声を潜めて泣いている。

「……暗くてつまらない話だろ？」

苦笑しながら鷹緒が言う。そんな鷹緒に、沙織は何度も首を振った。

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

沙織は申し訳なかった。鷹緒にとっては思い出したくもない、やはり触れてはいけない過去なのだと痛感する。そんな鷹緒が自分のために話してくれたこと、それを聞いて泣いてしまう自分の不甲斐なさ、沙織を自暴自棄にさせる。

「ごめんなさい……」

泣きながらそう言う沙織に、鷹緒の手が触れる。長い指が沙織の涙を拭った。

「……でも、べつに俺、自分が不幸だか思ってたないぞ？ まあそんな境遇のおかげで、卑屈で格好悪い人間になっちゃったけど、家族が恋しいか思ったのは十代のあの時期くらいだ。だから今、一人でもなんとも思わないし、ましておまえが泣くことは少しもないよ」

「うん。うん……」

しかし沙織の涙は、とどまることを知らない。そんな沙織に、鷹緒は静かに微笑んで、そばに投げ出してあったカバンから財布を取

り出すと、一枚の写真を見せた。

「これ……」

涙で滲んだ目で、沙織はその写真を見つめた。そこには祖父母の家で見た写真とよく似た、幼い沙織と兄の雅人が写っている。こちらを向いて笑っている。

114：傷あと

「この写真、俺の原点なんだ……」

鷹緒が笑ってそう言った。

「え……？」

「俺が高一の時かな……伯父さんに古いカメラもらって、いろいろ撮ってた。だけど被写体といえば風景とかしかなくて、人を撮る気にもならなかったんだ。だけど夏におまえたちが遊びにきて、コロコロ変わる表情が楽しくてさ……おまえが最高に笑った時、泣いた時、それを収めたくて楽しくなってた。それからカメラに興味が湧いてね……だから、これが俺の原点。沙織がきっかけなわけ」

鷹緒の言葉に、沙織は驚いた。

「この写真、持ち歩いてるの？」

「うーん、お守りみたいなものかな。カメラマン辞めようと思ったことは何度もあるけど、なんかこれ見ると、楽しいことしか思い浮かばないんだよな」

笑ってそう言う鷹緒に、沙織も微笑んだ。知らなかった事実嬉しくなる。

「私が、原点？」

「そうだよ……すぐにカメラマンになろうとは思わなかったけど、興味が湧いてた時に近くのスタジオでカメラマンアシスタントのバイト募集してて、そこでバイト始めたんだ。そこで茜の親父さんに会って、ヒロとも出会って。カメラの技術教わって、モデルの仕事までやらされて……いろいろあったけど、原点はやっぱそこだな」

「ありがとう。嬉しい……」

自分を元気づけようと、そこまで話してくれた鷹緒に、沙織は微笑んだ。

そう言う沙織の顔を、鷹緒が覗きこむ。

「……おまえは？ 大丈夫なのか？ 仕事とか。ユウとはうまくや

ってんの？」

突然、鷹緒がそう尋ねたので、沙織は頷いた。

「うん、平気。交際宣言してからは、マスコミもそんなに騒がなくなってきたし……時々嫌がらせとかはあるけど、ユウがちゃんと守ってくれるし、誰かそばにいるから平気だよ。仕事も順調」

「そっか、それなら一安心だ。頑張れよ」

笑ってそう言う鷹緒の手を、沙織が掴む。

「……鷹緒さんは？ もう、頑張らないの？ 家族に憧れなくなつて、恋人くらい……」

沙織が言った。その問いかけに、鷹緒は静かに微笑んだ。

「うん、頑張らない。頑張れない……もう、そういうことは考えられないんだ……」

その言葉は、沙織の心を貫くような衝撃があつた。鷹緒が今まで傷ついてきた、深い傷跡が見えた気がする。もう恋に頑張れないほど、鷹緒は臆病になっている。

それを知った今、沙織の瞳からはまた涙が溢れ出した。

「なんだよ。変なやつだな……」

その涙を見て、鷹緒が苦笑して言う。

「ごめんなさい……」

か細い声で沙織が言った。大声で泣きたい気分だった。しかしそれを抑えて、沙織は涙を流し続ける。

そんな沙織を、鷹緒は引き寄せた。そして鷹緒は、ベッドにもたれこむ沙織を、そのまま抱きしめる。

「……泣き虫のままだな……」

「鷹緒さん……鷹緒さん！」

堰を切ったように、沙織は鷹緒に抱きついて泣きじゃくった。

「馬鹿だな……人の過去なんて覗こうとするからだよ。おまえは基本的に幸せなんだろ？ そういうことに、免疫ないんだからさ……」

「ごめんなさい……」

「俺はもう、吹っ切ってるのにな……」

そう言う鷹緒の顔は、沙織には見えなかったが、きっと辛そうにしているに違いない。

しばらくして、鷹緒は沙織を引き離れた。

沙織は大分落ち着いた様子で、腫らした目を拭いながら、鷹緒を見つめる。

「……大丈夫か？ 泣かせて悪かったな」

鷹緒の言葉に、沙織は首を振る。

「ごめんなさい……」

「いいよ。それより、いい加減、もう帰った方がいい」

「うん……ごめんね。熱があるのに……」

「なにを今更……大丈夫だって」

笑って鷹緒が言う。

沙織はベッドから降りると、頭を下げた。

「いろいろ、ごめんなさい」

「もういいよ。気をつけて帰れよ」

「うん、ゆっくり休んでね。病院にも……」

「わかった。明日行くから、心配すんな」

「うん。じゃあ……」

「おやすみ」

「おやすみなさい……」

鷹緒を寝室に残して、沙織は鷹緒の部屋を出ていった。

まだドキドキしている。これは一時の感情ではない。鷹緒のことを思えば思うほど息苦しい。

沙織は懐かしいまでのこの気持ちに、自分の本心に気付かざるを得なかった。

「どうしよう。今はユウがいるのに……鷹緒さん……鷹緒さん！」
また止まらない涙を流しながら、沙織は家へと帰っていった。

115：止まらない想い

数日後。沙織はユウに呼び出され、ユウの部屋にいた。

「どうしたの？」

ぼうつとしている沙織に、ユウが尋ねる。

「え？」

「ぼうつとしてるじゃない。何かあった？」

優しく尋ねるユウに、沙織は首を振る。

あれから何度も鷹緒のことを考えた。湧き上がるように気付かされた、鷹緒への恋心。だが目の前にいるユウに知られてはいけなしかし、このまま嘘をつき続けるのかと思うと、気が重くてたまらない。どうしたらいいのかわからず、沙織は思い悩んでいた。

「沙織？」

「ごめんね。なんか、疲れてて……」

沙織が言った。そんな沙織の肩を、ユウは抱き寄せる。

「ごめん、急に呼び出したから」

「そんな……ユウは悪くないよ。ツアー終わって、真っ先に声かけてくれたんじゃない」

「うん、ツアー中は会えなかったから、ずっと沙織のことを考えてたよ」

そう笑いかけるユウを見て、沙織は泣けてきた。

「沙織？」

「ごめんね、なんでもない……」

「なんでもないって、泣きそうじゃん」

「違うの……ごめんね」

沙織がそう言った時、テーブルに置いてあった沙織の携帯電話が鳴った。

ユウが手を伸ばしてそれを取り、沙織に差し出す。二人の目には、画面に映る“諸星鷹緒”の文字が見えた。沙織の表情が変わる。

「諸星さんみたいだよ。出ないの？」

ユウの言葉に、沙織が携帯電話を受け取る。それと同時に電話が切れた。

「ああ、切れちゃったね……」

そう言うユウの目に、複雑な表情の沙織が映った。俯き加減の沙織は戸惑っているような、困っているような顔をしている。

「……沙織の元気がないのは、諸星さんが原因？」

黙り込んでいる沙織に、ユウが尋ねた。沙織はハッと顔を上げる。真剣なユウの瞳が、沙織を見つめている。

「……違うよ」

やっとのことで沙織が言った。だがユウにはそれが嘘だとわかって、溜息をつく。

「どうして嘘つくの？　そういうふうに隠されたんじゃ、何かやましいことがあるんじゃないかって思っちゃうよ」

「やましいことなんてないよ！」

沙織が言った。

ユウはただ静かに沙織を見つめている。

「……じゃあ、どうしてそんなにムキになるの？」

「なんでもない……」

「……わかった。話したくないなら、もういいよ」

ユウは静かにそう言うと、立ち上がった。少し怒っているような感じにも見えたが、その声は優しい。

「今日はもう帰りなよ。送るからさ……」

すでに支度を始めているユウがそう言ったので、沙織も立ち上がって帰り支度を始める。すると、ユウが後ろから抱きついてきた。

「沙織……僕のこと、好き？」

ユウの言葉に、沙織は一瞬、押し黙る。

「……うん。す……き……」

そう言ったところで、沙織の目から涙が溢れた。もう、嘘はつかなかった。

沙織はそのままユウの手からすり抜け、その場にしゃがみこむ。
そんな沙織に、ユウはすべてを理解した。

「諸星さんのことが……好きになっちゃったとか？」

静かに尋ねたユウに、沙織は首を振った。今は何も考えられない。
「ごめんなさい。今日はもう、帰るね……」

沙織はやつとそれだけを言うと、ユウのマンションを出ていった。
ユウはしばらく、その場に立ちつくしていた。

家へ帰る途中、沙織の心は沈んでいた。ユウが嫌いなわけでは決してない。だが鷹緒のことを思うと、胸がドキドキして止まらない。何が恋なのか、なぜユウを好きだと言うことが悲しかったのか、沙織にはわからなくなっていた。

ふらふらと夢遊病者のように、沙織は家へと帰っていった。

やつとの思いで沙織が家へ帰ると、部屋の前には鷹緒の姿があった。沙織は目を丸くさせる。

「鷹緒さん……！」

「おう、出かけてたのか。電話しても出ないから、どうしたのかと思った。デート中だったか？ 邪魔してたらごめんな。これ、この間の礼。いなかったら、ポストに入れて帰ろうと思ってた」

手土産を見せながら、静かに笑って鷹緒が言う。

「鷹緒さん……」

震える声で、沙織がそう呼んだ。鷹緒は怪訝な顔をして、沙織の顔を覗き込む。

「……どうした？」

沙織は、しきりに首を振った。

「泣いてるのか？ 喧嘩でもしたのか？」

鷹緒の問いかけに、沙織は首を振る一方だ。

「沙織？」

「……ないで……」

「え？ 聞こえ……」

「優しくなんてしないで！」

沙織はそう言っていると、鷹緒を押し退けて、部屋の鍵を開けようとする。

そんな沙織の腕を、鷹緒が後ろから掴んだ。

116：苛立ち

「離して……」

そう言いながら、沙織は体を強張らせていた。時が止まったかのように、何も出来ない。

鷹緒は鷹緒で、どうしたらいいのかわからなくなっていた。ただ沙織の腕を掴んだまま、その先何をしたらいいのか、何を声かければいいのか、まるで浮かばない。

時間が止まった中で、カチャンと沙織の手首が回り、鍵が開いた。それを見て、鷹緒はゆっくりと沙織から離れる。

沙織は振り向いて、鷹緒を見つめた。涙に濡れた沙織の瞳は、すでに真っ赤に腫れている。

それを見て鷹緒は沙織の腕を掴むと、部屋のドアを開け、中へと入っていった。

玄関先で、二人はしばらく見つめ合ったままだった。

「……何が、あったんだ？」

しばらくして、鷹緒がそう口を開いた。その言葉に沙織も我に返る。

「……鷹緒さんには、関係ない」

沙織の言葉に、鷹緒は押し黙った。

「帰ってよ……」

鷹緒は目を伏せた。

そこから動こうとしない鷹緒に、沙織は苛立って手を振り上げる。「帰って！」

沙織の振り上げた手を、鷹緒は反射的に掴んでいた。沙織はそのまま涙を流す。

鷹緒は沙織を見つめたまま、沙織の額に手をやった。大きな鷹緒の手が、沙織を包む。

「……熱なんかないよ」

「あるよ。おまえ、手、熱いじゃん……上がるぞ」

そう言って、鷹緒は沙織の手を掴んだまま、部屋の中へと入っていった。

鷹緒が沙織の部屋に上がるのは初めてだった。狭い部屋を見回すと、奥の寝室が目に入る。鷹緒は奥へと進んでいく。

「嫌だ。女の子の部屋に勝手に入らないでよ」

「なに、変なもんでも隠してあるのか？」

拒否する沙織に茶化するように言った鷹緒だが、顔は真剣である。

そのまま鷹緒に強い力でベッドに押し倒された沙織は、途端に布団を被せられた。

鷹緒は寝室を出ていくと、洗面所でタオルを見つけ、濡らして寝室へと戻っていく。

寝室の沙織は、大人しくベッドに横になっていた。

「この間の、まるで逆だな……ほら、手退けるよ」

苦笑して鷹緒が言った。

沙織は泣いているのか、両手で顔を隠している。沙織が手を退かそうとしないので、鷹緒は沙織の手の上にタオルを乗せた。

「冷たい……」

「おでこに乗つけるよ。俺の風邪が移ったのかな……ごめんな」

素直に謝る鷹緒に、沙織は小さく首を振った。

「……沙織。俺、どうしたらいい？」

少しして、静かに鷹緒がそう言った。どういう意味かわからずに沙織がそつと鷹緒を見上げる。目が合った鷹緒は、真剣な眼差しで沙織を見つめている。

「帰ってほしいなら帰るよ。でも俺、おまえがいつもと違うから、心配なんだ……」

今日の鷹緒はどこか素直に見える。そんな鷹緒に沙織が手を差し出す。それを見て、鷹緒もそつと手を握った。

「ごめんね。なんか今日、イライラしてて……」

沙織も素直に謝る。

鷹緒を好きな気持ちに気付いたことで、沙織は鷹緒から逃げたかった。恋人であるユウにも悲しい思いをさせてしまい、どうしたら良いのかわからぬ苛立ちが、鷹緒にぶつけることで表れてしまっていたからだ。

「それはいいよ……それより、薬飲めよ」

鷹緒は風邪気味で常備していた、自分の風邪薬と水を差し出す。

沙織はそれに応じて、薬を飲む。

「……だけど、何かあったんだろ？」

薬を飲んで横になる沙織に、鷹緒が尋ねた。

「ふふ。鷹緒さん、お父さんみたい……」

静かに笑って沙織が言った。鷹緒も優しく微笑む。

「そうだな……ここじゃ、おまえの保護者みたいだからな」

「……」

その時、沙織は突然起き上がり、鷹緒に抱きついた。

「……沙織？」

鷹緒は沙織を振り払うことも抱きしめることもなく、静かに尋ねた。

沙織は抱きついたまま鷹緒を見つめ、そつと口を開く。

「苦しいよ、鷹緒さん……」

「え、おまえ、風邪……」

「どうやってももう、鷹緒さんと恋人になることは出来ないの……？」

そんな沙織の言葉に、鷹緒は一瞬、大きな瞬きをした。そして沙織を引き離す。

沙織は熱に火照った体をし、腫らした目で鷹緒を見つめている。

「ハハ……からかうなよ。おまえには、トップスターがいるだろ？」

静かに笑って、鷹緒は立ち上がる。

沙織はそのまま倒れるように眠りについた。

次の日。沙織が目を覚ますと、そこに鷹緒の姿はない。寢室を出ると、食卓となるテーブルに置き手紙があった。

“沙織へ。起きたらここに行くように。鍋の中におかゆあります”
手紙には鷹緒の字で、病院の名前と地図が書かれている。

沙織はガス台に置かれた鍋を覗いた。料理下手な鷹緒が作ったおかゆだけあり、決して美味そうには見えないが、沙織は嬉しかった。
「好き……です、鷹緒さん。好きです……好きなんだもん。しょうがないじゃん！」

おかゆを食べながら沙織が言った。

鷹緒のおかゆは、少ししょっぱかった。

その夜。沙織は地下スタジオへと向かっていった。スタジオには、鷹緒の姿がある。

「沙織……」

鷹緒が驚いて言った。

「どうしたんだよ。病み上がりだろ？」

「うん。鷹緒さんに会いたくて……事務所に行ったら、ここだってそう言った沙織は、どこか晴々としている。

鷹緒は微笑み、口を開く。

「あとで、おまえのところに行こうと思ってた」

「そっか。でも、待てなかったんだ……」

「……なんで？」

「今、ユウと別れてきた」

沙織の言葉に、鷹緒は驚いた。

117：破局

「今、ユウと別れてきた」

沙織の言葉に、鷹緒は驚いた。

数十分前、沙織はユウの部屋にいた。

「ごめんなさい！」

深々と頭を下げて、突然、沙織が謝った。ユウにはその意味がわかっていた。

「やっぱり駄目か……」

苦笑してそう言ったユウに、沙織がそっと顔を上げる。

「え……？」

「相手は、諸星さんでしょうか？」

「……うん」

静かに沙織は頷き、言葉を続ける。

「説明がつけられないの……私、ユウのことは好き。だけど鷹緒さんのことを考えると、胸が苦しくて、イライラして、悲しいの……」

「……うん」

「ユウには、本当にいろいろ教えてもらった。鷹緒さんが日本にいない間も、ユウがいたから私はやってこれたんだと思う。だけど鷹緒さんが帰ってきて、自分の気持ちに嘘はつけなくなったの……ひどいよね。都合がいいよね……結局私は、ユウを利用してしまっていたんだと思う……」

沙織の本音に、黙って聞いていたユウは静かに微笑んだ。

「十分だよ……ひどいのは僕のほうだ」

思わぬユウの言葉に、沙織は顔を上げる。

「前に言っただろう？ 諸星さんがいなくなって、ラッキーだと思っただって。あれは僕の本音だ……諸星さんがいなくなって、僕は沙織とつき合えた。沙織も僕を好きになってくれた。それを嘘だとは

思わないし、思いたくもない。だけど、もともと無理があったんだよ。沙織の心は、諸星さんがニューヨークへ行った時点で、日本に置いてけぼりだったんだから……」

「ユウ……」

「……この間、沙織が僕を好きだって言えなかった時点で、僕の恋も終わってた……僕は君をスキヤンダルに巻き込んで、その中で早く交際を公表したかったのは、諸星さんが帰ってくる前に、既成事実を作りたかったのかもしれない。だから、僕は君に嫌われて同然の男なんだよ……」

静かにそう言ったユウに、沙織は首を振った。

「違う、違うよ。私が……」

沙織は溢れ出そうとしている涙を、必死に堪えた。
そうしているうちにユウが口を開く。

「おあいこだよ……」

「……ユウ」

「最後に、一度だけ……」

ユウはゆっくりと沙織を抱きしめた。堪えていた涙が、沙織の目から溢れ出す。

決してお互いに嫌いではなかった。たが鷹緒の存在は、二人にとって思ったよりも大きくなっていた。

「愛してる……愛してた。だから沙織、負けないで……」

「ユウ……ユウ……」

なぜ、この人では駄目なのか。なぜ鷹緒なのか。沙織の頭の中でこだまする。

またユウの胸の中で、説明のつかない感情が渦巻き、心の中で沙織を責め立てる。だが、ユウもまた沙織に恋をしているからこそ、沙織の気持ちを痛いほどわかっていた。

「さよなら、沙織。またね」

一度も責めることなく、ユウは沙織を笑って送り出した。そんなユウに、沙織は自分の不甲斐なさを恥じた。

「今、ユウと別れてきた」

半地下のスタジオで、鷹緒と沙織は見つめ合ったままだった。

「なに、言って……冗談だろ？」

目を丸くして驚き、鷹緒は激しく動揺しているようだった。こんな驚いた鷹緒を、沙織は初めて見ていた。

「冗談、じゃないよ。きつぱりと、さよならしてきた……」

「……なんで……」

鷹緒には沙織の行動が理解出来なかった。ただ沙織の次の言葉に耳を傾ける。

沙織は鷹緒を見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「鷹緒さん。私、やっぱり鷹緒さんのことが好きなの」

きつぱりとそう言った沙織に、鷹緒はまた目を丸くした。見つめる沙織は悲しげに微笑み、鷹緒を見つめている。

「……さ、おり……」

状況を飲み込んで、鷹緒はやっとそう口にした。だが、次の言葉が見つからない。

「わかつてる。鷹緒さんの返事は……だけど、もう遅いの。私、自分が納得するまで、鷹緒さんを好きでい続けるわ……これは誰にも止められない。鷹緒さんにもね。だって好きなんだもん、しょうがないじゃない」

沙織は笑ってそう言った。

「……」

鷹緒は何も言わなかった。いや、何も言えなかったのかもしれない。

沈黙の中、沙織は少し不安になった。勇気を振り絞って言ったはずの告白も、後悔しなければならぬのか……沙織は俯いた。ふられてもいい、何か言ってほしかった。

そんな中で、鷹緒の深呼吸に似た溜息が聞こえる。顔を上げた沙織に、一瞬、鷹緒の顔が見えた。泣いているように見えた――。

次の瞬間、沙織は強く鷹緒に抱き寄せられ、しっかりと抱きしめられた。

「馬鹿か、おまえは。本当に……信じらんねえ。わけわかんねえよ……馬鹿か！」

「そ、そんな、バカバカ言わないでよ……」

複雑な気持ちで沙織が反論する。苦しいくらいに抱きしめる鷹緒の肩は、やっぱり震えていた。

鷹緒の腕の中で、沙織はそっと涙を流し、鷹緒の背中に腕を回す。

「私は、鷹緒さんが好きなの……ずっと一緒にいたい……好きなの好……」

呪文のように繰り返す沙織に、鷹緒は静かにキスをした。すべての願いが叶うような、満たされるキスだった。

118：想い

互いに引き寄せられるように、二人は何度もキスを重ねた。

鷹緒の大きな手が、沙織の頬を撫でる。沙織の髪を解かす。そして鷹緒の唇は、沙織の頬や額をも捉える。やがて、もう一度唇を重ねた。

「鷹、緒さん……」

観念するように、沙織が呼んだ。

コツンと、鷹緒の額が沙織の額にぶつかる。

「……止まらなくなる……」

鷹緒の低い声が響いた。一瞬躊躇ったような、伏し目がちの鷹緒の顔が、沙織の目に映る。鷹緒はなぜか辛そうに、自分の頬と口を片手で押さえている。

「鷹緒さん？」

「……ごめん」

その言葉に、沙織は必死な目をして、鷹緒の腕を掴んだ。

「どうして！ どうしてそうやって逃げるの？ 私……」

「頼むから、そんなこと言うなよ……」

完全に顔を逸らして鷹緒が言った。沙織は離れていく鷹緒の前に立ち直す。

「そうやって向き合ってくれないんだね。どうして？ 私、もう傷なんかつかないよ。怖いものもない。私はもう子供じゃないし、前より大人だよ。鷹緒さんがそばにいてくれたら、他に何にもいらないの」

わかってほしい……必死の目で沙織が鷹緒を見つめる。

そんな沙織に首を振って、鷹緒は目を反らすことしか出来ない。

「俺は怖いよ。おまえを好きになるのが……」

静かに鷹緒がそう言った。

沙織はやつと鷹緒の本音を聞いた気がした。そして次の言葉を待

っ。

「大人なら、わかれよ……なんでだよ。俺なんかのどこがいいんだ？ おまえは、俺のすべてを知ってるはずだろ。過去も、なにもかも……」

沙織はそつと頷いた。

「そつだよ。その上で好きなんだよ？」

「アホか。なんでよりによつて、こんな男に引つかかる必要があるんだよ……あんなトップスターと別れてまで、つき合うのが俺か？それに、おまえの相手が俺じゃ、おまえの両親にだって申し訳が立たないだろ」

依然として苦しげにそう言った鷹緒の手を取り、沙織は口を開く。「それで……それでそんなに拒むの？　なんで、そういうふうにするの？　私、鷹緒さんの知らないこと、まだたくさんあるんだよ。

只知道、知つてるところは全部好き……お母さんたちだつてきつと喜ぶよ。それに、ユウは私を理解してくれた。だから私は逃げるわけにはいかないの。それだけすごい人なの、鷹緒さんは！」

沙織はそう言いながら、止め処ない涙を流していた。鷹緒に振り向いてほしい、この気持ちが真剣なことだけはわかつてほしい、ただそれだけだつた。

「遊びでもいい……捨てられてもいい。一度でいいから、こっちを向いてよ……」

溢れる涙に酸欠状態になりながらも、沙織はそう言った。涙で滲んだ瞳に、未だ辛そうにこちらを見ている鷹緒が映る。

「アホか。遊びだなんて……そんなこと、出来るわけないだろ。俺だって、おまえが……好きなんだから……」

ゾクツという感覚が、沙織を包んだ。

鷹緒は言葉を選ぶように、途切れ途切れにゆつくりと、そう口にしていった。そんな鷹緒を見つめながら、沙織は震える唇で、なんとか言葉にする。

「い、今……なんて？」

やつのことでそう言った沙織の涙を、鷹緒の手が拭う。ハツキリと見えた鷹緒の顔は、静かな微笑みを向けている。そして何かを吹っ切ったように、鷹緒は沙織をもう一度抱きしめた。

「俺も好きだよ……」

抱きしめられた沙織は一瞬、何が起こったのかわからなかった。

「う、嘘……」

信じられないといった様子で、沙織は鷹緒の腕の中にいる。鷹緒を見上げる表情は不安気だ。

形勢逆転といった形で、鷹緒は苦笑した。そしてもう一度、沙織にキスをする。

「嘘じゃないよ……」

「じゃあ……もう一回言って」

「アホ。そんなポンポン言えるか……」

呆れたように、少し顔を赤らめて鷹緒が言った。

鷹緒の腕の中で、沙織が飛び跳ねる。

「嫌だ、もう一回だけ！　お願い……」

あまりに切実な目で見るので、鷹緒は目を逸らして、小さく溜息を漏らした。そんな鷹緒に少しだけ傷つきながらも、沙織は見つめることをやめない。

やがて意を決したように、鷹緒は沙織を抱きしめ、沙織の耳元で囁いた。

「愛してるよ……」

とろけるような幸福感が、沙織を満たしてゆく。くすぐたいが心地良い。

やがて合う目線に、二人は纏れ合うようにして床に倒れ込んだ。もう、何も妨げるものはない。本能の赴くまま、二人は愛を確かめ合うのだった――。

119：以前と違う二人

朝日さえ差さない半地下のスタジオに、無造作に転がる衣服。その中に、身を寄せ合うようにして眠った、鷹緒と沙織の姿があった。鷹緒の腕の中で目を覚ました沙織は、途端に鷹緒と目が合う。

「あ……」

急なことで、沙織は言葉を失った。幸福感でいっぱいなもの、もう以前とは違う関係に戸惑いを覚える。

「……おはよう」

そんな沙織に、優しく微笑む鷹緒がいた。

「おはよう……起きてたの？」

「うん、さつき……」

鷹緒が天井を見つめて言った。互いの呼吸が伝わる。

沙織は鷹緒に身を寄せて、顔を見上げた。鷹緒も沙織の動きに合わせて肩を抱き寄せ、沙織を見つめる。

「後悔、してる？」

そつと沙織が尋ねた。

「……いや」

思いのほか、鷹緒の答えはそう返ってきた。一線を踏み越えてしまった二人だが、あれだけ思い悩んでいたはずなのに、なぜか後悔はないようだ。

「……本当？」

「なんで？」

沙織の問いかけに、逆に鷹緒が尋ねる。

「なんでって……」

「べつに後悔するようなら、最初からこんなことしねえよ……」

そう言うものの、鷹緒の顔は晴れていない。

鷹緒は沙織の頭の下から腕を引き抜くと、ゆっくりと起き上がった。時計を見ると、朝の六時半を指している。転がっているシャツ

を羽織ると、鷹緒は軽く伸びをした。床で寝ていたため体が痛む。離れていく鷹緒に、沙織は早くも寂しさを感じていた。

「……起きないの？」

寝そべったままの沙織に、鷹緒が尋ねる。

「う、ううん……」

淡々としている鷹緒に、沙織は少し戸惑っていた。

そんな沙織に軽く微笑んで、鷹緒は手を伸ばす。

「今日は七時半にはみんな来るんだ。そんな格好でいたら、みんなひっくり返るぞ」

からかうように笑って、鷹緒が言う。沙織は鷹緒の手を取ると、真っ赤になって起き上がった。

すでに準備の整っている鷹緒は、撮影に必要な機材を出している。そんな鷹緒を尻目に、沙織も来た時と同じ服装に戻っていた。

鷹緒は準備の整った沙織に気付くと、出入り口へと向かっていく。

「朝飯、食べに行こうぜ」

「う、うん……」

先に歩いて行く鷹緒に、沙織は小走りでついていく。鷹緒の淡々とした様子からは、昨夜の甘い時間など、なかったことのように感じられた。

近くのファーストフード店で、二人は朝食を済ませることにした。ちらちらと自分を見てくる沙織に、鷹緒が首を傾げる。

「なに？」

「えっ？」

「……いやに無口だな」

「だ、だって……」

その時、携帯電話が鳴ったので、鷹緒はすぐに電話に出た。

鷹緒が電話をしている間、沙織は食事を続けながら鷹緒を見つめる。その顔も、その腕も、その瞳も、すべて捉えたはずだった。しかしそんな朝を迎えた後も、いつも通りの鷹緒の様子に、沙織は鷹

緒をいつもより遠くに感じていた。

そんな時、鷹緒は電話を終え、沙織を見る。

「沙織。ちょっと事務所に寄ることになった。もう行くわ……」

「あ……うん」

「じゃあ……」

立ち上がる鷹緒を前にして、沙織は口を塞がれているかのように、言いたいことが言えない。

「……電話する」

その時、鷹緒がそう言った。その一言で、沙織は嬉しくなる。

「うん！」

「じゃあな……」

鷹緒はそう言って沙織の頭に軽く手を乗せると、店を出ていった。残された沙織は、まだ不安も多いものの、嬉しさに満たされていた。

その夜、沙織は片時も携帯電話を離さなかった。鷹緒からの電話を待つ。その間、鷹緒との夜が思い出され、思考を刺激する。それだけで何もかもが頑張れるような、沙織の勇気が報われた瞬間だった。

しかしその夜いくら待っても、鷹緒からの電話はなかった。

120：すれ違い

鷹緒は事務所にいた。目の前には広樹もいて、写真や書類を並べている。

「今、何時？」

そわそわした様子で、鷹緒が尋ねた。

「時間なんか気にせず、手を動かせよ」

苛立った様子でそう言う広樹に、鷹緒は手を止めて時計に振り向いた。時計の針は、夜中の一時を回っている。

そんな鷹緒の頭を、広樹が叩く。

「イテツ」

「手を動かせっつーの」

「やってるよ」

「おまえが昨日片付けてれば、こんなことはしないよ」

鷹緒は仕事に追われていた。昨日、沙織と過ごしたおかげで後回しになっていた仕事、タイムリミットに近付いていたのだ。今日の撮影も思いのほか長引いてしまったので、これにかかり始めたのは、すでに夜中といわれる時間であった。広樹が手伝っても、朝までかかることは目に見えている。

鷹緒は溜息をつきながら、今日の沙織への電話は諦め、仕事にかかった。

「……で、何があっただよ」

仕事を続けながら、広樹が尋ねた。

「え？」

「何かあったんだろ？ 離婚した時だって淡々と仕事をこなしてたおまえが、今日は一日中、上の空だ。ミスはするし、溜まった仕事もやってない。何があっただよ」

「……べつに。何もないよ」

そう言って、鷹緒はそのままソファに寝そべった。その顔はどこ

となく嬉しそうに見える。

「おい、鷹緒。寝てる暇……」

「五分寝かせて。このままやっても、何も進まない」

「……わかった。べつにおまえが言いたくなければ、何も聞かないさ……」

広樹の言葉を聞きながら、そのまま鷹緒は眠りについた。

次の日。ほとんど寝ずの晩で、鷹緒はやっと仕事を片付けた。しかしその日は、押せ押せで仕事がちっしり入っている。わずかな休憩時間も削られた鷹緒は、その夜にはやっと戻ってきた自宅で、帰った途端に眠りについていった。

沙織への電話は意識していたものの、結局その日も連絡が出来なかった。

沙織は一向にかかってこない電話を待ちながら、涙を流していた。いらぬ心配をしてしまう。やはり鷹緒は自分と一線を越えたことで、思い悩んでいるのではないか。嫌いになったのではないか。本当に一夜限りの遊びだったのかもしれない……。

その日、不安に怯えながら、沙織も寝不足で倒れるようにして眠りについた。

また次の日。早朝から仕事があった鷹緒は、未だ眠り足りない目を擦りながら、事務所へと向かっていった。

「鷹緒さん、大丈夫ですか？」

事務所に着くなり、助手の俊二が尋ねる。

「ん？ ああ、平気……」

「でもその顔色、尋常じゃないですよ。この間の風邪がぶり返したんじゃない……」

「いや、ただの寝不足だよ。まだ頭が起きてないし……起きればすぐに復活するよ」

そう言いながら、鷹緒は栄養ドリンクの蓋を開ける。

「でも、フラフラしてるじゃないですか。ちよっと横になったほうが……」

「平気だっつーの。そんなに心配してくれるなら、さっさと仕事終わらせようぜ」

「ハハハ。そうしたいのはやまやまですけど、今日の予定も夜までびっしりですからね」

「仕方ない……気力と体力で頑張らなきゃな」

鷹緒は栄養ドリンクを飲み干すと、仕事に取りかかった。

夕方。沙織は自分の仕事のため、事務所へと出向いた。

鷹緒からの連絡を待つ沙織は、自分から連絡する気にはなれなかった。なにより連絡がない今、鷹緒に会うのが恐い。

「沙織ちゃん、これから撮影？」

事務所にやってきた沙織に、広樹が尋ねる。

「あ、はい……」

返事をしながら、沙織の目は鷹緒を探している。そんな沙織を察して、広樹は苦笑した。

「鷹緒なら、仕事でいないよ」

「あ、そうですか……」

ほっとしたような残念なような、複雑な気持ちで沙織が言った。

「夜には帰ってくると思うけど」

「あ、いいんです。なんでもないですから……」

「……もしかして、鷹緒と何かあった？」

沙織の様子に、広樹が尋ねた。沙織は驚いて聞き返す。

「えっ？」

「ああいや、なんとなく……最近あいつ、いつもと少し様子がおかしいし」

「……そう、ですか。いえ、べつに……」

明らかに沙織は動揺していたが、広樹はそれ以上、何も聞かなかった。

「そっか……」

「じゃ、じゃあ、仕事に行ってきます」

そう言つと、沙織は事務所を出ていった。

鷹緒はいつも通り仕事をしている。それなのに、なぜ連絡をくれないのか。沙織の心は、不安でいっぱいになっていた。

121：本心

しばらくすると、事務所に鷹緒が帰ってきた。そこには広樹が残っているだけである。

「なんだ、鷹緒。早いな」

「先に引き上げさせてもらった……あとちょっとだったんだけど、俊二が帰れってうるさいから、任せて帰ってきた」

鷹緒はふらふらとソファに座る。そこへ広樹も近付き、鷹緒の顔を覗きこむ。

「そうか。確かに顔色悪いな……熱は？」

「ない。せつかく早く帰れたから、締切近いし、残った仕事片付けるよ」

そう言いながら、鷹緒は書類を広げる。

広樹は苦笑して缶コーヒーを差し出すと、そばにあった机に腰をかけた。

「鷹緒……さっき、沙織ちゃんが来たぞ」

広樹のその言葉に、一瞬、鷹緒の手が止まる。

「……ふうん」

「何があったか知らないけど、親戚なんだし、同じ事務所に所属してるんだ。ギクシヤク関係はやめてくれよ」

「……あいつが、何か？」

「いいや。でも、あの子は顔に出るからすぐわかるよ」

「そう……」

そのまま鷹緒は仕事を続ける。

何も言わない鷹緒に溜息をついて、広樹も自分の仕事へかかった。

数時間後。手持ちの仕事を終えた鷹緒は、その場で寝そべった。未だに仕事を続けている広樹は、一段落つけて立ち上がり、鷹緒に声をかける。

「終わったのか？」

「ああ、そっちは？」

寝そべったまま広樹を見上げて、鷹緒が尋ねた。

「まだまだ」

「ハハ……社長さんは大変だな」

「言うこと聞かない社員がいっぱいだね」

「俺以外か」

「馬鹿言え」

「あははは……」

「おい。仕事終わったなら、もう帰れよ。送ろうか？」

そう尋ねる広樹に、鷹緒は首を振る。

「いい……ここで寝かせてくれ」

「帰る気力もないか？ まあ、ここ二、三日、ろくに寝てないからな……」

広樹はそう言うと、仮眠用の布団を鷹緒にかけ、濡れタオルを投げた。

「おう、サンキュー。気持ちいい……」

濡れタオルを目の上に乗せながら、鷹緒が言う。身体は疲れきっており、このまますぐに眠れそうだ。

そんな鷹緒に、広樹が声をかける。

「明日は休みだったな。ゆっくり休めよな」

「ああ……」

横になっている鷹緒を尻目に、広樹はコーヒを飲みながら外を見つめた。もう夜も遅いというのに、街のネオンが眩しいくらいに輝いている。

「……沙織ちゃんと喧嘩したなら、僕から言っておけようか？」

やがて、静かに広樹が言った。鷹緒は苦笑する。

「だから、そんなんじゃないって」

「それなら、いいけど……」

濡れタオルを臉の上に乗せたまま、鷹緒は静かに口を開く。

「ヒロ。俺……沙織と寝たんだ」

その言葉に、広樹は大きく目を見開いた。言葉も出ないというほどである。

鷹緒は目を瞑ったまま、そんな広樹の表情を思い浮かべていた。

「お、おまえ。だって沙織ちゃんは、BBのユウと……」

そう言った広樹に、鷹緒は大きな溜息をつく。

「別れたらしい……」

「別れた……そうか……」

「……なんかもう、どうしていいのかわからなくなってきた……」
本音を語るように、ぼそつと鷹緒が言った。

濡れタオルを額に置き直し、険しい表情の鷹緒が、広樹の目に映る。そのまま広樹は、鷹緒の前に座った。

「後悔してるのか？ それじゃあ、沙織ちゃんが可哀想だろう」

「……後悔はしてない。だけど自己嫌悪、かな」

「自己嫌悪？」

「……沙織を傷つけても、突っぱねることは出来たんだろうよ」

煮え切らない態度の鷹緒に、広樹は眉をしかめた。

「じゃあ後悔してるんじゃないか。おまえ、沙織ちゃんのことどう思ってるんだよ？ 建て前はいつでもいいけど、おまえの本当の気持ち……」

「好きだよ。たぶん……」

鷹緒が言った。これほど素直な鷹緒は、広樹も久しぶりに見る。

「じゃあ……」

「だからつくつくつけるほど、俺たちの関係は単純じゃないだろ……」

…沙織はユウと別れたばかりだし、マスコミの目もある。なにより俺たちは親戚同士なんだから、親兄弟含めて全部知ってるんだぞ？

それを……」

「そんなに問題か？ スキャンダルはまずいけど、お互い好き合ってるのに、どうしてそれを殺さなきゃならないんだよ」

「……うるさいな。俺の心配より、自分の心配しとけ」

急にうんざりした様子で、鷹緒が言った。

「いつもそれで逃げるんだな……確かに僕はあまり恋愛経験もないし、疎いところもあるよ。だけど、おまえを見てるともどかしいよ」
そう言った広樹に、鷹緒は溜息をつく。

「どうにかしなきゃとは思ってるよ。沙織にも……早く電話してや
らなきゃ。あいつきつと、俺の電話待ってるのに……」

鷹緒はそう言つと、すうつと眠りについた。

やれやれといった様子で、広樹は仕事に戻った。広樹にとって、
鷹緒の告白は衝撃的なものではあったが、何か力になりたいと思っ
た。

早朝、鷹緒は事務所で目を覚ました。

目の前のソファには、座ったまま眠った少女の姿がある。沙織だ
った。

「……沙織？」

思わず鷹緒がそう呼ぶと、すぐに沙織は目を覚ました。二人の目
が合う。

「鷹緒さん……」

122：複雑な感情

「鷹緒さん……」

「……おまえ、どうしてここに？」

鷹緒が驚いて尋ねた。昨夜のことは、広樹と話していたところまでしか覚えていない。

「ヒロさんが呼んでくれたの。鷹緒さん、具合が悪いからついててやってくれって……」

「あいつ……」

沙織の言葉を受けながら、鷹緒は起き上がった。

昨晚。沙織のもとに広樹から電話があった。鷹緒から電話を待っていた沙織は、広樹からの電話と知り、少し落胆した。

「沙織ちゃん。鷹緒のことなんだけど……」

突然聞こえた鷹緒という名に、沙織は電話を持ち直す。

「は、はい……」

「実は、鷹緒が事務所で寝込んでるんだ。あいつ、ここ数日まったく寝てないからさ……よかったら看病しに来てくれないかな。僕はもう帰るところなんだ。調子の悪い鷹緒を置いていくにも気が引けるし……」

広樹がそう言った。沙織は目を泳がせる。

「あ、でも、私……今、鷹緒さんとは……」

沙織は渋ってそう言った。今、鷹緒とは会う気にはなれない。鷹緒から連絡が来るまでは、待っていたかった。

「聞いたよ。ユウさんと別れたんだって？」

「……鷹緒さんから？」

「うん……なんとなくだけどね」

「ごめんなさい。急にこんなことになってしまって……社長のヒロ

さんには、逸早く言うべきなのに……」

電話越しにお辞儀をしながら、沙織は謝った。

「うん。でも、プライベートまで管理するつもりはないよ」

「……鷹緒さん、どうですか？ 連絡くれるって言ってたのに、一度もくれなくて……なんかもう、会うのが恐いんです……」

正直に言った沙織に、広樹は静かに口を開く。

「ここ数日、あいつが電話する暇もなかったのは事実だから許してやって。とにかく、気が向いたら様子見に来てやってよ。ぐっすり眠ってるけど、起きて君がいたら嬉しいと思うし、誰もいないから……それに明日、あいつは休みだから、ゆっくり出来ると思うよ。鍵は開けておくから。じゃあ、またね」

一方的にそう言って、広樹は電話を切った。

「あ、ヒロさん！ 私……」

そう言うものの、すでに電話は繋がっていない。

沙織は事務所に行くかどうか悩んだが、意を決して、鷹緒に会おうと思った。会いたくなった。

そのまま沙織は、夜の街へと走り出した。

「ふう……」

沙織の話を聞きながら、深呼吸のような溜息をつく鷹緒。それを不安そうに沙織が見つめている。互いに、何を話したらいいのかわからなかった。

「あの、ごめんなさい。勝手に……」

やがて沙織が言った。鷹緒はそっけなく立ち上がる。

「べつに……ヒロが呼んだんだろ？」

「……鷹緒さん！」

背を向けた鷹緒に、沙織が呼び止めた。そして不安をぶつけるように口を開く。

「本当は後悔してるんでしょ？ いいよ、本当に遊びでも……だけ

ど、そんなふうに拒まないで。せめて今まで通り、ただの……親戚として……」

「……今まで通りなんて、思えないよ」

自分で言って悲しくなっている沙織に向かって、鷹緒がきっぱりと否定した。

「え……」

「なかったことに出来るほど、俺は器用じゃない。だからといって……悪いけど、これからのことなんて、まだ考えられないんだ。軽蔑するなら、していいよ……」

「……」

「ごめんな。電話も出来なくて……」

沙織の心は深く傷ついていた。このまま前に進めなくなりそうだ。「ず、ずるいよ、鷹緒さん。なんなの？ わけわかんないよ。私は、好きか嫌いか、ただそれだけ。そばにいたいだけなの！」

必死の形相で、沙織が言った。鷹緒は立ち止まったまま動かない。そんな鷹緒の腕に、沙織の手が触れた。二人に緊張した空気が張り詰める。やがて沙織の腕を、鷹緒が掴んで離れた。

「……悪い」

そう言つと、鷹緒はまたも沙織に背を向ける。

「鷹緒さん……」

「……どうしていいのかわからないんだ。感情のままにおまえのと受け入れたつて、きつとおまえを傷つける……恋愛なんてまるつきりしてないし、今までしてきた恋愛だつてうまくいかなかったと思う。おまえのこと、絶対傷つける決まってる」

沙織は、鷹緒を見つめた。

「……いいよ？ いいよ。鷹緒さんになら、どんなに傷つけられたつて……好きなのに想いが届かないより、好き合つて傷つけ合うほうがいい。傷つけたら……癒せばいいんじゃない！ 鷹緒さん、好きだよ……」

そう言つた沙織に、鷹緒は振り向いた。

123：あと一步

鷹緒の手が沙織の頬に触れる。泣き出しそうだった沙織の瞳から、涙が零れた。

「沙織……」

そう呼ぶ鷹緒の手は、小さく震えていた。なぜここまで苦しんでいるのか、沙織には理解出来なかった。

震える鷹緒の手を、沙織が取る。

「……どうしてそんなに辛そうな顔をするの？」

「……」

「鷹緒さん？」

鷹緒は目を伏せた。

「臆病なんだ。おまえを傷つけることも、自分が傷つくことも嫌だから……あと一步が踏み出せない……」

それを聞いて、沙織は一步を踏み出した。そして、そっと鷹緒に抱きつく。

「じゃあ私がもっと踏み出す。もう、こんなところで傷つくのは嫌なの」

互いの温もりが伝わり、鷹緒も沙織を抱きしめた。

「馬鹿だな……こんなバツイチで仕事人間な男を選んで、幸せになんて……」

「馬鹿はそっちだよ。私の幸せは、鷹緒さんと一緒にいることなの。だから私が鷹緒さんを幸せにする。鷹緒さんは、そのままであればいいんだよ」

沙織の言葉に、鷹緒は小さく微笑んだ。そして、きつく沙織を抱きしめる。

「ちゃんとしなくちゃな。俺も……」

「え……？」

きつく沙織を抱きしめたまま、鷹緒は目を閉じる。不安はあった。

年も何もかも違う沙織を、このまま受け止められるかはわからない。だが、沙織を手放したくないと思った。

鷹緒は何かを心に決めたように、静かに目を見開く。もう迷いはなかった。

「沙織……」

その声に不安を感じて、沙織は更に抱きつく。そんな沙織の額に、鷹緒はキスをした。

「クラクラする……」

沙織が言った。鷹緒は静かに微笑む。

「風邪だろ？」

「もう。ムードぶち壊し……」

「……沙織。どこか行こうか」

突然、鷹緒が言った。沙織の顔は一気に明るくなる。

「いいの？ でも、あんまり寝てないって……」

「今日は十分寝たから平気」

支度をして、鷹緒は手を差し出した。ゆっくりと沙織も手を伸ばしていく。二人の繋がった手から、温もりが伝わる。

「行こう」

鷹緒はそう言うと、沙織とともに事務所を出ていった。

二人はそのまま、近くのレストランで食事をする。鷹緒の車でドライブへと出かける。大して会話もなく、沙織は緊張していた。
（鷹緒さん……私たち、つき合ってるんだよね？ もう恋人なんだよね？）

そう聞きたいが、否定されたり怒られるのではないかと思うと、沙織は恐くて聞けない。

「で、どこか行きたいところないの？」

黙り込んでいる沙織に、いつもの口調で鷹緒が尋ねた。

「え？ うん……じゃあ、遊園地！」

「今から？ 俺、混むところ嫌いなんだよな……」

鷹緒の言葉に、沙織はがっかりした。

「うん、嫌いそう。駄目なら……」

「じゃあ、千葉方面でも行くか」

突然、鷹緒がそう言ったので、沙織は顔を上げる。

「本当？」

「たまにはいいよ」

渋滞を介しながらも、二人は遊園地へと向かった。

年は少し違うものの、恋人同士に見える二人。なにより沙織ははしゃぎっぱなしで、鷹緒も久々の遊園地を楽しんでいた。

124：心の距離

夜になり、遊園地ラストの花火を待つて着々と人が集まる中、鷹緒は沙織を連れ、人波と逆の方向へ歩いていった。

「鷹緒さん、どこ行くの？ もうすぐ花火が始まっちゃうよ！」

先を歩く鷹緒についていきながらも、心配そうに沙織が言う。

「わかってるよ」

鷹緒はそう言ったまま、どんどん進んでいく。すでに花火を待つ人の群れは遠くなってしまった。

その時、一発目の花火がけたたましい音とともに放たれた。

「始まっちゃった！」

少し苛立ちながら、立ち止まって振り向き、沙織が言った。大きな花火は建物の陰に隠れて、上半分だけが空しく見える。

「おい、行くぞ」

「ちよ、ちよっと、鷹緒さん！」

立ち止まった沙織の手を取り、鷹緒は走り始めた。そのまま沙織も仕方なく走る。

二人は近くのアトラクションへと入っていった。

「まもなく発車します」

そんな声を聞いて、鷹緒の手が更に強く握られる。

「やばい。急ぐぞ、沙織」

そう言いながら、鷹緒は沙織とともに、アトラクションの中へと入っていった。

「これ……汽車？」

辺りを見回しながら、沙織が言った。

遊園地を大きく半周する汽車は、夜はほとんど乗客もいない。また、遊園地を見下ろす形で走るので、何の妨げもなく花火が見えた。

「わあ！すごい、すごい！」

「おい、ちゃんと座れよ。危ないぞ」

窓にかじりつく沙織に、苦笑して鷹緒が言った。花火に照らされた沙織の顔は、無邪気に輝いている。鷹緒はそんな沙織に微笑み、黙って見つめるのだった。

「綺麗……」

しばらくして、少し落ち着いた様子の沙織がそう言った。鷹緒も頷きながら、花火をじっと見つめている。

「うん……」

「……どうして、こんなベストスポット知ってるの？」

突然、沙織が尋ねた。

「どうしてって……」

「……理恵さんと来たとか？」

その言葉に、花火を見ていた鷹緒が振り向いた。二人の目が合う。仕事だよ」

「……本当に？」

「なにを心配してんだか」

苦笑しながらそう言って、鷹緒は沙織の額を軽く叩いた。

「イタッ」

その時、汽車が止まり、すぐに鷹緒は立ち上がる。

「もう終わり？」

「まだまだ」

不敵に微笑み、鷹緒は止まった汽車を降りていった。

沙織は嬉しそうに、その後をついていく。すると鷹緒が突然止まったので、沙織は鷹緒の背中に当たった。振り向いた鷹緒の向こうでは、間近で花火が炸裂している。

「わあ……！」

そこは汽車の乗降階段で、すでに前には多くの人がいる。二人はその最後尾に立ち止まる形となった。そこは階段のてっぺんに近く、まるで特等席のようである。

「すごい……」

感動して食い入るように花火を見つめる沙織。その後ろに周り、

鷹緒は沙織の肩を抱いた。いつか二人で見た星空と同じ感動が、沙織を包んだ。

やがて、そのまま時間が止まったかのような二人を、花火を終えた静けさと人波が、現実へと引き戻した。

「……帰るか」

そう言って、鷹緒が沙織を追い越して歩き出す。妙な寂しさが、沙織を襲う。

「沙織？」

鷹緒の問いかけに、沙織はゆっくりと歩き出した。

「……どうした？」

やがて、歩きながら鷹緒が尋ねた。沙織の顔を覗きこむ鷹緒は、純粹に沙織の寂しさには気付いていない。

沙織は立ち止まって、鷹緒を見つめた。

「私、あの……」

何を言ったらいいのか、言いたいけれど言えない気持ちだが、沙織を襲う。

そんな沙織を、鷹緒は怪訝な顔で見つめている。

「なんだよ、どうした？」

「あ、の……」

言葉の出ない沙織に、鷹緒は静かに口を開いた。

「さっきの……ベストスポット知ってる理由で落ち込んでんなら、誤解だぞ？ ここには何度も撮影で来てるから、本当に仕事で……」

鷹緒が言った。沙織はその言葉を瞬時に信じて頷く。しかし次の言葉が出ない。

「うん……」

「……その話じゃないのか？」

「う、うん。なんでもない……」

そんな沙織の態度に首を傾げると、鷹緒は小さく溜息をついて微笑んだ。

「写真、撮ろうか。そこに立ってろよ」

そう言って、鷹緒はポケットから小さなデジタルカメラを取り出して構える。寂しい道の途中のため、アトラクションもネオン輝く店さえ見当たらない。決してフォトスポットではないところで鷹緒が構えたので、沙織も驚いた。

そこに、カメラのフラッシュが光る。

突然、眩しい光が放たれたので、思わず沙織は目を瞑った。

「沙織。ほら、プロだろ？ 笑顔、笑顔」

そう言う鷹緒は、沙織を元気づけるかのように必死に見える。沙織は静かに口を開く。

「鷹緒さん、私ね……」

言いかけた沙織の話聞くため、鷹緒はカメラを構える手を下ろした。

「うん？」

「……私ね、魔法でもかけられちゃったみたいなの……」

沙織の言葉に、鷹緒が笑った。

「ハハハ。夢の国だから？」

「ううん。もうずっと前から……」

125：ふたり

「私ね、魔法でもかけられちゃったみたいなの。もうずっと前から……」

変わらぬ表情でそう言った沙織。鷹緒は意味がわからずに、次の言葉を待つ。

「私、ずっと鷹緒さんのことが頭から離れなかった……数年前、十年ぶりくらいに再会した時、鷹緒さんはスタジオで撮影してたよね」
「……うん」

「その時のカメラのフラッシュで、逆反射して照らされた鷹緒さんの顔が、今でも離れない。まるで魔法でもかけられたみたいに、頭の中に焼きついて……カメラを構えてる鷹緒さん、真剣で楽しそうで……」

「……」

沙織は独り言のように、話を続ける。

「シンデレラコンテストの宣材写真を撮ってもらった時、二人きりで息が止まるかと思った。まるで蛇に睨まれたみたいに、カメラのレンズの向こうにいる鷹緒さんから目が反らせなかった……」

「……」

「その瞬間ね、フラッシュの光が私を包んで、それで……」
「もういいよ」

その時、鷹緒が止めた。

「え？」

「……もういいよ」
「いいって……」

鷹緒は軽く俯いた。鷹緒も何か言葉を探しているようだ。

「……鷹緒さん。私たち、つき合ってるん……だよね？」

その時、沙織が思い切ってそう尋ねた。鷹緒はやっと、沙織の不安の原因を理解していた。

「馬鹿だな。本当……」

そう言う鷹緒は、いっになく優しい瞳で沙織を見つめている。

「鷹緒さ……」

「俺は……ファインダー越しに見える沙織を、好きになったんだよ……」

言いかけた沙織の言葉を遮って、鷹緒が言った。その言葉に、沙織は大きな目を一層見開く。

「ごめんな。不安にさせて……」

言葉を選ぶようにゆっくりと、やっと鷹緒がそう言った。沙織は思いがけず涙を流した。鷹緒は苦笑して続ける。

「馬鹿。なんで泣くんだよ」

「だって、私……」

「……今度、挨拶に行こうか。おまえの実家に……」

静かに、鷹緒がそう言った。

沙織は涙を拭きながら、鷹緒を見つめる。沙織の目に映る鷹緒は、優しくこちらを向いて微笑んでいる。

「鷹緒さん……」

「つき合うのにも許可がいるだろ。俺の場合」

苦笑しながらも照れ笑いする鷹緒に、沙織は微笑んだ。

「うん。おばあちゃんのところにも！」

「そうだな。全然、顔も出してないしな」

「鷹緒さん……」

沙織が向かい合った鷹緒の手を握った。鷹緒はそんな沙織の手を握り返すと、静かに沙織を抱きしめる。

「……ちゃんと好きだから……」

腕の中で聞く鷹緒の言葉を、沙織は噛み締めるようにして、涙を流した。

「うん。私も……好き」

笑い合う二人は、そっとキスをした。

もう、二人が迷うことはなかった。過去も未来も、すべてが二人に繋がっている。互いに過ごす時間が、写真のように鮮明に刻まれる。

とどまることを知らないフラッシュの光に包まれたように、二人寄り添ったまま、暖かく輝いた未来へと歩いていく――。

あなたが放つフラッシュに魔法をかけられたように、あなたのこ

とが頭に焼きついて、離れない……。

125：ふたり（後書き）

最後までありがとうございました！よろしければ感想などお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5278e/>

FLASH ～かがやく君へ...～

2010年10月8日12時54分発行